

2024/7/1

推薦図書

第1章 全般	3
1-1 学習法	3
1-2 全般	3
第2章 政治・経済・社会	5
2-1 全般	5
2-2 法律	8
2-3 政治	9
2-4 経済	11
2-5 メディア	14
第3章 歴史	17
3-1 全般	17
3-2 日本史	18
3-3 諸外国史	22
第4章 日本論	24
4-1 全般	24
4-2 〈日本人〉による差別	25
第5章 国際関係	27
5-1 世界・国際連合	27
5-2 アメリカ	28
5-3 アジア	28
5-4 イスラーム	29
5-5 ヨーロッパ	31
5-6 アフリカ	31
第6章 沖縄	32
6-1 沖縄戦	32
6-2 基地・沖縄問題	35
6-3 琉球・沖縄史	38
6-4 琉球・沖縄文化	39
6-5 琉球・沖縄文学論	42
6-6 沖縄の教育	43
第7章 人間・心理・精神医学	46
7-1 心理	46
7-2 精神医学	48
7-3 人間	50
第8章 言語・文化	52
8-1 全般	52
8-2 英語	52
第9章 日本語・日本文学論	54
9-1 日本語	54
9-2 漢字・かな	56
9-3 古文	57
9-4 漢文	61
9-5 日本近代小説	62
9-6 日本近代韻文	64
9-7 国語教育	66
9-8 国語教科書	68
第10章 教育	70
10-1 全般	70
10-2 世界の教育	74
10-3 教育史	74
10-4 国家による教育統制	77

10-5 教師・教育委員会・文部科学省	80
10-6 子どもの貧困・教育格差	82
10-7 学力	84
10-8 いじめ・暴力・暴言・ハラスメント	85
10-9 部活動	89
10-10 いじめ・指導死に関する第三者委員会報告書	90
10-11 高校中退・生徒支援	91
10-12 進路指導・職業教育	93
10-13 特別支援教育	94
第11章 自然科学	96
11-1 全般	96
11-2 数学	96
11-3 宇宙・地学	96
11-4 生物	97
11-5 赤ちゃん	98
第12章 共生社会・看護・医療	100
12-1 性差別	100
12-2 高齢者	101
12-3 子ども・児童虐待	102
12-4 障害者	103
12-5 看護・医療	105
第13章 哲学・宗教・思想	107
13-1 哲学全般	107
13-2 ギリシア哲学	109
13-3 宗教全般	110
13-4 ユダヤ教・キリスト教・イスラーム	111
13-5 インドの思想・宗教	112
13-6 中国の思想・宗教	113
13-7 欧米の思想	115
13-8 日本の思想・宗教	118
第14章 文学	122
14-1 日本文学	122
14-2 沖縄文学アンソロジー	126
14-3 沖縄文学	127
14-4 海外文学	129
第15章 芸術・趣味・スポーツ・マンガ	131
15-1 芸術	131
15-2 趣味	132
15-3 中日ドラゴンズ	132
15-4 マンガ	132
第16章 絵本・図鑑・児童文学	134
16-1 絵本	134
16-2 図鑑	139
16-3 児童文学	140

ジャンルは便宜上のものです。すべて上高（1967年～）が読んだものだけです。

絶版の本もあります。古本屋（ネット含む）で買えます。

出版社の記載がないものは各種文庫・青空文庫などで。

塾生・元塾生には、分野・著者・作家などを指定してもらえば、どの本から読んだらいいかアドバイスします。

本は本屋（店舗）で買いましょう（古本屋含む）。

アマゾンなどのオンライン書店をできる限り使わないようにしましょう。

子どもたちが本を自分の手に取って、本を選べる社会を残しましょう。

第1章 全般

1-1 学習法

『勉強法が変わる本—心理学からのアドバイス』市川伸一（岩波ジュニア新書）

『学習カトレーニング』海保博之（岩波ジュニア新書）

以上の2冊は、教育心理学・学習心理学の成果に基づいた科学的学习法である。

『東大教授が教える独学勉強法』柳川範之（草思社文庫）

『知的複眼思考法—誰でも持っている創造力のスイッチ』荻谷剛彦（講談社＋α文庫）

『基礎からわかる論文の書き方』小熊英二（講談社現代新書）

1-2 全般

『世界名言集』岩波文庫編集部編（岩波書店）

岩波文庫別冊の名言集4冊（『ことばの花束』『ことばの贈物』『ことばの饗宴』『愛のことば』）をまとめた。

『10代のための古典名句名言』佐藤文隆・高橋義人（岩波ジュニア新書）

『一日一言—人類の知恵』桑原武夫編（岩波新書）

『岩波新書で「戦後」をよむ』小森陽一・成田龍一・本田由紀（岩波新書）

『新潮文庫20世紀の100冊』関川夏央（新潮新書）

関川夏央（1949年～）は作家・評論家。

以下は読んだもの。夏目漱石『吾輩は猫である』。ヘルマン＝ヘッセ『車輪の下』。森鷗外『キタ・セクスアリス』。石川啄木『一握の砂・悲しき玩具』。志賀直哉『和解』。井伏鱒二『山椒魚』。宮沢賢治『注文の多い料理店』。梶井基次郎『檸檬』。芥川龍之介『河童・或阿呆の一生』。林芙美子『放浪記』。島崎藤村『夜明け前』。川端康成『雪国』。三木清『人生論ノート』。中島敦『李陵・山月記』。太宰治『津軽』。坂口安吾『堕落論』。竹山道雄『ビルマの豎琴』。カミュ『異邦人』。壺井栄『二十四の瞳』。石原慎太郎『太陽の季節』。大江健三郎『死者の奢り・飼育』。松本清張『点と線』。三浦哲郎『忍ぶ川』。安部公房『砂の女』。遠藤周作『沈黙』。三島由紀夫『春の雪 豊饒の海（一）』。星新一『未来いそっぷ』。宮本輝『螢川・泥の河』。ジョン＝アーヴィング『ガープの世界』。沢木耕太郎『深夜特急1香港・マカオ』。江國香織『きらきらひかる』。宮部みゆき『火車』。『術語集—気になることば』中村雄二郎（岩波新書）

『術語集Ⅱ』中村雄二郎（岩波新書）

『客観性の落とし穴』村上靖彦（ちくまプリマー新書）

村上靖彦（1970年～）は大阪大学大学院教授。専門は現象学的な質的研究。

新書大賞2024第3位。

『17歳のための世界と日本の見方—セイゴオ先生の人間文化講義』松岡正剛（春秋社）

『知の編集術』松岡正剛（講談社現代新書）

『大学受験に強くなる教養講座』横山雅彦（ちくまプリマー新書）

『思考の整理学』外山滋比古（ちくま文庫）

外山滋比古（1923～2020年）はお茶の水女子大学名誉教授。専攻は英文学。

2008年東大・京大で一番読まれた本。出版は1983年で86年に文庫化された。発売から21年かけて17万部ゆっくり売れたのが、287万部突破のベストセラーになった。

『読書力』 齋藤孝（岩波新書）

『古典力』 齋藤孝（岩波新書）

『福岡ハカセの本棚』 福岡伸一（メディアファクトリー新書）

第2章 政治・経済・社会

2-1 全般

『新・世界経済入門』西川潤（岩波新書）

西川潤（1936～2018年）は早稲田大学名誉教授。専門は国際経済学，開発経済学。

NAFTAの結果，「メキシコ農業ではアメリカ農産物の輸入が大きく増え，農業の大農場集中が進む反面，中小農が離農し，多くがアメリカに労働移民（不法移民を含む）として移動し，アメリカ農業を支えることになった。メキシコ人口の1割以上が，いまではアメリカで暮らしている。」

『世界経済図説 第四版』宮崎勇・田谷禎三（岩波新書）

『世界経済図説 第三版』宮崎勇・田谷禎三（岩波新書）

『日本経済図説 第五版』宮崎勇・本庄真・田谷禎三（岩波新書）

『日本経済図説 第四版』宮崎勇・本庄真・田谷禎三（岩波新書）

『日本経済図説 第三版』宮崎勇・本庄真・田谷禎三（岩波新書）

『日本の構造—50の統計データで読む国のかたち』橘木俊詔（講談社現代新書）

『「日本」ってどんな国？—国際比較データで社会が見えてくる』本田由紀（ちくまプリマー新書）

『地球環境報告Ⅱ』石弘之（岩波新書）

『人新世の「資本論」』斎藤幸平（集英社新書）

斎藤幸平（1987年～）は東京大学准教授。専門は経済思想・社会思想。

新書大賞2021受賞。

『未来への大分岐—資本主義の終わりか，人間の終焉か？』

マルクス・ガブリエル，マイケル・ハート，ポール・メイソン，斎藤幸平編（集英社新書）

『知の逆転』ジャレド・ダイヤモンド，ノーム・チョムスキー，オリバー・サックス，マーゼン・ミンスキー，トム・レイトン，ジェームズ・ワトソン，吉成真由美［インタビュー・編］（NHK出版新書）

『知の英断』ジミー・カーター，フェルナンド・カルドゾ，グロ・ハーレム・ブルントラント，メアリー・ロビンソン，マルッティ・アハティサーリ，リチャード・ブランソン，吉成真由美［インタビュー・編］（NHK出版新書）

『社会学の名著30』竹内洋（ちくま新書）

竹内洋（1942年～）は京都大学名誉教授。関西大学名誉教授。専攻は歴史社会学・教育社会学。

以下は30冊の一部。マルクス・エンゲルス『共産党宣言』。マックス＝ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』。ハーバーマス『公共性の構造転換』。フーコー『監獄の誕生』。リースマン『孤独な群衆』。イリッチ『脱学校の社会』。

『現代社会の理論—情報化・消費化社会の現在と未来』見田宗介（岩波新書）

『社会学入門—人間と社会の未来』見田宗介（岩波新書）

『現代社会はどこへ向かうか—高原の見晴らしを切り開くこと』見田宗介（岩波新書）

見田宗介（1937～2022年）は東京大学名誉教授。専攻は現代社会論，比較社会学，文化の社会学。

『3・11複合被災』外岡秀俊（岩波新書）

『福島原発事故—県民健康管理調査の闇』日野行介（岩波新書）

『ふくしま原発作業員日誌—イチエフの真実，9年間の記録』片山夏子（朝日新聞出版）

片山夏子は東京新聞記者。

講談社本田靖春ノンフィクション賞・早稲田ジャーナリズム大賞奨励賞・「むのたけじ地域・民衆ジャーナリズム賞」大賞の3賞受賞。

『1968—若者たちの叛乱とその背景』小熊英二（新曜社）

『1968—叛乱の終焉とその遺産』小熊英二（新曜社）

小熊英二（1962年～）は慶應義塾大学教授。専攻は歴史社会学・相関社会科学。

『対話の回路—小熊英二対談集』小熊英二（新曜社）

対談者は、村上龍・島田雅彦・網野善彦・谷川健一・赤坂憲雄・上野千鶴子・姜尚中・今沢裕。

『真剣に話しましょう—小熊英二対談集』小熊英二（新曜社）

対談者は、古市憲寿・高原基彰・上野千鶴子・小川有美・酒井啓子・篠田徹・湯浅誠・保坂展人・東浩紀・菅原琢・韓東賢・木村草太。

『私たちはいまだどこにいるのか—小熊英二時評集』小熊英二（毎日新聞社）

『私たちはどこへ行こうとしているのか—小熊英二時評集』小熊英二（毎日新聞出版）

『日本社会のしくみ—雇用・教育・福祉の歴史社会学』小熊英二（講談社現代新書）

新書大賞2020第4位。

『社会を変えるには』小熊英二（講談社現代新書）

新書大賞2013受賞。

『私たちの国で起きていること—朝日新聞時評集』小熊英二（朝日新書）

『社会を知るために』筒井淳也（ちくまプリマー新書）

筒井淳也（1970年～）は立命館大学教授。専門は家族社会学・計量社会科学。

新書大賞2021第9位。

「社会は、決して思い通りにならないものです。しかし他方で、動かす余地がいくらでもあるものです。本書では、このことを「意図せざる結果」「緩さ」という言葉で表現しています。世の中の変化の多くは、人々が意図して変えたものではありません。そして世の中の各部分のつながりは、しっかりと考えられたものではなく、緩いものであるがゆえに、適切に考えれば動かすことができるものです。この「緩さ」は、意図せざる結果を生み出すものですし、他方で意図的に社会を動かすことも可能にするものです。」

『未婚と少子化—この国で子どもを産みにくい理由』筒井淳也（PHP新書）

「少し想像してみよう。誰かと出会い、結婚して協力しながら生活を成立させ、子育てを行う人生において、どういう働き方であればそれを支えることができるだろうか。もし安定した所得がなければ、そういった人生はなかなか想像できないだろう。出生率対策として最優先すべきは、経済政策、特に安定雇用の拡充と賃金の上昇である。経済政策は短期的には実を結ばない。それこそ総合的かつ長期的な取り組みが必要なものだが、効果は大きい。

次に、自分が近い将来にどこでどのような働き方をしているのかが、ある程度予測できることが重要である。この予測を難しくするのが、いわゆる「日本的雇用」、特に日本の大企業において典型的に見られる働き方である。それはすなわち、「労働時間と勤務地を選べない」働き方である。」「このような働き方は、日本人にとってはなじみ深いものだが、日本以外ではほとんど見ることができない。世界的に見れば、時間外労働は一部の働き手を除けば珍しいものだし、転勤も基本的に存在しない。」「日本のこのような働き方は、結婚や子育てにとって阻害的に働きうる。」

『子育て罰—「親子に冷たい日本」を変えるには』末富芳・桜井啓太（光文社新書）

末富芳（1974年～）は日本大学教授。専門は教育行政学・教育財政学。

桜井啓太（1984年～）は立命館大学准教授。専門は社会学・社会福祉学。

末富「結局のところ、「あなたが生きていてくれるとすごく嬉しい」という感覚が日本に少ないのが問題で

す。」

桜井「日本の学校が、そういうところですからね。頑張る人が評価される場合が多い。でも、基本的なことですが、人権や権利に「頑張っているかどうか」は関係ないんです。」

『ソーシャルジャスティス—小児精神科医、社会を診る』内田舞（文春新書）

内田舞は小児精神科医。ハーバード大学医学部准教授。マサチューセッツ総合病院小児うつ病センター長。米国ボストン在住・三児の母。

『ヒーローを待っていても世界は変わらない』湯浅誠（朝日文庫）

『朝日ざらい—よりよい世界のためのリベラル進化論』橘玲（朝日新書）

新書大賞2019第7位。

『共同取材 見たくない思想的現実を見る』金子勝・大澤真幸（岩波書店）

『独立国家のつくりかた』坂口恭平（講談社現代新書）

坂口恭平（1978年～）は建築家・作家・絵描き・踊り手・歌手。

新書大賞2013第6位。

2012年5月、新政府を樹立し、初代内閣総理大臣に就任。躁鬱病を患う。「いのちの電話」で「死にたい人」からの電話を10年受け続けている。

『苦しい時は電話して』坂口恭平（講談社現代新書）

『モバイルハウス三万円で家をつくる』坂口恭平（集英社新書）

『国民の違和感の9割は正しい』堤未果（PHP新書）

堤未果（1971年～）は国際ジャーナリスト。

「SNSで、最もスピーディに拡散されるのも、怒りと恐怖。スマホが市場に出て以降の売り上げと、10代の子供たちの自殺率の推移がほぼ重なることは、決して偶然ではありません。」

『堤未果のショック・ドクトリン—政府のやりたい放題から身を守る方法』堤未果（幻冬舎新書）

「ショック・ドクトリンとは、テロや戦争、クーデターに自然災害、パンデミックや金融危機、食糧不足に気候変動など、ショッキングな事件が起きたとき、国民がパニックで思考停止している隙に、通常なら炎上するような新自由主義政策（規制緩和、民営化、社会保障切り捨ての三本柱）を猛スピードでねじ込んで、国や国民の大事な資産を合法的に略奪し、政府とお友達企業群が大儲けする手法です。」

『ルポ 食が壊れる—私たちは何を食べさせられるのか？』堤未果（文春新書）

ファーストフードやコンビニでも、食物由来の人工肉が大々的に売り出されている。その裏側がわかる。自分は食べない。ビル・ゲイツは慈善家になっただけではなく、投資家のまま。投資対象の中心を、ITよりも利益が上がる農業などに変えただけ。

『縁食論—孤食と共食のあいだ』藤原辰史（ミシマ社）

『世界で最初に飢えるのは日本—食の安全保障をどう守るか』鈴木宣弘（講談社+α新書）

鈴木宣弘（1958年～）は東京大学教授。農業経済学者。農林水産省に15年勤めていた。

「今だけ、金だけ、自分だけ」という政権批判のスローガンを使い始めた人である。

『社会喪失の時代—プレカリテの社会学』ロベール・カステル／北垣徹＝訳（明石書店）

訳者の北垣徹（1967年～）は西南学院大学教授。2015センター試験・追試験・国語の評論文の筆者。大学の同級生。

訳者本人から献本として自宅に届いた。帯広告「この不安と閉塞感はどこからくるのか？ 雇用の劣化，社会保障の崩壊。歴史的な大転換のなか荒れ狂う 資本主義にさらされる持たざる者には 社会的所有の再構築しかない。カステル社会学のエッセンス。」

以下は、「2015センター試験・追試験」国語・評論文の「運動する認識」の演習の際に、筆者本人に書いて

もらった文章。

沖縄教員塾で学ばれている皆さんへ

人のこころというものを、古い考え方ですが、知・情・意の三層で考えるのが私にはしっくりきます。知性の基に感情があって、そのまた基に意志がある。皆さんも勉強して知識を得る際に、そこには好きとか嫌いとか、憧れとか畏れとか、何らかの感情あるいは気分のようなものが働いているのを感じないでしょうか。さらにはもっと根底に、意志というか意欲というか、行動を促す根源的な力のようなものがうごめいているのを感じないでしょうか。

アメリカの心理学者ウィリアム・ジェームズは、概ねこの知情意の三層で考えています。ジェームズの読者であった夏目漱石も、『草枕』の冒頭で「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ」と述べています。知情意の一つだけが突出すると厄介なことになるので、三つのバランスを取ることが大事だというわけです。

私が「運動する認識」という小論を書いたときにも、こうした知情意の図式が念頭にありました。つまり、認識という知性の働きを支える、もっと情動的な何かがあるのではないかと、認識の陰には、意志の力のような捉えどころのない何かがあるのではないかと、そんな思いがありました。この小論では結果として、そうした深みを十分に捉えるには至ってはならず、下に何かあるでしょうと仄めかすに止まっています。何とかもっと掘り下げて、うまく言葉で説明できればと思ってはいるのですが……

でもこれは、理論的にきちんと把握するのは難しいかもしれないけど、経験的にはあっさり与实践されていることです。そのことは教員志望の皆さんにとって、すでに実感されているのではないのでしょうか。「教える」ということには、たんに知識を伝えるという次元だけでなく、知識を押ししたり引いたりする力の次元があります。教えるというのは、たんに言葉を連ねて情報を伝達するというのではないでしょう。教えるためには、人の感情を動かし、意志を呼び覚ます必要があります。知情意の情と意の層は、とりわけ他者と深い関係にあります。知を得るのは一人でも何とかなっても、情が動いたり、意がみなぎったりするには、やはり他人の介添えが要りますね。あるいはもっと広く、社会とか歴史とかに繋がっていることが必要です。

昔からの友人として私の知るかぎり、上高徳弘は知性の人であるだけでなく、すぐれて情念と意志の人でもあります。上高先生に触発されて、皆さんの情念と意志が動かされんことを心より願っております。そして皆さん自身が、教えることを通じて、より若い世代の人たちの情念と意志を揺さぶる存在になられんことを、切に祈念しております。皆さんに「運動する認識」を、私以上に掘り下げて読んでもらえたら幸いです。読者の方が作者よりも、先を行ったり深く入り込んだりすることは、十分可能ですから。

2020年4月

北垣 徹

『社会学の問い』北垣徹（中川書店）

著者本人から献本として自宅に届いた。1993年から2012年までの8本の論文を収録している。30年前から10年前までの論文を公刊している。時代の移り変わりに耐える強度をもった質の高い論文とすることができるだろう。

「社会を問うよりも「社会をつくる」ことを問うべきだ。社会ができあがる以前の、さまざまな諸関係に注目する必要がある。さまざまなヒトやモノが組み合い、結びつく場を見定めること、これが社会学がなそうとしたことである。」

「「権利」という訳語も、他の候補として「権理」や「通義」があった。（中江）兆民は「権利」よりも「通義」を好んだが、その理由はフランス語*droit*や英語の*right*には、形容詞として「正しい」という意味があり、名詞としてもある種の普遍性が含意されているのに対し、中国語の「権利」のそもそもの意味は「権力と利益」であり、正しさや普遍性のニュアンスはないからだとしている。兆民の議論はすぐれて説得力があるけれども、今日では「権利」の語が完全に定着している。しかしそのことが今日における権利理解にとって、障害とまではいかないにせよ、ある種のバイアスをつくり出しているのは確かである。」

2-2 法律

『日本国憲法 第六版』芦部信喜（岩波書店）

『比較のなかの改憲論—日本国憲法の位置』辻村みよ子（岩波新書）

辻村みよ子（1949年～）は東北大学名誉教授。専攻は憲法学，比較憲法，ジェンダー法学。

『上野千鶴子の選憲論』上野千鶴子（集英社新書）

詩人の川満信一（1932年～）の琉球共和社会憲法C私（試）案が全文掲載されている。

『法とは何か』渡辺洋三（岩波新書）

『日本人の法意識』川島武宜（岩波新書）

『人が人を裁くということ』小坂井敏晶（岩波新書）

『プリズン・サークル』坂上香（岩波書店）

映画『プリズン・サークル』を見よう。

監督・著者の坂上香（1965年～）はドキュメンタリー映画監督。官民協働の新しい刑務所の物語。

「哲学者のミシェル・フーコーは、「従順」で「有用」な個人をつくるための「規律権力」が、学校、警察、軍隊、工場、企業、公共機関を覆い、社会が刑務所化してきたことを指摘した。現在の日本の学校では否定的な感情を排除したり、あるいは子ども同士が縛り合ったりする関係性が加速しているうえに、さらなる沈黙の強要が起こっていると考えれば、学校の刑務所化は、既に刑務所そのものを超えてしまっている、とすらいえるかもしれない。」

「実は、受刑者の多くが過去にいじめの体験をもつことは、最近の児童虐待と犯罪の関連に着目した国内の大規模調査でも明らかになった。調査対象になった若年受刑者（20～39歳）500名の5割に、家族からの虐待被害が確認されたことはメディアでも取り上げられた。……しかし、さらに注目すべきは、家族以外の第三者からの被害が、家族による虐待を上回って6割にも上ることだ。そのうち、最も多かったのが「いじめ」（この調査では悪口や無視のみに限定）で、「身体的暴力」と「暴力の目撃」が後に続く。それらすべての項目が、小学校高学年から急増することも判明した。」

『無知の涙 増補新版』永山則夫（河出文庫）

永山則夫（1949～97年）は19歳で4名を連続射殺した。その獄中ノートである。4歳で、4人のきょうだいと共に冬の網走に半年間捨てられた彼は、1997年に死刑で処刑された。

『まなざしの地獄—尽きなく生きることの社会学』見田宗介（河出書房新社）

見田宗介（1937～2022年）は東京大学名誉教授。専攻は現代社会論、比較社会学、文化の社会学。永山事件を若者の不安定雇用の問題として析出させた小論である。

死刑は廃止しなければならない。2023年の死刑執行国は19か国のみ。死刑を廃止していることがEUの加盟条件である。

『永山則夫—封印された鑑定記録』堀川恵子（講談社文庫）

堀川恵子（1969年～）はノンフィクション作家。

「30歳になった永山は、ある女性と結婚した。その人は占領下の沖縄に生まれ、10代でアメリカに渡っていた6歳年下の日本人。ミミというニックネームのその女性は、永山が書いた『無知の涙』を読み、彼の孤独と自らの人生を重ねた。ミミもまた実の父を知らず、幼い頃に母に置き去りにされるという傷を負っていた。」

『死刑の基準—「永山裁判」が遺したもの』堀川恵子（講談社文庫）

第32回講談社ノンフィクション賞受賞

2-3 政治

『政治学の名著30』佐々木毅（ちくま新書）

佐々木毅（1942年～）は東京大学名誉教授。東京大学総長だった。

以下は30冊の一部。プラトン『ゴルギアス』。マキアヴェッリ『君主論』。ヴェーバー『職業としての政治』。アリストテレス『政治学』。ホッブズ『リヴァイアサン』。ロック『政府論』と『寛容書簡』。モンテスキュー『法の精神』。プラトン『国家（ポリテイア）』。孔子『論語』。アウグスティヌス『神の国』。カルヴァン『キリスト教綱要』。孫武『孫子』。カント『永遠平和のために』。アダム＝スミス『国富論』。ヘーゲル『法の哲学』。マルクス、エンゲルス『共産党宣言』。ロールズ『正義論』。ルソー『社会契約論』。J.S.ミル『代議政体論』。福沢諭吉『文明論之概略』。孫文『三民主義』。アレント『全体主義の起源』。

『現代政治学の名著』佐々木毅編（中公新書）

『戦略論の名著—孫子、マキアヴェリから現代まで』野中郁二郎編著（中公新書）

野中郁二郎（1935年～）は一橋大学名誉教授。

以下はその名著の一部。孫武『孫子』。マキアヴェリ『君主論』。毛沢東『遊撃戦論』。

『姜尚中の政治学入門』姜尚中（集英社新書）

『民主主義とは何か』宇野重規（講談社現代新書）

宇野重規（1967年～）は東京大学教授。専攻は政治思想史、政治哲学。2020年の日本学術会議任命拒否6人のうちの1人。

2021年度石橋湛山賞受賞。新書大賞2021第2位。

公務員試験対策で政治学・国際関係論を教えた経験から薦める。

『新版 行政ってなんだろう』新藤宗幸（岩波ジュニア新書）

『コミュニティを問いなおす—つながり・都市・日本社会の未来』広井良典（ちくま新書）

広井良典（1961年～）は京都大学教授。

2009年大佛次郎論壇賞受賞。

『生き方の不平等—お互いさまの社会に向けて』白波瀬佐和子（岩波新書）

『政党崩壊—永田町の失われた十年』伊藤惇夫（新潮新書）

『日本改造計画』小沢一郎（講談社）

『新しい国へ—美しい国へ 完全版』安倍晋三（文春新書）

法の支配と立憲主義の歴史的意味を理解していないことを隠さず、法の支配と立憲主義を否定する。34ページ分を「日米同盟」にあてているが、沖縄の「お」の字も出てこない。『美しい国へ』（安倍晋三・文春新書）の全文を収録し、新論文を追加している。

『自民党という絶望』石破茂・鈴木エイト・白井聡・古谷経衡・浜矩子・野口悠紀雄・鈴木宣弘・井上寿一・亀井静香（宝島新書）

『「自由」の危機—息苦しさの正体』藤原辰史・内田樹・姜尚中・佐藤学・望月衣塑子・桐野夏生・村山由佳・上野千鶴子・小熊英二・苫野一徳・高橋哲哉・前川喜平・堤未果・池内了・津田大介・隠岐さや香・鈴木大裕・平田オリザ・杉田敦・阿部公彦・石川健治・会田誠・山田和樹・ヤマザキマリ・永井愛・山崎雅弘（集英社新書）

藤原辰史「オスプレイ1機は日本学術会議の1年間の予算の20倍なのに、どうしてオスプレイ1機を削減するよりも、日本学術会議の予算を削ることに貴重な労力を費やすのか。」

ヤマザキマリ「私は自分の子どもをいろいろな国で育ててきましたが、日本のように、学術を社会に出ていくための学歴を手に入れる手段と捉え、にわか作業で知識を頭に詰め込んでよしとする国はどこにもありませんでした。」

小熊英二「自分が苦しい時に声を上げれば、誰かから答えてもらえるという信頼が持てているのは、人間として正常な在り方です。人権とはヒューマンライツ、つまり人間として正しい、正常な在り方のことです。そういう状態が成り立っていないことを、人権が守られていないという。」

高橋哲哉「OECDの国際教員指導環境調査（TALIS）の2018年の報告書に、教育環境の国際比較があります。その中で、中学校の教員に対して、自らの授業において「批判的に考える必要がある課題を与える」ような指導実践を行なっているかどうか質問しています。「しばしば」または「いつも」行なっていると回答した教員の割合は、各国とも非常に高く、ブラジルの84.2%を筆頭に、アメリカが78.9%、オーストラリアが69.5%、イギリスは67.5%、フランスは50.3%、隣国の韓国は比較的低い方ですが、それでも44.8%でした。これに対して日本は圧倒的に低く、わずか12.6%で、参加48カ国中の最下位でした。

一方、「教室でのルールを守るように生徒に伝える」指導実践については、「しばしば」または「いつも」

行なっている割合が日本は非常に高い。批判的な思考の場合は12%程度だったのに、こちらは64%もありました。日本の学校の中では、「日の丸・君が代」を押し付けられても、大方の教員は、まあ仕方ないかと受け入れている状況があります。そうした空気の中で、批判的思考を促す授業が行なわれていない。」

『日本はなぜ、「基地」と「原発」を止められないのか』矢部宏治（講談社＋α文庫）

米軍が沖縄でやりたい放題でいられる理由が書かれている。

『日本はなぜ、「戦争ができる国」になったのか』矢部宏治（講談社＋α文庫）

『経済的徴兵制』布施祐仁（集英社新書）

布施祐仁（1976年～）はフリージャーナリスト。

「貧困率上位15道県だけで、全国の高校新卒「2士」入隊者数のじつに約52%を占めている。ちなみに、この15道県の高校新卒者数の全国に占める割合は、約27%に過ぎない。」

沖縄の高校新卒者の200人に1人は自衛隊に入隊している。

『大臣 増補版』菅直人（岩波新書）

『東電福島原発事故総理大臣として考えたこと』菅直人（幻冬舎新書）

『首相官邸の前で—Tell the Prime Minister』小熊英二（集英社）

同じタイトルの映画のDVD付き。映画『首相官邸の前で—Tell the Prime Minister』の上映会を沖縄教員塾で2017年3月5日に行った。沖縄では初上映だった。

『地図から消される街—3.11後の「言ってはいけない真実」』青木美希（講談社現代新書）

『核大国ニッポン』堤未果（小学館新書）

『日本が売られる』堤未果（幻冬舎新書）

新書大賞2019第4位。

『ニュー・アソシエーションист宣言』柄谷行人（作品社）

柄谷行人（1941年～）は思想家。バーグルエン哲学・文化賞受賞。賞金は100万ドル。

60年安保の全学連の活動家、法政大学教授、近畿大学教授、コロンビア大学客員教授だった。

『都市の論理 第一部 歴史的条件』羽仁五郎（講談社文庫）

『都市の論理 第二部 現代の闘争』羽仁五郎（講談社文庫）

『地方消滅』増田寛也編著（中公新書）

新書大賞2015受賞。

『暴走する地方自治』田村秀（ちくま新書）

『政令指定都市—百万都市から都構想へ』北村亘（中公新書）

『ボランティア—もうひとつの情報社会』金子郁容（岩波新書）

2-4 経済

『経済学の名著30』松原隆一郎（ちくま新書）

松原隆一郎（1956年～）は東京大学名誉教授。専攻は社会経済学・相関社会科学。

以下は30冊の一部。ロック『統治論』。ヒューム『経済論集』。スミス『道徳感情論』と『国富論』。リカード『経済学および課税の原理』。リスト『経済学の国民的体系』。J.S.ミル『経済学原理』。マルクス『資本論』。シュンペーター『経済発展の理論』。ケインズ『雇用・利子および貨幣の一般理論』と『若き日の信条』。フリードマン『資本主義と自由』。ロールズ『正義論』。セン『不平等の再検討』。

『経済学とは何だろうか』佐和隆光（岩波新書）

『経済学のことば』根井雅弘（講談社現代新書）

『WTO—貿易自由化を超えて』 中川淳司（岩波新書）

『グローバル恐慌』 浜矩子（岩波新書）

『資本主義の終焉と歴史の危機』 水野和夫（集英社新書）

水野和夫（1953年～）は法政大学教授。専門は現代日本経済論。信頼するエコノミスト。

新書大賞2015第2位。

「いくら資本を再投資しようとも、利潤をあげるフロンティアが消滅すれば、資本の増殖はストップします。そのサインが利子率ゼロということです。利子率がゼロに近づいたということは、資本の自己増殖が臨界点に達していること、すなわち資本主義が終焉期に入っていることを意味しています。」

『閉じてゆく帝国と逆説の21世紀経済』 水野和夫（集英社新書）

日本が「EUに毎年加盟申請をする」。自分と同じ意見が書かれていて驚いた。

『豊かさとは何か』 暉峻淑子（岩波新書）

『財政から読み解く日本社会—君たちの未来のために』 井手栄策（岩波ジュニア新書）

『デフレの正体—経済は「人口の波」で動く』 藻谷浩介（角川oneテーマ21新書）

藻谷浩介（1964年～）は地域エコノミスト。平成合併前の約3200市町村の99.9%と海外59か国を訪問。

新書大賞2011第2位。

著者による要約。「経済を動かしているのは、景気の波ではなくて人口の波、つまり生産年齢人口＝現役世代の数の増減だ」。沖縄経済を知る上でも推薦。

『里山資本主義—日本経済は「安心の原理」で動く』 藻谷浩介・NHK広島取材班（角川oneテーマ21新書）

新書大賞2014受賞。

『雇用身分社会』 森岡孝二（岩波新書）

『ルポ 雇用劣化不況』 竹信三恵子（岩波新書）

『ジョブ型雇用社会とは何か—正社員体制の矛盾と転機』 濱口桂一郎（岩波新書）

濱口桂一郎（1958年～）は労働政策研究・研修機構労働政策研究所長。専門は労働法，社会政策。

新書大賞2022第6位。

「外に現れたものとしては何を評価するかというと、人事労務でいう情意考課です。情意というのは、一言でいうとやる気です。やる気というのは、企業メンバーとしての忠誠心を評価しているわけですが、やる気を何で見るかといえ、一番わかりやすいのは長時間労働です。」

教職員評価システムが、教員の長時間労働をもたらし、その一部として部活動の過熱化をもたらしていることがわかる。

『ブラック企業—日本を食いつぶす妖怪』 今野晴貴（文春新書）

今野晴貴（1983年～）はNPO法人POSSE代表。社会政策，労働経済学。

2013年大佛次郎論壇賞受賞。

『ルポ 生活保護—貧困をなくす新たな取り組み』 本田良一（中公新書）

本田良一（1959年～）はノンフィクション作家・ジャーナリスト。北海道新聞記者だった。

「子どもが貧困から抜け出す有効な手段となる教育だが、教育を受ける費用は異常に高い。頼みの奨学金さえ、有利子となり、返済できない人が増える」。「貧しい家庭に生まれた子どもは、ずっと貧しい生活を送るしかない—そんな社会は子どもたちから希望と可能性を奪い、彼らの不満と反撥を招くだろう。優秀な人材と能力を埋もれさせ、社会の活力を衰退させるだろう。いま、日本はその瀬戸際にある。」「貧困の連鎖の中にあることの多い生活保護世帯の親は高校、大学生活を経験した人が少なく、進学や学校生活、勉強について具体的にアドバイスができない」。

『さおだけ屋はなぜ潰れないのか？—身近な疑問からはじめる会計学』 山田真哉（光文社新書）

『払ってはいけない—資産を減らす50の悪習慣』荻原博子（新潮新書）

『日本の税金 第3版』三木義一（岩波新書）

三木義一（1950年～）は青山学院大学名誉教授。学長だった。専門は租税法，行政法，会計。

日本の消費税は税率が3%・5%・8%と定額である点がよかった。2019年10月から軽減税率によって10%と8%の2つに分かれる。中小企業・自営業者の負担を考えたときに，単純に10%とする方が社会全体のコストが低い。にもかかわらず新聞が自らのためだけに軽減税率導入の論陣を張ったことは許せない。

『自動車の社会的費用』宇沢弘文（岩波新書）

『原発のコスト—エネルギー転換への視点』大島堅一（岩波新書）

大島堅一（1967年～）は龍谷大学教授。専攻は環境経済学，環境・エネルギー政策論。

2012年大佛次郎論壇賞受賞。

「福島第一原発事故は，原発を15基（1基廃炉中）にかえる福井県出身の私にとって，衝撃的な出来事でした。これまで，原子力政策を政治経済学的立場から研究してきましたが，原子力政策の異常な推進体制をしつかり国民に伝えきれたかどうかを振り返り，心から反省しました。一般書を書こうと決意したのはこのためです。注をつけず，大学入学したての1年生が読んでも理解できるように努力しました。これまでの歴史上の大きな変革は，常に若者によって先導されました。私は，若者に賭けたいと思います。」

『家計からみる日本経済』橋木俊詔（岩波新書）

橋木俊詔（1943年～）は京都大学名誉教授。専攻は労働経済学。「格差社会」の火付け役である。

2004年度石橋湛山賞受賞。

『格差社会』橋木俊詔（岩波新書）

『夫婦格差社会—二極化する結婚のかたち』橋木俊詔・迫田さやか（中公新書）

『離婚の経済学—愛と別れの論理』橋木俊詔＋迫田さやか（講談社現代新書）

迫田さやか（1986年～）は同志社大学准教授。専門は経済学（所得分配・不平等・貧困問題）。

「有配偶離婚率（結婚している夫婦だけが分母である）は，21世紀に入って19歳以下の男性は40%強，女性は80%前後であり，20～24歳では50%前後に達している。すなわち，結婚する若者に限定すれば，約半数が離婚に至るという深刻さである。」「労働市場と結婚市場は連動している」。

『〈格差〉と〈階級〉の戦後史』橋本健二（河出新書）

『階級都市—格差が街を侵食する』橋本健二（ちくま新書）

『アンダークラス—新たな下層階級の出現』橋本健二（ちくま新書）

『中流崩壊』橋本健二（朝日新書）

『新・日本の階級社会』橋本健二（講談社現代新書）

橋本健二（1959年～）は早稲田大学教授。専攻は社会学（社会階層論，階級論）。

次のような指摘は，新自由主義への根底的な批判である。「経済格差の大きさと死亡率の関係を都市別にみると，不平等な都市ほど死亡率が高くなる。……データは，不平等な社会に住めば，どんな所得レベルの人でも死亡率が上がってしまうことを示している。格差が大きくなると，低所得の人々のみならず，平均的な，さらには平均以上の所得のある豊かな人々でも，死亡率が上昇するのである。」

『「家族の幸せ」の経済学—データ分析でわかった結婚，出産，子育ての真実』山口慎太郎（光文社新書）

2019年度サントリー学芸賞（政治・経済部門）受賞。新書大賞2020第5位。

『競争と公平感—市場経済の本当のメリット』大竹文雄（中公新書）

大竹文雄（1961年～）は大阪大学教授。専門は経済学（労働経済学，行動経済学）。

新書大賞2011第4位。

著者自身がワーカーホリックなので，ワーカーホリックに経済合理性があると自己肯定しているのが，同じ

ワーカーホリックとして笑えた。

『競争社会の歩き方—自分の「強み」を見つけるには』大竹文雄（中公新書）

『格差という虚構』小坂井敏晶（ちくま新書）

小坂井敏晶（1956年～）はパリ第八大学准教授だった。専門は社会心理学。

「能力を計測する物差しは存在しない。受験に合格し、スポーツの試合に勝ったり芸術で成功しても、あるいは起業がうまくいって大金を手にしても、それが能力によるものか、偶然や運、人脈の助けの結果なのか判別する術はない。遺伝・環境・偶然という外因が重なり合って生まれる差異、つまりくじ引きの結果による格差を正当化するために能力という「内因」を持ち出すのである。意志も能力も、神という外部の根拠を失った近代が個人内部に捏造する虚像だ。」

『貧乏はお金持ち—「雇われない生き方」で格差社会を逆転する』橘玲（講談社＋α文庫）

『「ニート」って言うな！』本田由紀・内藤朝雄・後藤和智（集英社新書）

『下流社会』三浦展（光文社新書）

『下流社会 第2章』三浦展（光文社新書）

『反貧困—「すべり台社会」からの脱出』湯浅誠（岩波新書）

湯浅誠（1969年～）は社会活動家。

2008年大佛次郎論壇賞受賞。

岩波新書の3冊『ルポ 貧困大国アメリカ』堤未果・『反貧困—「すべり台社会」からの脱出』湯浅誠・『子どもの貧困』阿部彩は、「貧困3部作」としてまとめて推薦する。

『正社員が没落する』堤未果・湯浅誠（角川oneテーマ21新書）

『貧困についてとことん考えてみた』湯浅誠・茂木健一郎（NHK出版新書）

『弱者の居場所がない社会—貧困・格差と社会的包摂』阿部彩（講談社現代新書）

『貧困を救えない国 日本』阿部彩・鈴木大介（PHP新書）

『本当の貧困の話をしよう—未来を変える方程式』石井光太（文春文庫）

石井光太（1977年～）はノンフィクション作家。

『世代間格差』加藤久和（ちくま新書）

『貧困世代—社会の監獄に閉じ込められた若者たち』藤田孝典（講談社現代新書）

藤田孝典（1982年～）は社会活動家。

台湾の本屋で翻訳書が大きく宣伝されていた。台湾は日本と同じで、都市部であればどこに行ってもコンビニがある。つまりそれだけ最低時給の低賃金で働く人たちがいる。

『ルポ コールセンター—過剰サービス労働の現場から』仲村和代（朝日新聞出版）

『日本でいちばん大切にしたい会社』坂本光司（あさ出版）

『日本でいちばん大切にしたい会社2』坂本光司（あさ出版）

坂本光司（1947年～）は「人を大切にする経営学会」会長。専攻は経営学（中小企業経営論、地域経済論、地域産業論）。

「50年前に知的障害をもつ2人の少女を、「私たちみんなでカバーしますから」という社員たちのたつての願いで採用した日本理化学工業。今、この会社の障害者雇用率は、社員の7割に及んでいます。」沖縄教員塾でも日本理化学工業のチョークを使用していた。

2-5 メディア

『メディア論の名著30』佐藤卓己（ちくま新書）

佐藤卓己（1960年～）は上智大学教授。京都大学名誉教授。専攻はメディア史。

以下は30冊の一部。クラッパー『マス・コミュニケーションの効果』。ボードリヤール『消費社会の神話と構造』。ベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』。リップマン『世論』。ハーバーマス『公共性の構造転換』。ノエル＝ノイマン『沈黙の螺旋仮説』。マクルーハン『メディア論』。

『メディアと日本人—変わりゆく日常』橋元良明（岩波新書）

橋元良明（1955年～）は東京女子大学教授。東京大学教授だった。専攻はコミュニケーション論。

1995年から2010年までの著者らによる「日本人の情報行動調査」に基づくメディア論。

『ちょっとピンぼけ』ロバート・キャパ（文春文庫）

ロバート・キャパ（1913～54年）はハンガリー生まれの報道写真家。

『新聞記者』望月衣塑子（角川新書）

『報道現場』望月衣塑子（角川新書）

望月衣塑子（1975年～）は東京新聞記者。『新聞記者』は映画化・ドラマ化された。

『同調圧力』望月衣塑子，前川喜平，マーティン・ファクラー（角川新書）

『政府は必ず嘘をつく 増補版』堤未果（角川新書）

『政府はもう嘘をつけない』堤未果（角川新書）

『社会の真実の見つけかた』堤未果（岩波ジュニア新書）

『デジタル・ファシズム—日本の資産と主権が消える』堤未果（NHK出版新書）

新書大賞2022第4位。

『別冊NHK100分de名著 メディアと私たち』堤未果・中島岳志・大澤真幸・高橋源一郎（NHK出版）

『支配の構造 国家とメディア—世論はいかに操られるか』

堤未果・中島岳志・大澤真幸・高橋源一郎（SB新書）

『ネットのバカ』中川淳一郎（新潮新書）

中川淳一郎（1973年～）はネットニュース編集者・PRプランナー。

「【ネットに関する基本4姿勢】

- ・人間はどんなツールを使おうが、基本的能力がそれによって上がることはない
- ・ツールありきではなく、何を言いたい、何を成し遂げたいかによって、人は行動すべき。ネットがそれを達成するために役立つのであれば、積極的に活用する
- ・ネットがあろうがなかろうが有能な人は有能なまま、無能な人はネットがあっても無能なまま
- ・1人の人間の人生が好転するのは人との出会いによる」

『映画を早送りで観る人たち—ファスト映画・ネタバレ——コンテンツ消費の現在形』稲田豊史（光文社新書）

稲田豊史（1974年～）はライター・コラムニスト・編集者。

新書大賞2023第2位。

「新聞・雑誌とインターネットの大きな違いは何か。紙面・誌面の存在する前者は、自分が特に興味のない記事や広告もなんとなく目に触れる作りだが、後者では見出しをクリックで読みたい記事だけを読む。すなわち、ぱっと見て興味のない記事は視界にすら入れなくてよい。」

『スマホが学力を破壊する』川島隆太（集英社新書）

川島隆太（1959年～）は医学博士。東北大学加齢医学研究所所長。

スマホをやめれば偏差値が10上がることを、仙台市の7万人の小中学生の児童生徒の5年間の追跡調査から明らかにしている。スマホで睡眠時間が削られるから学力が下がるのではない。スマホを使うから学力が下がるのである。家庭学習ゼロでスマホを使わない生徒の方が、家庭学習をするスマホ使用者よりも学力が高いのである。

『スマホはどこまで脳を壊すか』 榊浩平（朝日新書）

榊浩平（1989年～）は東北大学加齢医学研究所助教。

川島隆太監修。

「経済開発協力機構（OECD）が2015年に発表した、世界72の国と地域に住む15歳の子どもたち約54万人を対象とした調査結果によると、「学校にあるコンピュータの数が多い国ほど数学の学力が低い」「学校でインターネットを使うことが多い国ほど、子どもたちの読解力が低い」ことなどが報告されています。」

『スマホ依存から脳を守る』 中山秀紀（朝日新書）

中山秀紀（1973年～）は医学博士。旭山病院精神科医長。

本の帯広告に「スマホは最凶の依存物です」。

浜松市教育委員会は、教職員のスマホの職員室からの持ち出し（教室へのスマホの持ち込み含む）と、児童生徒及び保護者とのSNSでの個人的なやりとりを禁止した。スマホ依存の教師は学校と学校教育から退場すべし。

『スマホを捨てたい子どもたち—野生に学ぶ「未知の時代」の生き方』 山極寿一（ポプラ新書）

『スマホ脳』 アンデシュ・ハンセン（新潮新書）

アンデシュ・ハンセン（1974年～）は精神科医。スウェーデン出身。

新書大賞2021第5位。

大人がスマホを持たず、児童生徒にスマホを持たせなければ、大人と児童生徒の学力は上がる。文科省も教委も学校も保護者も、児童生徒の学力向上を真剣には考えていない。

2024年度実施教員選考試験・小学校国語で出題された。

『デジタル馬鹿』 ミシェル・デミュルジェ／鳥取絹子＝訳（花伝書）

ミシェル・デミュルジェ（1965年～）はフランス国立衛生医学研究所所長だった。専門は認識神経科学。

OECD加盟国では一人当たりのパソコンの数が増えるほど、数学（読書・科学）の成績が低下している。一人一台端末が愚民化政策であること、そしてそれへの抵抗の仕方を知ることができる。

第3章 歴史

「琉球・沖縄史」は6-3にまとめた。

3-1 全般

『人類の起源—古代DNAが語るホモ・サピエンスの「大いなる旅」』篠田謙一（中公新書）

篠田謙一（1955年～）は国立科学博物館館長。専門は分子人類学。

新書大賞2023第2位。

古人骨のDNA解析が可能になり、人類史の見直しが進む。本書は「古代DNA研究の最新成果をもとに人類の起源をたどる。長生きして、この研究の行く末を見たい。タミル語が日本語の起源だという大野晋の学説の正誤も明らかになるかもしれないからだ。自分はこの説を支持しているが、古代DNA研究で、縄文人の出発地点は南アジアと考えられている。

『歴史とは何か』E.H.カー／清水幾太郎＝訳（岩波新書）

『歴史学の名著30』山内昌之（ちくま新書）

山内昌之（1947年～）は東京大学名誉教授。専攻はイスラーム地域研究と国際関係史。教育再生実行会議委員（2013～15年）。

以下は30冊の一部。司馬遷『史記』。ホイジンガ『中世の秋』。慈円『愚管抄』。新井白石『読史余論』。カエサル『ガリア戦記』。チャーチル『第二次世界大戦』。ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』。フーコー『監獄の誕生』。

『銃・病原菌・鉄（上下）—1万3000年にわたる人類史の謎』ジャレド・ダイヤモンド（草思社文庫）

ジャレド・ダイヤモンド（1937年～）はカリフォルニア大学教授。生理学者、進化生物学者、生物地理学者。

朝日新聞「ゼロ年代の50冊」第1位。「歴史は、異なる人びとによって異なる経路をたどったが、それは、人びとのおかれた環境の差異によるものであって、人びとの生物学的な差異によるものではない」。

『現代史を学ぶ』溪内謙（岩波新書）

『二〇世紀の歴史』木畑洋一（岩波新書）

『戦後世界経済史—自由と平等の視点から』猪木武徳（中公新書）

猪木武徳（1945年～）は大阪大学名誉教授。国際日本文化研究センター名誉教授。

新書大賞2010第4位。

むすびの最後のことばは、次の通り。「知育・徳育を中心とした教育問題こそがこれからの世界経済の最大の課題であることは否定すべくもない。」

『トラクターの世界史—人類の歴史を変えた「鉄の馬」たち』藤原辰史（中公新書）

藤原辰史（1976年～）は京都大学准教授。専攻は農業思想史・農業技術史。

「家畜の糞尿を肥料にできなくなるのは大きな欠点であった。とくに、糞や木屑と一緒に発酵させて、養分豊富な堆肥を作れない。それゆえ、他所から肥料を購入せねばならない。20世紀は化学肥料の急激な発達をもたらした世紀であるが、それはトラクターの普及と密接にかかわっている。トラクターと化学肥料は切り離すことのできないパートナーなのである。」

『戦争と農業』藤原辰史（インターナショナル新書）

「トラクターが戦車に、化学肥料が火薬に、毒ガスが農薬になった！」

『史論の復権—與那覇潤対論集』與那覇潤（新潮新書）

3-2 日本史

『ともに学ぶ 人間の歴史 中学社会 歴史的分野』（学び舎）

文部科学省検定済の中学校社会（歴史）の教科書。現場の中学校教員たちが作った。歴史学習の面白さに圧倒される。歴史を暗記教科だと間違った認識を持っている人は、ぜひ手に取ってほしい。

『日本社会の歴史（上中下）』網野善彦（岩波新書）

『日本の歴史をよみなおす（全）』網野善彦（ちくま学芸文庫）

網野善彦（1928～2004年）は歴史学者。

『僕の叔父さん 網野善彦』中沢新一（集英社新書）

中沢新一（1950年～）は千葉工業大学日本文化再生研究センター所長。宗教学者・哲学者。

「歴史学とは、過去を研究することで現代人である自分を拘束している見えない権力の働きから自由になるための確実な道を開いていくことである、と網野さんは信じていた。」

『日本の歴史（上中下）』井上清（岩波新書）

井上清（1913～2001年）は京都大学名誉教授。日本史専攻。

メディア（2011年7月の文章）

私はテレビを見ない、基本的に。子どもが生まれて、テレビを見せないようにしていたら、自分もテレビを見る必要がないことに気づいた。私の家にはインターネットもない。

しかし、情報の入手で特に困ることはない。新聞と本で充分である。会社でインターネットは使うけれど。

日本語で新聞（新しく聞くこと）、英語でnewspaper（新しい紙）、フランス語でjournal（日々のもの）である。

新しさだけに商品価値があるかのようで、その日の新聞は、新鮮なその日のうちに読まなければならない感じがする。

しかし、ちょっと大きな図書館に行くと、例えば自分が生まれる前の新聞を、例えば1週間分読んでみよう。政治・経済・社会・スポーツ欄はもちろん、広告欄やテレビの局数・放送時間帯まで興味が尽きない。

下手な小説よりは、よほどおもしろい。

新しいニュースにはほとんど意味がない。ニュースは、時間の経過の中で、その価値がはっきりしてくる。

自分の顔は距離が近すぎて見えない。

ニュースも時間的距離を取らないと、その意味は見えない。

そもそも新聞は、連載やコラムや広告など、その日に読む必然性がないものが多い。その日にしか使えないものは、テレビ・ラジオ欄だけである（沖縄では死亡広告も）。

かつて岩波新書『日本の歴史（上・中・下）』の著者である井上清（京都大学名誉教授・故人）の自宅を訪ねた際に、「今日ヨーロッパからもどったばかりで、ずっと新聞を読んでいるところだ」とおっしゃっていたことがある。

海外旅行中の日本の新聞を読んでいたのは間違いない。歴史学者は、たまった古新聞を読んでいたのである。

私が自宅で購入しているのは朝日新聞だ。仕事が終わる、夕食を終えた23時過ぎに（もっと遅いことも多いが）、前日の夕刊と当日の朝刊を読む。毎朝、東京から那覇に飛行機でやってくるものだ。

その日の朝刊を読まずに、1日の仕事を終えるが特に困ることはない。

沖縄タイムスと琉球新報は、会社の古新聞をもらって読んでいる。それぞれ数ヵ月後に、別の時期に読む。同じ日の3種の新聞を、3回に分けて違う時期に読んでいる。

同じ歴史を3回などることができる。

日本の15年戦争の始まりとなった柳条湖事件（いわゆる「満州事変」）も、アメリカの本格的なベトナム戦争突入となったトンキン湾事件も、侵略する側のでっち上げの嘘の情報が、「真実」として報じられた。ほとんどすべての国民が、それを信じた。

最近のイラク戦争ですら、イラクに大量破壊兵器があることが、イラク侵略の口実とされ、アメリカは国連にもそのように報告した。実際にはイラクに大量破壊兵器はなかった。

日本の新聞・テレビは、原子力発電を容認し、その安全性を報道し、政府や東京電力などの「原発は安全」という広告を垂れ流してきた。

新聞は、大広告主である政府や電力会社の批判ができない。広告料（CM放映料）のみによって成り立つテレビは、なおさらそうである。

フクシマの報道では、メルトダウンが起きていたのに、それを東京電力が認めたのは約2ヶ月後であるし、冷却水の注水中断が首相の責任問題として国会で議論されていたのに、実際には注水は中断されていなかった。

軍部の情報をそのまま垂れ流して報道したように、東京電力の情報をそのまま垂れ流しただけだ（政府すら軍部・東京電力にだまされていることに注意）。

メディアにどのようなバイアス（歪み・偏り）がかかっているかを学び、メディア・リテラシー（メディアを読みとる力）を高めなければならない。

勧められることは、さまざまな本を読むことと、さまざまな考えの人に直接会うことだ。

それぞれの「私」は、政府であれ、大企業であれ、「私」自身であれ、すべてを自由に批判することができる。

私たちは、歴史に学ばないから、国民国家とマスメディアの誕生以降、同じ過ちを何度も何度も、あまりにも何度も繰り返してきた。

※今は自宅にインターネットがあり、会社を辞め、新聞は4紙読んでいる。

『いっきに学び直す日本史 古代・中世・近世 教養編』安達達朗（東洋経済新報社）

『いっきに学び直す日本史 近代・現代 実用編』安達達朗（東洋経済新報社）

『日本文化史 第二版』家永三郎（岩波新書）

家永三郎（1913～2002年）は東京教育大学名誉教授。専攻は日本思想史。家永教科書裁判の家永三郎である。

『日本文化の歴史』尾藤正英（岩波新書）

『未来のための江戸学—この国のカタチをどう作るのか』田中優子（小学館101新書）

田中優子（1952年～）は法政大学名誉教授。総長だった。専攻は日本近世文化・アジア比較文化。

以下は私塾について。「藩校に比べ時代に沿った新しい学問が特徴で、しかもそれぞれの土地に根差している。彼らは現実の農村の荒廃や社会の矛盾、変化を眼前に見ており、その現実こそが学問の動機であった。地に足のついた学問は地方で育ったのである。荻生徂徠は少年のころ父親が江戸払いとなって現在の千葉県茂原市に暮らすことになり、人々の暮らしを骨身にしみて知った。そこから書を読むと、何でもよく理解できたという。彼はこれを「南総の力」といつている。旅も学問や思想に大きな力となった。福岡に生まれた貝原益軒は、旅することで日本の本草学を確立した」。

『日本近代史』坂野潤治（ちくま新書）

坂野潤治（1937～2020年）は東京大学名誉教授。専門は近代日本政治史。

新書大賞2013第3位。

『近代日本一五〇年—科学技術総力戦体制の破綻』山本義隆（岩波新書）

山本義隆（1941年～）は科学史家。元東大全共闘代表。駿台予備校勤務（物理）。

「京都帝国大学の誕生は、日清戦争での賠償金によるものであり、九州帝大と東北帝大は、古川鉦業の寄付によって生まれた。古川市兵衛は、足尾鉦毒問題での世間の非難を緩和するために寄付をしたと伝えられる。」

『伊藤博文—知の政治家』瀧井一博（中公新書）

瀧井一博（1967年～）は国際日本文化研究センター教授。専門は法制史（国制史、比較法史）。

2010年度サントリー学芸賞（政治・経済部門）受賞。新書大賞2011第5位。

日本最初の首相はテロリストだった。「1862年12月には、高杉晋作らによる品川御殿山に建設中のイギリス公使館焼き打ちに参加、その数日後には、国学者塙次郎（忠宝。塙保己一の息子）が廃帝の故事を調査中との誤伝を信じて、山尾庸三とともにこれを斬殺している」。「松陰没後の伊藤は、このように立派なテロリストであり、その行動を支えていたのは、晩年の松陰が到達した尊王攘夷に基づく倒幕思想だった」。

『治安維持法—なぜ政党政治は「悪法」を生んだか』中澤俊輔（中公新書）

『日本軍兵士—アジア・太平洋戦争の現実』吉田裕（中公新書）

吉田裕（1954年～）は一橋大学名誉教授。東京大空襲・戦災資料センター館長。専攻は日本近代軍事史・日本近現代政治史。

新書大賞2019受賞。

日本の戦争の事実を知ることができる。

『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』加藤陽子（新潮文庫）

加藤陽子（1960年～）は東京大学教授。専攻は日本近現代史。2020年の日本学術会議任命拒否6人のうちの1人。

2010年小林秀雄賞受賞。

栄光学園の歴史研究部の高校生・中学生を対象にした講義録。

『戦争まで—歴史を決めた交渉と日本の失敗』加藤陽子（朝日出版社）

「沖縄戦の犠牲者は、民間人と軍人合わせて、18万8136人となり、民間人が9万4千人、軍人が9万4136人です。民間人と軍人の犠牲者数がほぼ同数であるところに、住民を巻き込んでなされた最大の地上戦の過酷さ

の本質が、よく現れていると思います。

日本軍による組織的抵抗は6月23日に終わったはずでしたが、それ以降の時期において、4万人以上の人々が亡くなっている点も、他では見られない特徴です。……最も大きな理由は、このとき、沖縄守備軍の最高指揮官である第32軍司令官牛島満が自決したことで、軍司令部の指揮系統が消滅し、軍とともに本島南端まで移動していた民間人が離散をよぎなくされたことにあります。」

『未完のファシズム―「持たざる国」日本の運命』片山杜秀（新潮選書）

片山杜秀（1963年～）は慶應義塾大学教授。専門は政治思想史。音楽評論家。『朝日新聞』の文芸時評とクラシック音楽評を担当していたことがある。

2012年度司馬遼太郎賞受賞。

『これだけは知っておきたい日本と朝鮮の一〇〇年史』和田春樹（平凡社新書）

和田春樹（1938年～）は東京大学名誉教授。専攻はロシア・ソ連史、現代朝鮮研究。

日本は大きくなったり小さくなったりしてきた。「昭和15（1940）年の国勢調査を見ると、日本本土には7311万人、朝鮮半島に2433万人、台湾島に587万人、その他関東州などで300万人、総計1億500万人、これが日本の臣民だということです。……一億人の戦士のうち7割は日本人で、2割5分、つまり4人に1人は朝鮮人だということです。」

『朝鮮人強制連行』外村大（岩波新書）

『朝鮮と日本に生きる―濟州島から猪飼野へ』金時鐘（岩波新書）

金時鐘（1929年～）は詩人。

2015年大佛次郎賞受賞。

『ノモンハン戦争―モンゴルと満洲国』田中克彦（岩波新書）

田中克彦（1934年～）は一橋大学名誉教授。専攻は言語学・モンゴル学。最も信頼する言語学者。

新書大賞2010第5位。

『きけわだつみのこえ―日本戦没学生の手記』日本戦没学生記念会編（岩波文庫）

『天皇の戦争責任』井上清（岩波同時代ライブラリー）

『昭和天皇―「理性の君主」の孤独』古川隆久（中公新書）

古川隆久（1962年～）は日本大学教授。専門は日本近代史。

2011年度サントリー学芸賞（政治・経済部門）受賞。新書大賞2012第2位。

『ヒロシマ・ノート』大江健三郎（岩波新書）

次のように記された本が発行されたのは1965年。60年前である。

「僕は沖縄の被爆者の鋭い棘にみちた言葉を書きとめておくほかにさしあたってなにひとつできないことを恥じるのみである。《日本人はもっと誠意をもってもらいたい。いつもアメリカのご機嫌をとって、人間の問題を放置している。もし、やるつもりがあるなら、すぐにもやってくれ、すぐさま行動に示してくれ。それがみんなの心です》」。

『自伝的戦後史（上下）』羽仁五郎（講談社文庫）

羽仁五郎（1901～83年）は歴史学者。1945年3月逮捕され、敗戦は警視庁の留置場で迎えた。10月治安維持法廃止によって釈放。参議院議員も務めた（1947～56年）。国立国会図書館創設の中心人物。政府による任命拒否が問題となっている日本学術会議創立の中心人物。

30年ぶりに再読した。羽仁五郎の「真理は少数にあり」ということばは、自分の人生の指針である。

『羊の歌―わが回想』加藤周一（岩波新書）

『続 羊の歌―わが回想』加藤周一（岩波新書）

『増補版 敗北を抱きしめて―第二次大戦後の日本人（上下）』ジョン・ダワー（岩波書店）

『昭和史〔新版〕』遠山茂樹・今井清一・藤原彰（岩波新書）

『戦後史』中村政則（岩波新書）

『戦後史の正体』孫崎享（創元社）

孫崎享（1943年～）は外務省官僚・駐ウズベキスタン大使・駐イラク大使・防衛大学校教授だった。

第二次世界大戦後は、傭兵ではない外国の軍隊が駐留していても主権国家と言うようになった。はたして日本は主権国家といえるのか。

『永続敗戦論—戦後日本の核心』白井聡（講談社+α文庫）

白井聡（1977年～）は京都精華大学准教授。専攻は社会思想・政治学。

2014年度石橋湛山賞受賞。

『国体論—菊と星条旗』白井聡（集英社新書）

新書大賞2019第8位。

『〈民主〉と〈愛国〉—戦後日本のナショナリズムと公共性』小熊英二（新曜社）

小熊英二（1962年～）は慶應義塾大学教授。専攻は歴史社会学・相関社会科学。

2003年大佛次郎論壇賞受賞。

『生きて帰った男—ある日本兵の戦争と戦後』小熊英二（岩波新書）

2015年小林秀雄賞受賞。新書大賞2016第2位。

『戦争が遺したもの』鶴見俊輔・上野千鶴子・小熊英二（新曜社）

『従軍慰安婦と靖国神社—言語学者の随想』田中克彦（KADOKAWA）

『私の1960年代』山本義隆（金曜日）

『日中国交正常化—田中角栄，大平正芳，官僚たちの挑戦』服部龍二（中公新書）

服部龍二（1968年～）は中央大学教授。専門は日本政治外交史，東アジア国際政治史。

2011年大佛次郎論壇賞受賞。

昔の自民党はまだよかった，と慨嘆する。

『黎明 日本左翼史—左派の誕生と弾圧・転向 1867—1945』池上彰・佐藤優（講談社現代新書）

『真説 日本左翼史—戦後左派の源流 1945—1960』池上彰・佐藤優（講談社現代新書）

『激動 日本左翼史—学生運動と過激派 1960—1972』池上彰・佐藤優（講談社現代新書）

『漂流 日本左翼史—理想なき左派の混迷 1972—2022』池上彰・佐藤優（講談社現代新書）

池上彰（1950年～）はジャーナリスト。NHK記者だった。

佐藤優（1960年～）は作家。外務省主任分析官・名桜大学客員教授だった。母親が久米島出身。

池上「私が小～中学生だった1960年代前半は，学校の先生たちもしょっちゅうストライキをやっていました。

……あの頃も公務員のストは法律上禁じられていました。だからあの当時の先生たちは，最初から処分覚悟でストをやっていたわけですね。」

佐藤「実際，処分されていましたね。」

池上「ええ。大量に処分されてクビになりますし，東京都教職員組合の幹部なんて違法なストライキを指導したという容疑で逮捕までされていました。だから日教組はその人たちを専従として大量に抱え込むわけですね。あの頃は労働組合がそれほどに戦っていた時代でした。」

『安倍三代』青木理（朝日文庫）

青木理（1966年～）はジャーナリスト。共同通信記者だった。

安倍寛・安倍晋太郎・安倍晋三の「安倍三代」のルポタージュである。

安倍は母方の祖父・岸信介を敬愛していた。安倍の父方の祖父も国会議員だった。

以下は，国会議事録から。「私の父方の祖父は安倍寛といいまして，翼賛選挙にいわば反対をして，翼賛会

ではなく非翼賛会として当選した数少ない議員でもございましたし、反東条政権を貫いた議員でもありました。」筋金入りの反骨者、反権力者だった、のである。

安倍寛の地元の女性（61歳）「亡くなった主人が言っていたのですが、海の人1日単位でものを考えて、農家は1年単位で、そして山の人100年単位でものを考えるそうですね。その3つがそろっている場所ですから、ものも育つし、人も育つんだと聞かされてきました」

3-3 諸外国史

『アジア近現代史—「世界史の誕生」以後の800年』岩崎育夫（中公新書）

岩崎育夫（1949年～）は拓殖大学教授だった。専門は東アジア・東南アジアの政治発展論。

東アジア・東南アジア・南アジア限定。中央アジア・中東諸国は除かれている。

『朝鮮史』梶村秀樹（講談社現代新書）

『北朝鮮現代史』和田春樹（岩波新書）

『科挙—中国の試験地獄』宮崎市定（中公新書）

『奇人と異人の中国史』井波律子（岩波新書）

『故事成句でたどる楽しい中国史』井波律子（岩波ジュニア新書）

『台湾—四百年の歴史と展望』伊藤潔（中公新書）

『ガンディー—平和を紡ぐ人』竹中千春（岩波新書）

『物語 アラビアの歴史』薮勇造（中公新書）

『物語 エルサレムの歴史—旧約聖書以前からパレスチナ和平まで』笈川博一（中公新書）

笈川博一（1942年～）の専攻は古代エジプト言語学・現代中東学。イスラエルのヘブライ大学に留学、同大学で教えた。イスラエルのベギン元首相の聖書研究会の講師を務めたこともある。

『物語 ウクライナの歴史—ヨーロッパ最後の大国』黒川祐次（中公新書）

黒川祐次（1944年～）は外務省官僚、駐ウクライナ大使・モルドバ大使（兼務）、駐コートジボアール大使、駐ベナン・ブルキナファソ・ニジェール・トーゴ大使（兼任）だった。

「1914年にはロシア極東地方では、ロシア人の2倍にあたる200万人のウクライナ人が定住していた。したがって現在でもロシア極東地方の住民は、過半数がウクライナ人だといわれる。」

『物語 イスタンブールの歴史—「世界帝都」の1600年』宮下遼（中公新書）

宮下遼（1981年～）は大阪大学大学院准教授。専門はトルコ文学（史）。

『物語 ストラスブールの歴史—国家の辺境、ヨーロッパの中核』内田日出海（中公新書）

内田日出海（1953年～）は成蹊大学名誉教授。ストラスブール大学で歴史学博士に。

フランス語でストラスブールは、ドイツ語読みでシュトラースブルクと呼ばれる。アルザスの中心都市で、EU議会が置かれ、旧市街は世界遺産となっている。人口27万人。独仏が交互に領有した国境の町である。EUの歴史はECSC（欧州石炭鉄鋼共同体）から始まるが、その目的は二度の世界大戦となった独仏対立に終止符を打つことにあった。

『物語 スコットランドの歴史—イギリスのなかにある「誇り高き国」』中村隆文（中公新書）

中村隆文（1974年～）は神奈川大学教授。専門は英米哲学・リベラリズム・比較思想。

スコットランドは、「グレートブリテンおよび北部アイルランド連合王国」（イギリスの正式国名）をイングランド、ウェールズ、北部アイルランドとともに形成している。

琉球独立派はスコットランド独立運動を参考にしている。

「名誉革命は、アイルランドにおいてはある意味では植民地化を決定づけるような悲劇ですらあった。」

「2005年には「ゲール語法案」がスコットランド議会において満場一致で可決され、……ゲール語普及運動がなされるようになった。」「小学校からのゲール語の導入の実践」「若年層のゲール語話者は次第に増加傾向にある。」

「観光地として機能している限りは、その地域は「〇〇らしさ」を保つことができるが、不況やパンデミックなどの突発的なアクシデントのもとではそれを維持することは困難であるし、そうでなくとも、表面上は単に演じるだけのものとなり、文化の根幹にある「言語」「思想」「習慣」は失われ、取り戻すことができなくなってしまうだろう。」

『ロシア革命史（1～5）』 トロツキー／藤井一行＝訳（岩波文庫）

『世界をゆるがした十日間（上下）』 ジョン・リード／原光雄＝訳（岩波文庫）

『歴史としての社会主義』 和田春樹（岩波新書）

『独ソ戦—絶滅戦争の惨禍』 大木毅（岩波新書）

大木毅（1961年～）は著述業。専門はドイツ現代史・国際政治史。

新書大賞2020受賞。

ロシアのウクライナ侵略戦争の戦闘地域が独ソ戦の激戦地の一つである。第二次世界大戦から約80年をへて、ウクライナの地が再び地上戦の戦場となってしまった。沖縄戦を繰り返してはいけない。軍隊は住民を守らない。

『娘と話すアウシュヴィッツってなに？』 アネット・ヴィヴィオルカ／山本規雄＝訳（現代企画室）

訳者の山本規雄（1967年～）は大学の同級生。

『アメリカ黒人の歴史』 本田創造（岩波新書）

『好戦の共和国アメリカ—戦争の記憶をたどる』 油井大三郎（岩波新書）

『ハイチ革命の世界史—奴隷たちがきりひらいた近代』 浜忠雄（岩波新書）

浜忠雄（1943年～）は北海学園大学名誉教授。専攻はハイチ革命史、フランス革命史。

ヨーロッパ中心・アメリカ中心、白人中心、キリスト教中心の世界観にいかにも毒されているかを強く反省させられた。

「ハイチは西半球でアメリカ合衆国に次ぐ2番目の、ラテンアメリカ・カリブ海地域では最初の独立国であり、1806年には共和制をしいて「世界初の黒人共和国」となった。1791年に始まり1804年の建国に帰結した奴隷解放と独立の運動を総称して「ハイチ革命」という。」

「先駆的な黒人奴隷解放と独立という輝かしい歴史を持つにもかかわらず、ハイチは極度の貧困に喘いでいる、という表現は不的確である。むしろ、そのような先駆的な国であるが故に貧困化へと向かわされた、と言わなければならないであろう。当時の周辺世界は「世界初の黒人共和国」を歓迎しなかった。ハイチは、その先駆性ゆえに、苦難を強いられることとなったのである。」

第4章 日本論

4-1 全般

『日本の思想』丸山真男（岩波新書）

丸山真男（1914～96年）は東京大学名誉教授。専攻は日本政治思想史。

『翻訳と日本の近代』丸山真男・加藤周一（岩波新書）

対談ではなく、加藤周一（1919～2008年）が問いかけ、丸山真男（1914～96年）が答える、という「問答」である。

森有礼が“Education in Japan”で「英語を国語にしろという有名な議論を展開した……大和言葉というのは抽象語がないから」と書いた話や、「総計300万部出た『学問のすゝめ』のうち、実質20万部くらいを除いてほとんどが偽版」であった話などが出てくる。ちなみに“copyright”を「版權」と訳したのは福沢諭吉である。

『日本問答』田中優子・松岡正剛（岩波新書）

『江戸問答』田中優子・松岡正剛（岩波新書）

『「世間」とは何か』阿部謹也（講談社現代新書）

『「教養」とは何か』阿部謹也（講談社現代新書）

『近代化と世間—私が見たヨーロッパと日本』阿部謹也（朝日新書）

阿部謹也（1935～2006年）は一橋大学名誉教授。専攻はドイツ中世史。

『同調圧力—日本社会はなぜ息苦しいのか』鴻上尚史・佐藤直樹（講談社現代新書）

『タテ社会の人間関係—単一社会の理論』中根千枝（講談社現代新書）

中根千枝（1926～2021年）は東京大学名誉教授。専攻はインド・チベット・日本の社会組織。
1967年刊120万部のベストセラー。

『東西／南北考—いくつもの日本へ』赤坂憲雄（岩波新書）

『日本辺境論』内田樹（新潮新書）

内田樹（1950年～）は神戸女学院大学名誉教授。専攻はフランス現代思想・映画論・武道論。
新書大賞2010受賞。

『日本人の身体』安田登（ちくま新書）

『中国化する日本 増補版—日中「文明の衝突」一千年史』與那覇潤（文春文庫）

『主権者のいない国』白井聡（講談社）

『上級国民／下級国民』橘玲（小学館新書）

『無理ゲー社会』橘玲（小学館新書）

新書大賞2022第9位。

『転換期の日本へ—「パックス・アメリカナ」か「パックス・アジア」か』

ジョン・W・ダワー、ガバン・マコーマック（NHK出版新書）

『ネグリ、日本と向き合う』アントニオ・ネグリ

市田良彦、伊藤守、上野千鶴子、大澤真幸、姜尚中、白井聡、毛利嘉孝、三浦信孝（NHK出版新書）

『げんきな日本論』橋爪大三郎×大澤真幸（講談社現代新書）

『国家の品格』藤原正彦（新潮新書）

『上司は思いつきでものを言う』橋本治（集英社新書）

『知性の顛覆—日本人がバカになってしまう構造』橋本治（朝日新書）

橋本治（1948～2019年）は作家。

『靖国問題』高橋哲哉（ちくま新書）

『敗戦後論』加藤典洋（ちくま学芸文庫）

『愛と暴力の戦後とその後』赤坂真理（講談社現代新書）

赤坂真理（1964年～）は作家。

新書大賞2015第4位。

『ミカドの肖像』猪瀬直樹（小学館文庫）

1987年大宅壮一ノンフィクション賞受賞。

『日本の難点』宮台真司（幻冬舎新書）

新書大賞2010第9位。

『希望難民—ピースボートと「承認の共同体」幻想』古市憲寿（知恵の森文庫・未来ライブラリー）

新書大賞2011第7位。

『絶望の国の幸福な若者たち』古市憲寿（講談社+α文庫）

『だから日本はズレている』古市憲寿（新潮新書）

新書大賞2015第9位。

『世界でバカにされる日本人—今すぐ知っておきたい本当のこと』谷本真由美（ワニブックスPLUS新書）

『生涯未婚時代』永田夏来（イースト新書）

『日本の異界 名古屋』清水義範（ベスト新書）

清水義範（1947年～）は作家。

『不幸な国の幸福論』加賀乙彦（集英社新書）

『科学と宗教と死』加賀乙彦（集英社新書）

加賀乙彦（1929～2013年）は精神科医・作家。東京拘置所医務技官，上智大学教授だった。カトリック信徒。

「残念ながら，日本は為政者が国民に対して平気で嘘を言う国だと感じます。」

『世界カワイイ革命—なぜ彼女たちは「日本人になりたい」と叫ぶのか』櫻井孝昌（PHP新書）

櫻井孝昌（1965～2015年）はポップカルチャー研究家・メディアプロデューサー。

『未来の年表—人口減少日本でこれから起きること』河合雅司（講談社現代新書）

新書大賞2018第2位。

『世界がかわるシマ思考—離島に学ぶ，生きるすべ』世界がかわるシマ思考制作委員会（issue+design）

有人離島専門新聞『季刊ritokei』による。

4-2 〈日本人〉による差別

琉球・沖縄に対する差別は「第6章 沖縄」にまとめた。

『単一民族神話の起源—〈日本人〉の自画像の系譜』小熊英二（新曜社）

小熊英二（1962年～）は慶應義塾大学教授。専攻は歴史社会学・相関社会科学。

1996年度サントリー学芸賞（社会・風俗部門）受賞。

『〈日本人〉の境界—沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』小熊英二（新曜社）

『日本という国』小熊英二（理論社）

福沢諭吉の天賦人權論の一側面について。「彼は1882年3月の「遺伝之能力」という評論で、こう書いている。「北海道の土人の子を^{やしない}養て之に文を学ばしめ、時を費し財を^す捐て、辛苦教導するも、其成業の後に至り我慶應義塾上等の教員たる^{べか}可らざるや明^{あきらか}なり。蓋し其本人に罪なし、祖先以来精神を練磨したることなくして遺伝の智徳に乏しければなり」。つまり福沢によれば、アイヌは遺伝的に能力が劣るから、どんなに教育しても慶應義塾の教員にはなれないというわけだ」。

『越境の時—1960年代と在日』鈴木道彦（集英社新書）

『獄中19年—韓国政治犯のたたかい』徐勝（岩波新書）

『在日』姜尚中（集英社文庫）

『ルポ 差別と貧困の外国人労働者』安田浩一（光文社新書）

安田浩一（1964年～）はジャーナリスト。

「米国務省が毎年発表している「世界の人身売買の実態に関する報告書」では2007年度版から、日本の研修生問題が取り上げられている。報告書は研修制度について「一部の外国人労働者は強制労働（forced labor）の状況にある」と指摘。研修制度が人身売買の一形態であるとの認識を示した。」

『ヘイトスピーチ—「愛国者」たちの憎悪と暴力』安田浩一（文春新書）

『差別と日本人』野中広務・辛淑玉（角川oneテーマ21新書）

新書大賞2010第2位。

麻生首相（在任：2008～09年）の部落出身である野中への差別発言が書かれている。

『ノーマ・フィールドは語る』ノーマ・フィールド（岩波ブックレット）

第5章 国際関係

5-1 世界・国際連合

『2100年の世界地図—アフラシアの時代』 峯陽一（岩波新書）

峯陽一（1961年～）は同志社大学教授。専攻は人間の安全保障・開発研究・アフリカ地域研究。

「予測が困難な時代」と無意味なことばを繰り返すよりは、予測が可能な人口動態から世界を考えた方がよい。2100年には、アフリカ・アジア（アフラシア）で世界人口の8割を占めることが予測されている。

『世界を見る目が変わる50の事実』 ジェシカ・ウィリアムズ／酒井泰介＝訳（草思社）

編集者が大学の同級生。

『国際関係論—同時代史への羅針盤』 中嶋嶺雄（中公新書）

『国際政治のキーワード』 西川恵（講談社現代新書）

『国際連合—軌跡と展望』 明石康（岩波新書）

『国連とアメリカ』 最上敏樹（岩波新書）

『国際人権入門—現場から考える』 申恵丰（岩波新書）

『人権と国家—理念の力と国際政治の現実』 筒井清輝（岩波新書）

筒井清輝（1971年～）はスタンフォード大学教授。専攻は政治社会学，国際比較社会学，国際人権，社会運動論，組織論，経済社会学など。

2022年度サントリー学芸賞受賞〔思想・歴史部門〕。2022年度石橋湛山賞受賞。新書大賞2023第9位。

法学者でもなく、政治学者でもない、社会学者が書いた人権入門なので、非常に現実的である。人権の歴史と現実，国内のアイヌの人権，在日コリアンの人権が学べる。

『過激派で読む世界地図』 宮田律（ちくま新書）

『ハイパーハードボイルドグルメレポート』 上出遼平（朝日新聞出版）

『帝国を壊すために—戦争と正義をめぐるエッセイ』 アルンダティ・ロイ／本橋哲也＝訳（岩波新書）

『新世界秩序—21世紀の“帝国の攻防”と“世界統治”』 ジャック・アタリ／山本規雄＝訳（作品社）

ジャック・アタリ（1943年～）はフランスの経済学者，思想家，作家，政治顧問。

訳者の山本規雄（1967年～）が大学の同級生。以下は，訳者本人によるこの本の紹介文。

本書の著者ジャック・アタリは，今回のようなパンデミック（感染爆発）が発生することを，10年前にすでに予見・警告していたということ最近話題になったフランスの経済学者・歴史学者です。

また，2020年4月にNHKのETVが放送した「緊急対談 パンデミックが変える世界——海外の知性が語る展望」にも出演していたので，ご覧になった方も多いと思います。

番組でのアタリの主張は，パンデミックは人類が直面している大きな危機のひとつに過ぎないこと，これを乗り越えるためには人類の生存に直接かかわる医療や教育といったセクターに資源を振り向けるべきであること，自分個人，自分の会社，自分の国さえ得をすれば良いという「自分ファースト」をやめ，将来世代の利益を考慮に入れた，“利他主義”にもとづく経済・社会を再構築すべきであること，危機に見舞われた今こそ良い機会であり，この転換ができなければ人類の存続は危ぶまれる，ということでした。

しかしそれはもちろん簡単ではない，とアタリは言います。なぜなら資本主義というものは，本質的に目先の利益を優先する性質があるからです。「目先」というのは，たとえば自分の国がたいせつでどこか遠い国のことは考えない，という空間的な意味もありますし，また今現在いくら儲かるかがたいせつで，それが将来世代にどれだけの「つけ」になって返ってくるかは考えない，という時間的な意味もあります。

現在の世界の統治機関は，最大規模の国連から国際機関，各国政府，地方自治体，個々の企業などに至るまで，どれも資本主義のこの性質をコントロールすることが不可能になっていると，アタリは言います。本書は，人類の統治機関の歴史を古代にさかのぼって丁寧にたどり，それをふまえて今後，“利他主義”にもとづく経済・社会を構築するために必要なのは，どのような統治機関であるのかということ，具体的に構想したものです。ご関心がありましたら，是非お手にとってみてください。

最後にひとつ。NHKの番組で，“利他主義”というのは，禁欲的な理想主義なのでは？と（つまり暗に，できっこないことを善人ぶって唱えているだけではないのか，と）問われたアタリはこう答えました。「いいえ，とんでもない。“利他主義”は最大限合理的な利己主義なのです」。

5-2 アメリカ

『歴代アメリカ大統領総覧』 高崎通浩（中公新書ラクレ）

『アメリカの保守本流』 広瀬隆（集英社新書）

『9・11ジェネレーション—米国留学中の女子高生が学んだ戦争』 岡崎玲子（集英社新書）

『ルポ 貧困大国アメリカ』 堤未果（岩波新書）

『ルポ 貧困大国アメリカⅡ』 堤未果（岩波新書）

『憐貧困大国アメリカ』 堤未果（岩波新書）

堤未果（1971年～）は国際ジャーナリスト。国連婦人開発基金・アムネスティインターナショナルをへて米国野村證券勤務中に9・11を経験。

『ルポ 貧困大国アメリカ』は新書大賞2009受賞、『憐貧困大国アメリカ』は新書大賞2014第3位。

アメリカを見習うとどのような社会になるかがわかる。2010年の時点でアメリカ国内のワーキングプア人口は1億5000万人（2人に1人）を突破，うち4人に1人が，八大低賃金サービス業（ウェイトラー・ウェイトレス，レジ係，小売店の店員，メイド，運転手，調理人，用務員，介護士）に就いており，給料の手取り額が貧困ライン以下だという。

岩波新書の3冊『ルポ 貧困大国アメリカ』堤未果・『反貧困—「すべり台社会」からの脱出』湯浅誠・『子どもの貧困』阿部彩は，「貧困3部作」としてまとめて推薦する。

『アメリカから〈自由〉が消える』 堤未果（扶桑社新書）

これまでの戦争には終わりがあった。「テロとの戦い」には終戦がない。戦争国家アメリカは，戦争を永遠に続けられる。

『沈みゆく大国アメリカ』 堤未果（集英社新書）

『沈みゆく大国アメリカ〈逃げ切れ！ 日本の医療〉』 堤未果（集英社新書）

『Z世代のアメリカ』 三牧聖子（NHK出版新書）

三牧聖子（1981年～）は同志社大学大学院准教授。専門はアメリカ政治外交史・平和研究。

新書大賞2024第4位

5-3 アジア

『アジア政治を見る眼—開発独裁から市民社会へ』 岩崎育夫（中公新書）

『老いてゆくアジア—繁栄の構図が変わるとき』 大泉啓一郎（中公新書）

『アジア力の世紀—どう生き抜くのか』 進藤榮一（岩波新書）

『女たちがつくるアジア』 松井やより（岩波新書）

『多民族国家 中国』 王柯（岩波新書）

王柯（1956年～）は神戸大学教授。中国出身。専攻は中国近現代史。

中国の少数民族の入門書である（少数民族といってもチワン族は約1,692万人，満洲族は約1,038万人）。著者は2014年3月中国出張の際に現地警察によって18日間にわたって拘束された。イスラームを信仰するウイグル族を研究対象としていることが理由だと推測されている。

『おどろきの中国』 橋爪大三郎×大澤真幸×宮台真司（講談社現代新書）

『幸福な監視国家・中国』 梶谷懐・高口康太（NHK出版新書）

新書大賞2020第6位。

『中国人の腹のうち』 加藤徹（廣済堂新書）

『ナグネー中国朝鮮族の友と日本』 最相葉月（岩波新書）

『観光コースでない台湾』 片倉佳史（高文研）

『台湾とは何か』 野嶋剛（ちくま新書）

『韓国 行き過ぎた資本主義―「無限競争社会」の苦悩』 金敬哲（講談社現代新書）

金敬哲はフリージャーナリスト。

韓国を見習うとどのような社会になるかがわかる。

『朝鮮半島と日本の未来』 姜尚中（集英社新書）

『日本の国境問題―尖閣・竹島・北方領土』 孫崎享（ちくま新書）

『「戦地」派遣―変わる自衛隊』 半田滋（岩波新書）

『3・11後の自衛隊―迷走する安全保障のゆくえ』 半田滋（岩波ブックレット）

『日本は戦争をするのか―集団的自衛権と自衛隊』 半田滋（岩波新書）

半田滋（1955年～）は防衛ジャーナリスト。東京新聞編集委員だった。

在ジブチ自衛隊基地の状況も書かれている。

『自衛隊海外派遣―隠された「戦地」の現実』 布施祐仁（集英社新書）

布施祐仁（1976年～）はフリージャーナリスト。

「イラク派遣当時、陸自トップの陸上幕僚長を務めていた先崎一氏は、NHKの取材に応え、隊員が死亡した場合に備えて、遺体の搬送や葬送式の執り行いについて極秘に検討していたことを明らかにした。宿営地には、棺を約10個持ち込んでいたという。」

「防衛省によると、2016年3月末の時点で、イラク派遣に参加した自衛官のうち、陸上自衛隊で22人、航空自衛隊で8人が自殺している。これらは在職中に自殺した人数なので、退職者も含めれば実数はもっと多くなるだろう。」

『ODA援助の現実』 鷺見一夫（岩波新書）

『バナナと日本人―フィリピン農園と食卓のあいだ』 鶴見良行（岩波新書）

『エビと日本人』 村井吉敬（岩波新書）

『エビと日本人Ⅱ』 村井吉敬（岩波新書）

『東アジア共同体―経済統合のゆくえと日本』 谷口誠（岩波新書）

『ブータンに魅せられて』 今枝由郎（岩波新書）

今枝由郎（1947年～）はフランス在住のチベット学者。専攻はチベット歴史・文献学。1981～90年にブータン国立図書館顧問としてブータンに赴任した。

ブータンは「国民総幸福」を提唱した仏教国（チベット仏教ドゥク派が国教）である。教育と医療は原則的に全面無料。「国民の福祉・利益の最優先がブータンの近代化政策の基本である」。異なる国・社会・人間のあり方に興味がある人にお勧め。ブータンに魅せられます。

5-4 イスラーム

『現代アラブの社会思想―終末論とイスラーム主義』 池内恵（講談社現代新書）

池内恵（1973年～）は東京大学教授。専攻はイスラーム政治思想史・中東地域研究。

2002年大佛次郎論壇賞受賞。

現代アラブの「思想的袋小路」が描かれている。イスラームを高所から批判する高飛車な態度はいやだが、反駁の仕様がなほ現実的＝論理的である。

『イスラーム国の衝撃』 池内恵（文春新書）

新書大賞2016第3位。

『ヨーロッパとイスラーム—共生は可能か』内藤正典（岩波新書）

『イスラームからヨーロッパをみる—社会の深層で何が起きているか』内藤正典（岩波新書）

『イスラムの怒り』内藤正典（集英社新書）

『イスラーム—癒しの知恵』内藤正典（集英社新書）

『イスラム戦争—中東崩壊と欧米の敗北』内藤正典（集英社新書）

『イスラームから世界を見る』内藤正典（ちくまプリマー新書）

『トルコ—建国—〇〇年の自画像』内藤正典（岩波新書）

内藤正典（1956年～）は同志社大学大学院教授。一橋大学名誉教授。国際移動論、現代イスラーム地域研究。1980年代前半のシリアに留学していた。現代のイスラームについてお薦め。

『アフガニスタン—戦乱の現代史』渡辺光一（岩波新書）

アフガニスタン（2008年11月の文章）

アフガニスタンについて書く。

生涯訪れることもない土地について書くのは気が重い。それでも乏しい知識で書かなければならない。アフガニスタン人にアフガニスタンの手料理を食べさせてもらったことがある日本人は、数少ないはずだからだ。

今年8月にペシャワール会の伊藤和也さん（当時31歳）が殺された。ペシャワール会は、第1回沖縄平和賞を代表の中村哲医師が受賞したこともあり、沖縄との縁は深い。

伊藤氏は現地で6年目を迎え、サツマイモ栽培などの農業指導を行い、パシュトゥン語も達者だったということだ。彼は、電気もないスタッフハウスに現地スタッフと起居していたということだ。

ご遺族は「家族の誇りです」ときっぱりとおっしゃった。

さて、この事件の直後に、教員の二次試験対策があった。面接練習で「最近興味関心を持ったニュースは」という質問に、この事件をあげた受験生が何人かいた。さらに「どのように思いましたか」と尋ねると、「現地の人のために活動していた人が、現地の人に殺されるのはやりきれない」という同じような答えが返ってきた。

この受け答えは、面接試験の受け答えとして何の問題もない。

しかし、個人的にはどうしてもやりすごせない点がいくつかある。

第一に、日本のアフガニスタンに対する関わりの問題である。

2001年9・11アメリカ同時多発テロが起きる。アメリカはその首謀者をアルカイダとビン＝ラディンと断定し、アフガニスタンのタリバン政権がビン＝ラディンを保護しているという理由で、10月7日にイギリスとともにアフガニスタンへの空爆を開始する。11月には米軍の支援を受けた北部同盟軍が首都カブールを制圧する。

日本はこの「戦争」を支持し、テロ特措法によって、11月に海上自衛隊をインド洋に派遣し、米軍などへの給油支援活動を行っている。今回の伊藤氏殺害事件は、単なる金目当てである可能性が高いようだ。しかし、アフガニスタンの現地の人々が、自らの土地を侵略し続けている米軍を支援する敵国人として日本人を見るのは当然のことなのだ。

今年6月には、日本政府が陸上自衛隊のアフガニスタン派遣を検討していることが報道された（その後断念）。

中村哲氏は、「日本人スタッフの安全が保てなくなる」ということで、これを強く非難した。

いつ解散するのかだけが焦点になっている国会で、何の実質的審議もなく新テロ特措法が延長され、海上自衛隊のインド洋派遣が継続されようとしている（10/28現在）。

米軍によるアフガニスタン戦争の実態は、国同士の「戦争」ですらなく、歴史の上で「アフガニスタン大虐殺」「アフガニスタン無差別殺戮」と呼ばれる日が来ると考えている人は少なくない。私もその一人だ。

伊藤氏のかけがえのない命が奪われた。それと同じように、かけがえのない、アフガニスタンの人々の何千人もの命を奪う戦争に、私たち自身が加担している。

第二に、アフガニスタンの歴史と現実である。

「アメリカ・ソ連の2国に侵略された国はどこでしょう。」

クイズや世界史で必ず出題されるだろう問題である。

答えは、アフガニスタンである。20世紀の二大強国に直接侵略されたアフガニスタンでは、大麻のためのケシ栽培が主要産業となっている。アフガニスタンの手料理をごちそうしてくれた留学生は、タリバンなどがいない時代に日本にやってきたが、政治的事情で故国に帰ることはありえないという「亡国の人」であった。

タリバンだ、アルカイダだと「悪の元凶」を決めつけて、それを一掃すれば、平和が訪れるというような単純な発想は、国際政治でははじめてから間違っている。

大国の侵略と介入を受け続けてきた、政治的・経済的な傷跡は深い。それに絶望せず、現地の人々の自立をはかるペシャワール会の活動には頭が下がる。

琉球新報9月3日村上優氏の伊藤氏への追悼文を参考にしました。

伊藤氏とアフガニスタンの多くの人々の死を悼み、ご冥福を祈ります。

5-5 ヨーロッパ

『拡大ヨーロッパの挑戦—アメリカに並ぶ多元的パワーとなるか』羽場久渥子（中公新書）

羽場久渥子（1952年～）は青山学院大学名誉教授。専門は国際政治学。

『おどろきのウクライナ』橋爪大三郎・大澤真幸（集英社新書）

橋爪大三郎（1948年～）は東京工業大学名誉教授。社会学者。妻は中国人。

大澤真幸（1958年～）は京都大学教授だった。社会学者。

『ウクライナ動乱—ソ連解体から露ウ戦まで』松里公孝（ちくま新書）

松里公孝（1960年～）は東京大学大学院教授。専門はロシア帝国史、ウクライナなど旧ソ連圏の現代政治。
1989～91年レニングラード大学に所属。

「ソーシャル・メディアとスマートフォンの普及で、テレビではとても放映できないようなシーンを素人が容易に撮影し、それをユーザーに（有無を言わず）見せられるようになったことが持つ政治的なインパクトを、政治学者はまだ十分に考察していない。クリミアとドンバスのウクライナからの分離は、スマートフォンの普及と無縁ではないと思う。」

「ロシア経済と日本経済は実は似ており、本当に効率化するのは苦手だが、箱モノを作って一時的に所得水準を上げるのは得意である。」

『バチカン—ローマ法王庁は、いま』郷富佐子（岩波新書）

郷富佐子（1966年～）は朝日新聞論説委員。女性で初めての「天声人語」筆者となった。

『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』ブレイディみかこ（新潮文庫）

『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー2』ブレイディみかこ（新潮社）

ブレイディみかこ（1965年～）はイギリス在住の保育士・ライター・コラムニスト。シリーズ累計100万部のベストセラー。

『ワイルドサイドをほっつき歩け—ハマータウンのおっさんたち』ブレイディみかこ（筑摩書房）

『他者の靴を履く—アナーキック・エンパシーのすすめ』ブレイディみかこ（文藝春秋）

5-6 アフリカ

『アフリカ・レポート—壊れる国、生きる人々』松本仁一（岩波新書）

『新・現代アフリカ入門—人々が変える大陸』勝俣誠（岩波新書）

『バッタを倒しにアフリカへ』前野ウルド浩太郎（光文社新書）

新書大賞2018受賞。

第6章 沖縄

6-1 沖縄戦

『証言 沖縄「集団自決」—慶良間諸島で何が起きたか』謝花直美（岩波新書）

『「集団自決」を心に刻んで』金城重明（高文研）

金城重明（1929～2022年）は沖縄キリスト教短期大学名誉教授。学長だった。渡嘉敷島生まれ。

「沖縄県の師範学校には、全国の師範学校に先駆けて御真影が下賜されるという出来事がありました。1887（明治20）年のことです。教育勅語が、謄本で各学校に配布されたのに対して、御真影は、県知事を通して、いわば模範校に下賜されたわけですから、名誉なこととされました。ここに明治政府の沖縄の皇民化教育への力の入れようが、露呈されています。軍国主義・皇民化教育は、日清・日露の戦争を契機に拍車をかけられていきます。沖縄県への徴兵制度実施後初の戦争であった日露戦争（1904－05年）には、沖縄から2000人余の出兵兵士が送り出され、そのうち205人が戦死し、149人が負傷しました。地元の新聞は、県出身兵士の死者が増えれば増えるほど、そのことを我が県の誇りだと書き立て、天皇のために犠牲になることを煽り立てたのです。皇民化教育は、明治・大正・昭和の沖縄戦に至るまで、県民の魂をからめとり、死の教育を施していきました。1910（明治43）年3月7日の夜、島尻郡の佐敷小学校で火災が発生し、教育勅語と御真影を焼失するという事件が発生しました。」用務員は焼死、校長と宿直の訓導は免職処分。

「沖縄戦の悲劇の極限状況は、親がわが子を、夫が妻を、兄弟が姉妹を、愛するが故に殺害せざるを得なかった「集団自決」だったのです。その惨事を、私は、自分の目で目撃し、体で体験いたしました。」「沖縄の離島で起こった「集団自決」について、見逃してはならない重要な点は、それは日本軍が配置されていた島じまでしか起こっていない、という事実であります。「集団自決」は、日本軍の存在を抜きにしては、起こりえなかった惨事なのです。」「渡嘉敷村に、戦後無人島になった前島という小さい島があります。渡嘉敷国民学校・前島分教場に、戦争中、比嘉儀清という校長が赴任しておりました。1944年10月10日の空襲の少し前のことです。」「比嘉氏は「なぜ兵隊を駐屯させるのですか」と聞き返します。将校は、「君たち住民を守るためだ」と説明しました。気になる比嘉氏は、「いろいろ過去の実例を見ますと、兵隊がいると敵の兵隊が来て戦います。そうすると住民の中から死者が出る。友軍の兵隊がいない方が住民が死ぬ機会が少ないと思いますが」と率直に進言します。」「結局、将校は根負けして、島には兵を入れることを断念したのです。その結果、前島の住民は、「集団自決」の悲劇をまぬがれました。隣の渡嘉敷島では300名余の犠牲者が出ました。日本軍がいた島とそうでない島とでは、生と死の明暗が鮮やかに分かれたのです。」

家永教科書裁判の証人になった経緯も書かれています。

『沖縄戦「集団自決」を生きる—渡嘉敷島、座間味島の証言』森住卓（高文研）

『沖縄戦を知る事典—非体験世代が語り継ぐ』吉浜忍・林博史・吉川由紀編（吉川弘文館）

沖縄戦の非体験世代28人が執筆している。

（戦時下の教員たち）「1944年1月、現在の県教育長にあたる県視学が新聞紙上で「皇国護持のために死ぬる皇国民の錬成にその根本義があることを我等實際家は肝に銘ずべきである」と発言した。教育者がついに、天皇や国体護持のために、青少年に死ぬことを要求するに至ったのである。」

「生きて虜囚の辱めを受けず」と教えた教員たちであったが、教員が自決したという証言は、米軍に追い詰められたパニックの中で、生徒たちとともに自決した例が1件あるだけである。」

『沖縄の旅・アブチラガマと轟の壕—国内が戦場になったとき』石原昌家（集英社新書）

『写真記録「これが沖縄戦だ」改訂版』大田昌秀（那覇出版社）

『沖縄のこころ—沖縄戦と私』大田昌秀（岩波新書）

大田昌秀（1925～2017年）は沖縄県知事（1990～98年）。参議院議員（2001～07年）。琉球大学名誉教授。メディア社会学。久米島出身。

初版は1972年8月。

「那覇の大空襲後、泉守紀知事以下の県首脳は、県庁所在地の那覇市を離れて、沖縄本島中部の普天間に避難し、事実上、県の行政事務が停止していたほか、県庁の高級官吏や学校長、県視学などが、「事務打合わせ」の名目で本土に行ったまま、戻ってこないものが少なからずいたからである。」

「食糧の大半を県外からの移入に頼っていた沖縄にとって、戦局の急迫は、そのまま食糧難につながった。船舶が軍に徴用されて、民需まで手がまわらないだけでなく、敵の攻撃を恐れて航海ができないからだ。昭和19年も半ばを過ぎる頃から、食糧難は急速に深刻になりつつあった。」

「沖縄守備軍司令部は、琉球王国歴代の王の居城であった首里城の地下にあった。」「壕内は、通風をよくするため換気装置がなされ、排水面も考慮されていた。発電機もあって壕の隅々まであかあかと照明が灯っていた。種類も豊富な上、長参謀長は、わざわざ出身地の福岡から料理人を呼び寄せていた。専属の菓子職人までいて、戦争の初期の段階では、ここに入っていさえすれば、しばらくは戦争を忘れることさえできたのである。」

沖縄守備軍司令部の地下壕で、大田元知事は軍隊慰安婦も見ている。

「わたしが牛島司令官と長参謀長の姿をさいごに見たのは、6月19日の夕刻、益永大尉に会うため軍司令部の壕をたずねたときである。その後、守備軍司令部の管理部の壕にひそんでいたとき、両首脳が自決したことを聞いた。しかし、とくべつな感慨はなかった。」

「わたしは、死人のあいだを這いずり回って、手ごろの大きさの地下足袋を抜きとり、それに付着した腐肉を海水で洗い落としてはいた。」

「戦争中の怨恨をリンチで晴らす風潮が高まっていたある日、わたしは、何人かの沖縄青年たちが、一人の他県人を自分たちの幕舎内に連れこんで地べたに跪かせ、「スパイとは何だ」「住民を虐殺したのだぞ」などと怒号しながら何事かを難詰しているのに出くわした。……地べたに正座して難詰されていたのは、久米島で海軍の通信隊長をしていた鹿山兵曹長で、詰問している者は、かれによって惨殺されたという地元民の縁故者を名乗る人たちであった。」

屋嘉収容所で、大田元知事は久米島住民虐殺の鹿山兵曹長も見ている。

『久米島の「沖縄戦」—空襲・久米島事件・米軍政—』大田昌秀（沖縄国際平和研究所）

大田元知事が亡くなった日にたまたま読了した。軍隊は住民を守らない。軍隊は住民を虐殺する。

『陸軍中野学校と沖縄戦—知られざる少年兵「護郷隊」』川満彰（吉川弘文館）

川満彰（1960年～）は沖縄国際大学非常勤講師。

第一次召集「1944年10月23日、名護国民学校に北は国頭村から南は恩納村（字南恩納まで）、金武村（宜野座村含む）の少年たち約700名が集まってきた。」

第二次召集 12月10日約150名本部町の謝花国民学校

第三次召集 1945年1月14日羽地国民学校（金武国民学校から、安富祖国民学校から）

地域の学校が召集場所・訓練場所だった。

『証言 沖縄スパイ戦史』三上智恵（集英社新書）

三上智恵（1964年～）はフリージャーナリスト・映画監督。毎日放送・琉球朝日放送（QAB）キャスターだった。ドキュメンタリー映画「沖縄スパイ戦史」の共同監督。

749ページ。自分が読んだ中では最も分厚い新書である。

親泊康勝さん（1928年生まれ）16歳で入隊

「当時の国民学校ではね、皇民化教育。毎日教育勅語。毎朝、登下校時には奉安殿（天皇の写真「御真影」

が置かれた建物)に最敬礼。」

親泊さんの長女の長男(孫)が、琉球シールズだった元山仁士郎さん。

「軍隊は住民を守らなかったという残酷な事実が沖縄戦最大の教訓であるが、住民を守るための作戦と、軍隊が勝つための作戦は全く一致しない。」

「昭和19(1944)年6月から始まったサイパン戦では、初めて大量の在留邦人たちが軍隊と共に玉砕を強いられた。その数はおよそ1万人で、在留邦人のおよそ半分が死んだことになる。そのうちの6割は沖縄出身者といわれ、軍と民が運命を共にするサイパンの「玉砕」のイメージは沖縄戦に大きな影響を与えた。」

「遊撃戦のマニュアルを見れば、戦争マラリアも強制集団死も住民虐殺も、全部起こるべくして起きたことが分かった。」

戦争マラリアも強制集団死も住民虐殺も、陸軍中野学校のエリート軍人などが、軍のマニュアル通りに指揮・指導した結果である。

『戦場の宮古島と「慰安所」—12のことばが刻む「女たちへ」』

日韓共同「日本軍慰安所」宮古島調査報告団・洪琬伸編(なんよう文庫)

日本軍性奴隷制被害者の女性たちの故郷の12の言語—つまりオーストラリア、ビルマ、中国・台湾、グアム、インドネシア、マレーシア、日本、韓国・朝鮮民主主義人民共和国、オランダ、タイ、フィリピン、東チモール、ベトナムの12の言語で祈念碑は刻まれている。ベトナム語は、ベトナム戦争で韓国軍兵士による性暴力被害を受けたベトナムの女性たちのためのものである。2018年に訪れた。

『沖縄「戦争マラリア」—強制疎開死3600人の真相に迫る』大矢英代(あけび書房)

大矢英代(1987年〜)はフリージャーナリスト・映画監督。シラキウス大学助教。琉球朝日放送記者だった。ドキュメンタリー映画『沖縄スパイ戦史』の共同監督。

波照間島「1945年、沖縄戦の最中、当時の全人口の3分の1にあたる552人が死亡した。原因は戦闘ではなかった。熱病・マラリアだ。蚊が媒介する恐ろしい感染症である。」

「国家が戦争に向かう時、国や社会、民衆はどのように間違っていくのか。極限の状態に置かれた時、軍隊はどんな暴力性を持つのか。私は、戦争マラリアの体験者の言葉からそれをみつけないと思った。」

『フォト・ドキュメント 骨の戦世—65年目の沖縄戦』比嘉豊光・西谷修編(岩波ブックレット)

比嘉豊光(1950年〜)は写真家。居酒屋で一度同席したことがある。

『戦争と沖縄』池宮城秀意(岩波ジュニア新書)

池宮城秀意(1907〜89年)は琉球新報社長・会長だった。

比嘉春潮「私は大和世になって11年目の明治22年に、結髪姿で大和世式の西原小学校に5つ上の兄といっしょに入学した。そのころは西原のような農村では、農業をするには学問は要らないと、なかなか学校には行き手がない。それで各村(いまの字)に生徒数を割り当てて強制的に入れた。まるで徴兵制であった。ただし兄と私は首里からの居住人(士族が廃藩のために田舎に移り住んだ)だからみずから進んで入学した。いわば志願兵であった」「今日では小学児童というが、そのころの生徒は児童ではなかった。私のように10歳以下のは1, 2割くらいで、だいたい14, 5歳。17, 8歳以上の者も相当数いて、なかには煙草入れをぶらさげて、休み時間になると小使室に行き煙をはいている者もいた」

『兵隊先生—沖縄戦, ある敗残兵の記録』松本仁一(新潮社)

松本仁一(1942年〜)は朝日新聞記者だった。

カラシニコフなど戦争を追う記者の執念の原点が沖縄にあった。沖縄の戦後、米軍統治、教育がどのようにして始まったのか、ある敗残兵を通して知ることができる。

『ぼくが遺骨を掘る人「ガマフヤー」になったわけ—サトウキビの島は戦場だった』具志堅隆松(合同出版)

具志堅隆松(1954年〜)は28歳から遺骨収集ボランティアを続ける「ガマフヤー(ガマを掘る人の意)」。

『沖縄戦いまだ終わらず』佐野眞一（集英社文庫）

『沖縄戦を生きぬいた人びと—揺れる想いを語り合えるまでの70年』吉川麻衣子（創元社）

6-2 基地・沖縄問題

『戦雲（いくさふむ）—要塞化する沖縄，島々の記録』三上智恵（集英社新書）

映画「戦雲（いくさふむ）」を見よう。

三上智恵（1964年～）はフリージャーナリスト・映画監督。毎日放送・琉球朝日放送（QAB）キャスターだった。

「集団自決も、スパイ虐殺（沖縄県民をスパイ容疑で虐殺したこと）も、そしてマラリア地獄も、この沖縄戦の三大悲劇はいずれも軍事情報を持った住民を生きのまま敵の手に渡さないために、軍機保護法を背景に軍が組織としてやったことだ。住民の命よりも軍機保持を優先した結果の「処置」であり、組織犯罪だと私は思う。離島で軍隊とともに生活をする場合、知るつもりなどなくても軍機に通じてしまう。平時は良くても、有事にはまた住民らが「生きていたら不都合な存在」にされる。」

「島に軍隊を引き受けるということは、島民は軍と一緒に心中する覚悟があるということです。そのことを、政治家はちゃんと説明しましたか？」元自衛官のこの言葉だけでも、石垣島の島民すべての耳に届けた。」

（遺骨収集ボランティアの具志堅隆松さん）「今、戦場になった島々からどうやって住民を安全に避難させられるか？という議論が盛んになってきていますが、これはおかしいです。出ていくべきは、私たちではありません。軍事基地です。私たちは、沖縄に住み続けていい。その権利を持っているんです！」

「軍隊が民を統率する手段として、どの国でも「避難訓練」が利用されてきた歴史の教訓を、私たちは十分に認識しておかなければならない。」

『海をあげる』上間陽子（筑摩書房）

上間陽子（1972年～）は琉球大学大学院教授。専攻は教育学。2020年〔池田晶子記念〕わたくし、つまりNobody賞受賞者。令和3年1月沖縄県立高等学校生徒の自死事案に関する第三者再調査委員会副委員長。普天間基地の近くに住む。

『海をあげる』特設サイト <https://www.chikumashobo.co.jp/special/umiwoageru/>

『地元を生きる—沖縄の共同性の社会学』岸政彦・打越正行・上原健太郎・上間陽子（ナカニシヤ出版）

岸政彦（1967年～）は京都大学大学院教授。専攻は社会学。

打越正行（1979年～）は和光大学専任講師。専攻は社会学。他の著作『ヤンキーと地元』（筑摩書房）。

上原健太郎（1985年～）は大阪国際大学准教授。専攻は社会学。主な専門は沖縄の若者の就労問題。

上間陽子（1972年～）は琉球大学大学院教授。他の著作『海をあげる』（筑摩書房）・『裸足で逃げる』（太田出版）。

『米軍と農民—沖縄県伊江島』阿波根昌鴻（岩波新書）

阿波根昌鴻（1901～2002年）は伊江島の土地闘争を行った。

『沖縄ノート』大江健三郎（岩波新書）

1935年・37年生まれの教師が中心になった劇団の活動場所として、越來中学校が出てくる。「沖縄からコザ高校の学生200人近くが万国博を見物にやってくる」とコザ高校も出てくる。

『沖縄密約—「情報犯罪」と日米同盟』西山太吉（岩波新書）

西山太吉（1931～2023年）は毎日新聞記者だった。沖縄返還での日米密約をスクープした。

『沖縄「戦後」ゼロ年』目取真俊（NHK出版新書）

目取真俊（1960年～）は作家。1997年『水滴』で芥川賞受賞。

元県立高校教師として、沖縄県の教育は津嘉山教育長以降悪くなったと名指しで批判している。

『沖縄と国家』辺見庸・目取真俊（角川新書）

『同盟漂流（上下）』船橋洋一（岩波現代文庫）

『「アメとムチ」の構図—普天間移設の内幕』渡辺豪（沖縄タイムス社）

『沖縄基地とイラク戦争—米軍ヘリ墜落事故の深層』伊波洋一・永井浩（岩波ブックレット）

『本土の人間は知らないが、沖縄の人はみんな知っていること—沖縄・米軍基地ガイド』

須田慎太郎写真・矢部宏治文・前泊博盛監修（ちくま文庫）

ルース＝ベネディクトの『菊と刀』について。「オーストラリア大学のガバン・マコーマック教授によると、「ベネディクトは、長期にわたって日本を米国に従属させるためには、日本文化の基底には言葉にできない、非アジア的な天皇中心の『文化パターン』がある、という考えを広めると効果があると結論づけた。日本が心理的にアジアと距離をおけば、決してアジア諸国と共同歩調をとれないだろうし、アメリカに依存しつづけるはずだと分析したのだ」ということです。日本人はベネディクトに集団洗脳されてしまったのだろうか。

『もっと知りたい！ 本当の沖縄』前泊博盛（岩波ブックレット）

『沖縄と米軍基地』前泊博盛（角川oneテーマ21新書）

『本当は憲法よりも大切な「日米地位協定入門」』前泊博盛編著（創元社）

前泊博盛（1960年～）は沖縄国際大学教授。琉球新報論説委員長だった。

『日米地位協定—在日米軍と「同盟」の70年』山本章子（中公新書）

山本章子（1979年～）は琉球大学准教授。専攻は国際政治史。

2020年度石橋湛山賞受賞。

『沖縄の米軍基地と軍用地料』来間泰男（榕樹書林）

来間泰男（1941年～）は沖縄国際大学名誉教授。専攻は農業経済学。何度か居酒屋で一緒にさせていただいた。雑誌の連載記事を毎月メールで送っていただいている。

米軍基地撤去の抵抗勢力である軍用地主の実態・問題を正面から取り上げている。

『沖縄と核』松岡哲平（新潮社）

『辺野古入門』熊本博之（ちくま新書）

熊本博之（1975年～）は明星大学教授。

2022年1月、西川征夫（新基地建設反対の「命を守る会」元代表）の自宅で名護市長選の開票の報道を見て渡具知市長の再選を確認した。歩いて1分の公民館で、渡具知市長のお礼の挨拶を聞き、自身も司会から求められ、挨拶した。「おめでとうとは言わないようにした。」

「なぜ辺野古の海は埋め立てられ、新たな基地が建設されようとしているのか。」

辺野古が条件つきで建設を容認しているからでないことは、ここまで読んでくれた方はわかっているだろう。辺野古には、普天間代替施設／辺野古新基地の建設の是非を決める決定権がない。それは名護市にも、沖縄県にもない。

それなのに、辺野古が普天間基地の移設候補地になった1996年からずっと、建設に賛成なのか、それとも反対なのか、問われ続けている。つまり、辺野古区民も、名護市民も、沖縄県民も、「決定権なき決定者」なのである。

「決定権なき決定者」という概念……ここでは簡単に、「あることについて賛成したときにしか決定を認めてもらえないのに、賛否を示すように迫られている人（たち）」と定義しておこう。

このような状況に置かれ続けると、人は、賛否を問われること自体から距離を置くようになる。いくら反対の意思を示しても認めてもらえず、賛成したときだけ決定したとみなされるのであれば、賛否を答えることに

意味がなくなるからだ。」

『犠牲のシステム 福島・沖縄』高橋哲哉（集英社新書）

『沖縄の米軍基地―「県外移設」を考える』高橋哲哉（集英社新書）

高橋哲哉（1956年～）は東京大学名誉教授。専攻は哲学。

『増補改訂版 無意識の植民地主義―日本人の米軍基地と沖縄人』野村浩也（松籟社）

野村浩也（1964年～）は広島修道大学教授。沖縄生まれ。専門は社会学。

『沖縄ゼネスト50年―解放への狼煙』（榕樹書林）

1971年の5・19ゼネスト、11・10ゼネストから50周年ということで、2021年6月に行われた討論会の記録。高良勉「ゼネストは、全住民を巻き込んだ。全琉の小中高や大学が休校になった。バス、タクシーの公共交通機関が運休した。市町村の窓口業務もマヒした。店を閉める商店も多く、町村のサシミ屋まで閉まる所が多かった。」

『沖縄独立宣言―ヤマトは帰るべき「祖国」ではなかった』大山朝常（現代書林）

大山朝常（1901～99年）はコザ市長（1958～74年）。国民学校の校長・教師だった。沖縄戦で3人の子ども、母、兄を亡くした。

「「コザ暴動」が勃発したときのコザ市長が、私でした。……ひとりのウチナーンチュとして、アメリカ軍基地やアメリカ兵に向かって荒れ狂う市民の気持ちが痛いほどよくわかりました。市長という役職を超えて、それは私自身の怒りでもあったのです。」25年ぶりに再読した。

『琉球独立宣言―実現可能な五つの方法』松島泰勝（講談社文庫）

松島泰勝（1963年～）は龍谷大学教授。専門は地域経済論・島嶼経済論・島嶼独立論。石垣市生まれ。

「17世紀から今日にかけて、日本は琉球の軍事的、政治的、経済的、外交的利益をいかにして得るかという物欲的な関心でしか琉球をみていないのです。琉球という島の上に自分と同じ人間が住んでいることを考えたためしが無いのです。だから人が生きる島で戦争をしたり、異民族による凶暴な支配を見過ごしたり、琉球人の大半が反対する辺野古の海を埋め立てようとするのです。琉球併合の時の日本政府の心性は今も続いています。日本の利益が琉球の犠牲のもとに生み出されてきたという歴史が日本史であり、琉球史なのです。このような不幸な歴史を終わらせて、新たな日本史、琉球史をつくるのが琉球独立という切り札です。」

『沖縄発―復帰運動から40年』川満信一（情況新書）

川満信一（1932年～）は詩人。反復帰論・琉球共和社会憲法C私（試）案で有名。宮古島生まれ。

2016年4月24日沖縄教員塾で講演会をしていただいた。

『焼きすてられた日の丸〔増補版〕―基地の島・沖縄読谷から』知花昌一（社会批評社）

『私の沖縄問題』部落解放・人権研究所編（解放出版社）

『本音の沖縄問題』仲村清司（講談社現代新書）

『これが沖縄の生きる道』仲村清司・宮台真司（亜紀書房）

『消えゆく沖縄―移住生活20年の光と影』仲村清司（光文社新書）

仲村清司（1958年～）は作家・沖縄大学客員教授。大阪市生まれの沖縄人2世。

同じころに沖縄移住しているので、目で見ている沖縄が同じ期間なので共感するところが多い。

『癒しの島、沖縄の真実』野里洋（ソフトバンク新書）

『沖縄力の時代』野里洋（ソフトバンク新書）

『沖縄幻想』奥野修司（洋泉社新書y）

『お笑い沖縄ガイド―貧乏芸人のうちなーリポート』小波津正光（NHK出版新書）

『せやろがい！ではおさまらない―僕が今、伝えたいこと聞いてくれへんか？』

せやろがいおじさん（榎森耕助）（ワニブックス）

『沖縄の不都合な真実』大久保潤・篠原章（新潮新書）

『国防政策が生んだ沖縄基地マフィア』平井康嗣・野中大樹（七つ森書館）

『沖縄 本土メディアが伝えない真実』古木杜恵（イースト新書）

『世界 臨時増刊2015年4月号 沖縄何が起きているのか』（岩波書店）

『沖縄問題—リアリズムの視点から』高良倉吉編著（中公新書）

『観光コースでない沖縄』新崎盛暉・謝花直美・松元剛他（高文研）

『観光コースではない沖縄 第5版』新崎盛暉・謝花直美・松元剛他（高文研）

1983年初版。

『沖縄から貧困がなくなる本当の理由』樋口耕太郎（光文社新書）

『沖縄が日本を倒す日—「民意の再構築」が始まった』渡瀬夏彦（かもがわ出版）

『100の指標からみた沖縄県のすがた』沖縄県企画部統計課（沖縄県統計協会）

『沖縄経済入門 第2版』沖縄国際大学経済学科編（編集工房東洋企画）

『沖縄とセクシュアリティの社会学

—ポストコロニアル・フェミニズムから問い直す 沖縄戦・米軍基地・観光』玉城福子（人文書院）

玉城福子（1985年～）は名桜大学准教授。大学受験時の教え子。

2019年2月17日に沖縄教員塾で学習講座「沖縄戦と日本軍『慰安婦』問題—次世代への継承を考える」を開いてもらった。以下は、著者本人による自著紹介文。

2022年6月10日

玉城福子

本書では、これまで沖縄研究の中で取り上げられてきた沖縄戦、米軍基地、観光という3つの領域をセクシュアリティに関わる事柄、とりわけ性暴力と性売買について焦点を当てて、植民地主義と性差別の絡まり合いを描いている。社会的に弱い立場の者たちが暴力や搾取に晒された後で、いかに声を奪われ、見えなくされるのか。各章では、日本軍「慰安所」制度を裁く女性国際戦犯法廷や沖縄県平和祈念資料館の展示改ざん事件等、有名な事例を再検討した。暴力や搾取に批判的な研究者であっても、植民地主義と性差別の絡まり合いは見過ごしてしまう場合が多い。本書は社会学の手法を用いた実証的な研究書ではあるが、隆盛する学際的な沖縄研究への問題提起を込めたつもりである。

6-3 琉球・沖縄史

『教養講座 琉球・沖縄史』新城俊昭（編集工房東洋企画）

『本音で語る沖縄史』仲村清司（新潮文庫）

『沖縄現代史 新版』新崎盛暉（岩波新書）

『日本にとって沖縄とは何か』新崎盛暉（岩波新書）

新崎盛暉（1936～2018年）は沖縄大学名誉教授。学長だった。専攻は沖縄近現代史・社会学。

『沖縄現代史—米国統治、本土復帰から「オール沖縄」まで』櫻澤誠（中公新書）

『フォト・ストーリー 沖縄の70年』石川文洋（岩波新書）

『琉球王国』高良倉吉（岩波新書）

『琉球の時代—大いなる歴史像を求めて』高良倉吉（ちくま学芸文庫）

高良倉吉（1947年～）は歴史学者。琉球大学名誉教授。仲井眞知事のもとで沖縄県副知事（2013～14年）。首里城復元に向けた技術検討委員会委員長。彼が講演者の集まりで、エレベーターで一緒になったことがある。

『人頭税はなかった—伝承・事実・真実』来間泰男（榕樹書林）

『琉球王国の成立と展開—よくわかる沖縄の歴史』来間泰男（日本経済評論社）

『琉球近世の社会のかたち—よくわかる沖縄の歴史』来間泰男（日本経済評論社）

来間泰男（1941年～）は沖縄国際大学名誉教授。専攻は農業経済学。何度か居酒屋で一緒にさせていただ

いた。雑誌の連載記事を毎月メールで送っていただいている。

『島人もびっくり オモシロ琉球・沖縄史』上里隆史（角川ソフィア文庫）

『海の王国・琉球―「海域アジア」屈指の交易国家の実像』上里隆史（歴史新書y）

上里隆史（1976年～）は琉球史研究者。専攻は古琉球史・海域アジア史。

『ハンセン病を生きて―きみたちに伝えたいこと』伊波敏男（岩波ジュニア新書）

伊波敏男（1943年～）は作家。ハンセン病回復者。

国からの1200万円の補償金は、伊波基金としてフィリピンで医学を学ぶ人たちのための奨学金となっている。沖縄が誇るべきウチナーンチュの一人である。

「伊波敏男（1943年～）は南大東島で生まれました。14歳からハンセン病療養所（沖縄愛楽園）での生活を始めます。後に鹿児島、岡山の療養所での治療を経て全快します。……伊波は、沖縄愛楽園に入園していた少年のころ、来園した川端康成にその文才を見いだされ励まされます。この天賦の才能に努力を重ね、同じ病で苦しんでいる人々の悲しみを掬い上げ、二度とこのような過ちを犯さないためにと、積極的な文筆活動や講演活動を行っています。」（『「沖縄文学」への招待』（大城貞俊・沖縄タイムス社）より）。

『ナツコー沖縄密貿易の女王』奥野修司（文春文庫）

奥野修司（1948年～）はフリージャーナリスト。

2005年講談社ノンフィクション賞受賞。2006年大宅壮一ノンフィクション賞受賞。

戦後直後の「沖縄」を知ることができる。

「当時は「男は戦果、女は体当たり」という言葉が流行った。“体当たり”とはむろん売春のことである。米軍には若い兵隊が多く、沖縄女性の“体当たり”は効果てきめんだった。現在の沖縄市がコザ市と呼ばれた頃に4期16年間市長を務め、基地経済からの脱却を生涯にわたって訴えつづけた大山朝常は、死去する2年前の1997年、こんな話を飄々と2時間以上にわたって語ってくれたことがある。

「戦後、私は小学校の校長をしていました。職員の給料は1日米1合でした。これじゃ生きて生かれんです。3人の仲間とトラックを借りましてね。米軍の倉庫に行ったです。そのとき女も連れていきました。英語のうまい仲間が米兵と交渉するんです。女が欲しければ目をつむってくれって。すると『欲しいものがあれば全部持って行け』ですよ。日本軍なら在庫を計算するが、連中はそんなことやらない。それより女が欲しいから、女をくっつけたらすぐOKです。おかげでトラックいっぱい缶詰を運びました。材木もいらないというから、これも運んで校舎を建てましたよ。ただ、連中は見えるところでもナニするもんだから、女が嫌がって困ったことがありました。あれは女次第ですなあ。」

『沖縄だれにも書かれたくなかった戦後史（上下）』佐野真一（集英社文庫）

『「米留組」と沖縄―米軍統治下のアメリカ留学』山里絹子（集英社新書）

山里絹子（1978年～）は琉球大学准教授。専門はアメリカ研究、社会学、移民・ディアスポラ、戦後沖縄文化史、ライフストーリーなど。

『増補改訂 ぼくの沖縄〈復帰後〉史プラス』新城和博（ボーダー新書）

6-4 琉球・沖縄文化

『沖縄からアジアが見える』比嘉政夫（岩波ジュニア新書）

比嘉政夫（1936～2009年）は琉球大学教授・沖縄大学地域研究所長だった。専攻は社会人類学。

『沖縄からアジアが見える』は、沖縄生まれの人が一番のお薦めの本。県立高校入試でも出題された。

ある店で、著者ご本人と偶然会うことができた。その際に『沖縄を識る―琉球列島の神話と祭り』をサイン入りでいただいた。

『沖縄を識る—琉球列島の神話と祭り』比嘉政夫（歴博ブックレット④）

『沖縄の歴史と文化』外間守善（中公新書）

『新書 沖縄読本』下川裕治・仲村清司著編（講談社現代新書）

『沖縄文化論—忘れられた日本』岡本太郎（中公文庫）

2014年度実施教員選考試験・専門国語で出題された。

『沖縄 時間がゆったり流れる島』宮里千里（光文社新書）

宮里千里（1950年～）はエッセイスト、沖縄の民族祭祀の録音記録者。那覇市職員・那覇市労働組合委員長だった。翁長雄志（1950～2018年）の那覇市長時代の右腕だった。そのため城間幹子前市長（中学校国語教師、中学校校長だった）の後援会長だった。

2003年の出版。

自分が沖縄に来た頃の、古きよき沖縄が描かれている。今の沖縄は、小学校ですら「ベル着」が義務づけられ、毎時間のようにタイマーで測られて、「2分間で話し合ってください」と、せせこましい時間に縛られる島になってしまった。

『日本人の魂の原郷 沖縄久高島』比嘉康雄（集英社新書）

比嘉康雄（1938～2000年）は写真家。

『まれびとたちの沖縄』与那原恵（小学館101新書）

与那原恵（1958年～）はノンフィクション作家。

「第2章 為朝はまた来る? 「琉球本」の系譜」で、滝沢馬琴『椿説弓張月』について触れている。他の章では、田島利三郎・ベッテルハイム・田辺尚雄と日劇ダンシングチームが取り上げられている。

『甦える海上の道—日本と琉球』谷川健一（文春新書）

谷川健一（1921～2013年）は民俗学者。

第一尚氏の起源として、折口信夫の説が以下のように紹介されている。「肥後の佐敷は、折口信夫が琉球国の第一尚氏の出自の地として重視しているところである。このことはすでに馬琴も気が付いていて『弓張月』の末尾に……「琉球の地名に、九州の地名を擬したりとおもうものすくなくならず、肥後に佐敷と唱うる所あり」……琉球の佐敷が第一尚氏の根拠地であったことは言うまでもない。」肥後八代の「名和氏の一統あるいは分派」は「肥後海賊のくずれで伊平屋の島を経て沖縄島の東南部、知念半島の一角に上陸して、佐敷に根拠地を設けた。それが第一尚氏のはじまりであることは、折口信夫の説くところである。」第一尚氏の「初代王の尚思紹は、苗代大親（なわしろふや）と称した。苗は名和に通じ、代は八代に通じる、と折口はいう。」名和＝苗＝尚であり、筆者はこの説を支持している。

『街道を行く6—沖縄・先島への道』司馬遼太郎（朝日文庫）

司馬遼太郎（1923～96年）は作家。

「軍隊というものは本来、つまり本質としての機能としても、自国の住民を守るものではない、ということである。軍隊は軍隊そのものを守る。」

「明治三、四十年ごろまでの農村では即興の琉歌をたえず口ずさんでいたとすれば、明治の画一文化の先兵ともいべき小学校教育の普及が、沖縄の「おもろ」心の息をとめてしまったということになるだろうか。」

『沖縄生活誌』高良勉（岩波新書）

『ウチナーグチ（沖縄語）練習帖』高良勉（NHK出版新書）

『言振り—琉球弧からの詩・文学論』高良勉（未来社）

高良勉（1949年～）は詩人。県立高校教師（化学）だった。結婚式・居酒屋で同席したことがある。

『コトバの生まれる場所』崎山多美（砂子屋書房）

崎山多美（1954年～）は作家。2018年4月1日沖縄教員塾で講演会をしていただいた。

『沖縄を撃つ!』花村萬月（集英社新書）

『母なる海から日本を読み解く』佐藤優（新潮文庫）

「沖縄・久米島から日本国家を読み解く」から改題。古典評論『三鳥問答』が大きく取り上げられている。鳥、鷺、隼の三鳥が集まって久米島の農村の困窮ぶりを語り、その立て直しの方策を話し合う。

『はじめての沖縄』岸政彦（新曜社）

『よくわかる御願ハンドブック〈増補改訂〉』（ボーダーインク）

『沖縄苗字のヒミツ』武智方寛（ボーダー新書）

『沖縄イメージを旅する—柳田國男から移住ブームまで』多田治（中公新書ラクレ）

多田治（1970年〜）は一橋大学大学院教授。琉球大学助教授だった。専攻はグローバル社会学・現代社会理論・沖縄研究。

現在の沖縄の歴史・文化ブームは、日本最大の広告代理店「電通」によって作り出されたというような「目から鱗が落ちる」話がたくさんある。1924年まで大阪から台湾は1万トンの船で4日間、沖縄は1,500トンの船で1週間かかったということなので、「本土」から台湾よりは沖縄の方が遠かった。この時代に訪れたのが柳田國男や折口信夫。1937年4,700トンの船の導入に伴い、本格的な「沖縄パックツアー」が誕生する（1940年まで）。この時代に繰り返し訪れたのが柳宗悦。

『内地の歩き方—沖縄から県外に行くあなたが、知っておきたい23のオキテ』吉戸三貴（ボーダーインク）

『菜の花の沖縄日記』坂本菜の花（ヘウレーカ）

坂本菜の花（1999年〜）は石川県珠州市生まれ。中学卒業後、沖縄の無認可学校「珊瑚舎スコーレ」に進学、2018年3月卒業。実家の宿を手伝う。

映画『ちむぐりさ 菜の花の沖縄日記』もお勧めである。

『沖縄の新聞は本当に「偏向」しているのか』安田浩一（朝日文庫）

安田浩一（1964年〜）はジャーナリスト。

この本を読むと県内紙を読む楽しみが増す。沖縄タイムス・琉球新報の20人以上の記者が紹介されている。

『沖縄報道—日本のジャーナリズムの現在』山田健太（ちくま新書）

山田健太（1959年〜）は専修大学教授。専門は言論法、ジャーナリズム研究。琉球新報で「メディア時評」を連載中。

沖縄の人々は、沖縄タイムス・琉球新報という、すばらしい地方紙を2紙ももっていることをもっと誇っていいし、この2紙を購読・投稿・授業などでもっと活用してよい。

『沖縄オトナの社会見学R18』仲村清司・藤井誠二・普久原朝充（亜紀書房）

『沖縄アンダーグラウンド—売春街を生きた者たち』藤井誠二（集英社文庫）

藤井誠二（1965年〜）はノンフィクション作家。那覇と東京の二拠点生活。

1968年琉球政府の第1回行政主席通常選挙について佐木隆三の話。

「那覇市長だった西銘順治が主席選挙に出ていました。アメリカから沖縄即時無条件返還を求める屋良朝苗さんの応援演説で大江健三郎が来ていて、本土との一体化を訴えた西銘陣営には石原慎太郎さんが応援に来ていました。」

『誰も書かなかった玉城デニーの青春—もう一つの沖縄戦後史』藤井誠二（光文社）

仲村伊織さんの父である仲村晃さんのインタビューがあったので、読んだ。

仲村晃「息子は重度の知的障がいなので、1年目の高校受験のとき、教育委員会としては、前例がないということもあったし、特別支援学校の高等部に行ってくれと言われたんです。どこの地域でもそういう判断をするものだと思いますが、ただ、大阪や東京、北海道は“定員内不合格”というのはなくて、入学させているんです。

特に大阪は同和教育の流れで率先して人権教育が進んでいて、障がいのない子も障がいのある子も一緒に学ぼうというインクルーシブ（包括的）教育というか、障がいのある子どもも学校でみんなと一緒に過ごすという実践をしていた。大阪でできることが、なんで沖縄ではできないのかと訴えました。」

「二次募集を入れると3年で6回落ちて、2021年3月にやっと4年目で合格できて、『ゆい教室』というところに通うことになったんです。……ただ学籍は特別支援学校なんです。」

仲村伊織さんへの応援動画

10代3人の沖縄からのメッセージ【#ComeTogether】「さあ、世界を変えよう」（約5分）

<https://www.youtube.com/watch?v=v6WlNBPERec>

『那覇の市場で古本屋—ひょっこり始めた〈ウララ〉の日々』宇田智子（ボーダーインク）

『増補 本屋になりたい—この島の本を売る』宇田智子（ちくま文庫）

『市場のことは、本の声』宇田智子（晶文社）

宇田智子（1980年～）は、市場の古本屋「ウララ」店主。2014年〔池田晶子記念〕わたくし、つまりNobody賞受賞者。

「旅人のように

ある勉強会で、本の出張販売をすることになった。会場までは家から歩いて20分、ただし本を40冊持っていないといけない。……そうだ、スーツケースで行こう。……

ビルについた。会場は3階、エレベーターはない。汗をかいて上った。歩いて運んできましたと話したおかげか、本は半分以上売れた。よかった。」

2016年2月28日に沖縄教員塾で講演をしていただいた。その前後の話である。

『沖縄1935』週刊朝日編集部編（朝日新聞出版）

『中山良彦米寿記念エッセイ集 戦後沖縄をプロデュース—文化運動としての「民主化」をめざして』

中山良彦（自費出版）

中山良彦（1925～2016年）は海洋博記念公園の沖縄館やひめゆり平和祈念資料館の総合プロデューサー。沖縄教員塾にある百科事典は中山良彦の遺品である。

『石垣島で台湾を歩く—もうひとつの沖縄ガイド』

国永美智子・野入直美・松田ヒロ子・松田良孝・水田憲志編著（沖縄タイムス社）

『不便が残してくれたもの—西表島・船浮からのメッセージ』池田卓（ボーダーインク）

池田卓（1979年～）は西表島船浮出身・船浮在住。シンガーソングライター、竹富町観光大使、船浮海運代表取締役。現代の万能人。

教育のあるべき姿は、離島へき地教育・定時制にある。2000年に訪れた船浮にもう一度行きたい！

『読めば宮古！—あららがまパラダイス読本』さいが族編著（ポーターインク）

『地球の歩き方JAPAN 島旅11 宮古MIYAKO』（ダイヤモンド社）

『琉球列島のチョウたち～南の邦はチョウ天国～』大城安弘（鳴き虫会）

大城安弘（1943年～）は県蝶制定の中心を担った。オオゴマダラの羽化を見せてもらったことがある。

6-5 琉球・沖縄文学論

『平敷屋朝敏—歴史に消された真実の行方』比嘉加津夫（脈発行所）

比嘉加津夫（1944～2019年）は詩人・評論家。遺著となった。

主宰する季刊誌『脈』の最後の102号・103号に沖縄教員塾の広告を掲載した。

『琉歌散歩』島袋盛俊（榕樹書林）

『沖縄の文学』沖縄県高等学校教職員組合編（沖縄時事出版）

『沖縄の文学〈近代・現代編〉』沖縄県高等学校障害児学校教職員組合編（沖縄時事出版）

『新版 沖縄の文学（増補・改訂版）』高教組教育資料センター編（沖縄時事出版）

『「沖縄文学」への招待』大城貞俊（沖縄タイムス社）

『沖縄文学の一〇〇年』仲程昌徳（ボーダーインク）

仲程昌徳（1943年～）は琉球大学教授だった。近現代沖縄文学研究者。テニアン島生まれ。

「琉歌」のなかで「つらね」は、1910年に演じられた歌劇「泊阿嘉」の人気とともに広がっていったもので、1911年になると「新体琉歌」そして「琉詩」と呼ばれるようになり、翌12年にかけて空前絶後の流行を見せ、2、3年で凋落する。それは、伝統的な琉球語表現「琉球文学」最後の光芒であったように見えるものである。」

『古今琉歌集』は1895年（明治28年）に刊行され、「つらね」は1911年（明治44年）から12年（明治45年＝大正元年）にかけて空前絶後の流行を見せた。

『あんやんばまん anyanbaman vol.1 清田政信の詩と思想へ』清田政信研究会（小舟舎）

冒頭の座談会は沖縄教員塾で行われた。

『あんやんばまん anyanbaman vol.2 清田政信とその周辺』清田政信研究会（小舟舎）

6-6 沖縄の教育

『裸足で逃げる—沖縄の夜の街の少女たち』上間陽子（太田出版）

上間陽子（1972年～）は琉球大学大学院教授。専攻は教育学。生活指導の観点から主に非行少年少女の問題を研究。2020年〔池田晶子記念〕わたくし、つまりNobody賞受賞者。令和3年1月沖縄県立高等学校生徒の自死事案に関する第三者再調査委員会副委員長。

沖縄の若者の現実を知ることから、沖縄の教育・若者支援を始めよう。

『裸足で逃げる—沖縄の夜の街の少女たち』特設サイト <http://www.ohtabooks.com/sp/hadashi/>

『ヤンキーと地元—解体屋、風俗経営者、ヤミ業者になった沖縄の若者たち』打越正行（筑摩書房）

打越正行（1979年～）は和光大学専任講師。研究テーマの柱が沖縄、沖縄について研究する際の枠組みが社会学、方法が参与観察。

沖縄の若者の現実を知ることから、沖縄の教育・若者支援を始めよう。

『夜を彷徨う—貧困と暴力 沖縄の少年・少女たちのいま』琉球新報取材班（朝日新聞出版）

2018年1月から8月までの琉球新報の連載をまとめた。2019年6月の高校生5人を含む若者ら10人が大麻取締法違反容疑で摘発された事件の連載も収録している。県立高校の定員内不合格と中途退学が生み出している、沖縄の若者たちの現実が描かれている。

「（杉山春さんのことば）弱さを抱えた人間が助けを求めないことを『個人の責任』に帰すのは妥当ではない。これまで家族の領域とされてきた部分を公的に補わなければ、人が育ちようもない時代が来ていることを、社会が早く気付かなければならない」。

「リョータは何度も遅刻した。ある日、たまたま登校が給食時間に重なり、周りの児童がいる中で教師から「給食を食べるために学校に来ているのか」と言われた。恥ずかしさと怒りが湧き、それ以来、学校から足が遠のいた。」

『復帰50年 沖縄子ども白書2022』（かもがわ出版）

沖縄の子どもたちとその保護者たちの現実を知ってから、教育を行おう。

編集委員は、上間陽子（琉球大学教育学研究科教授）・川武啓介（やえせ北保育園園長）・北上田源（琉球大

学教育学部准教授）・島村聡（沖縄大学人文学部福祉文化学科教授）・二宮千賀子（一般社団法人Co-Link）・山野良一（沖縄大学人文学部福祉文化学科教授）・横江崇（弁護士／美ら島法律事務所）の7人。

『沖縄子どもの貧困白書』沖縄県子ども総合研究所編（かもがわ出版）

『沖縄子ども白書—地域と子どもの「いま」を考える』「沖縄子ども白書」編集委員会（ボーダーインク）

『沖縄で教師をめざす人のために』上地完治・西本裕輝編著（協同出版）

『誰がこの子らを救うのか 沖縄—貧困と虐待の現場から』山内優子（沖縄タイムス社）

『学力テスト全国最下位からの脱出—沖縄県学力向上の取り組み』諸見里明（学事出版）

『人・夢・未来—諸ちゃんだより365日』諸見里明（新星出版）

諸見里明（1956年～）は沖縄県教育長（2013～16年）だった。

『激震・沖縄の教育—「凡事徹底」県教育長ドキュメント』仲村守和（沖縄タイムス出版部）

仲村守和（1947年～）は沖縄県教育長（2007～09年）だった。読谷高校校長（02～05年）。

『教職の道に生きて—出会いに学ぶ—回想録—』津留健二（ボーダーインク）

津留健二（1933年～）は沖縄県教育長（1991～93年）だった。沖縄女子短期大学名誉教授。

『揺れるデイパック—沖縄新教育事情』（琉球新報社）

1995年の新聞連載をまとめた本。当時の沖縄の旧教育事情がわかる。

『戦後沖縄教育運動史—復帰運動における沖縄教職員会の光と影』奥平一（ボーダーインク）

奥平一（1941年～）は台湾生まれ、宮古島市出身。小学校1年時の1949年末中部に移り住んだ。大学卒業後の1968年沖縄で教員に。竹富町立船浮中学校教頭、浦添市立沢岬小学校校長、ドイツハンブルグ日本人学校校長、浦添市立浦添小学校校長を歴任。

「本書を脱稿した今、復帰までの沖縄戦後史について筆者の感想を一言で表現すると、「米政府は沖縄の魂をズタズタに切り裂き愚弄し、それを日本政府が終始一貫追認・黙認してきた」という激しい憤りと悲痛な思いである。」

『沖縄を変えた男 裁弘義—高校野球に捧げた生涯』松永多佳倫（集英社文庫）

『若者の未来をひらく—親、学校、現場体験が育む「就業意識」』うつみ恵美子（なんよう文庫）

『再生の島』奥野修司（文春文庫）

2006～08年の久高島留学センターの様子が書かれている。

『居場所をください—沖縄・kukuluの学校に行けない子どもたち』

藤井誠二＝原作・田名俊信＝作画（世界書院）

『それぞれの歩幅で—発達支援を考える』（新報新書）

琉球新報の連載記事を加筆修正してまとめた。「乳幼児期」「学童期」「思春期」「青年期」と成長段階に応じてまとめられている。沖縄県の発達支援の取り組みが具体的にわかる。

『まちかんてい！ 動き始めた学びの時計』珊瑚舎スコーレ編著（高文研）

夜間中学校の生徒たちの聞き書きである。泊高校の定時制に進学した人たちも多い。

『めんそーれ！ 化学—おばあと学んだ理科授業』盛口満（岩波ジュニア新書）

盛口満（1962年～）は沖縄大学教授。学長だった。専門は理科教育。沖縄タイムスの日曜子ども版「わらびー」に、虫のイラストを描き続けている人である。だから専門は生物である。

珊瑚舎スコーレ夜間中学校での1年間の授業記録である。

「70歳を超える夜間中学生が、「もっと学びたい」と口にするのを、若い大学生たちは、やや圧倒される様子で聞き入っていた。「学ぶことで、新しい自分に会えるんです」——夜間中学の生徒たちが学校に通うわけをそんなふうに言っていることに、何度でも立ち返りたいと僕は思う。」

『教えることは学ぶこと』吉浜忍（自費出版）

吉浜忍（1949年～）は沖縄国際大学教授だった。

県立高校教師27年，沖国大教授15年の記録。

『私の沖縄教育論』大城立裕（若夏社）

大城立裕（1925～2020年）は作家。琉球政府職員・沖縄県職員，沖縄県立博物館館長だった。

『カクテル・パーティー』で1967年度上半期に沖縄出身者で初めて芥川賞を受賞した。

本書は1980年の出版。

「何でも与えられているようで，そのじつ，何も与えられていない時代に，希望をつながせる教育とは大変なものだと思う。」（1977年の文章）

「沖縄の教師たちは祖国復帰運動をはじめたころから，いや戦前からひきつづき，教育技術については文部省におぶさることしか知らなかったのだ。文部省ほしさに日本復帰運動をはじめたのではないかとさえ，私は思うことがある。」（1979年の文章）

第7章 人間・心理・精神医学

7-1 心理

『やさしい教育心理学 第5版』鎌原雅彦・竹綱誠一郎（有斐閣アルマ）

『心理学の名著30』サトウタツヤ（ちくま新書）

サトウタツヤ（1962年～）は立命館大学教授。専攻は文化心理学・心理学史。

以下は30冊の一部。スキナー『自由と尊厳を超えて』。セリグマン『オプティミストはなぜ成功するか』。ビネ・シモン『知能の発達と評価』。フロイト『精神分析入門』。ユング『心理学的類型』。ヴィゴツキー『教育心理学講義』。ロジャーズ『カウンセリングと心理療法』。エリクソン『アイデンティティとライフサイクル』。ブルーナー『意味の復権』。フロム『自由からの逃走』。 فرانクル『夜と霧』。レヴィン『社会科学における場の理論』。マズロー『人間性の心理学』。

「マズローが自己実現している人間として認めているのは、アメリカの第3代大統領ジェファソンと第16代大統領リンカーンの2人だけである。アインシュタインやスピノザなど6名は「非常に可能性のある者」、ベートーヴェンやフロイトなど7名は「欠けるところはあるが、研究に使用可能な者」という扱いである」。

それなのに日本の教育では、普通の小学生・中学生・高校生でも「現在及び将来における自己実現を図っていくことができる」（各学習指導要領）のである。

『心理学をつくった実験30』大芦治（ちくま新書）

大芦治（1966年～）は千葉大学教授。専攻は心理学・教育心理学。

以下は30の実験の一部。ソーンダイクの問題箱、パヴロフの条件づけ、ワトソンの男児アルバートの条件づけ、ウェルトハイマーの運動視の研究、ケーラーの知恵実験、トールマンのネズミの潜在学習の実験、バンデューラの観察学習の実験、エビングハウスの忘却曲線、ハウロウのサル実験、ストレンジ・シチュエーション法、ピアジェの量の保存の実験、デシの内発的動機づけ、セリグマンの学習性無力感、ローゼンタールらのピグマリオン効果、クロンバックの適性処遇交互作用。

『臨床心理学小史』サトウタツヤ（ちくま新書）

（20世紀初頭のアメリカ）「精神分析は生後の親子関係がその後の人生の質に影響すること、行動主義は人間や動物の行動には環境の影響が大きいことをその特徴とするが、こうした学問を受け入れた理由も若い国アメリカの進取の精神によるものであろう（一方でヨーロッパでは遺伝や素質が人生の質に影響するというような考えを好んでいたようである）。」

「神国思想の再生産を行うような教育ではなく、科学に基づく教育学が導入されるようになったのだが、その中心の一つは教育に関する心理学、つまり教育心理学であった。」「発達」「学習」「人格（適応）」「評価」といういわゆる「教育心理学」の四本柱が教員を目指すすべての学生に教授されるようになった。」

『コンプレックス』河合隼雄（岩波新書）

河合隼雄（1928～2007年）は京都大学名誉教授。国際日本文化研究センター名誉教授。日本のユング派心理学の第一人者、臨床心理学者。文化庁長官も務めた。京都大学理学部卒。高校教師も3年間やっている。

「人間は努力すれば何でもできる」と信じている人は幸福だ。われわれのように対人援助の仕事に従事しているものは、人間の能力に限界があり、われわれの抗し難い不可解な力が人間に働いていることを、いつも認めさせられるのである。どう努力をしても知能が低いままの子供がいる。交通事故で足を失った人は、その足を取り返すことはできない。われわれは時にいいようなない絶望感におそわれる。このような問題と必死に取り組まなかった人は、安易な楽観論をもつことができるだろうが。」

「今日の情報過多の状態は、あらゆる機会にわれわれのコンプレックスに作用を及ぼす。」

「私」というものに対する強い確信がないとき、情報量の多さに比例して、その人は安定をゆすぶられる。はっきりと、自分の自己に根ざした道を歩んでいない人は、危険である。」

『カウンセラーは何を見ているか』 信田さよ子（医学書院）

『家族と国家は共謀する—サバイバルからレジスタンスへ』 信田さよ子（角川新書）

信田さよ子（1946年～）は公認心理師・臨床心理士。

「自己肯定感」のような、いまや世の中に流通しきった感のある言葉は、私がもつとも嫌悪し、もつとも忌避するものである。まさに、すべてを回収してその箱の中に投入すれば世の中がスッキリするという言葉ではないだろうか。自己肯定感とは、……いつのまにか「自分で自分を愛せないなんて」「自分を好きになろうよ」「自分で自分を愛せなければ人を愛することはできません」といった文脈で、自己肯定感を「もつ」とか「高める」といったコントロール可能な尺度へと変わっていったのである。」

『言葉を失ったあとで』 信田さよ子・上間陽子（筑摩書房）

上間陽子（1972年～）は琉球大学大学院教授。専攻は教育学。

対談のはじめで、上間陽子が参加したと話す「信田さよ子の講演会」には、自分も参加した。

『セラピスト』 最相葉月（新潮文庫）

最相葉月（1972年～）はノンフィクション作家。

ロジャーズが日本にどのように受容されたのかがわかる。

『感じない子ども—こころを扱えない大人』 巖岩奈々（集英社新書）

巖岩奈々（1959年～）は心理カウンセラー。不登校生徒と家族の教育相談員だった。

不登校の子どもとのかかわりについて次のように記している。「彼らとのやりとりのなかで「どうして学校に行けないの？」と問うことが、どんなに意味のないことを学んだ。彼らは質問されることにうんざりしている。自分だってそれがわからなくてイライラしているというのに。だから、彼らと話すときにはよく「私」の話をした」。

『日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか—児童精神科医の現場報告』 古荘純一（光文社新書）

古荘純一は青山学院大学教授・小児科医・児童精神科医。

「ユニセフの幸福度調査で、「孤独を感じる」と答えた15歳児の割合が、日本は29.8%で突出した1位（2位はアイスランドの10.3%。最下位のオランダは2.9%）だった。

『聞く技術 聞いてもらう技術』 東畑開人（ちくま新書）

東畑開人（1983年～）は教育学博士・臨床心理士。専門は臨床心理学・精神分析・医療人類学。白金高輪カウンセリングルーム主宰。

新書大賞2023第5位。

「人間にとっての真の痛みとは何より孤独であることです。聞くには現実を変えるちからはなくとも、孤独の痛みを慰める深いちからがあります。」

『おとなが育つ条件—発達心理学から考える』 柏木恵子（岩波新書）

柏木恵子（1932年～）は東京女子大学名誉教授。専攻は発達心理学・家族心理学。

『増補 オオカミ少女はいなかった—スキャンダラスな心理学』 鈴木光太郎（ちくま文庫）

鈴木光太郎（1954年～）は新潟大学教授だった。専攻は実験心理学。

人間はオオカミの乳を消化できない。オオカミに育てられることはありえない。カマラが「オオカミのように」木に登っている写真が残っているが、オオカミは木に登ることができない。その他たくさんの理由によって、「オオカミ少女はいなかった」と結論づけている。

オオカミ少女以外に7つの心理学の神話を取り上げている。行動主義心理学を創始したワトソンが、有名な

「アルバート坊やの実験」の助手を務めた大学院生と不倫関係になり、大学から追放されてしまう話はおもしろい。37歳でアメリカ心理学会会長を務めたワトソンの心理学者としてのキャリアは、そのとき42歳で終わっているのだ。

『ヒトの心はどう進化したのか—狩猟採集生活が生んだもの』鈴木光太郎（ちくま新書）

『「死ぬくらいなら会社辞めれば」ができない理由』汐街コナ（あさ出版）

過労で、うつ病になる前に読むべき本である。ほぼ漫画。

『サイコパス』中野信子（文春新書）

『スピリチュアルズ—「わたし」の謎』橘玲（幻冬舎）

『ワンストップ支援における留意点—複雑・困難な背景を有する人々を支援するための手引き 第二版』

一般社団法人日本うつ病センター

無料ですべて読める。<https://www.jcptd.jp/suicide.html>

『自死は、向き合える—遺族を支える，社会で防ぐ』杉山春（岩波ブックレット）

杉山春（1958年～）はルポライター。

「一つ胸に落ちたつぶやきがあった。それは「自死予防とは、その人の自由を回復することなんですね」という言葉だ。死の淵にまで追い詰められる前に、自由を回復すること、それは自死予防の本質だ。」

7-2 精神医学

『子どものための精神医学』滝川一廣（医学書院）

滝川一廣（1947年～）は児童精神科医・臨床心理学者。沖縄で沖縄の子どもたちのために働いている。

養護教諭志望者はぜひ読んで欲しい。

『精神分析の名著—フロイトから土居健郎まで』立木康介編著（中公新書）

立木康介（1968年～）は京都大学教授。精神分析学。

以下はその一部。フロイト『夢解釈』『快楽の彼岸』『文化の中の居心地悪さ』。クライン『児童の精神分析』『羨望と感謝』。アンナ＝フロイト『自我と防衛機制』。エリクソン『幼児期と社会』。土居健郎『「甘え」の構造』。

『やさしさの精神病理』大平健（岩波新書）

『ゆたかさの精神病理』大平健（岩波新書）

『純愛時代』大平健（岩波新書）

『貧困の精神病理—ペルー社会とマチスタ』大平健（岩波書店）

『顔をなくした女—〈わたし〉探しの精神病理』大平健（岩波現代文庫）

『マンガで考える精神病理』大平健（講談社）

『食の精神病理』大平健（光文社新書）

『診療室にきた赤ずきん—物語療法の世界』大平健（新潮文庫）

大平健（1949年～）は精神科医。

彼の著作が読まれた理由は、『岩波新書で「戦後」をよむ』小森陽一・成田龍一・本田由紀（岩波新書）で分析されている。同書で取り上げられた全21冊の岩波新書のうちの1冊が『やさしさの精神病理』である。

『「悩み」の正体』香山リカ（岩波新書）

『いまどきの「常識」』香山リカ（岩波新書）

『若者の法則』香山リカ（岩波新書）

香山リカ（1960年～）は精神科医。

『犯罪心理学入門』福島章（中公新書）

『犯罪精神医学入門—人はなぜ人を殺せるのか』福島章（中公新書）

福島章（1936～2022年）は精神科医。

『死刑囚の記録』加賀乙彦（中公新書）

『精神鑑定の事件史』中谷陽二（中公新書）

『精神科医になる—患者を〈わかる〉ということ』熊木徹夫（中公新書）

『精神医療に葬られた人びと—潜入ルポ 社会的入院』織田淳太郎（光文社新書）

『精神医学とナチズム—裁かれるユング、ハイデガー』小俣和一郎（講談社現代新書）

『精神医学の歴史』小俣和一郎（レグルス文庫）

『異常とは何か』小俣和一郎（講談社現代新書）

小俣和一郎（1950年～）は精神科医・精神医学史家。

ユングの戦争責任をしっかりと追及している。この点に問題意識すらもたないユング系の心理学者・カウンセラーばかりの中で、信頼できる人である。

『はじめての認知療法』大野裕（講談社現代新書）

大野裕（1950年～）は国立精神・神経医療研究センター認知行動療法センター顧問。認知療法を開発したアメリカの精神科医ベックに直接学んでいる。

『はじめての森田療法』北西憲二（講談社現代新書）

『思春期ポストモダン—成熟はいかにして可能か』斎藤環（幻冬社新書）

斎藤環（1961年～）は精神科医。筑波大学教授。専門は、思春期・青年期の精神病理学・病跡学、「ひきこもり」事例の治療・支援ならびに啓蒙。

「いじめ体験はしばしば、もっとも重いタイプのPTSDをもたらすことがある」。「長くいじめを経験した人は、加害者の攻撃性をそのまま自分のものにしてしまうことがある。結果として、いじめの被害者まで非常に攻撃的な人間になってしまうのだ。その矛先が他人に向かうと家庭内暴力などになるし、自分に向かうと自殺になってしまいかねない。実際、いじめ体験から何年も経って自殺する事例は少なくないのだ」。

「2002年度にはじめて、不登校が減少に転じたことがあった」。「2002年4月から公立校の週5日制がはじまったことが一番大きな原因だったように思う」。「それを「登校刺激」と呼ぶかどうかはともかく、教師や家族が不登校の子どもに何とかして「関わり」を持ち続けようとする努力は、むしろ欠かせないものではないだろうか」。

『博士の奇妙な思春期』斎藤環（日本評論社）

『関係する女 所有する男』斎藤環（講談社現代新書）

『「自傷的自己愛」の精神分析』斎藤環（角川新書）

「熊谷晋一郎氏の名言「自立とは依存先を増やすこと」」

これは本当に名言です。

「発達障害の近年の急増ぶりは、とりわけ日本で突出しています。かつて「広汎性発達障害」と呼ばれた障害の有病率は、日本では約2%とされていますが、これは欧米の調査結果のほぼ2倍です。」

「発達障害は先天的な脳の機能障害ですから、日本で突出して多いというのは奇妙なことです。個人的な経験から述べれば、専門医、非専門医を問わず、「発達障害」の診断で紹介されてきた患者の誤診率はきわめて高いという印象です。専門医でもない私が「誤診」と断定できるのは、彼らが「治って」しまうからです。繰り返しますが発達障害は「先天性の脳の機能障害」で、「治療」や「治癒」という表現は適切ではないとされます。奇妙な話ですが、治ってしまったものは誤診、と言わざるをえないのです。」

『自殺予防』高橋祥友（岩波新書）

7-3 人間

『ケータイを持ったサル―「人間らしさ」の崩壊』正高信男（中公新書）

『父親力―母子密着型子育てからの脱出』正高信男（中公新書）

『家族幻想―「ひきこもり」から問う』杉山春（ちくま新書）

『バカの壁』養老孟司（新潮新書）

養老孟司（1937年～）は東京大学名誉教授。解剖学者。

450万部のベストセラー。

『死の壁』養老孟司（新潮新書）

『「自分」の壁』養老孟司（新潮新書）

『遺言。』養老孟司（新潮新書）

『人は見た目が9割』竹内一郎（新潮新書）

『やっぱり見た目が9割』竹内一郎（新潮新書）

竹内一郎（1956年～）は劇作家・演出家・評論家。さい ふうめい名義では漫画原作者・ギャンブル評論家。宝塚大学教授。

面接試験は第一印象が一番大切です。そのためには日々の生活です。

『言ってはいけない―残酷すぎる真実』橘玲（新潮新書）

橘玲（1959年～）は作家。

新書大賞2017受賞。

『もっと言ってはいけない』橘玲（新潮新書）

『女と男 なぜわかりあえないのか』橘玲（文春新書）

『裏道を行け―ディストピア世界をHACKする』橘玲（講談社現代新書）

「スマートフォンは、たとえ使っていなくても、そこにあるだけで人間関係の質を損なうのだ。なぜこんなことになるかという、スマートフォンの向こうに世界が広がっていることをつねに思い出しているため、目の前の会話に集中できなくなるのだという。」

「アメリカの大学生のうち48%が「ネット中毒」で、残りの40%は境界線または危険がある状態」

『バカと無知―人間、この不都合な生きもの』橘玲（新潮新書）

「古今東西の歴史をひもとけばわかるように、人間は匿名の陰に隠れるとかぎりなく残酷になる。戦場で想像を絶する残虐行為が行なわれるのは、軍隊が個人ではなく匿名の「兵士」の集団だからだ。SNSは人類の進化に存在しない環境で、自分は安全な場所にいながら、相手を一方的に攻撃できるという、言論空間のプラットフォームとしては最悪の環境をつくり出した。そこでは、ささいなことで自尊心を傷つけられたと感じた者たちが罵詈雑言や誹謗中傷をぶつけ合っている。ここまでは、人間の本性からの論理的帰結だ。悩ましいのは、だったらどうすればいいのかの答えが、まだどこにもないことだ。」

『世界はなぜ地獄になるのか』橘玲（小学館新書）

『人生は攻略できる』橘玲（ポプラ新書）

『80's―エイティーズ ある80年代の物語』橘玲（幻冬舎文庫）

『悩む力』姜尚中（集英社新書）

姜尚中（1950年～）は東京大学名誉教授。専門は政治学・政治思想史。

新書大賞2009第8位。

『続・悩む力』姜尚中（集英社新書）

『現実脱出論』坂口恭平（講談社現代新書）

『自分を愛する力』 乙武洋匡（講談社現代新書）

乙武洋匡（1976年～）は『五体不満足』の著者。杉並区立杉並第四小学校教諭を3年間務めた。

「むずかしいことはわかっている。それでも、僕らが「平均」や「標準」というモノサシを捨て、その子なりの特性や発育のペースを尊重してあげることができれば、——きっと、幸せな子どもが増えていくと思うのだ。」

『動詞人間学』 作田啓一・多田道太郎（講談社現代新書）

『深夜特急(1)』 沢木耕太郎（新潮文庫）

沢木耕太郎（1947年～）は作家。

『間抜けの構造』 ビートたけし（新潮新書）

ビートたけし（1947年～）はタレント・映画監督。

『二十歳の原点』 高野悦子（新潮文庫）

『二十歳の原点序章』 高野悦子（新潮文庫）

『二十歳の原点ノート』 高野悦子（新潮文庫）

高野悦子（1949～69年）は20歳で自死した学生。その日記。

『聞くカー心をひらく』 阿川佐和子（文春新書）

阿川佐和子（1953年～）はタレント・エッセイスト。

新書大賞2013第5位。170万部のベストセラー。

『六つの星—川上未映子対話集』（文春文庫）

川上未映子（1976年～）は作家・詩人。2008年〔池田晶子記念〕わたくし、つまりNobody賞受賞者。

川上未映子を読むと思ったのは、この本の6人の対談相手が、斎藤環・福岡伸一・松浦理英子・穂村弘・多和田葉子・永井均だったからである。いずれもこの「推薦図書」で、それぞれの本を紹介している。

『野心のすすめ』 林真理子（講談社現代新書）

林真理子（1954年～）は作家。

新書大賞2014第4位。

『ホームレス歌人のいた冬』 三山喬（文春文庫）

三山喬（1961年～）はノンフィクション作家。

朝日新聞歌壇に立てつづけに投稿が掲載され、そして消えたホームレス歌人の正体を追う。

『アンパンマンの遺書』 やなせたかし（岩波現代文庫）

やなせたかし（1919～2013年）は漫画家。

『百万本のバラ物語』 加藤登紀子（光文社）

加藤登紀子（1943年～）は歌手。中国東北部ハルビン市生まれ。東京大学卒。

『ひょうげもん—コメディアン奮戦!』 小松政夫（さくら舎）

小松政夫（1942～2020年）はコメディアン。

『東電OL殺人事件』 佐野真一（新潮文庫）

『東電OL症候群』 佐野真一（新潮文庫）

佐野真一（1947～2022年）はノンフィクション作家。

『新自殺論—自己イメージから自殺を読み解く社会学』 大村英昭／阪本俊生編著（青弓社）

『日航123便 墜落の新事実—目撃証言から真相に迫る』 青山透子（河出文庫）

青山透子は日本航空客室乗務員だった。

1985年8月12日の日本航空123便墜落事故では、乗客乗員524人のうち520人が亡くなった。事故機のクルーと同じグループで乗務していたことがある。同僚が亡くなった原因を追究する。

第8章 言語・文化

「日本語」は9-1に、「琉球・沖縄文化」は6-4にまとめた。

8-1 全般

『ことばと国家』 田中克彦（岩波新書）

田中克彦（1934年～）は一橋大学名誉教授。専攻は言語学・モンゴル学。上高の言語の先生です。

沖縄の国語教師の必読書。ウチナーグチを日本語の方言ととらえるか、それとも独立した言語ととらえるかは、政治の問題であることがわかる。

『言語学とは何か』 田中克彦（岩波新書）

『名前と人間』 田中克彦（岩波新書）

『エスペラント―異端の言語』 田中克彦（岩波新書）

「1922年には『武士道——日本の魂』の著者として知られる新渡戸稲造と民俗学者の柳田国男が共同で国際連盟に働きかけ、世界中の公立学校でエスペラントを教えるよう決議を求めた。提案は、フランス語以外の言語は世界語たるの資格がないと主張するフランスの強い反対を押しきって可決された」。

『ことばは国家を超える—日本語、ウラル・アルタイ語、ツラン主義』 田中克彦（ちくま新書）

『日本語と外国語』 鈴木孝夫（岩波新書）

鈴木孝夫（1926～2021年）は慶応大学名誉教授。専攻は言語社会学。

『対論 言語学が輝いていた時代』 鈴木孝夫・田中克彦（岩波書店）

『もしも、詩があったら』 アーサー・ビナード（光文社新書）

アーサー・ビナード（1967年～）は詩人。日本語でも書く。辺野古を訪れたようだ。

『ことばの力学—応用言語学への招待』 白井恭弘（岩波新書）

『外国語学習の科学—第二言語習得論とは何か』 白井恭弘（岩波新書）

白井恭弘（1957年～）はケース・ウェスタン・リザーブ大学教授。専攻は言語学・言語習得論。

『消滅する言語—人類の知的遺産をいかに守るか』

デイヴィッド・クリスタル／斎藤兆史・三谷裕美＝訳（中公新書）

2018年度実施教員選考試験・専門国語で出題された。

『世界の言語入門』 黒田龍之介（講談社現代新書）

『言語世界地図』 町田健（新潮新書）

『ナチ・ドイツと言語—ヒトラー演説から民衆の悪夢まで』 宮田光雄（岩波新書）

『コミュニケーション力』 齋藤孝（岩波新書）

『アイヌ語地名で旅する北海道』 北道邦彦（朝日新書）

『アイヌ文化で読み解く「ゴールデンカムイ」』 中川裕（集英社新書）

8-2 英語

『日本の英語教育』 山田雄一郎（岩波新書）

『英語教育はなぜ間違っているのか』 山田雄一郎（ちくま新書）

山田雄一郎（1945年～）は広島修道大学教授だった。専攻は言語政策・英語教育。英語教育論で信頼できる

学者の一人。

『TOEFL・TOEICと日本人の英語力』鳥飼玖美子（講談社現代新書）

鳥飼玖美子（1946年～）は立教大学名誉教授。アポロ11号の月面着陸などの同時通訳を行った。小学校での英語教育に反対する論陣を張っている。英語教育論で信頼できる学者の一人。

『英語教育，迫り来る破綻』大津由紀雄・江利川春雄・斎藤兆史・鳥飼玖美子（ひつじ書房）

江利川春雄（1956年～）は和歌山大学名誉教授。「学びの共同体」にも関わっている。

『小学校英語のジレンマ』寺沢拓敬（岩波新書）

寺沢拓敬（1982年～）は関西学院大学准教授。研究領域は言語社会学，応用言語学，日本における外国語をめぐる政策・制度・言説。

「小学校英語は熟議なしで拙速に決定されたものであり（6章），そもそも劇的な効果は望めない（7章）。また，グローバル化に対応するために小学校から英語を導入すべしという根拠も不明である（8章）。こう見ると小学校英語改革は多くの問題を含んでいることがわかるが，その中でも筆者が最大の問題だと考えるのが，教員負担に関する問題と，それと密接に関わる行財政的条件である。」

『英語の歴史—過去から未来への物語』寺澤盾（中公新書）

寺澤盾（1959年～）は東京大学名誉教授。

軍事＝政治＝経済の力で，インド＝ヨーロッパ語族の中でも，「特殊」で「厄介」な言語が国際語になってしまったことが分かる。たとえば，綴り字と発音に対応関係がなかったり，語順ではなく助動詞doで疑問文を作ったりする英語は，ヨーロッパの諸言語の中でも「特殊」である。

『英単語の世界—多義語と意味変化から見る』寺澤盾（中公新書）

『日本人の英語』マーク・ピーターセン（岩波新書）

マーク・ピーターセン（1946年～）は明治大学名誉教授。アメリカ出身。コロラド大学で英米文学，ワシントン大学大学院で日本文学を専攻，1980年フルブライト留学生として来日，東京工業大学にて「正宗白鳥」を研究。

『語源でふやそう英単語』小池直己（岩波ジュニア新書）

第9章 日本語・日本文学論

言語と文学（とりわけ詩）は、歴史的にも本質的にも切り離すことができない。だから日本語と日本文学論の項目は、長くなるが一つにまとめている。

琉球諸語は「6-4 琉球・沖縄文化」に、琉球・沖縄文学論は「6-5 琉球・沖縄文学」にまとめた。

9-1 日本語

『日本語の文法を考える』大野晋（岩波新書）

『日本語練習帳』大野晋（岩波新書）

『日本語の教室』大野晋（岩波新書）

『日本語の源流を求めて』大野晋（岩波新書）

『古典文法質問箱』大野晋（角川ソフィア文庫）

『古典基礎語の世界—源氏物語のもののあはれ』大野晋（角川ソフィア文庫）

『日本語について』大野晋（岩波書店・同時代ライブラリー）

大野晋（1919～2008年）は国語学者。学習院大学名誉教授。上高の日本語の先生です。

古語辞典は『岩波古語辞典 補訂版』、国語辞典は『角川必携国語辞典』がお薦めである。いずれも大野先生が編者である。

「だいたい私は日本語を、およそ事が通じればよい道具であると考えていない。ほのかな心のやりとりも可能な、敵を攻撃して打倒できる強い鋭い表現も可能な言語、また透徹した論理を冴え冴えと表わしうる言語、豊かな厳密な表現にたえる言語であるべきだと思っている。」

「今日では、新聞は1日に44分読まれているという。1日に新聞を40分読むと1万字から2万字くらい読むことになる。」（1969年「新聞文章の方向」より）

『日本語で一番大事なもの』大野晋・丸谷才一（中公文庫）

『孤高 国語学者大野晋の生涯』川村二郎（集英社文庫）

『日本文学史序説（上下）』加藤周一（ちくま学芸文庫）

加藤周一（1919～2008年）は評論家。

1980年大佛次郎賞受賞。英・仏・独・伊・韓・中・ルーマニアなどの各国語に翻訳されている。

十返舎一九の伝説として次の話が紹介されている。

辞世の狂歌「此世をば どりやおいとま せん香と ともにつひには 灰左様なら」。

「そして遺言として、棺のなかに花火を仕掛けさせた。その屍を焼くと、花火は四方に飛び散ったという」。

『日本文学史序説補講』加藤周一（かもがわ出版）

札幌農学校について。「教師は従軍経験者だったのです。彼らは、ニューイングランドから来た信仰の篤いプロテスタントの牧師たちでした。明治維新が1868年で、牧師たちは1870年代に来日しますから、アメリカで南北戦争が終ったところだった。維新前のサムライの息子たちが教会で出会った牧師は、戦場を駆け巡った経験のある北軍の元将校だった。維新の動乱のなかを生き抜いてきたサムライの子弟にとって、話を聞いてみると、彼らはうちの親父に似ている、ということになったでしょう」。内村鑑三も新渡戸稲造も武士の子であり、彼らはいずれも「武士道とプロテスタント」を一つのものと主張した。

『日本文学史』小西甚一（講談社学術文庫）

『日本語の歴史』山口仲美（岩波新書）

山口仲美（1943年～）は明治大学名誉教授。専攻は日本語学（日本語史・擬声語研究）。

一般向けに、日本語史の焦点を、奈良時代（文字）・平安時代（文章）・鎌倉室町（文法）・江戸時代（音韻語彙）と変えているのが斬新で読みやすかった。

『日本語の古典』山口仲美（岩波新書）

30作品について1つのテーマを設けて、解説している。

『曾根崎心中』について。「(1703年4月7日の) 2人の心中事件は、当時の人々の心を打ち、すぐに歌舞伎となって演じられました。一方、近松門左衛門も心中現場に取材に行き、人形の演じる語り物『曾根崎心中』を僅か20日余りで書き下ろし、5月7日に竹本座で上演」。「実にリズムカルな名文。なにしろ、七音と五音の繰り返しから成り立っている。一番整えにくい会話までも七五調なんですよ！」

『犬は「びよ」と鳴いていた—日本語は擬音語・擬態語が面白い』山口仲美（光文社新書）

『翻訳語成立事情』柳父章（岩波新書）

柳父章（1928～2018年）は桃山学院大学名誉教授。専門は翻訳語・比較文化論。

日本語を考える・教える上で必読の一冊です。

『日本語教室』井上ひさし（新潮新書）

井上ひさし（1934～2010年）は作家。

母校・上智大学での連続講義録なので読みやすい。

『日本語の奇跡—〈アイウエオ〉と〈いろは〉の奇跡』山口謠司（新潮新書）

『日本語と時間—〈時の文法〉をたどる』藤井貞和（岩波新書）

藤井貞和（1942年～）は東京大学名誉教授。詩人。専攻は日本古典文学・言語態分析。

次の考えに賛成。「〈詩のことば〉があつて、そこから散文のことが発達してきた。散文という複雑な言語装置の持つ基本の基本、出発点は〈詩のことば〉のうちにあるはずだ。」

『百年前の日本語—書きことばが揺れた時代』今野真二（岩波新書）

今野真二（1958年～）は清泉女子大学教授。専攻は日本語学。

新書大賞2013第9位。

表記の統一などという面倒なことが、百年前にはなかったことがわかる。

『日本語の考古学』今野真二（岩波新書）

「藤原定家は、少なくとも18回『古今和歌集』を書写したことが、現在残されている『古今和歌集』の奥書などからわかっている。」

『超明解！ 国語辞典』今野真二（文春新書）

『『広辞苑』をよむ』今野真二（岩波新書）

『増補 日本語が亡びるとき—英語の世紀の中で』水村美苗（ちくま文庫）

水村美苗（1951年～）は作家。アメリカのプリンストン大学などで日本近代文学を教えた。日本語と英語のバイリンガルで、フランス語で講演を行ったことがある。

2009年小林秀雄賞受賞。

「学校教育とは、ある言葉を教えることによって、その言葉を〈国語〉に育て上げることもできる代わりに、ある言葉を教えないことによって、その言葉を亡ぼすこともできる」。

「教育とは最終的には時間とエネルギーの配分でしかない」。

「教育とは家庭環境が与えないものを与えることである。教育とは、さらには、市場が与えないものを与えることである」。

「日本の国語教育はまずは日本近代文学を読み継がせるのに主眼を置くべきである」。「具体的には、翻訳や詩歌も含めた日本近代文学の古典を次々と読ませる。しかも、最初の一頁から最後の一頁まで読ませる」。

『曲り角の日本語』水谷静夫（岩波新書）

水谷静夫（1926～2014年）は東京女子大学名誉教授。国語学者。『岩波国語辞典』の編纂に初版（1963年）から第7版（2009年）までかかわる。

『日本の方言』柴田武（岩波新書）

柴田武（1918～2007年）は東京大学名誉教授。埼玉大学名誉教授。専攻は言語学。

1958年の出版なので、沖縄が日本ではなかった時代に書かれた「日本の方言」についての本である。だから「琉球も、今後、ながい間、内地と政治的に分離されることがあれば、たとえば、奄美群島の方言とのちがいはいっそう大きくなる可能性がある」とある。

尾鷲を「オワシ」と読むのか、「オワセ」と読むのかについて書かれているのが興味深い。尾鷲の方言では「オワシェ」だったのである。名古屋で生まれ育った自分は「オワセ」と言っていた。

『さすらいの仏教語—暮らしに息づく88話』玄侑宗久（中公新書）

『「国語」の近代史—帝国日本と国語学者たち』安田敏郎（中公新書）

『外国語としての日本語』佐々木瑞枝（講談社現代新書）

『日本語という外国語』荒川洋平（講談社現代新書）

『日本語の宿命—なぜ日本人は社会科学を理解できないか』薬師院仁志（光文社新書）

薬師院仁志（1961年～）は帝塚山学院大学教授。専攻分野は社会学理論、現代社会論、教育社会学。

『言葉と歩く日記』多和田葉子（岩波新書）

『女ことばと日本語』中村桃子（岩波新書）

『やさしい日本語—多文化共生社会へ』庵功雄（岩波新書）

庵功雄（1967年～）は一橋大学教授。専攻は日本語教育・日本語学。著者は通信制高校卒の異色の経歴である。だから優しい・易しい。

まえがきに次のようにある。「本書は、移民受け入れと多文化共生社会の実現に関連する問題のうち、言語（ことば）に関するものを取り上げ、日本語学（言語学）、日本語教育の立場から考えるものです。」

「第4章 外国にルーツを持つ子どもたちと〈やさしい日本語〉」

「第5章 障害をもつ人と〈やさしい日本語〉」

「第7章 多文化共生社会に必要なこと」

9-2 漢字・かな

『漢字—生い立ちとその背景—』白川静（岩波新書）

『漢字百話』白川静（中公文庫）

白川静（1910～2006年）は立命館大学名誉教授。専攻は中国文学。白川静の『常用字解 [第二版]』（平凡社）を小学校教師・国語教師は活用してください。

『白川静—漢字の世界観』松岡正剛（平凡社新書）

新書大賞2009第5位。

『漢字伝来』大島正二（岩波新書）

『部首のはなし—漢字を解剖する』阿辻哲次（中公新書）

『部首のはなし2—もっと漢字を解剖する』阿辻哲次（中公新書）

『漢字再入門—楽しく学ぶために』阿辻哲次（中公新書）

『漢字を楽しむ』阿辻哲次（講談社現代新書）

阿辻哲次（1951年～）は京都大学名誉教授。専攻は中国語学、とりわけ漢字を中心とする文化史。小学校の

国語教科書の編集にも携わっている。上高の漢字の先生です。

『日本の漢字』 笹原宏之（岩波新書）

『訓読みの話—漢字文化と日本語』 笹原宏之（角川ソフィア文庫）

笹原宏之（1965年～）は早稲田大学教授。経済産業省の「JIS漢字」、法務省法制審議会の「人名用漢字」、文部科学省・文化庁文化審議会国語分科会の「常用漢字」などの制定・改正に携わる。中学生で『大漢和辞典』を購入し通覧するほどの漢字オタク。上高の漢字の先生です。

沖縄の最古の寺院は浦添の補陀落山極楽寺だが、補陀落山は観音菩薩の住む浄土である。それは、チベットの宮殿「ポタラ宮」とも、日光とも同じ語源である。「ポータラカ山」（サンスクリット語）→漢字を当てて「補陀落（フダラク）山」→発音が変わり「ふたら山」→漢字で「二荒山」→音読みして「ニコウ山」→佳字（縁起がよい漢字）が当てられ「日光山」→江戸時代の漢学者が一字に詰めて「晃山」の表記も。

『漢字の歴史—古くて新しい文字の話』 笹原宏之（ちくまプリマー新書）

『漢字に託した「日本の心」』 笹原宏之（NHK出版新書）

『漢字からみた日本語の歴史』 今野真二（ちくまプリマー新書）

「日本語を書くための文字としての仮名がうまれてからも漢字を使い続けている。したがって、「日本語を漢字で書く」ということは、日本語の歴史全体を覆っていることがらであることになる。つまり「日本語を漢字で書く」ということに関しては、日本語の歴史は一貫していて、どこにも「切れ目」がないともいえる。」

『^{ふりがな}振仮名の歴史^{れきし}』 今野真二（岩波現代文庫）

『漢字と日本語』 高島俊男（講談社現代新書）

高島俊男（1937～2021年）は中国文学者・エッセイスト。専攻は中国文学。

「もともと中国人は、学問と商売さえ自由にやらせてもらえればゴキゲンの人たちである。学問も商売も個人の才覚が物を言う。そこが大事のところである。それさえあれば上にどんな権力があるかと、まあたいして気にはしない。」

『漢字は日本語である』 小駒勝美（新潮新書）

『言語学者が語る漢字文明論』 田中克彦（講談社学術文庫）

『筆順のはなし』 松本仁志（中公新書ラクレ）

松本仁志（1964年～）は広島大学大学院教授。専攻は文学・書写の教育。「小学校学習指導要領解説国語編」作成協力者。広島大学附属中・高等学校教諭だった。

『かな—その成立と変遷』 小松茂美（岩波新書）

『かなづかいの歴史』 今野真二（中公新書）

「片仮名は漢文を訓読する場において、訓点（フコト点、返り点、送り仮名など）を書くためにうまれたと考えられている。漢文に訓点を施すためにうまれたのだから、片仮名はそもそも漢字と併用することが前提であったことになる。一方平仮名にはそうした前提はなかった。漢字と併用することが前提なのだから、片仮名が独立した文字となるためには漢字から離れる必要があった。しかしまた併用が前提であるのだから、形態的にあまり漢字と離れすぎると融和性がなくなる。片仮名が漢字の部分を使っているのは、そうしたことにも関わりがあると考ええる。」

9-3 古文

『検定絶対不合格教科書 古文』 田中貴子（朝日新聞社）

田中貴子（1960年～）は甲南大学教授。専攻は中世の説話文学。上高の古文の先生です。

「第一部 教科書を読み直す」では、多くの教科書にとりあげられている5作品（『宇治拾遺物語』『枕草子』

『伊勢物語』『徒然草』『平家物語』について、最新の研究から疑問点・批判点が示されている。たとえば、「児ちごのそら寝」『宇治拾遺物語』について、「かいもちひ」を作っていた僧たちが、「児」に敬語を使っているのは、僧たちが「児」を性愛の対象として見ていたからではないか、と筆者は推測している。

「第二部 教科書には載らない古文を読む」では、教科書で隠蔽されている性も宗教もすべてあり。ロストバージョンも『源氏物語』『紫の上』含め2つ取り上げられている。

「第三部 論説編—国語教科書の古文、ここがヘン！」では、国語教育批判が行われている。学習指導要領を、「もっとも近い『外国』である朝鮮の文学との関係はいまだに無視されたままであるし、『日本のなかの外国』として扱われることの多い琉球についてもなんら言及がない」と批判している。「古文でも現代文でも、深い読書行為を行った場合、必ずや国家がめざしているものへの批判や矛盾が噴出する可能性があるものだから、あくまで『深く考えないけど学力があるよいこちゃん』を育成しようとしているのである」。

『セクシィ古文』田中貴子・田中英一（メディアファクトリー新書）

「古文の引用→現代語訳（漫画付き）→著者の解説」という構成。最後にはセクシィ古語辞典まで付いている。「嫁ぐ」はもともと「と」＝陰門（女性器）を「接ぐ（つぐ）」＝欠けたところをふさぐ、つまり「Hする」から来た言葉なのだ」。

「平安貴族の女性たちですが、実際は位が高ければ高いほど交際の相手は自由に選ばませんでした。お付きの女房たちが、姫に届いた和歌（＝セックス申込書）のなかから家格の合う、将来性のありそうな男を選んで返事を書き、ある夜、その男を寝所に送り込むのです。……その内実はレイプである」。

『古典がもっと好きになる』田中貴子（岩波ジュニア新書）

「古文」を理解するためには、(1)繰り返して読む、(2)状況について勘を働かせる、(3)当時の文化を理解しておく、という、この三点が重要だ」。

『いちにち、古典—くときをめぐる日本文学誌』田中貴子（岩波新書）

『古文の読解』小西甚一（ちくま学芸文庫）

小西甚一（1915～2007年）は筑波大学名誉教授。専門は日本中世文学、比較文学。

昔の参考書。受験勉強の際に使った。

『知ってる古文の知らない魅力』鈴木健一（講談社現代新書）

鈴木健一（1960年～）は学習院大学教授。専攻は詩歌史、江戸時代の文学、古典の享受史。

学習院大の主に1年生対象とした「日本文学史概説Ⅱ」の講義内容とほぼ同じ。『源氏物語』『平家物語』『枕草子』『おくのほそ道』『竹取物語』『伊勢物語』の6作品を中心に扱っている。

「つれづれなるままに、……」は『徒然草』の冒頭として余りに有名だが、平安時代にはすでに定番表現となっており、先行する作品に「つれづれなりし折……」（和泉式部の歌集）、「つれづれに侍るままに……」（『堤中納言物語』）、「つれづれのままに……」（『讃岐典侍日記』）とある。

「日本人の独創のように思える古典の名文にも中国文学が色濃く影を落としていて、単独で成り立つ名作というものはあり得ない」。

「感動のパターンというのは何千年もの歴史の中で形成されていて、人々の心性に奥深く根付いています。人間は根っここのところでは、それほど大きく変化していないのです」。だから古文・漢文を学ぶのである。

『おもしろ古典教室』上野誠（ちくまプリマー新書）

『快樂でよみとく古典文学』大塚ひかり（小学館101新書）

『王朝文学の楽しみ』尾崎左永子（岩波新書）

『平安女子の楽しい！生活』川村裕子（岩波ジュニア新書）

『平安文学でわかる恋の法則』高木和子（ちくまプリマー新書）

『古文を楽しく読むために』福田孝（ひつじ書房）

『古典モノ語り』山本淳子（笠間書院）

「現代の自家用車にグレードがあるように、牛車にもグレードがあった。」

唐庇車（からびさしのくるま）→檳榔毛車（びろうげのくるま）→網代車（あじろぐるま）

「天皇は牛車に乗れない。乗り物は輿（こし）と限られているからだ。」

『野の古典』安田登（紀伊国屋書店）

安田登（1956年～）は能楽師。高校国語教師だった。

「中学生や高校生が目にする古典は、何度も何度も検閲の網を潜（くぐ）った、刺激の少ない、毒にも薬にもならないものです。目黒のサンマです。そりゃあ、面白くないのは当たり前です。」

『装束の日本史—平安貴族は何を着ていたのか』近藤好和（平凡社新書）

近藤好和（1957年～）は國學院大学非常勤講師。専攻は有職故実。パワーリフティング世界選手権110キロ級日本代表（2001年、2005年）。48歳で日本代表。

これほど知らない単語が出てくる本は読んだことがない。英語と同じくらい、もしくはそれ以上に知らない単語（ほとんどが名詞）ばかりだった。

「直衣は私服なので、ファッションとして風流^{ふうりゅう}があった。出衣^{いだしぎぬ}といい、下着に相^{あこめ}や桂^{うちき}を着用し、前身は指貫に着籠めず、その裾をのぞかせた。」下着を見せるファッションは、平安時代からの伝統だったのだ。

『和歌とは何か』渡部泰明（岩波新書）

渡部泰明（1957年～）は東京大学名誉教授。専攻は和歌文学・中世文学。上高の和歌の先生です。

野田秀樹率いる劇団「夢の遊眠社」の団員だった著者が、「和歌は演技している」ととらえて、そのレトリック（枕詞・序詞・掛詞・縁語・本歌取り）と儀礼的空間（贈答歌^{ぞうとう か}・歌合^{うたあわせ}・屏風歌^{びょうぶ うた}と障子歌^{しょうじ うた}・柿本人麻呂^{えい}影供^ぐ・古今伝授^{こきんでんじゅ}）を説明する。

『古典和歌入門』渡部泰明（岩波ジュニア新書）

『和歌のルール』渡部泰明編（笠間書房）

『万葉秀歌（上下）』斎藤茂吉（岩波新書）

斎藤茂吉（1882～1953年）は歌人・精神科医。

こういう本は1日1首ずつ読んでいくとよい。

『万葉びとの宴』上野誠（講談社現代新書）

上野誠（1960年～）は奈良大学名誉教授。専門は万葉文化論。

憶良らは 今は罷らむ 子泣くらむ それその母も 我を待つらむそ

「宴というものに招かれたら、元来朝まで飲むのが礼儀で、最後まで残るのが礼儀なのである。したがって、個人の都合で、中座するというのは、マナー違反なので、こう下手に出る必要があるのである。時に憶良は70歳。乳飲み子がいるとは考えにくく、このように自己卑下して、道化師の笑いを取って、退出したのである。苦勞人、憶良は、こうして早引けしたのである。」

『源氏物語』秋山虔（岩波新書）

『源氏物語の世界』日向一雅（岩波新書）

『光源氏の一生』池田弥三郎（講談社現代新書）

池田弥三郎（1914～82年）は慶応大学名誉教授。国文学者・民俗学者。

光源氏の一生を通して、『源氏物語』のあらすじを読める。入門書としてお薦め。1964年発行。

『源氏物語の時代—一条天皇と后たちのものがたり』山本淳子（朝日選書）

山本淳子（1960年～）は京都先端科学大学教授。高校教諭を経験。上高の源氏物語の先生です。

2007年度サントリー学芸賞（芸術・文学部門）受賞。

源氏物語に関する本で、『源氏物語』そのものの次にお薦めの一冊である。「一条天皇と、彼をめぐる二人の

后、定子と彰子の物語を、現存する歴史資料と文学作品によって再構成したもの」である。

『平安人の心で「源氏物語」を読む』山本淳子（朝日選書）

『紫式部ひとり語り』山本淳子（角川ソフィア文庫）

『誰も教えくれなかった「源氏物語」本当の面白さ』林真理子・山本淳子（小学館101新書）

『源氏物語』大野晋（岩波現代文庫）

大野晋（1919～2008年）は学習院大学名誉教授。国語学者。上高の日本語の先生です。

藤原道長と紫式部は、男と女の関係だったのかどうかという古くからのテーマについて、国語学者の読み解きが秀逸。あったと推測し、別れのきっかけまで読み解いている。

『光る源氏の物語（上下）』大野晋・丸谷オ一（中公文庫）

『源氏物語ものがたり』島内景二（新潮新書）

島内景二（1955年～）は電気通信大学名誉教授。専門は古典文学。

源氏物語が1,000年間にわたって、どのように読み継がれてきたかを、源氏物語に取りつかれた9人の男を通して、ものがたる。本居宣長も、傍注・頭注つきのテキストで源氏物語を読んでいる。源氏物語は、口語訳で読むのでも、漫画で読むのでも、映画で見るのでも、よい。

『源氏物語を反体制文学として読んでみる』三田誠広（集英社新書）

『紫式部』清水好子（岩波新書）

『源氏物語の結婚—平安朝の婚姻制度と恋愛譚』工藤重矩（中公新書）

北の方（本妻）は同居が基本。通い婚は、序列が二番目以降の妻と愛人。国語教育では、通い婚が基本と嘘を教える（教えられる）。同居している本妻では「ものがたり」にならないことを踏まえて、試験対策のためのテクニックを教えている（教えられている）のである。

『枕草子のたくらみ—「春はあけぼの」に秘められた思い』山本淳子（朝日選書）

『平家物語』石母田正（岩波新書）

石母田正（1912～86年）は法政大学名誉教授。専攻は古代史・中世史。

『いくさ物語の世界—中世軍記文学を読む』日下力（岩波新書）

日下力（1945年～）は早稲田大学名誉教授。専攻は中世軍記文学。

『保元物語』・『平治物語』・『平家物語』・『承久記』を、当時の「戦後文学」として読む。軍記物語が「死」を美化する教育に悪用され、「集団自決（強制集団死）」などをもたらし伏流とされたことは知っておいてよい。

『平家物語』「木曾の最期」は、今でも多くの教科書に採録されている。

『琵琶法師—〈異界〉を語る人びと』兵藤裕己（岩波新書）

兵藤裕己（1950年～）は学習院大学名誉教授。専攻は日本中世文学・芸能論。

最後の琵琶法師と言われた山鹿良之（1901～96年）の演唱のDVDつき。視覚障害者の文化史として読むこともできる。例えば、『平家物語』を本として所持していることが、視覚障害者の組織である当道座そうけんぎょうの惣検校（総検校）の権威とされていた。「語りの正統を文字テキストとして独占的に管理することで、惣検校を頂点とした当道座のピラミッド型の内部支配が補完されたのだ」。視覚障害者の官僚機構の権威の源泉は、視覚障害者が読めない文字テキストであったのだ。

『西行』高橋英夫（岩波新書）

高橋英夫（1930～2019年）は文芸評論家。

西行は、出家した身でありながら、遊女と歌のやり取りをし、世間での自らの歌の評価を気にしつつけた。旅人でありながらも、政治権力の近くにもいた。西行の人生をたどりながら、その短歌を味わうことができる。

『鴨長明—自由のこころ』鈴木貞美（ちくま新書）

『兼好法師—徒然草に記されなかった真実』小川剛生（中公新書）

小川剛生（1971年～）は慶應義塾大学文学部教授。専攻は中世和歌史。

国語便覧に書かれている兼好法師の説明のほとんどがねつ造された嘘であることが立証されている。

『季語の誕生』宮坂静生（岩波新書）

『芭蕉―「かるみ」の境地へ』田中善信（中公新書）

田中善信（1940年～）は白百合女子大学名誉教授。専攻は江戸時代の俳諧。

「歌謡というのはうたって覚えるものである。逆にいえば、うたわなければ歌謡の歌詞を覚えることはできない。『貝おほひ』には、縦横無尽といってよいほど、当時のはやり歌の文句が駆使されている。これだけ縦横にはやり歌の文句を駆使できた芭蕉は、うたうことが好きな人物であったと考えて間違いあるまい。私はかつて芭蕉のことを、カラオケへ行ったらマイクを離さないような人物だったと言ったことがある」。

『小林一茶―時代を詠んだ俳諧師』青木美智男（岩波新書）

『新書で入門 西鶴という鬼才』浅沼璞（新潮新書）

浅沼璞（1957年～）は日本大学教授。連句人。

「西鶴自身も男色を好み、その数、千人を豪語していた。それも元服前の若衆だから少年愛である。

「舞台に上がる前の修行中の歌舞伎子を陰間^{かげま}といったが、それが歌舞伎から離れて男色専門の少年をさすようになり、さらにカゲマをカマと略すようになる——これがオカマの語源」である。

明治以来、西鶴の好色物は禁書であり、大正期でもエロティックな描写は「×」などの伏せ字だった。このように西鶴はたんなるエロ作家として扱われてきたのである。

なお、西鶴は住吉神社前で一日に23,500もの俳諧を詠んだという伝説がある。

9-4 漢文

『真に理解する漢文法』中井光

中井光はウェブサイト「漢文学びのとびら」の運営者。

漢文の学習は本書と『漢辞海』で行うのがよい。古典中国語文法にも基づいて説明しているからである。本書の入手方法は以下のサイトから。

<https://xuexi.mokuren.ne.jp/kantobi/index.php>

『漢文の語法』西田太一郎（角川ソフィア文庫）

西田太一郎（1910～82年）は京都大学名誉教授。中国哲学者。

『漢文法要説』西田太一郎（朋友書店）

『漢文入門』小川環樹・西田太一郎（岩波全書）

小川環樹（1910～93年）は京都大学名誉教授。中国文学者。

『改訂版 漢文語法の基礎』濱口富士雄編（東豊書店）

『漢辞海』巻末付録「漢文読解の基礎」を詳しくしたもの。

『漢文の話』吉川幸次郎（ちくま学芸文庫）

吉川幸次郎（1904～80年）は京都大学名誉教授。中国文学者。

『漢文法基礎―本当にわかる漢文入門』二畳庵主人＝加地伸行（講談社学術文庫）

『精講 漢文』前野直彬（ちくま学芸文庫）

『漢文入門』前野直彬（ちくま学芸文庫）

前野直彬（1920～98年）は東京大学名誉教授。中国文学者。

『漢文のルール』鈴木健一編（笠間書房）

『李白』A.ウェイリー／小川環樹・栗山稔＝訳（岩波新書）

A. ウェイリー（1889～1966年）は東洋学者。『源氏物語』を世界で初めて英語全訳し、世界に紹介した。

『杜甫』川合康三（岩波新書）

『白楽天—官と隠のはざままで』川合康三（岩波新書）

『生と死のことば—中国の名言を読む』川合康三（岩波新書）

川合康三（1948年～）は京都大学名誉教授。専攻は中国文学。

『中国名文選』興膳宏（岩波新書）

興膳宏（1936～2023年）は京都大学名誉教授。専攻は中国文学。

『孟子』、『莊子』、司馬遷『史記』、陶淵明、李白、柳宗元、蘇軾など12の名文を取り上げている。

『漢語日語』興膳宏（岩波新書）

『仏教漢語50話』興膳宏（岩波新書）

『漢語の知識』一海知義（岩波ジュニア新書）

『漢詩入門』一海知義（岩波ジュニア新書）

一海知義（1929～2015年）は神戸大学名誉教授。中国文学者。

『新唐詩選』吉川幸次郎・三好達治（岩波新書）

『新唐詩選 続篇』吉川幸次郎・桑原武夫（岩波新書）

『白文攻略 漢文法ひとり学び』加藤徹（白水社）

『漢文の素養—誰が日本文化をつくったのか？』加藤徹（光文社新書）

『漢文力』加藤徹（中公文庫）

『貝と羊の中国人』加藤徹（新潮新書）

『怪力乱神』加藤徹（中央公論新社）

『新版 絵で読む漢文』加藤徹（朝日出版社）

『漢文で知る中国—名言が教える人生の知恵』加藤徹（NHK出版）

加藤徹（1963年～）は明治大学教授。専攻は中国文学。その漢文論・中国論は、広く深くおもしろい。上高の漢文の先生です。『漢文力』は中国語訳・韓国語訳も出版されている。

『東洋脳×西洋脳』茂木健一郎・加藤徹（中公新書ラクレ）

『受験生のための一夜漬け漢文教室』山田史生（ちくまプリマー新書）

『菜根譚—中国の処世訓』湯浅邦弘（中公新書）

『漢文と東アジア—訓読の文化圏』金文京（岩波新書）

金文京（1952年～）は京都大学名誉教授。専攻は中国文学。

『漢文脈と近代日本』齋藤希史（角川ソフィア文庫）

齋藤希史（1963年～）は東京大学教授。専門は中国古典文学、清末～明治期の言語・文学・出版。

2022年度実施教員選考試験・二次試験・高校国語の模擬授業で出題された。

『四字熟語の中国史』富谷至（岩波新書）

富谷至（1952年～）は京都大学名誉教授。専門は中国法制史・古文書学。

『高校生のための古典ライブラリー 漢文名文選—故事成語編』（筑摩書房）

9-5 日本近代小説

『戦後文学を問う—その体験と理念』川村湊（岩波新書）

『海を越える日本文学』張競（ちくまプリマー新書）

張競（1953年～）は明治大学教授。中国上海生まれ。

村上春樹は「欧米人に褒められているから」日本でも評価が高い。三浦綾子は「東アジアに人気があったとはいえ、欧米では認められていません」。だから日本では評価が低い。鋭い。

『新しい文学のために』大江健三郎（岩波新書）

『夏目漱石』十川信介（岩波新書）

十川信介（1936～2018年）は学習院大学名誉教授。専門は日本近代文学。

夏目漱石の評伝である。

『漱石—母に愛されなかった子』三浦雅士（岩波新書）

三浦雅士（1946年～）は評論家。

「人は、自分について考えるとき、ほとんど必ず自殺についても考えます。自殺は自分という仕組みと不可避的に結びついているのです」。

「日本近代文学はじつは仁斎、徂徠から始まったと言っていい。芭蕉、西鶴、近松もその間の生まれです。仁斎、徂徠によって日本文学という概念がはっきりと打ち出された。自身の問題意識に立って中国と対等に中国の古典を論ずる、それが主体性ということの意味である。要するに自己本位ということだ」。

『吾輩は猫である』発表が1905年、明治38年、絶筆『明暗』の執筆が1916年、大正5年、漱石は文字通り20世紀の作家ですが、驚くべきはわずか11年のあいだに執筆した文学作品の質と量です」。

『新書で入門 漱石と鷗外』高橋昭男（新潮新書）

『小林多喜二—21世紀にどう読むか』ノーマ・フィールド（岩波新書）

ノーマ・フィールド（1947年～）はシカゴ大学名誉教授。専攻は日本文学・日本文化。東京生まれ。父は米国人、母は日本人。辺野古新基地建設に反対する一人。1965年にアメリカンスクール卒業後渡米。2004～05年小樽在住。

小林多喜二の警察による拷問・虐殺後の死体の写真は秘匿され、戦後に公開された。その作品も、伏せ字や削除なしで読めるようになったのは、戦後である。

『「私」をつくる—近代小説の試み』安藤宏（岩波新書）

安藤宏（1958年～）は東京大学教授だった。専攻は日本近代文学、特に太宰治。

夏目漱石、森鷗外、芥川龍之介、志賀直哉、太宰治、川端康成の有名作品を通して、日本の近代小説における「私」の作り方を論じる。

『太宰治 弱さを演じるということ』安藤宏（ちくま新書）

『ピカレスク—太宰治伝』猪瀬直樹（文春文庫）

猪瀬直樹（1946年～）は作家。東京都知事（2012～13年）。参議院議員（2022年～）。

『津軽・斜陽の家—太宰治を生んだ「地主貴族」の光芒』鎌田慧（講談社文庫）

鎌田慧（1938年～）はルポライター。

『完本 太宰と井伏—ふたつの戦後』加藤典洋（講談社文芸文庫）

加藤典洋（1948～2019年）は文芸評論家。早稲田大学名誉教授。

『女が読む太宰治』雨宮処凛・井上荒野・太田治子・香山リカ・佐藤江梨子・辛酸なめ子・平安寿子・

高田里恵子・津村記久子・中沢けい・西加奈子・山崎ナオコーラ（ちくまプリマー新書）

女と男は別の生き物だとよく言うけれど、「女が読む」太宰治には、家の葛藤（父親との、兄たちとの）もなければ、政治的葛藤（地主の子であること、共産党の地下活動への協力）も一切ない。「女が読む」太宰治には、自意識と美意識の問題しかなかった。目から鱗の発見であった。

『文学者たちの大逆事件と韓国併合』高澤秀次（平凡社新書）

高澤秀次（1952年～）は文芸評論家。

1910年に起きた大逆事件・韓国併合と文学者との関係を描く。佐藤春夫や与謝野鉄幹の知られざる一面が

紹介される。

『狂うひと―「死の棘」の妻・島尾ミホ』梯久美子（新潮文庫）

梯久美子（1961年～）はノンフィクション作家。

2017年講談社ノンフィクション賞受賞。

島尾敏雄『死の棘』は私小説のすごみを、『狂うひと』はノンフィクションのすごみを思い知らされる。

島尾敏雄は奄美で特攻艇の指揮官を務めた。『死の棘』は敗戦直後の家族と愛人をめぐる私小説。

『三島由紀夫ふたつの謎』大澤真幸（集英社新書）

『星新一――〇〇―話をつくった人（上下）』最相葉月（新潮文庫）

2007年大佛次郎賞受賞。2007年講談社ノンフィクション賞受賞。

『平敷拓哉遺稿集 ひらく』平敷拓哉遺稿集編集委員会（自費出版）

平敷拓哉（1992～2019年）は沖縄教員塾4期生。卒論『『痴人の愛』論』，修論「蘆刈説話の研究」など。

『美しい日本の私―その序説』川端康成（講談社現代新書）

ノーベル文学賞受賞演説。

『あいまいな日本の私』大江健三郎（岩波新書）

ノーベル文学賞受賞演説など。

9-6 日本近代韻文

『詩を読む人のために』三好達治（岩波文庫）

三好達治（1900～64年）は詩人。

冒頭の「千曲川旅情の歌」についての解説が絶品である。

「この詩一篇は、通じていって、――すべての芸術がそれに向ってあこがれるといわれる、「音楽の状態」に最も近いのであります」。

『詩ってなんだろう』谷川俊太郎（ちくま文庫）

谷川俊太郎（1931年～）は詩人。

本のタイトルに、筆者が選ぶ詩と若干のコメントで答えている。取り上げられている詩の範囲は広く、なぞなぞ、しりとり、いるはかるた、わらべうた……。あとがきには次のように記されている。「この本は、現行のいくつかの小学校国語教科書を読んで感じた私の危機感から出発しています。教科書には私の作も含めて多くの詩が収録されているのですが、その扱いがばらばらで、日本の詩歌の時間的、空間的なひろがり子どもたちにどう教えていけばいいかという方法論が見あたらないのです。現場の先生がたもまた、そういう大きな視点をもてない悩みをかかえているようでした」。小学校教師・国語教師志望者には絶対お勧め。

『詩のころを読む』茨木のり子（岩波ジュニア新書）

茨木のり子（1926～2006年）は詩人。

『通勤電車でよむ詩集』小池昌代編著（NHK出版新書）

小池昌代（1959年～）は詩人・作家。

新書大賞2010第9位。41の詩が紹介されている。

トーマ・ヒロコ（1982年～，2005年沖縄国際大学卒業）の詩が時代を見事に写し取っていてすばらしい。朝日新聞の鷺田清一の「折々のことば」でも取り上げられた。

『恋愛詩集』小池昌代編著（NHK出版新書）

『石川啄木』ドナルドキーン／角地幸男＝訳（新潮文庫）

ドナルドキーン（1922～2019年）はコロンビア大学名誉教授。アメリカ出身の日本文学者・日本学者。沖

縄戦に通訳で参戦している。東日本大震災を契機に日本に帰化した。

代用教員の「啄木は校長に、学校の運営の仕方に不満があることを告げ、辞職を求めたようだった。」そして「ストライキの先頭に立った。」

『北原白秋—言葉の魔術師』今野真二（岩波新書）

『中原中也—沈黙の音楽』佐々木幹郎（岩波新書）

佐々木幹郎（1947年～）は詩人。

『季語集』坪内稔典（岩波新書）

坪内稔典（1944年～）は俳人。京都教育大学名誉教授。上高の俳句の先生です。

300の季語について400字の文章と俳句2つが紹介されている。筆者はカバ好きで、全国29か所約60頭のカバをすべて見て、それぞれの前に1時間以上いるということを達成した。筆者が見たであろう、「こどもの国」のカバを見に行くとよい。「赤い河馬^{かば}」は夏の季語である。「夏の河馬は赤い。日焼けから皮膚を守るために赤い体液を分泌するからだ」。

600句の中で一番よかったのは次の句である。

・ 夏惜しむサーフボードの疵^{きず}なでて （季語・サーフボード→夏） 黛^{まゆずみ} まどか

『季語百話—花をひろう』高橋睦郎（中公新書）

高橋睦郎（1937年～）は詩人・歌人・俳人。

『俳句世がたり』小沢信男（岩波新書）

小沢信男（1927～2021年）は作家。

『俳句のルール』井上泰至編（笠間書房）

『正岡子規—言葉と生きる』坪内稔典（岩波新書）

「子規には「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」という代表句があるが、この句を調べたり考えたりしているうちに、柿が秋の代表的風物になったのは俳句が柿を詠むようになったからだと気付いた。食べ物だった柿は、雅語の詩である和歌では対象にならなかった」。「新聞『日本』は明治22年2月11日（憲法発布の日）に陸羯南によって創刊された。……『日本』紙上には漢詩や和歌による時事評がすでにあつた。そこへ子規の「俳句時事評」が加わったのである」。新聞『日本』発刊の日に暗殺されたのが初代文部大臣^{ありのり}森有礼である。

『正岡子規の〈楽しむ力〉』坪内稔典（NHK出版新書）

それぞれの本名をもじって、河東乗五郎（へいごろう）に碧梧桐^{へきごとう}、高浜清（きよし）に虚子^{きよし}と名づけたのは子規である。単なる「もじり」が文学史に名を残したのである。野球に熱中した正岡子規は「野球」をペンネームに用いた。「ノボール」と読む。自分の幼名「升（のぼる）」をもじったものだった。今も使われている子規の訳語として「打者」「走者」「直球」「飛球」がある。子規は野球殿堂入りしている。

『子規と漱石—友情が育んだ写実の近代』小森陽一（集英社新書）

小森陽一（1953年～）は東京大学名誉教授。専攻は日本近代文学。全国「九条の会」事務局長。

漱石と子規ではない。子規と漱石なのである。同級生なのに、漱石は子規を師として教えを請うた。

『[改訂] 桜は本当に美しいのか—欲望が生んだ文化装置』水原紫苑（平凡社ライブラリー）

水原紫苑（1959年～）は歌人。

「戦争に利用された桜への忌避感が次第に消えて、桜の歌が表舞台に戻って来る。」「折しも、「歴史は繰り返すが、一度目は、悲劇、二度目は茶番である」というマルクスのあまりにも有名な言葉を忠実に実行したいらしく、大根役者たちが下手な見えを切ろうとしている。とんでもない花吹雪の幕切れになる前に、舞台から引きずりおろさなければならない。」「

『大岡信『折々のうた』選—短歌（一）』水原紫苑編（岩波新書）

『大岡信『折々のうた』選—短歌（二）』水原紫苑編（岩波新書）

大岡信（1931～2017年）は詩人・評論家。東京芸術大学名誉教授。

『近代秀歌』永田和宏（岩波新書）

永田和宏（1947年～）は歌人。細胞生物学者。京都大学名誉教授。京都産業大学名誉教授。岩波新書の『タンパク質の一生』の著者でもある。岩波新書で文系の本と理系の本を両方書いた初めての人である。

日本人ならこれだけは知っておきたい近代の歌100首を取り上げる。

『現代秀歌』永田和宏（岩波新書）

『あなたと短歌』永田和宏・知花くらら（朝日新聞出版）

知花くらら（1982年～）はモデル・女優。那覇出身。国連世界食糧計画（WFP）オフィシャルサポーター。

『歌仙の愉しみ』大岡信・岡野弘彦・丸谷オー（岩波新書）

『短歌の友人』穂村弘（河出文庫）

穂村弘（1962年～）は歌人。

「我々の言葉が〈リアル〉であるための第一義的な条件としては、「生き延びる」ことを忘れて「生きる」という絶対的な矛盾を引き受けることが要求されるはずである。詩を為すことは必ず死への接近を伴うという、しばしば語られるテーゼの本質がこれであろう。」

『一首のものがたり—^{うた}短歌が生まれるとき』加古陽治（東京新聞）

9-7 国語教育

『生きていくための短歌』南悟（岩波ジュニア新書）

南悟（1946年～）は兵庫県高等学校国語教員だった。1979年から31年間、神戸工業高等学校（夜間定時制）に勤務。

短歌はすべて定時制高校生のもの。この本の「印税収入については、定時制高校生徒の、奨学金、就学資金に活用させていただきます。」100人以上の生徒の短歌と人生が紹介されているが、匿名は2人のみ。著者は教師として生徒と卒業後まで強い信頼関係を形成している。

(1)「卒業文集を書く時に初めて語ってくれたことですが、7年前に昼の学校を退学した理由は、彼の友だちをいじめている生徒5、6人を殴ってけがをさせ、自ら先生に名乗り出て退学になったとのことで、最後まで殴った理由を明かさなかったと言います。」ガソリンスタンドで正社員としてオイルまみれで働く、その生徒の卒業の歌。

二〇才過ぎ嫁さんもらって息子でき小さな家族我が支える （2001年）

(2)日系ブラジル人の生徒の歌。

おっさんが首になった検品の作業任せられ頑張りとおす （2007年）

(3)母子家庭で私立の進学高校に入学した秋に、お母さんがくも膜下出血で39歳で亡くなり、高校を中退し、バイトしながら19歳で入学した生徒の歌。

生きること疲れて手には亡き母の携帯写真温もり心に （2008年）

(4)知的な障害を持ち、他人とのコミュニケーションをとるのが難しい生徒の歌。

ニッカポッカみながはいてるからカッコいい風ひらひらと学校へくる A （1997年）

「仕事に就けないA君ですが、級友と同様の格好がしくて、お母さんに無理を言ってニッカポッカで登校していたのです。クラスの者も心得ていて、「A君、今日の仕事はどうだった？」と声をかけたりしていました。」

このA君が、いじめのフラッシュバックで、泣いてばかりの状態で、心配してお母さんが授業に付き添っていたときの話。

「測量事務所で働くB君が、突然、泣いているA君の席に行き、「いつまでも、甘えるな。Aは恵まれている。僕の1歳下の弟は、喋れないし勉強もできない。中学校の障害児学級を出たけれど、行くところがないし友だちもいない。Aは、こうして定時制高校に来て幸せだろう。泣き止め。」と発言しました。

B君が、障害を持つ弟の話題を持ち出したのは初めてです。」

「そして、実に驚くことに、この日以来A君は、一度も泣かず、一日も休まずに卒業してくれました。」

(5)学校と仕事子育て疲れても子どもの笑顔で元気回復 (2006年)

震災の年、18歳で中退した彼女は、2人の子をもつ26歳のシングルマザーとして再入学してきた。2人ともアスペルガー症候群と診断されている。長男が妊娠7か月の時に震災があった。

「よく子ども連れで登校し、隣の席に座らせて漢字帳や宿題をさせていました。」

国語の授業で「勉強の「勉」も分娩の「娩」も免許の「免」も、全て女性が出産する姿が漢字になっている」→「彼女は、自分はすべて経験している、大したもんだと、自分を誉めなくなった」

『獄中メモは問う—作文教育が罪にされた時代』佐竹直子（道新選書）

佐竹直子（1966年～）は北海道新聞記者。

東北地方の教師たちの「北方性教育運動」に学んだ北海道の教師たちの運動と、それへの弾圧である。

「東北の農村の教員たちが、「赤い鳥」で評価された綴方が「都会の子供たちの作品に偏っている」と指摘した。」

「(1934年)当時、「先生」を目指す青年たちはみな、師範学校卒業後に半年間の兵役に就いてから教壇に立った。」

『部活で俳句』今井聖（岩波ジュニア新書）

今井聖（1950年～）は俳人・脚本家。

『短歌は最強アイテム—高校生活の悩みに効きます』千葉聡（岩波ジュニア新書）

千葉聡（1968年～）は横浜市立高校国語教諭。歌人。三省堂の高校国語教科書「文学国語」編集委員。

名桜大学校歌の作曲者（作詞は外間守善）。外間守善（1924～2012年）に大学院で学んだ。

高校のホームルーム経営・同僚関係・保護者対応などの指南本としても読める。

『日本の教師に伝えたいこと』大村はま（ちくま学芸文庫）

大村はま（1906～2005年）は伝説の国語教師。国語教育研究家。

『橋本式国語勉強法』橋本武（岩波ジュニア新書）

『〈銀の匙〉の国語授業』橋本武（岩波ジュニア新書）

橋本武（1912～2013年）は国語教師。101歳で亡くなった。1934年東京高等師範学校卒業。灘中学校・高等学校で50年間教壇に立ち続けた。灘は6年間1教科1教師の持ち上がり担当制の中高一貫教育。

「私は、国語の基礎学力を涵養する根源は「書く」ことにあると思っています。」

若輩者ながらまったく同感である。

『国語教育の危機—大学入学共通テストと新学習指導要領』紅野謙介（ちくま新書）

『国語教育—混迷する改革』紅野謙介（ちくま新書）

紅野謙介（1956年～）は日本大学特任教授。

高校国語教師は必読である。上高は半分賛成、半分反対。教科書に教師用の指導書がなければ教えられないと、平気で主張できるのは、驚きだった。

『まともな日本語を教えない勘違いだらけの国語教育』有元秀文（合同出版）

『高校生のための現代思想エッセンス—ちくま評論選』（筑摩書房）

『高校生のための近現代文学ベーシック—ちくま小説入門』（筑摩書房）

『「国語」入試の近現代史』石川巧（講談社選書メチエ）

『教養としての大学受験国語』石原千秋（ちくま新書）

『打倒！ センター試験の現代文』石原千秋（ちくまプリマー新書）

『大学生からの文章表現—無難で退屈な日本語から卒業する』黒田龍之介（ちくま新書）

黒田龍之介（1964年～）はフリーランス語学教師。専攻はスラブ語学、言語学。

大学での「日本語表現のテクニック」の授業をもとにしている。「作文」でも「小論文」でもない「日本文」の書き方を指南している。

『「書ける」大学生に育てる—A0入試現場からの提言』島田康行（大修館書店）

島田康行（1963年～）は筑波大学教授。

国立大学に進学した学生が高校時代に400字程度以上の長さの文章を書く機会のアンケート結果が衝撃的であった。0回46%，1～3回25%で7割以上である。

『ルポ 誰が国語力を殺すのか』石井光太（文藝春秋）

石井光太（1977年～）はノンフィクション作家。

子どもたちは教科書が読めない。『ごんぎつね』で「母の死体を煮ている」と誤読する児童がいる。このことを前提に教育しよう。教科書以外の本を読まない教師が国語力を殺している。

9-8 国語教科書

『国語教科書の思想』石原千秋（ちくま新書）

『国語教科書の中の「日本」』石原千秋（ちくま新書）

石原千秋（1955年～）は早稲田大学教授。専攻は日本近代文学。20年以上高校国語教科書の編集委員だった。

2011年度実施教員選考試験・二次試験・小学校の模擬授業の課題とされた「ごんぎつね」のように、「小学校国語教科書には、動物が主人公の物語や、動物に関して語った説明文が異様に多い。」「文字通り「動物化」することを求める小学校国語教科書のメッセージは、受動的で与えられた環境に対して従順な「人格」を作り上げることに一役買っている可能性が高いのだ。」

『大人のための国語教科書—あの名作の“アブない”読み方！』小森陽一（角川oneテーマ21新書）

小森陽一（1953年～）は東京大学名誉教授。専攻は日本近代文学。

現役の高校国語教師が、大学院で「教科書と指導書を対象として、文学作品の解釈枠組について研究」したことがきっかけで生まれた本。著者も大学院生時代に高校で国語を教えたことがある。著者の『『こころ』論』（高校教科書での扱いへの批判の文章）は、すでにいくつかの教師用指導書にも掲載されている。森鷗外『舞姫』、夏目漱石『こころ』、芥川龍之介『羅生門』、宮沢賢治「永訣の朝」、中島敦『山月記』が取り上げられている。

『教科書で出会った名句・名歌300』石原千秋監修（新潮文庫）

『教科書で出会った名詩100』石原千秋監修（新潮文庫）

『教科書でおぼえた名詩』（文春文庫）

『教科書の文学を読みなおす』島内景二（ちくまプリマー新書）

島内景二（1955年～）は電気通信大学名誉教授。専門は古典文学。

漱石『それから』『坊っちゃん』『草枕』、鷗外『舞姫』『山椒大夫』。以上の5作品を現代的視点と日本の古典の3層構造で解説する。

『国語教科書の闇』川島幸希（新潮新書）

川島幸希（1960年～）は学校法人秀明学園理事長・秀明大学学長。

高校生の減少が教科書会社の撤退につながっている。高校国語教科書発行の出版社は、1994年15社→2003年11社→2013年9社と淘汰が進む。「羅生門」「こころ」「舞姫」「山月記」の定番小説四天王が確立していく。

第10章 教育

「沖縄の教育」は6-6に、「国語教育」は9-7に、「国語教科書」は9-8に、「英語教育」は8-2にまとめた。

10-1 全般

『子どもの声を社会へー子どもオンブズの挑戦』桜井智恵子（岩波新書）

桜井智恵子（1958年～）は関西学院大学教授。川西市子どもの人権オンブズパーソン代表だった。専攻は教育学・思想史。

教員志望者に一番読んでほしい本です。沖縄教員塾からの合格者には1冊ずつプレゼントとします。

国連・子どもの権利委員会は、2010年の日本の第3回定期報告書の審査後の総括所見で以下のように勧告した。

「・高度に競争的な学校環境が、就学年齢にある児童の間で、いじめ、精神障害、不登校、中途退学、自殺を助長している可能性があることを懸念する。

・委員会は、締結国が、質の高い教育と児童を中心に考えた能力の育成を組み合わせること、及び極端に競争的な環境による悪影響を回避することを目的とし、学校及び教育制度を見直すことを勧告する。

・委員会はまた、締結国が同級生の間でのいじめと闘う努力を強化し、及びそのような措置の策定に児童の視点を反映させるよう勧告する。」

『教育は変えられる』山口裕也（講談社現代新書）

山口裕也（1979年～）は杉並区教育委員会教育長付主任研究員だった。

熊本市教育委員の苦野一徳「これからの教育が向かうべきビジョンとロードマップ、そのすべてがこの本には描かれている」。

『追いついた近代 消えた近代—戦後日本の自己像と教育』荻谷剛彦（岩波書店）

荻谷剛彦（1955年～）はオックスフォード大学教授。教育社会学。

「「予測できない未来」に対応するには、「受け身」ではなく、社会の変化に「主体的に向き合って関わり合う資質＝主体性の育成が必要である」という「2018年の指導要領の改訂」を、エセ演繹型思考として正面から批判する。

自分流に言えば、生きている人間に「生きる力」を育むのは、生きている木々や雑草に「生きる力」を育むくらいに滑稽なことだ。故事成語の「助長」そのものである。2022～23年、2年連続で500人以上の児童生徒を自死に追い込んでしまった。

『教育改革の幻想』荻谷剛彦（ちくま新書）

『教育と平等—大衆教育社会はいかに生成したか』荻谷剛彦（中公新書）

秋田や福井といった地方県の学力が高いのは、戦後民主主義のもとでの平等化の結果である。1972年に日本になった沖縄は、憲法と戦後民主主義の恩恵を受けていない。

『コロナ後の教育へーオックスフォードからの提唱』荻谷剛彦（中公新書ラクレ）

『教育論の新常識—格差・学力・政策・未来』松岡亮二編著（中公新書ラクレ）

編著者の松岡亮二は龍谷大学准教授。

「教育政策は「凡庸な思いつき」でできている」

松岡亮二「日本の高校教育は「生まれ」によって生徒を序列化された各学校に隔離し、異なる教育空間の中で卒業生を見本として進路を自発的に選ばせる社会化装置なのだ。」

「わたしたちは、格差を縮小できない義務教育制度と高校受験制度によって、低SES家庭出身である生徒を「底辺校」に隔離しているのである。」 SES……社会経済的地位 (Socioeconomic status)

中村高康「知識偏重」を嫌う改革論者ほど「知識」を過度に軽視し、「知識」なしで平気で自説を主張する」
児見川孝一郎「Society5.0型の教育においては、子どもたちが自律的に学習に取り組み、自らの学びをデザインすることが理想とされるが、そこでは「自律性」や「自由」の美名と引き換えに、実際には学びは究極的なかたちで「自己責任化」される。「格差」は、これまで以上に拡大する。」

末富芳「教育の現場にいる、児童生徒・受験生・教職員や保護者の意見や不安を軽視したまま行われるいかなる改革も、よい効果にむすびつくことはない。」

中室牧子「少子化が進む日本では、就学期の子どもがいる世帯が全体の2割にとどまる。」

松岡亮二「文科省が何をしてきたかという、理念に基づいて、都道府県・市区町村の教育委員会に対して、模範的な実践や政策を「通知」という「指導・助言」を主に行ってきました。「規範的な」「指導・助言」を「通知」したのだから、後は現場が責任を負う、という「やりっ放し教育行政」です。この「通知行政」の一環として、教育長・校長のリーダーシップや教師の優れた実践などが「好事例」としてまとめられ、模範的な実践・政策を他の学校に広げていく「横展開」が試みられてきました。

このような教育行政のやり方は、「どんな社会経済的文脈であれば実践・政策が狙い通りに成立するのか」といった視点を抜きにしている以上、効果を期待することはできません。医師が診断をせずに、「適切な」栄養、運動、睡眠が大切と原則論を述べているようなものです。」

「小学校で約2万、中学校で1万と少し、高校で5000校近くあります。同様の数の校長がいて、小学校から高校の年齢層に対する教師は約100万人います。……教育委員会の数だけでも約1800あるのです。「通知」に効果がなくても、よい実践・政策の事例を見つけることはできるわけです。……文科省の「通知」がなくても、うまくできていた人・組織は存在するはずです。」

『これからの日本、これからの教育』前川喜平・寺脇研（ちくま新書）

文科省事務次官だった前川喜平（1955年～）と「ミスター文部省」と言われた寺脇研（1952年～）の対談。

『前川喜平 教育のなかのマイノリティを語る』

—高校中退・夜間中学・外国につながる子ども・LGBT・沖縄の歴史教育』前川喜平（明石書店）

5人の対談者は青砥恭（高校中退）・新城俊昭（沖縄の歴史教育）・関本保孝（夜間中学）・善元幸夫（外国につながる子ども）・金井景子（LGBT）。

善元幸夫「私も、現役教員のあいだに3回学習指導要領が変わりました。今は大学で教えていて、今回が4回目です。今回の改訂は最悪だと思います。評価から授業をつくる発想なんてありえません。……」

前川喜平「とにかく先生はいつも正しいみたい。そこを生徒は見ています。あの先生は口先だけだとか。私は、先生も肩肘張らずにもう少し階段を降りてきたほうがいいと思っています。学校にはどうしても教師と生徒のあいだの権力関係があって、それが一番酷い形で表れるのが指導死といわれるようなシチュエーションです。教員の指導によって子どもが自殺する。昔の軍隊みたいな話です。教師のほうが自分は常に正しいんだと思いこんでいるところがある。ちょっとまちがえても、そんなことは、おくびにも出さずに自分は正しいという建前を貫こうとする。そこが問題じゃないかと思う。先生もまちがえることだってある。認識が少し甘かったとか、意識が低かったとか、そういうことを有り体にいつてかまわないという学校文化にしていけないといけないんじゃないかと思っています。」

『誰のための「教育再生」か』藤田英典編（岩波新書）

著者は6名。藤田英典（教育社会学専攻・国際基督教大学教授）、尾木直樹（教育評論家・法政大学教授）、喜多明人（教育法学・子ども支援学、早稲田大学教授）、佐藤学（教育学・東京大学教授）、中川明（弁護士・明治学院大学教授）、西原博史（憲法学・早稲田大学教授）。肩書は出版当時。

『義務教育を問いなおす』藤田英典（ちくま新書）

藤田英典（1944年～）は東京大学名誉教授。共栄大学名誉教授。日本教育学会会長だった。専攻は教育社会学。

教育の専門家としての、日本の教育に対する危機感が、社会学者としての実証性に基づいて論じられている。改革推進論者は、20年以上「教育の危機」を叫び、20年以上「教育改革」を進めている。〈時代の趨勢〉や〈世間の意向〉を誘導し、つくりあげている。

『日本の公教育—学力・コスト・民主主義』中澤渉（中公新書）

中澤渉（1973年～）は立教大学教授。専攻は教育社会学。

『新版 学校を改革する—学びの共同体の構想と実践』佐藤学（岩波ブックレット）

佐藤学（1951年～）は東京大学名誉教授。日本教育学会会長だった。国内4000校、海外700校以上の学校を訪問した。国頭村の公開研で4回講演を拝聴した。初版は7か国語で翻訳出版されている。

「学びの共同体の学校のヴィジョンを定義しておこう。学びの共同体の学校は、子どもたちが学び育ち合う学校であり、教師たちも教育の専門家として学び育ち合う学校であり、さらに保護者や市民も学校の改革に協力し参加して学び育ち合う学校である。学びの共同体の学校は、このヴィジョンによって、学校の公共的使命である「一人残らず子どもの学ぶ権利を実現し、その学びの質を高めること」と「民主主義の社会を準備すること」を実現している」。

新版での最重要の加筆部分は次のとおり。

「PISA調査委員会の調査（2015年）とマッキンゼーの調査（2020年）は、教室におけるコンピュータ活用の時間が長ければ長いほど学力が低下し、子ども一人一台端末で使ったとき、そのダメージが最も大きいと報告している。コンピュータは「教える道具」として活用するのではなく、「学びの道具」（協同的な探究の道具）として活用したとき、効果を発揮することが知られている。コンピュータを文房具の一つとして活用する方法が探られなければならない。」

『第四次産業革命と教育の未来—ポストコロナ時代のICT教育』佐藤学（岩波ブックレット）

『学び合う教室・育ち合う学校—学びの共同体の改革』佐藤学（小学館）

『子どもと教室の事実から学ぶ—「学びの共同体」の学校改革と省察』佐藤雅彰・齊藤英介（ぎょうせい）

『みらいの教育—学校現場をブラックからワクワクへ変える』内田良・苫野一徳（武久出版）

『公教育をイチから考えよう』リヒテルズ直子×苫野一徳（日本評論社）

『教育の力』苫野一徳（講談社現代新書）

『学校』をつくり直す』苫野一徳（河出新書）

苫野一徳（1980年～）は熊本大学准教授。教育哲学者。熊本市教育委員（2020～28年）。

『「みんなの学校」が教えてくれたこと—学び合いと育ち合いを見届けた3290日』木村泰子（小学館）

木村泰子（1948年～）は大阪市立大空小学校校長だった。

映画「みんなの学校」を見よう。日本の教育にも、まだ希望がある。

『「みんなの学校」から「みんなの社会」へ』尾木直樹・木村泰子（岩波ブックレット）

『校則なくした中学校 たったひとつの校長ルール—定期テストも制服も、いじめも不登校もない！

笑顔あふれる学び舎はこうしてつくられた』西郷孝彦（小学館）

西郷孝彦（1954年～）は世田谷区立桜丘中学校校長だった。

映画「みんなの学校」を観た著者。「どんな子どもも楽しく学べる公立中学校があつたら、どんなにいいだろう。そうだ、ないならつくってしまえばいい。よし、その中学校は任せろ！ 大阪と東京、ちょっと離れているけれど、桜丘中学校を絶対に大空小学校のような中学校にしてみせる。——私はそう誓ったのでした。」

『学校の「当たり前」をやめた。—生徒も教師も変わる！ 公立名門中学校長の改革』工藤勇一（時事通信社）

工藤勇一（1960年～）は千代田区立麹町中学校校長だった。

「服装頭髪指導を行わない」「宿題を出さない」「中間・期末テストの全廃」「固定担任制の廃止」。

『教育入門』堀尾輝久（岩波新書）

堀尾輝久（1933年～）は東京大学名誉教授。専攻は教育学・教育思想史。

「子どもの心を開かせる秘訣というようなものがあるとは思いますが、少なくともこれだけは知っておいた方がいいと思いますのは、子どもの心の扉は外側にはハンドルはない、内側にしかない。だから外側からいくらこじあげようとしても、それは開かない。子ども自身がその扉を開くのを待つ以外ないのだということです。」

『教育という病—子どもと先生を苦しめる「教育リスク」』内田良（光文社新書）

内田良（1976年～）は名古屋大学大学院教授。専攻は教育社会学。

巨大組体操，2分の1成人式，運動部活動における体罰と事故，部活動顧問の加重負担，柔道事故を取り上げる。

『日本の教育を考える』宇沢弘文（岩波新書）

『反教育論—猿の思考から超猿の思考』泉谷閑示（講談社現代新書）

泉谷閑示（1962年～）は精神科医。専門は精神療法。音楽家・評論家。

『子どもと学校』河合隼雄（岩波新書）

『子どもの社会力』門脇厚司（岩波新書）

『街場の教育論』内田樹（ミシマ社）

『授業の復権』森口朗（新潮新書）

『日教組』森口朗（新潮新書）

『学校するからだ』矢野利裕（晶文社）

矢野利裕（1983年～）は東京都の私立中高一貫校の国語教師。文芸評論家・批評家・ライター，DJ，イラストレーター。

『正しいパンツのたたみ方—新しい家庭科勉強法』南野忠晴（岩波ジュニア新書）

南野忠晴（1958年～）は高校英語教師として13年勤めたあとに，数少ない男性の家庭科教師になった。

新書大賞2012第8位。家庭科志望者は必読。

『シアワセなお金の使い方—新しい家庭科勉強法2』南野忠晴（岩波ジュニア新書）

『真正の「共生体育」をつくる』梅澤秋久・苫野一徳編著（大修館書店）

『ルポ 保健室—子どもの貧困・虐待・性のリアル』秋山千佳（朝日新書）

養護教諭志望者は必読。

『みんなでつくろう学校図書館』成田康子（岩波ジュニア新書）

成田康子（1955年～）は高校の学校司書として29年勤めた。

スクールカウンセラーではなく，学校図書館司書を配置して，保健室登校と同様に図書室登校を行うとよいのだが，絶対に実施されない教育政策だろう。学校図書館の貧困化＝愚民化政策である。学習指導要領解説には「不登校児童が自らの意思で登校した場合は，温かい雰囲気迎え入れられるよう配慮するとともに，保健室，相談室や学校図書館等も活用しつつ，安心して学校生活を送ることができるような支援を行うことが重要である。」と書かれている。

『ほんとうにいいの？ デジタル教科書』新井紀子（岩波ブックレット）

『現代思想2014年4月号—ブラック化する教育』（青土社）

佐藤学「例えば教師が教科書を選べないなんていうのは中国と日本くらいしかありません。学校の財政・予算・人事に関してきちんと意見が言えるかどうか，校長選出にどのように教師の意見が反映されるか，授業時間

数をどのように決定できるか、といったような項目で見えていくと、日本はことごとく最低です。OECD生徒の学習到達度調査（PISA）の発表のときに、この調査結果が付随的に翻訳されていない。」

『アクティブラーニングとは何か』渡部淳（岩波新書）

『教育激変—2020年、大学入試と学習指導要領大改革のゆくえ』池上彰・佐藤優（中公新書ラクレ）

『教養主義の没落—変わりゆくエリート学生文化』竹内洋（中公新書）

『女子校育ち』辛酸なめ子（ちくまプリマー新書）

新書大賞2012第5位。

『友だち幻想—人と人の〈つながり〉を考える』菅野仁（ちくまプリマー新書）

2022年度実施教員選考試験・小学校国語で出題された。

『窓ぎわのトットちゃん』黒柳徹子（講談社文庫）

黒柳徹子（1933年～）は女優・タレント。累計800万部の戦後最大のベストセラー。35か国語に翻訳され、中国では日本を超える1000万部、世界で2370万部のベストセラー。「問題行動」により公立小学校を1年生で「退学」させられた黒柳徹子が学んだトモエ学園のお話である。

トモエ学園の前身は、手塚岸衛が創設した自由ヶ丘学園である。大正新教育運動における八大教育主張の講演者の1人で「自由教育論」を説いたのが手塚である。手塚岸衛を解答させる設問が2022年度実施教員選考試験で出題された。

10-2 世界の教育

『こんなに違う！ 世界の国語教科書』二宮皓監修（メディアファクトリー新書）

二宮皓（1945年～）は広島大学名誉教授。比較教育学・国際教育学の第一人者。

11か国が取り上げられている。

『こんなに厳しい！ 世界の校則』二宮皓監修（メディアファクトリー新書）

19か国が取り上げられている。

「オランダでは、初等・中等学校で公立は3割にすぎず、あとの7割は私立。親が、自分の子どもに合った学校、価値観や宗教観の合致した学校を自由に選択できるわけだ。しかも、義務教育（4～18歳）期間の授業料は共に無料である。」モンテッソーリ校160校、ドルトンプラン校260校、フレイネ校16校、シュタイナー校95校、イエナプラン校220校がある。

『こんなに違う！ 世界の性教育』橋本紀子監修（メディアファクトリー新書）

『自由と規律—イギリスの学校生活』池田潔（岩波新書）

池田潔（1903～90年）は慶應大学名誉教授。専攻は英文学・英語学。リース・スクール卒業。

20世紀はじめのイギリスの私立学校・寄宿学校での学校生活を知ることができる。

『ミュンヘンの小学生—娘が学んだシュタイナー学校』子安美知子（中公新書）

子安美知子（1933～2017年）は早稲田大学名誉教授。専攻はドイツ文学。

西ドイツ留学時に娘が通ったシュタイナー学校を日本に紹介した本である。

10-3 教育史

『教育思想史』今井康雄編（有斐閣アルマ）

『人物で見る日本の教育』沖田行司編著（ミネルヴァ書房）

『人物で見る日本の教育 [第2版]』沖田行司編著（ミネルヴァ書房）

編著者の沖田行司（1948年～）は同志社大学名誉教授。びわこ学院大学学長。専門は教育史、教育思想史。

以下は人物の一部。中江藤樹、伊藤仁斎、荻生徂徠、貝原益軒、石田梅岩、本居宣長、緒方洪庵、吉田松陰、福沢諭吉、新島襄、西村茂樹、森有礼、津田梅子、元田永孚、沢柳政太郎、及川平治、林羅山、広瀬淡窓、羽仁もと子。

『戦後教科書運動史』 依義文（平凡社新書）

依義文（1941～2021年）は教科書出版会社に勤務し、教科書運動に「人生を捧げた」。

始まりつつある教科書の国定化を阻止し、児童生徒とその社会のための教科書にしなければならない。

「会期末の56年6月2日、参議院に警官500人を導入した強行採決によって「地教行法」は可決・成立し、戦後の教育民主化の一つの柱であった公選制の教育委員会法は廃止された。」

「57年以降の教育反動化の最大の焦点は、教職員の勤務評定（勤評）をめぐるたたかいになった。」「勤評は、校長が一方的に教職員の勤務成績を評定し、その結果を昇給に結びつけることによって、教員を校長に無条件に服従させ、平和・民主主義の教育を行う自由を教員から奪い去ろうとするものであった。」「勤評闘争に対して当局は激しい弾圧を加え、多くの教員が逮捕・起訴され、免職から戒告まで行政処分を受けた者は3000名以上におよび、各地で勤評裁判がはじまった。」

「文部省は、61年10月26日、中学校2、3年生を対象に学テを強行実施した。その結果、生徒によい点をとらせようとする準備教育が全国の学校で横行し、追いつめられた教員の中には生徒にカンニングさせる者があらわれるなど、重大な弊害が生じ、全国の実教現場に多くの混乱をひきおこした。」「この学テ闘争に対しても当局は激しい弾圧を加え、……61年には逮捕者61名、起訴された者15名、免職から戒告まで行政処分を受けた者約2000名におよび……学力テスト自体は1966年に廃止された。」

『教育勅語と御真影—近代天皇制と教育』 小野雅章（講談社現代新書）

小野雅章（1959年～）は日本大学教授。専門は近代日本教育史。

「神格化した天皇の肖像写真である御真影は、人命よりはるかに重んじられた。「紙切れ一枚」を神として「崇め奉り」、生命を差し出すことを厭わないように求める、これが戦時下の天皇制公教育の実態であった。」

『文明としての教育』 山崎正和（新潮新書）

山崎正和（1934～2020年）は大阪大学名誉教授。劇作家・評論家。中央教育審議会会長（2007～09年）。

2010年度実教員選考試験・専門国語で出題された。

「教育は人間が人間にたいしておこなう営みであって、そこで教え教えられる人間の熱い積極性が大切だからです。報酬の分だけ働くとか、対価の分だけ商品を渡すという考え方ではなくて、そこに何らかの精神的迫力が加わらなければ人は人を教えられないのです」。

『江戸の教育力』 高橋敏（ちくま新書）

高橋敏（1940年～）は国立歴史民俗博物館名誉教授。総合研究大学院大学名誉教授。専攻は近世教育・社会史、アウトロー研究。

「著者の勝手な思い入れであるが、教育の今、そして未来を憂える多くの人々に読まれることを願っている。……決して即効薬ではないが、厳しい教育現場で苦闘をつづける教師の皆さんに元気をつける漢方薬ぐらいになればと念じている」。

『日本の教育改革—産業化社会を育てた130年』 尾崎ムゲン（中公新書）

尾崎ムゲン（1942～2002年）の専攻は教育学・日本教育史。

1999年発行。近代以降の日本教育史をしっかりと学ぶのに、とてもよい。

『日本教育小史—近・現代』 山住正己（岩波新書）

山住正己（1931～2003年）は東京都立大学名誉教授。教育学者。

1986年までが対象となっている。「教育への国家統制が強められるときは、常に教育内容と教師が同時に統

制の対象となってきたのである」。1970年家永教科書裁判第二次訴訟の地裁での原告勝訴判決で、その後10年間は教科書検定が緩やかになった。当時、教科書訴訟支援全国連絡会会員の比率が全国一だったのは八重山である。教科書問題において、八重山は全国を動かす位置を占めているのである。

『学校の戦後史』木村元（岩波新書）

木村元（1958年～）は一橋大学名誉教授。専攻は教育学・教育史。

「近代学校のもっとも基本的な性格は、「教える」という文化伝達を軸にして、生活の場から距離をとって構成された特別の時空間に、対象となるすべての子どもを一定の期間収容するところにある。近代以前は、共同体社会（ムラ）の統治や職業技能の伝承など、新しい世代が先行の世代の文化を「学ぶ」ことで結果として人づくりが行われていた。」「教育」ということばは、学校の普及にともなって定着していったのである。」

『ある小学校校長の回想』金沢嘉市（岩波新書）

金沢嘉市（1908～86年）は小学校教師・校長だった。

1967年発行。

「教育委員会の任命制，勤評，学テ，教科書の統制（広域採択制），検定の強化等のなりゆきを冷静に反省して見ると，教育の中央集権的統制が見事な計画のもとに進められてきたことに気づくにちがいない。」「お上のいうことに順応していく教育と，教師を求めているのが今日の文教政策の大筋の流れであると見てよい。」

『民主主義—〈一九四八—五三〉中学・高校社会科教科書エッセンス復刻版』

文部省著／西田亮介編（幻冬舎新書）

著作者は文部省（当時）。教科書そのものの抜粋である。刊行当時，沖縄は日本でなかった。

西田亮介（1983年～）は日本大学教授。専門は公共政策，情報社会論。

「個人主義はけっして利己主義ではない

人間を個人として尊重する立場は，個人主義である。だから，民主主義の根本精神は個人主義に立脚する。軍国主義の時代の日本の政治家や思想家たちは，民主主義を圧迫した。したがって，その根本にある個人主義を，いやしむべき利己主義であるとののしった。しかし，これほど大きなまちがいはない。個人主義は，個人こそあらゆる社会活動の単位であり，したがって，個人の完成こそいっさいの社会進歩の基礎であることを認める立場である。」

「内閣は国会の下に立つといわなければならないような地位にある。いいかえれば，立法部は行政部よりも優越した地位を占めている。もしもこの関係が逆になって，行政権が立法権よりも強くなる場合には，その政治組織はそれだけ独裁主義に近づいたことになるのである。」現在の日本の政治を正確に予測している。

『日本を教育した人々』齋藤孝（ちくま新書）

『大学の誕生（上）—帝国大学の時代』天野郁夫（中公新書）

『大学の誕生（下）—大学への挑戦』天野郁夫（中公新書）

天野郁夫（1936年～）は東京大学名誉教授。専攻は教育社会学・高等教育論。

英語などの外国語で教授することから始まった日本の大学にとって，日本語で教授することが夢だった。せっかく日本語で教授できるようになったのに，再び英語で教授しようとしているからパラドキシカルである。

『文系と理系はなぜ分かれたのか』隠岐さや香（星海社新書）

隠岐さや香（1975年～）は東京大学教授。科学史家。

2019新書大賞第2位。

「世界で初めて総合大学に工学部を開設したのは日本の帝国大学（現・東京大学）でした。1886年のことです。」「農学を専門とするカレッジや学部などの専門教育は，実際に農地開発が必要とされていたアメリカで早く発展したのです。」

『〈お受験〉の歴史学—選択される私立小学校 選抜される親と子』小針誠（講談社選書メチエ）

『給食の歴史』藤原辰史（岩波新書）

藤原辰史（1976年～）は京都大学准教授。専攻は農業思想史・農業技術史。
おもしろい。

10-4 国家による教育統制

『アクティブラーニング—学校教育の理想と現実』小針誠（講談社現代新書）

小針誠（1973年～）は青山学院大学教授。専攻は教育社会学・教育社会史。
アクティブラーニングの5つの幻想を批判的に検証し、その危険性を指摘する。

『教育は何を評価してきたのか』本田由紀（岩波新書）

本田由紀（1964年～）は東京大学大学院教授。専攻は教育社会学。
なぜ日本社会はこんなに息苦しいのか。「能力」「資質」「態度」という言葉に、社会と人々ががんじがらめになっているからだ。

『「^{サバイバル}生存競争」教育への反抗』神代健彦（集英社新書）

神代健彦（1981年～）は京都教育大学准教授。専門は教育学・教育史、道德教育論。

『暴走する能力主義—教育と現代社会の病理』中村高康（ちくま新書）

中村高康（1967年～）は東京大学教授。専門は教育社会学。

「実のところ私は、新しい時代にコミュニケーション能力や協調性、問題解決能力などといった「新しい能力」といわれるものがこれまで以上に必要とされている、とはあまり思っていない。……それらはこれまでも求められていたし、これからも求められるであろう陳腐な能力であって、新しい時代になったからはじめて必要ないし重要になってきた能力などでは決してない、ということなのである。」

「いま人々が渴望しているのは、「新しい能力を求めなければならない」という議論それ自体である。」

「流行の「非認知能力」に飛びつく前に、少し冷静に考えを巡らしてみる必要があるのだ。……非認知能力とされる健康や根気強さ、注意深さ、意欲、自信といったものが将来に影響するという話は、ヘックマンの研究がなければ我々はまったく知りえなかったことなのだろうか、と。おそらくほとんどの人にとっては、そんなことは言われなくてもわかっている、と言いたくなるような話なのではないか。」

『教科書が危ない—「心のノート」と公民・歴史』入江曜子（岩波新書）

『教育と国家』高橋哲哉（講談社現代新書）

高橋哲哉（1956年～）は東京大学名誉教授。専攻は哲学。

「文部科学省が発行した全国一律の教材（事実上の国定教科書）によってすべての小・中学生に9年間、「心の教育」を施すことは、国家の推奨する道徳を子どもたちの心の中に9年間語り続けることになります。これは恐いことです。内心の自由に対する権力の介入と言ってもいいし、法的に言えば、子どもの権利条約、日本国憲法、現行の教育基本法などに違反している疑いが強い。仮に内容がよいものであっても、これはよくないと私は思うのです。」

『教室と愛国—誰が教室を窒息させるのか』齊加尚代・毎日放送映像取材版（岩波書店）

大阪の毎日放送のドキュメンタリー番組の制作過程での取材をまとめたものである。

東京23区すべてで採用されていた老舗の日本書籍の中学校歴史教科書は、2001年検定の際にこれまで通り「朝鮮などアジアの各地で若い女性が強制的に集められ、日本兵の慰安婦として戦場に集められました。」と記述した。検定は通過。ただし他社の多くが、脅迫めいた手紙などによって慰安婦問題の記述を避ける中で、日本書籍は目立つことになった。23区のうち21区の採用がなくなった。そして2004年に倒産。

番組宛てに届いた教育現場の現状を嘆くメールから。「(新人の府立高校国語教師について) この新人は、『僕

は本を読まないんです』とまことに明るく述べ、実際全く読まず、実に貧弱な世界知識でもって授業をしている。彼があまりつまらぬ授業をしているので、『教科書以外で、何か自分の好きな教材、教えた教材を使って授業する』ように提案したところ、『やりたいこと、ないんです。』と言う。おもしろさを教えた小説も、詩も、もちろん古典もないという。」「今年赴任してきた校長は、年度当初の『対教師個人懇談』で『マネジメント』『人材』『数値目標』『学校経営』というような商売の言葉を多用したが、私が『校長の教育ビジョン、グランドデザインを聞かせて欲しい』と言うと、数秒考えた挙句『ない』と言った。」

『検証 大阪の教育改革—いま、何が起きているのか』志水宏吉（岩波ブックレット）

『ルポ 大阪の教育改革とは何だったのか』永尾俊彦（岩波ブックレット）

永尾俊彦（1957年～）はルポライター。毎日新聞記者だった。

冒頭に大阪市立木川南小学校・久保校長の大阪市長への「提言」全文が引用されている。

以下の朝日新聞のサイトでも読める。

<https://www.asahi.com/articles/ASP5N6KWMP5NPTIL00R.html>

久保校長の教師2校目「1年生を受け持った。その中に気に入らないとすぐ暴力をふるうタカヒデがいた。父親はタカヒデが3歳くらいの時に亡くなっているが、生前は母親を殴ったりしていたようだ。引きこもりの高校生の兄と3人で暮らしていた。

毎日の帰りの会では、頭から給食のジャムをかけられた、粘土で作ったタコ焼きを口に押し込まれたなど被害を訴える声が続く。ただ、タカヒデには肢体不自由の子の車イスを押してやるような優しさもあった。ある日の帰りの会でも、タカヒデの被害を訴える声があがった。クラスは「謝れ、謝れ」という雰囲気になっていた。タカヒデは泣き出した。

「どうせみんな僕のことが嫌いなんや。僕なんかおらんほうがええんや！」

その時、メイが「そんなこと言ったらアカン。タカヒデ君はタカヒデ君なんだから」と毅然と言った。メイは母親が日本人、父親が米国人だ。「私ね、電車とかに乗るといつもジロジロ見られるの。『ガイジン、ガイジン』って言われることもある。そんな時、ママが『メイちゃんはメイちゃんよ』ってギュッってしてくれるの。だからいないほうがいいなんて言っちゃダメ」

子どもたちは「ハッ」としたようだった。クラスの雰囲気が変わったのを久保さんは感じた。

「メイの言葉から、人間の尊厳みたいなものが伝わってきました」

「生き合う」とはこういうことではないか。教師は、採用試験に合格したから教師になるのではない。子どもたちに教えられながら教師になっていくのだ。

そして、このようなそれ自体は些細な出来事でも、人生や社会の根本に通じる問題をどれだけ拾えて、子どもたちに返せるかが教師の力量ではないかと考えるようになる。」

「『個別最適化』は集団から個を切り離すので、個々人の学習格差を前提とした「内容の差別化」が互いに見えず、容認され、「ともに学び、ともに育つ」教育とは逆行する」。「個別最適化は『孤立』最適化です」。

『教育現場の光と闇—学校も所詮【白い巨塔】』小林宜洋（幻冬舎）

『武道は教育でありうるか』松原隆一郎（イースト新書）

松原隆一郎（1956年～）は東京大学名誉教授。専攻は社会経済学・相関社会科学。柔道三段、空道五段。

『みんなの道徳解体新書』パオロ・マッツァリーノ（ちくまプリマー新書）

『新しい道徳—「いいことをすると気持ちがいい」のはなぜか』北野武（幻冬舎）

『オカルト化する日本の教育—江戸しぐさと親学にひそむナショナリズム』原田実（ちくま新書）

原田実（1961年～）は歴史研究家。

「江戸しぐさ」は、文部科学省の『私たちの道徳 小学校5・6年生用』に掲載されている。しかし、これは歴史のねつ造である。「江戸しぐさ」と「親学」の教育現場での普及に関して、もっとも影響力がある団体は

TOSSである。……TOSSは自民党の政治家たちとの間に太いパイプがあり、その全国集会には、安倍晋三や下村博文らをはじめとする有力議員から、毎回応援のメッセージが送られる。」

『学校に入り込むニセ科学』左巻健男（平凡社新書）

左巻健男（1949年～）の専門は理科教育。東京大学教育学部附属中学校・高等学校教諭、京都工芸繊維大学教授、同志社女子大学教授、法政大学教授だった。

「私が若いころは、教員は社会の中である程度の知的レベルを持っていて、平均的に本をよく読む層だった。」「そして今、教員の大量採用時代が続いている。採用試験の倍率が低い。教員になった人はかつてのように本を読まない人も多い。……きちんとした本をいろいろ読んで科学リテラシーを身につけること、ニセ科学を見抜くセンスを身につけなければ、現代はかつて以上にニセ科学を信じてしまう度合いが高くなる危機的な時代である。そういった警鐘を鳴らす目的で、本書を執筆した。」

『ルポ 良心と義務―「日の丸・君が代」に抗う人びと』田中伸尚（岩波新書）

『性教育裁判―七生養護学校事件が残したもの』児玉勇二（岩波ブックレット）

児玉勇二（1943年～）は七生養護学校事件の原告側弁護団長。

政治による教育への介入・破壊のすさまじさに戦慄する。障害児は性犯罪の被害者にも加害者になりやすい傾向がある。先進的な性教育を進めてきた「養護学校」で2003年7月に起きた事件を是非知ってほしい。

「命令に服している非主体的な教師に主体的人間を育てる真の教育を期待することはできず、そこにあるのは非主体的人間を造成する「教化」にほかなりません」。

『学校から言論の自由を考える』土肥信雄・藤田英典・尾木直樹・西原博史・石坂啓（岩波ブックレット）

土肥信雄（1948年～）は東京都立三鷹高校長だった。2006年、都教委の「挙手や採決などの方法で教職員の意思を確認してはならない」という通知に現職校長として反対の声をあげた。生徒全員の名前を覚えているすごい校長先生です。

藤田英典「この10数年の教育政策・改革には、東京の「非常識」（すなわち歪んだ政策・施策）を全国各地に広める傾向が目立つ」。

『福島から問う教育と命』中村晋・大森直樹（岩波ブックレット）

『隠れ教育費―公立小中学校でかかるお金を徹底検証』柳澤靖明・福嶋尚子（太郎次郎社エディタス）

柳澤靖明（1982年～）は川口市立小谷場中学校事務主査。埼玉県の小学校（7年）中学校（13年）に事務職員として勤務。

福嶋尚子（1981年～）は千葉工業大学准教授。専門は教育行政学、教育法学。

「隠れ教育費」研究室 https://kakure-edu-cost-lab.com/hidden_education_expenses/

日本国憲法第26条第2項「すべて国民は、法律の定めるところにより、その保護する子女に普通教育を受けさせる義務を負ふ。義務教育は、これを無償とする。」

無償となっていない憲法違反の「実態」「歴史」「理念」「対策」が示されている。

『PTAという国家装置』岩竹美加子（青弓社）

岩竹美加子（1955年～）はヘルシンキ大学非常勤教授。

『公立高校とPTA―娘が通った保護者として考えたこと』近藤邦明（不知火書房）

『PTA不要論』黒川祥子（新潮新書）

『ルポ 大学崩壊』田中圭太郎（ちくま新書）

田中圭太郎（1973年～）はジャーナリスト、ライター。

教職員の非正規化が広がり、日本の大学が壊れつつあることは知っていた。しかし、ここまで壊れているとは。

「学長の独裁化が顕著な筑波大学や大分大学などが、学内の教員の反対の声を無視して軍事研究に応募し、

採択されている。」

国立大学に「多くの文科省職員が現役のまま出向している」「驚くのはその人数だ。2017年1月1日の時点で、全国83の大学の幹部ポストに、合計241人が出向していた。この数は、文科省の職員全体の1割以上を占める。」

「これまで進められてきた法改正によって、教育や研究、学生生活の面で、学生にどんなメリットがあったというのだろうか。」

『デジタル教育という幻想—GIGAスクール構想の過ち』物江潤（平凡社新書）

物江潤（1985年～）は作家、塾経営者。

オランダは2024年1月から学校内におけるタブレット端末・携帯電話・スマートウォッチの使用を禁止した。ゲーム依存症など、一人一台端末の児童生徒への悪影響が明らかになっている。水俣病の原因が工場廃水の有機水銀であることが明らかになっても、チッソと日本政府は、有機水銀を流し続けて、水俣病の患者を増やし続けた。公害の同じ過ちが繰り返されている。

10-5 教師・教育委員会・文部科学省

『教師が育つ条件』今津孝次郎（岩波新書）

今津孝次郎（1946年～）は名古屋大学名誉教授。愛知東邦大学名誉教授。専攻は教育社会学・学校臨床社会学・発達社会学。名古屋大学教育学部附属中・高等学校校長だった。

「教職課程の期間を含む大学または短大の教育は4年ないし2年であり、教育実習にしても2～4週間と短いに対して、実際に就く教職期間は一般に30年以上に及ぶから、時間数からしても現職経験を通じて得るものが、大学または短大での教育とは比較にならないのは当然である。」選考試験の合格はスタートラインに立ったということです。

『教師花伝書—専門家として成長するために』佐藤学（小学館）

「私は、いつも教師たちに「職人資質」として次の3つの規範を求めてきた。その第一は、子どもは一人ひとりの尊厳を大切にすることである。第二は、教材の可能性と発展性を大切にすることである。そして、第三は教師としての自らの哲学を大切にすることである。

授業の巧拙や授業の結果の成否はどうでもよい事柄である。どんなに困難であろうとも、子ども一人ひとりの尊厳を尊重し、教材の可能性と発展性を尊重し、教師自らの哲学を大切にしている教師こそ、教師として信頼にたる「職人氣質」を会得した教師だからである。」

『専門家として教師を育てる—教師教育改革のグランドデザイン』佐藤学（岩波書店）

『教師のブラック残業—「定額働かせ放題」を強いる給特法とは?!』内田良・斉藤ひでみ（学陽書房）

『教えることの復権』大村はま・荻谷剛彦・荻谷夏子（ちくま新書）

『評伝 大村はま—ことばを育て 人を育て』荻谷夏子（小学館）

荻谷夏子（1956年～）は、大村はま（1906～2005年）の教え子。「大村はま記念国語教育の会」事務局長。

「大村はまが、40代の働きざかりの時期に、学習指導要領や教科書編纂に関わったということは、大きな意味を持つ。」「古典は、文学史上の財産である。だからこそ「古典に親しむ」という方針であるべきだ、と、はまは強く訴えた。」「今日にいたるまで、中学国語における古典学習の姿勢は「古典に親しむ」となっている。」

『いろんな人がいる』が当たり前の教室に』原田真知子（高文研）

原田真知子（1956年～）は小学校教諭だった。36年間、学級担任を務めた。

解説は上間陽子。

「子どもたちの半分以上は、私立中学を受験する。塾通いに忙しく、放課後の遊び時間などほとんどないし、そのことに疑問を感じない子も多い。曰く「だってみんなそうじゃん。」

「批判や要求ができないのは、でも、子どもたちのせいではない。そういうことを誰も教えてこなかったし、機会を作ってこなかったのではないか。」

『中学生を担任するということ―「ゆめのたね」をあなたに』 高原史朗（高文研）

高原史朗（1957年～）は中学校国語教師だった。

中学校教師志望者に絶対にお勧め。小学校・高等学校・特別支援学校と比べると、全国でも沖縄でも中学校の労働条件が一番悪い。しかし、人間の成長に最もよい形でかかわれる職場でもある。

『教師の資質―できる教師とダメな教師は何が違うのか？』 諸富祥彦（朝日新書）

『残念な教員―学校教育の失敗学』 林純次（光文社新書）

『「プロ教師」の流儀―クレイゴトぬきの教育入門』 諏訪哲二（中公新書ラクレ）

『教師崩壊―先生の数が足りない、質も危ない』 妹尾昌俊（PHP新書）

妹尾昌俊（1979年～）は教育研究家・学校業務実践アドバイザー。中教審「学校における働き方改革特別部会」委員などを務めた。

今、日本の教師、教育現場が直面している「5つの危機」を明らかにする。ピンチはチャンスである。

『教員という仕事―なぜ「ブラック化」したのか』 朝比奈なを（朝日新書）

『教師の仕事がブラック化する本当の理由』 喜入克（草思社文庫）

喜入克（1963年～）は東京都立高校国語教諭。

1988年から都立高校教諭。2012～18年には3校で副校長として都立高校改革を目指したが、うまくいかず、2019年から教諭に。出版時は教務主任。

『#教師のバトン とはなんだったのか―教師の発信と学校の未来』

内田良・斉藤ひでみ・嶋崎量・福嶋尚子（岩波ブックレット）

『教育幻想―クールティーチャー宣言』 菅野仁（ちくまプリマー新書）

菅野仁（1960～2016年）は宮城教育大学副学長だった。専攻は社会学（社会学思想史・コミュニケーション論・地域社会論）。

ベストセラーとなった『友だち幻想』だけでなく、教師志望者は『教育幻想』も併せて読んで欲しい。教員と教員志望者は、熱血教師がいかにダメな教師かを知るべきである。

『校長のカー―学校が変わらない理由、変わる秘訣』 工藤勇一（中公新書ラクレ）

工藤勇一（1960年～）は千代田区立麹町中学校校長だった。私立横浜創英中学・高等学校校長。

校長・教頭志望者にまずお勧めする。

「何のための教育か」という最も本質的な問いの部分は忘れられたまま、ハウツーを求める。そもそも学校をどういう場にしたいのか、何のための教育なのかを考えようとせず、とにかく「何も問題の起こらない学校・学級をつくること」に邁進してしまう。

僕には、目的と手段を取り違えているように思えてなりません。」

「生徒たちを管理することが優先され、目的となってしまう学校は、全国各地、ざらにあります。多くの学校が文部科学省が示す学習指導要領を実現することばかりに注目し、もっと上位にある何のための教育かという最上位の目標をなおざりにしたまま、管理するという手段ばかり厳密に実行しているのです。」

「残念ながら、日本中の多くの校長たちは安易に目標を立てすぎています。

例えば、学校の目標を設定する際、なんとなく惰性で行う校長がほとんどです。一番わかりやすい例が「知育、徳育、体育」という目標を一番上に立てたがる人たちです。」

「残念ながら日本全国を見まわすと、名誉職タイプの校長のほうが多いように見えてきます。

校長としてた2年か3年しかひとつの学校にいられないとすれば、1年目は前校長が決めたことをやるしかありません。2年目にもし、自分なりに教育課程を変えたとしても、その結果を見届けることができなうちに

異動になります。

つまり、何かを積極的にやるには、校長の任期が短すぎるということです。

僕が麹町中学でさまざまな挑戦をすることができたのは、東京都が他県等とは違って、校長の任期が基本的に「5年」という長い時間だったからでした。」

『校長という仕事』代田昭久（講談社現代新書）

代田昭久（1965年～）は杉並区立和田中学校の民間人校長を務めた。

「教務主任の大きな仕事は、授業が年間計画どおりに実施され、各教科の履修漏れがないようにチェックしていくことです。また、始業式、終業式の段取り、生徒の転入、転出の処理、運動会や学芸会などの行事の計画、教育実習生の受け入れ、定期テストの実施、通知表、成績一覧表の作成まで、校長の確認が必要な重要な案件ばかり。重要な会議の前には、校長と相談して議案の作成をすることも、仕事のひとつです。

ある先生に、「教務主任の経験がない校長は、実にたよりないのです」と言われたことがあります。教務主任の仕事が、専門的な知識と正確さを要求される点において、ビジネスの世界では、経理や財務の経験と知識が乏しい社長、といったところでしょうか。その発言の感覚はよくわかります。」

『教育委員会—何が問題か』新藤宗幸（岩波新書）

新藤宗幸（1946～2022年）は千葉大学名誉教授。専攻は行政学。

2013年の出版。9年ぶりに再読した。行政学の第一人者が、1997年から「教育委員会廃止」を提言している。

『教育委員会の真実』角田裕育（宝島社）

『文部科学省—揺らぐ日本の教育と学術』青木栄一（中公新書）

青木栄一（1973年～）は東北大学教授。専攻は教育行政学・行政学。

『文部科学省—「三流官庁」の知られざる素顔』寺脇研（中公新書ラクレ）

『教育の論理—文部省廃止論』羽仁五郎（講談社文庫）

羽仁五郎（1901～83年）は歴史学者。1945年3月逮捕され、敗戦は警視庁の留置場で迎えた。10月治安維持法廃止によって釈放。参議院議員も務めた（1947～56年）。国立国会図書館創設の中心人物。政府による任命拒否が問題となっている日本学術会議創立の中心人物。

1979年の出版。35年ぶりに再読した。

羽仁五郎の「真理は少数にあり」ということばは、自分の人生の指針である。

10-6 子どもの貧困・教育格差

『子どもの貧困』阿部彩（岩波新書）

『子どもの貧困Ⅱ—解決策を考える』阿部彩（岩波新書）

阿部彩（1964年～）は東京都立大学教授。専門は貧困・格差論，社会保障論，社会政策。

「15歳児の貧困」→「限られた教育機会」→「恵まれない職」→「低所得」→「低い生活水準」という貧困の連鎖を指摘する。「家庭の貧困は、子どもが非行にかかわってしまう確率をも高める。しかし、この事実にも、日本は目をつぶってきた」。「少年がかかわった犯罪の度合いが重いほど、その少年が貧困世帯である確率が高いのである」。

岩波新書の3冊『ルポ 貧困大国アメリカ』堤未果・『反貧困—「すべり台社会」からの脱出』湯浅誠・『子どもの貧困』阿部彩は、「貧困3部作」としてまとめて推薦する。

『「なんとかする」子どもの貧困』湯浅誠（角川新書）

『ひとり親家庭』赤石千衣子（岩波新書）

『子どもの最貧国・日本—学力・心身・社会におよぶ諸影響』山野良一（光文社新書）

山野良一（1960年～）は沖縄大学教授。児童福祉司。専門は児童福祉，子どもの貧困，児童虐待。

PISA2003の結果について福田誠治氏のコメント。「日本の子どもたちは家庭では勉強しない割には成績がよい。また，勉強意欲も低いにもかかわらず，不本意ながらも短時間で効率よく勉強し，平均点では好成績をあげている。これらの結果からすると，これまでの日本の学校教育の成果，したがって，日本の教師の努力の成果は高いといえよう。日本のマスコミは，まず，日本の学校と教師の快挙をほめたたえるべきであった。もしここで，日本の学校の良さを壊して，教育を競争主義の市場原理に委ねるならば，アメリカ並みの低学力しか約束されないだろう」。

『子どもに貧困を押しつける国・日本』山野良一（光文社新書）

『日本の教育格差』橘木俊詔（岩波新書）

橘木俊詔（1943年～）は京都大学名誉教授。日本経済学会会長だった。専攻は労働経済学，公共経済学。「格差社会」の火付け役である。

「学力が最も下位にある沖縄県は貧困率の高さもさることながら，全国で最も平均所得の低い県である。したがって，かなり多くの家庭が貧困状態であることが推測できる。そのために子どもの学力も低くなっていると考えられる。貧困は子どもの学力向上にとって大きな障害となることを認識する必要がある。」

『教育格差の経済学—何が子どもの将来を決めるのか』橘木俊詔（NHK出版新書）

『教育格差—階層・地域・学歴』松岡亮二（ちくま新書）

新書大賞2020第3位。

『子ども格差—壊れる子どもと教育現場』尾木直樹（角川oneテーマ21新書）

尾木直樹（1947年～）は教育評論家。法政大学名誉教授。

「1998（平成10）年6月，国連の子どもの権利委員会は，日本の子どもが，「高度に競争的な教育制度のストレス及びその結果として（中略）発達障害にさらされていること」を懸念し，改善するようにと勧告していました。しかし日本政府は，その勧告を深刻に受け止めることはなく，学力向上を目指した「詰め込み教育」を進めていきました。そのため，2004（平成16）年にも国連は「以前に勧告しているのにまったく改善されない」と，再度の警告を出していました。」

『進学格差—深刻化する教育費負担』小林雅之（ちくま新書）

小林雅之（1953年～）は東京大学名誉教授。専攻は教育社会学。

「大学4年間では，少なくとも400万円，多ければ1000万円をこえる費用がかかる。……普通の人は1000万円を越える買い物は，持ち家くらいだろう。いまや大学進学は人生で二番目に高い買い物なのだ。」

『学歴分断社会』吉川徹（ちくま新書）

吉川徹（1966年～）は大阪大学教授。専攻は計量社会学。

「いま日本人の7割は，親が高卒ならば子も高卒，親が大卒ならば子も大卒というように，親と同じ学歴を得るようになっていきます。」

『日本の分断—切り離される非大卒若者たち』吉川徹（光文社新書）

『「つながり格差」が学力格差を生む』志水宏吉（亜紀書房）

『二極化する学校—公立校の「格差」に向き合う』志水宏吉（亜紀書房）

志水宏吉（1959年～）は大阪大学教授。学校臨床学，教育社会学専攻。信頼できる教育学者の一人。

「端的にいうなら，公教育システムのバージョンアップが，今必要なのである。そして，結論を先取りするなら，その課題はシステム内に公正の原理を復権させることで成し遂げられるに違いない。一人ひとりがかけがえのない個として大事にされる学校が今こそ求められている。」

『ペアレントクラシー—「親格差時代の衝撃」』志水宏吉（朝日新書）

「現在の日本社会は，個人の能力と努力が高く評価される社会である。しかし，家庭環境によってその「個

人の能力と努力」が大きく規定され、親の富と願望とが幅を利かせるペアレントクラシーの社会だということである。そのなかで、できる層の対極に位置づけられる人々、つまり「能力のない」「努力をしない（できない）」とみなされる人々は、低く評価され、置き去りにされてしまうのが日本の現実である。その現実は、是正されなければならない。」

『ブラックバイト—学生が危ない』今野晴喜（岩波新書）

『ブラック奨学金』今野晴貴（文春新書）

今野晴貴（1983年～）は労働相談・調査研究を行うNPO法人POSSE代表。ブラック企業対策プロジェクト共同代表。

進路指導の名において、高利の借金を生徒に安易に勧めて一家破産に追い込んではいけない。

『下流志向—学ばない子どもたち 働かない若者たち』内田樹（講談社文庫）

10-7 学力

『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』新井紀子（東洋経済新報社）

新井紀子（1962年～）は国立情報学研究所社会共有知研究センター長・教授。専攻は数理論理学・遠隔教育。東京都教育委員（2021～23年）。

2018年度石橋湛山賞受賞。

『AIに負けない子どもを育てる』新井紀子（東洋経済新報社）

全国学力調査で平均点に達している沖縄県の小学校6年生が、3年後には全国最下位になってしまう理由も書かれている。

『学力を育てる』志水宏吉（岩波新書）

志水宏吉（1959年～）は大阪大学教授。学校臨床学，教育社会学専攻。信頼できる教育学者の一人。

効果的な学校（通塾しなくても成績を伸ばしている公立学校）として著者が対象とした小中学校は、ともに同和地区を含む学区にある学校であり、解放教育としての伝統が継承されている学校である。

『公立学校の底力』志水宏吉（ちくま新書）

小学校4校・中学校6校・高校2校が取り上げられている。

「仕事柄、いろいろな地域のさまざまな学校を訪問する機会が多いが、先生方は本当にがんばっている」。

「私などは、「教育は買うものである」という感覚は大嫌いである。教育は「選ぶ」ものではなく、「一緒につくる」ものである。できあがったものを顧客が消費するというイメージではなく、たまたま出会った人々が汗を流しながら共同作業を進めるイメージ」。

『学力格差を克服する』志水宏吉（ちくま新書）

『全国学力テストはなぜ失敗したのか—学力調査を科学する』川口俊明（岩波書店）

川口俊明（1980年～）は福岡教育大学准教授。専門は教育学・教育社会学。

失敗した全国学力テストの点数を気にしている人は、何をしているのだろうか。

『学力幻想』小玉重夫（ちくま新書）

『学力があぶない』大野晋・上野健爾（岩波新書）

『本当の学力をつける本』陰山英男（文春文庫）

『新しい学力』『教育力』齋藤孝（岩波新書）

『「学力」の経済学』中室牧子（ディスカヴァー・トゥエンティワン）

『予備校が教育を救う』丹羽健夫（文春新書）

『ルポ 塾歴社会』おおたとしまさ（幻冬舎新書）

『教育虐待・教育ネグレクト—日本の教育システムと親が抱える問題』古荘純一・磯崎祐介（光文社新書）

『教育虐待—子供を壊す「教育熱心」な親たち』石井光太（ハヤカワ新書）

過剰な受験教育を強いる親が子を殺す、過剰な受験教育を強いられた子が親を殺す、そんな「教育虐待」を取り上げる。

10-8 いじめ・暴力・暴言・ハラスメント

『いじめと不登校』河合隼雄（新潮文庫）

河合隼雄（1928～2007年）は京都大学名誉教授。国際日本文化研究センター名誉教授。日本のユング派心理学の第一人者。臨床心理学者。文化庁長官も務めた。京都大学理学部卒。高校教師も3年間やっている。

対談や講演を集めた本。道徳の教科化に対して、本書の次のことばは強烈的な批判となっている。「中教審でも僕は一番初めに言ったんですけど、とりわけ心の教育というのは、育てるとか育つとかの「育」のほうが大事なんで、「教」は関係ないんです。教えることは心つぶしになってしまうんです。今の学校の先生は教えるのが好きすぎます」。

『教室の悪魔—見えない「いじめ」を解決するために』山脇由貴子（ポプラ社）

山脇由貴子（1969年～）は東京都児童相談所の児童心理司だった。

いじめの現実と対策が分かりやすく簡潔に書かれている。かつてのいじめの加害者・被害者・傍観者という構造ではなくなっている。一人の被害者にクラス全員が加害者（ただし被害者は、いつ変わるか分からない。）という構図が多い。教員志望者には、中学生に中学生を殺させないために絶対に読んでほしい本。

『震える学校—不信地獄の「いじめ社会」を打ち破るために』山脇由貴子（ポプラ社）

『いじめの構造—なぜ人が怪物になるのか』内藤朝雄（講談社現代新書）

内藤朝雄（1962年～）は明治大学准教授。専攻は社会学・いじめ学。

うるま市の中学生による集団暴行殺人事件の心理・論理が、手に取るように分かる。「被害者が他殺や自殺にまで至るような深刻ないじめは、最初の段階で「いじめをすると自分も酷い目に遭う」と思わせることさえできればその大多数は食い止めることができるものですが、「たいした罰は受けない」と思わせたが最後、破滅的な事態を招きかねません」。

『〈いじめ学〉の時代』内藤朝雄（柏書房）

『いじめとは何か—教室の問題、社会の問題』森田洋司（中公新書）

森田洋司（1941～2019年）は大阪市立大学名誉教授。専攻は社会学（教育社会学・犯罪社会学・社会病理学・生徒指導論）。いじめの4層構造（加害者—観客—傍観者—被害者）を唱えた人である。

「私たちの調査では、いじめ発生率の高い学級では、正直者が馬鹿を見るような空気が教室に漂っていたり、教師によるえこひいきなど公平を欠く学級運営が行われていたり、教師が子どもたちに迎合する態度が見られるなどの傾向が強いことが分かっている。また、指導のブレをなくすことも大切である。とくにいじめについては、外からは被害の実情が分かりづらく、人によって解釈の幅が出やすい。教員の間で共通理解を図ることが大切となる」。

『いじめのある世界に生きる君たちへ—いじめられっ子だった精神科医の贈る言葉』

中井久夫（中央公論新社）

中井久夫（1934～2022年）は精神科医。神戸大学名誉教授。

『いじめ問題をどう克服するか』尾木直樹（岩波新書）

『夜回り先生 いじめを断つ』水谷修（日本評論社）

『いじめ加害者にどう対応するか—処罰と被害者優先のケア』斎藤環・内田良（岩波ブックレット）

斎藤環（1961年～）は精神科医。筑波大学教授。専門は思春期・青年期の精神病理学、「ひきこもり」の治療・支援ならびに啓蒙活動。

内田良（1976年～）は名古屋大学教授。専攻は教育社会学。

斎藤環「2020年度の不登校人口は小中学校で19万6000人と史上最多の人数です。……日本の教育システムの制度疲労と言っていると思います。……その原因は、学校現場が昭和の非行対策モデルから脱していないことにあって考えています。……そろそろ、「反社会的な生徒をどうするか」ではなく、不登校やひきこもりのような「非社会的な生徒へどう対応するか」に軸を合わせたモデルへとアップデートしないと、不登校人口の増加に歯止めがかからないでしょう。」

『現代思想12月臨時増刊号 緊急復刊imago いじめ 学校・社会・日本』（青土社）

『最後まで読まれなかった「クリスマスの物語」—川崎市中学生いじめ自死調査報告書から』

渡邊信二（高文研）

渡邊信二（1966年～）は約29年間、川崎市立小学校教諭及び統括教諭と市教育委員会学校教育部指導主事などを務め、2020年に退職。2010年篠原真矢さんのいじめ自死についての調査委員を担当。ご遺族の両親とともに講演やシンポジウムなどの活動もしている。

「現象や行為ばかり目をとらわれていると、傷む人が置かれている心理的な状態や人間関係性の状況が見えづらくなる。このことは、あらゆる教室における教師の重要な知恵として肝に銘じなければならない。」

『娘の遺体は凍っていた—旭川女子中学生イジメ凍死事件』文春オンライン特集版（文藝春秋）

『大人のいじめ』坂倉昇平（講談社現代新書）

『学校と暴力—いじめ・体罰問題の本質』今津孝次郎（平凡社新書）

今津孝次郎（1946年～）は名古屋大学名誉教授。愛知東邦大学名誉教授。専攻は教育社会学・学校臨床社会学・発達社会学。名古屋大学教育学部附属中・高等学校校長だった。

「A 暴力を誘発する学校」の特徴

「①子どもたち一人ひとりの発達を育むよりも、学校組織の秩序を重視する。

②そのために学校組織が縦型の管理主義に貫かれていて、力で押さえ込む「権力」関係の原理に囚われている。

③学力テストの結果を上げる数値目標が決められ、それに向けた教育に集中するのが組織目標となっている。

④学校のさまざまな情報が外部には伝えられず、保護者からの情報も学校内で共有されずに学校組織が閉鎖的である。

⑤こうした学校組織の下で、各教師は孤立しやすく、互いが協働してともに仕事をする連帯意識が弱い。

「B 暴力を誘発しない学校」の特徴

「①子どもたち一人ひとりに寄り添って、その発達を達成できるように同じクラスの仲間とともに取り組むことを重視する。

②そのために学校組織は教師の自律を可能な限り許容し、教師が尊敬されて、「権威」関係をつくり出せるような横型の組織原理に貫かれている。

③学力テストの結果を参考にしながら、一人ひとりの子どもの次の学習課題を明らかにし、授業の内容と方法を改善するために教師自身の自己評価を積み上げることを目標にする。

④学校の取り組みに関するさまざまな情報を外部に公開し、保護者からの情報も学校内で共有して、学校組織を開放的にする。

⑤こうした学校組織文化の下で、各教師は相互に尊重し合い、協働してともに仕事をする連帯意識が強い。」

『いじめ・体罰と父母の教育権』今橋盛勝（岩波ブックレット）

『少年にわが子を殺された親たち』黒沼克史（文春文庫）

黒沼克史（1955～2005年）はジャーナリスト。

6家族を取り上げているが、最初が1992年の八重山中学2年生の集団暴行殺人事件である。犯人は、中学2年生6人、中学1年生3人である。事件後の、生徒アンケートで1年間に717件の金銭巻き上げがあった。被害総額約700万円。全校生徒903人のうち約200人が被害者となっていた。2つ目の事件は、1996年の石垣市の高校2年生の集団暴行殺人事件である。犯人は5人で、4年前の事件のとき中学1年生だった、同じ不良グループの者もいた。

『「少年A」被害者遺族の慟哭』藤井誠二（小学館新書）

藤井誠二（1965年～）はノンフィクション作家。那覇と東京の二拠点生活。

2009年にうるま市で起きた、中学生による集団暴行殺人事件のその後を知ることができる。

『43回の殺意—川崎中1男子生徒殺害事件の深層』石井光太（新潮文庫）

『教室内カースト』鈴木翔（集英社新書）

鈴木翔（1984年～）は東京電機大学准教授。専攻は教育社会学。

いじめの土壌がわかる。

『日本の体罰—学校とスポーツの人類学』

アーロン・L・ミラー／石井昌幸・坂元正樹・志村真幸・中田浩司・中村哲也＝訳（共和国）

アーロン・L・ミラー（1980年～）はカリフォルニア州立大学・セントメアリーズ大学講師。専攻は文化人類学・日本研究。

「日本は、世界で6番目に学校での体罰を禁止した国である」「日本が最初に体罰禁止条項を制定したのは、「世界に先進国としてアピール」したかったからである。」

「ヒエラルキー的な度合いの強い社会に生きる親ほど、体罰を用いる可能性が高いことになる。とりわけ、外国の植民地ないし旧植民地の社会では、ヒエラルキー（および外国通貨）が強要されるがゆえに、そうした傾向があるというのである。」

「高橋と久米田は、日本の運動部には、とりわけ体罰が起りやすい5つの特徴があるとしている。

1. スポーツには、身体を使って覚えるという要素があるため、コーチは言語によるコミュニケーションをかならずしも重視しない。
2. 教師は教室で生徒の態度を変えさせるのに言葉を用いるが、スポーツのコーチや体育教師は、生徒の姿勢を変えさせることが多い。怪我をしないように身体に触れて指導することが必要な場合もある。
3. スポーツは、自分で自分を評価することよりも、他者の評価に焦点をあわせる。また、この評価プロセスにおいて勝敗は最も重要な側面である。
4. スポーツの練習の決まりはコーチが決めるから、「教条的（ドグマティック）」なリーダーとなる可能性がある。
5. 日本では、体育には「精神形成」という明確な目標がある。」

『体罰・暴力・いじめ—スポーツと学校の社会哲学』松田太希（青弓社）

松田太希（1988年～）は暴力問題相談センター主宰。専攻は暴力論、スポーツ哲学、教育学。

「たとえば、教師の言うことに対して何らかの違和や苦痛を感じたとしても、「良心」が生徒たちに、「学校の先生が言っていることなのだから、一応聞いておくべきかもしれない」と感じさせる。「明らかに先生が言っていることはおかしい」といったひどい場合でも、「ここで反抗したら怒られるし、生徒指導の怖い先生に呼び出されてしまう」といった具合に自分の内面だけですべてを処理して納得していく。教師からののはたらきかけを甘受することは、生徒たちにとって学校で生きていくためのある種の積極的な努力なのだ。……学校教育の根源的な暴力性と、生徒の「良心」を利用した教師の「巧みな回収」。これらが、生徒の自我を非力なもの

に作り上げている。そしておそらくは、この非力な自我こそ、教師たち、ひいては大人たちが「いい子」と呼んでいるところのものなのである。」

『体罰はなぜなくなるのか』藤井誠二（幻冬舎新書）

藤井誠二（1965年～）はノンフィクション作家。那覇と東京の二拠点生活。

1985年中津商陸上部キャプテンA子さん・顧問の体罰を苦に自殺

「リーダーが必死に耐える姿をほかの生徒に見せて、「あれだけキャプテンが頑張っているんだから、自分たちも頑張らなければならない」と思わせる。部員の誰か一人でもサボっていると、リーダーが犠牲になる。「それは申し訳ないから、自分も頑張ろう」と思わせる。このような心理的な支配、いわば恐怖政治は、集団を掌握して発奮させる方法として、意識的か無意識的かは別にして体罰を肯定する教員たちにとっては常道とされていた。」

「この方法の最大の「効果」は、理不尽だと思いつつも、それに耐えることができない生徒が自分を責めていくところにある。A子さんにしても、暴力や暴言が辛くても、自分が選んだ道だし、何より「先生の言うことを聞いて自分も強くなりたい」という強い思いもあったに違いない。だから暴力も甘んじて受けていたのだろう。私たち大人は、A子さんはどうして陸上部をやめなかったのか、どうして逃げなかったのかと思いがちだが、逃げることややめることという選択肢はA子さんにはなかったのだと思う。暴力に耐えられなければ、先生にもう認めてもらえなくなる。一度期待され、注目された者にとってはそれは自尊心を否定することになる。そんな弱い自分を自分で認めるわけにはいかないのだ。負けたくないという、率直な子どもたちの言い方は、頑張って練習に打ち込めない自分に負けたくないという面だけではなく、理不尽な指導者に耐えられない自分に負けたくないという意味であることを、私たちは知らなければならない。」

「各教育委員会が作成する体罰防止マニュアルに決定的に欠けているものがある。問題が発生した場合、学校や教育委員会がどう対応するかという「マニュアル」である。」

「運動部の場合は、基本的に一人の顧問教員が長期間にわたって指導することが多いため、子どもたちは顧問のつくったルールに従わざるを得ない。運動部はいわば顧問教員の小帝国化しているのが現状だ。」

『反体罰宣言—日本体育大学が超本気で取り組んだ命の授業』南部さおり（春陽堂書店）

南部さおりは日本体育大学教授。医学博士。専門は法医学・刑事法学・スポーツ危機管理学。

「部活動内で体罰やハラスメントがあった場合、生徒や保護者が匿名で通報できる部局などを自治体内に設けるなどの対策を講じる必要がある。」

『スクールセクハラ—なぜ教師のわいせつ犯罪は繰り返されるのか』池谷孝司（幻冬舎文庫）

「入江さんは、教え子が教師になった途端に常識が通じなくなると感じる。学校が社会と遊離していることにすら気付かない。社会では通用しないような理屈を「学校だから、そんなことは当たり前です。」と平気で話し、体罰を「愛のむちだ」と容認する元教え子も多い。」

「学校という組織は自浄能力が極めて低いんです。生徒を守ることよりも、組織防衛に走りがちです。」

「国連で1989年に採択された「子どもの権利条約」が、日本でなかなか批准されなかった歴史がある。94年までずれ込み、日本は158番目の批准国になった。」

『黙殺される教師の「性暴力」』南彰（朝日新聞出版）

南彰（1979年～）は朝日新聞を退社し、2023年11月に琉球新報記者・編集委員に転職した。新聞労連委員長（2018～20年）だった。東京新聞記者の望月衣塑子の本で名前がよく出てきた。

一つの性犯罪の記録である。

「2020年度に「性犯罪・性暴力等」を理由に処分された公立学校の教員は200人。2011～2019年度に「わいせつ行為等」で処分された人数を加えると、10年間では2163人になる。被害者の多くは子どもたちで、数字の裏側には、性的虐待で心身を傷つけられ、信じる力を削られた子どもたちがいる。」

『わいせつ教員の闇—教育現場で何が起きているか』読売新聞取材班（中公新書ラクレ）

『学校ハラスメント—暴力・セクハラ・部活動—なぜ教育は「行き過ぎる」か』内田良（朝日新書）

『学校が子どもを殺すとき—「教える側」の質が劣化したこの社会で』渋井哲也（論創社）

『先生、殴らないで！—学校・スポーツの体罰・暴力を考える』三輪定宣・川口智久編著（かもがわ出版）

『桜宮高校バスケット部体罰事件の真実—そして少年は死ぬことに決めた』島沢優子（朝日新聞出版）

『「指導死」—追いつめられ、死を選んだ七人の子どもたち。』大貫隆志編著（高文研）

大貫隆志（1957年～）は「指導死」親の会代表世話人。

1952年～2013年4月で68件（うち5件は未遂）の「指導死」を紹介している。2021年のコザ高校での「指導死」を繰り返さないための必読書。

『学校で命を落とすということ—子どもたちが安心して過ごせる学校となるために』

安達和美（あっぷる出版社）

安達和美は「指導死」親の会共同代表。息子さんの「指導死」から18回忌を迎え、以下のように記す。

「私は、自分の子どもの死に直面するまで、おかしいことや、理不尽なことがあっても、声を上げてこなかった。おかしいという感覚さえなかった。自分自身も、子どもの時、学校生活をそうやって過ごし、受け入れ、不条理にすっかり慣らされ、麻痺していたのだと思う。

大人になってから、学校という現場に行ってみると、校則だけでなく、変な習慣が今も残っていて驚く。学校という閉ざされた中にいることで、子どもも教師もそれが当たり前だと思い、いつの間にかわからなくなってしまうのだろう。」

10-9 部活動

『ブラック部活動—子どもと先生の苦しみに向き合う』内田良（東洋館出版社）

『「ハッピーな部活」のつくり方』中澤篤史・内田良（岩波ジュニア新書）

『部活動の社会学—学校の文化・教師の働き方』内田良編（岩波書店）

内田良（1976年～）は名古屋大学教授。専攻は教育社会学。

「部活動に進んで取り組む教員の「主体性」によって、そうでない教員にまで部活動指導が強いられる「強制性」へと結びつき、結果として、学校組織全体で部活動指導に励む風土ができあがることで、主体的な教員はますます多忙となり、強制された教員もその磁場から逃れられなくなるという構造である。」

「体育では感染症予防に力が注がれていても、運動部活動ではそれが大幅にゆめられてしまう。……部活動が「特別扱い」されている」

『運動部活動の戦後と現在—なぜスポーツは学校教育に結び付けられるのか』中澤篤史（青弓社）

中澤篤史（1979年～）は早稲田大学教授。専攻は身体教育学・スポーツ科学・社会福祉学。

「目的的な活動であるスポーツと、それとは別の目的に応じた手段的な活動である体育は、互いに相容れない部分を持つ。スポーツが自然発生的な遊びや楽しみであるかぎり、意図性や計画性を備える体育とは相容れない。また、体育が教育として人間形成の手段であるかぎり、それ自体を目的とするスポーツとは相容れない。

……スポーツを学校教育の手段とすることの矛盾を理解できる。すなわち、遊戯してのスポーツが、その遊戯の性質と相容れない学校教育に結び付けられることには、原理的な矛盾がある。とすれば、スポーツと学校教育が結び付くとはいったいどういうことなのか。」

「現在の保護者と教師たちは、自らの人生経験と照らし合わせながら、運動部活動の存在を自明視し、当然視している。運動部活動が拡大してきた戦後を生きたい今の大人たち、とりわけ運動部活動が大衆化した1970年代やそれ以降に中学生・高校生だった今の30代および40代の大人たちは、運動部活動を自明で当然の存

在として受け止めている。そうした世代の特徴を持った大人たちが、現在、保護者となり教師となっている。」

『そろそろ、部活のこれからを話ませんか—未来のための部活講義』中澤篤史（大月書店）

「1948年の通達では、中学校の場合、原則として校内大会までとして、市町村大会や郡市大会、そして宿泊を要しない都道府県大会までが許容範囲とされた。つまり、全国大会は中学校では禁止されていた。高校の場合は、原則として都道府県大会までとして、ブロック大会や年1回の全国大会は許容範囲とされた。」

『運動部活動の教育学入門—歴史とのダイアログ』神谷拓（大修館書店）

神谷拓（1975年～）は関西大学教授。日本部活動学会会長。

『運動部活動の社会学—「規律」と「自主性」をめぐる言説と実践』下竹亮志（新評論）

『部活があぶない』島沢優子（講談社現代新書）

島沢優子（1962年～）はフリーライター。沖縄県の部活動の在り方検討委員会のオブザーバーを務めた。

『スポーツ毒親—暴力・性虐待になぜわが子を差し出すのか』島沢優子（文藝春秋）

「2021年1月。運動部活動の顧問から執拗な叱責を受けたコザ高校2年（当時17）の男子生徒が自殺した。この問題について、県が設置した第三者調査チームの調べが不十分だとして、県立高校の保護者有志は6月、再調査を求める陳情書を県議会に提出した。

聞き取りの対象職員が校長や教頭、担任、顧問など一部に限られたことや、教員や学校、県教育委員会の責務が報告書でつまびらかになっていないとして、県教委から独立した第三者委員会の設置と再調査や、子供や保護者の声を聞く第三者機関の設置などを求めた。

遺族以外の保護者が再調査を求めるなど、過去にはなかったことだ。ほとんどの場合「かかわりたくない」「早く忘れたい」と真相究明に後ろ向きだった。地元紙だけで全国的なニュースにならなかったが、沖縄の「保護者有志」に拍手を送りたい。」

『脱ブラック部活』中小路徹（洋泉社新書y）

中小路徹（1968年～）は朝日新聞編集委員。

「日本はムラ社会の原理が強い。退部は共同体で生きられなかったことを意味し、学校で毎日、「敗者」としてすごさなければならず、耐えがたい。」

10-10 いじめ・指導死に関する第三者委員会報告書

「令和3年1月沖縄県立高等学校生徒の自死事案に関する第三者再調査委員会調査報告書」（2024年3月22日）

<https://www.pref.okinawa.lg.jp/kyoiku/edu/1008462/1008463/1014615/1029129.html>

「令和3年1月沖縄県立高等学校生徒の自死事案に関する第三者再調査委員会調査報告書【概要版】」

（2024年3月22日）

<https://www.pref.okinawa.lg.jp/kyoiku/edu/1008462/1008463/1014615/1028473.html>

「豊見城市いじめ問題専門委員会調査報告書」（2018年3月30日）

<https://www.city.tomigusuku.lg.jp/soshiki/8/1030/gyomuannai/3/212.html>

「いじめ重大事態に関する調査委員会報告書」（2017年7月21日 沖縄市）

「さいたま市立南浦和中学校調査報告書」（2023年6月23日）

<https://www.city.saitama.lg.jp/003/002/008/001/p097899.html>

「静岡県立静岡西高等学校元教諭による言動に関する第三者調査委員会報告書（公表版）」（2023年4月29日）

https://www.pref.shizuoka.jp/_res/projects/default_project/_page_001/031/316/houkokusyo.pdf

「調査報告書（公表版）」（2022年10月24日 熊本市子どもの死亡事案に関する詳細調査委員会）

https://www.city.kumamoto.jp/common/UploadFileDsp.aspx?c_id=5&id=35496&sub_id=43&flid=318230
「いじめの重大事態に係る調査報告書（公表版）」（2022年9月12日旭川市いじめ防止等対策委員会）
<https://www.city.asahikawa.hokkaido.jp/kurashi/218/266/270/d076131.html>
「調査報告書～平成30年に発生した高校生生の転落事案について～【公表版】」
（2022年3月25日柏市いじめ重大事態調査検証委員会）
「第三者調査委員会報告書」（2021年11月5日長崎県立学校）
「鹿児島市児童生徒の死亡事故に関する調査委員会報告書公表版」（2021年7月29日）
<https://www.city.kagoshima.lg.jp/kyoiku/kyoiku/seisyonen/kouhyouban28.html>
「京都府いじめ調査委員会調査報告書」（2021年3月9日）
<https://www.pref.kyoto.jp/shingikai/bunkyo-02/documents/02houkokusyo.pdf>
「調査報告書」（2020年7月22日岩手県立学校児童生徒の重大事案に関する調査委員会）
https://www.pref.iwate.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/057/698/02_iwatemodelsirixyouhenn.pdf
「第三者調査委員会調査報告書」
（2018年12月平成27年11月奄美市立中学校生徒の死亡事案に関する第三者調査委員会）
<https://www.city.amami.lg.jp/somu/daisansyaiinkai3.html>
「調査報告書」（2017年9月26日池田町学校事故等調査委員会）
https://www.town.ikedai.fukui.jp/kurashi/kosodate/1443/p002851_d/fil/hokokusyo.pdf
「調査報告書【概要版】」（2016年12月23日矢巾町いじめ問題対策委員会）
<https://www.town.yahaba.iwate.jp/soshiki/gakumu/manabi/2016122300018/>
「調査報告書」（2016年1月6日新上五島町立学校におけるいじめに関する第三者調査委員会）
<https://official.shinkamigoto.net/cmd/data/entry/benri/benri.03072.00000018.pdf>
「報告書」（2013年3月9日大阪市立桜宮高校・外部監察チーム）
「調査報告書」（2013年1月31日大津市立中学校におけるいじめに関する第三者調査委員会の調査報告書）
https://www.city.otsu.lg.jp/ijime_taisaku/others/1522209990056.html

10-11 高校中退・生徒支援

『県立！ 再チャレンジ高校—生徒が人生をやり直せる学校』黒川祥子（講談社現代新書）

黒川祥子（1959年～）はノンフィクション作家。

沖縄に絶対に必要な県立高校が描かれている。沖縄の県立高校にいて欲しい校長・副校長・教頭・生徒支援（指導）主任・学年主任・教育相談コーディネーター・キャリアカウンセラー・学校司書・担任・教諭たちである。県立高等学校編成整備計画におけるフューチャースクール構想が頓挫した理由も明らかになる。

『ルポ 教育困難校』朝比奈なを（朝日新書）

『置き去りにされた高校生たち—加速する高校改革の中での「教育困難校」』朝比奈なを（学事出版）

朝比奈なをは教育ライター。公立高校地歴・公民科教諭だった。

『ドキュメント 高校中退—いま、貧困がうまれる場所』青砥恭（ちくま新書）

青砥恭（1948年～）は埼玉県立高校教諭だった。NPO法人さいたまユースサポートネット代表理事。

著者のような県立高校教師が沖縄にも増えて欲しいと切に願う。

「○○人やめさせて、ずいぶん楽になりました。」といった言葉が、底辺校では日常的に聞かれる。「彼らがいなくなったら学校は落ち着く」「彼らがいたら他の生徒に迷惑になる」と退学を正当化する論理がまかり

とおるのである。それでも、自分を権力的な存在だと考えている教師は不思議なほど多くない」。

学区の拡大によって「貧困世帯の子どもたちを底辺校に囲い込むことで、同世代の異なる階層の若者たちと出会う機会がなくなり、同世代の若者たちからも孤立する状況が生まれている」。

「孤立した若者を見つけ、手をさしのべ、社会とつなごう。それが教師の仕事だ。今、多くの教師たちもまた、「競争的教育」の中にどっぷり浸かって、それがどのような社会につながっているか、考えることをやめている」。

高校教員志望者には、絶対に読んでほしい。公教育は平等化を進めるべきである。しかし、沖縄では公教育である高校教育によって、格差と貧困が拡大再生産されている。

『高校中退—不登校でも引きこもりでもやり直せる！』杉浦孝宣（宝島社新書）

杉浦孝宣（1960年～）はNPO高卒支援会主宰。

「不登校の生徒は真面目な子、よく考えている子が多いです。……高校が予備校化して、生徒の進路に対する動機付けがなくなったんですね。「偏差値上げろ、国公立目指せ」ばかり。それだけだと、自分の進路や未来に対して、子どもでなくても疑問を持ちますよ」。

「学校が生徒に引導を渡す際に使う言葉は「高校は義務教育じゃない」です。組織の輪を乱すから、学力指導できないから辞めさせる。これは学校の教育放棄であるわけです」。

『不登校の本質—不登校で悩める保護者の皆さんのために—』小野昌彦（風間書房）

『学校に行きたくない君へ』全国不登校新聞社編（ポプラ社）

インタビューの聞き手は、不登校・ひきこもりの当事者・経験者である「不登校新聞社子ども・若者編集部」。

柴田元幸「一つだけ言えるとすれば、「誰にとっても絶対必要なものなどない」ということです。「若いうちにこれだけは」とか「目的意識を持って」と世間ではよく言っていますが、ああいうのは聞き流していいと思う。」

リリー・フランキー「よく情緒不安定と言うけど、情緒なんて、そもそも不安定なもんだから。」

大人なんて、もっと揺らぐんだから。」

不登校経験者（27歳女性・図書館司書）「不登校しているとき、私は「今」でいっぱいでした。「今」しか見えていないときに、過去のことも、将来のことも、頭に入って来ません。」

西原理恵子「人間って、みんなバランスが悪くて、どっかしら病気なんです。とくに母親の場合は、子どもに何かあったら、世界中から「母親が悪かった」と言われる。だから、「母親」という病気を持ってしまうんです。」

（私の父はお金がなくともギャンブルを続けてます。どうしたらいいのでしょうか？）

「私も最初の父親をアルコール依存症で、二番目の父親をギャンブル依存症で亡くしました。……病気はサイエンスでしか看ちゃいけないんです。あなたがガン患者を看たら、知識不足でかならず病状を悪化させてしまいます。それと同じで、家族が面倒を見るとよりお父さんを悪化させます。」

田口トモロヲ「本当の自分を見つけない、自分らしくありたい、やりたいことをやっていきたい、自然体でいたい、幸せになりたい……、そういうものはまとめて捨てた方がいいです。まず、「自分」なんてどこにもないし、僕は一度も「自分」なんてなかった気がします。」

「それと「やりたいこと」なんかよりも、一つでもすがれるものを見つけたほうがいいですよ。人に迷惑をかけなければ、世間的に地味でも価値がなくとも、すがれるものならなんでもすがったらい。それが一つでも見つければ、いろんなことが見えてくると思います。」

安富歩「ほとんどの人は、狂ったシステムのなかで平然と生きています。たまに満員電車に乗ると「なんなんだ、これは」と恐ろしい気持ちになります。でもみんな平気で乗っている。平気なほうがおかしいんです。」

小熊英二「個性化や多様化という言葉は、昔から政府が人間をより分ける常套手段として使われてきました。

……文部省のいう「多様化」は、ようするに頭の悪いやつは大学に行かずに働けばいいんだ、ということです。」

『〈ヤンチャな子ら〉のエスノグラフィー』 知念渉（青弓社）

知念渉（1985年～）は神田外語大学准教授。専門は教育社会学・家族社会学。沖縄出身。

上間陽子・志水宏吉のもとで学んだ期待の星。

『先生のホンネ—評価、生活・受験指導』 岩本茂樹（光文社新書）。

岩本茂樹（1952年～）は神戸学院大学教授だった。30年間にわたり小学校、中学校、高校の教師を勤めた。

「学校の秩序を維持する先生にとって、依拠する枠組みは校則である。生徒の服装の乱れを見過ごすことは自分たちが拠って立つ支柱を揺るがすこととなる。そのことは、学校の主導権が生徒に奪われかねない危険を意味するわけである。それゆえ、「服装の乱れ」が生じることは「生徒の心の乱れ」というよりも、「先生の心の乱れ」を意味する。だからこそ、服装の乱れを取り締まることによって、先生の心を安定させなければならないのである。つまり、「服装の乱れは心の乱れ」とは、先生たちの自己防衛が作り出した言説なのである」。

『高校の現実—生徒指導の現場から』 喜入克（草思社）

喜入克（1963年～）は東京都立高校国語教諭。

「今日のようにリスク不安の高まった世の中では、どんなに努力してもどうにもならないことや、今すぐに分からないことに対して、耐えられなくなってくる。だから性急に、その原因や責任者が特定できるはずだと思ってしまう、一律で過剰な対策に走ってしまう」。

『教師にできる自殺予防—子どものSOSを見逃さない』 高橋聡美（教育開発研究所）

『教師が知らない「子どものスマホ・SNS」新常識』 藤川大祐（教育開発研究所）

『ケーキの切れない非行少年たち』 宮口幸治（新潮新書）

新書大賞2020第2位。

『どうしても頑張れない人たち—ケーキの切れない非行少年たち2』 宮口幸治（新潮新書）

『ブラック校則—理不尽な苦しみの現実』 荻上チキ・内田亮（東洋館出版社）

『夜回り先生』 水谷修（小学館文庫）

『女子高生の裏社会—「関係性の貧困」に生きる少女たち』 仁藤夢乃（光文社新書）

10-12 進路指導・職業教育

『君たちはどう生きるか』 吉野源三郎（岩波文庫）

漫画化によってベストセラーになった。

『13歳のハローワーク』 村上龍（幻冬舎）

『検証 迷走する英語入試—スピーキング導入と民間委託』 南風原朝和編（岩波ブックレット）

著者は5人。（肩書は発売当時）

南風原朝和（1953年～）は東京大学教授。専門は心理統計学・テスト理論。那覇高校出身。

宮本久也（1957年～）は東京都立八王子東高等学校長。元全国高等学校協会会長。専門は日本史。

羽藤由美（1956年～）は京都工芸繊維大学教授。専門は応用言語学。

阿部公彦（1966年～）は東京大学教授。専門は英米文学。

荒井克弘（1947年～）は東北大学名誉教授。大学入試センター名誉教授。専門は高等教育研究・教育計画論。

文科省前などで抗議をした高校生たちは、共通テストへの英語の民間検定テストの導入・国語の記述式の導入などを、「ベネッセに大学入試を売り渡すな」と喝破していた。沖縄の県立高校教育はベネッセにほぼ売却

済みだが。

『キャリア教育のウソ』児美川孝一郎（ちくまプリマー新書）

児美川孝一郎（1963年～）は法政大学教授。専攻は教育学。

就職率最低の沖縄がキャリア教育先進県であるカラクリがわかる。

「流行りのキャリア教育が、〈やりたいこと（仕事）〉の選択→その職業（仕事）についての調べ学習」といったベクトルでの段階論に立っているとしたら、そんなことはすぐにもやめたほうがいい」。

「子どもや若者には、現在の日本の産業構造がどうなっていて、職業構成がどう変化し、実際の職場における労働（仕事）の実態が、いかなる状況にあるのかといった、職業や仕事についての理解を深める学習に力を入れることを薦めたい」。

『教育の職業的意義—若者、学校、社会をつなぐ』本田由紀（ちくま新書）

本田由紀（1964年～）は東京大学教授。専攻は教育社会学。

「高校生の大半を擁している普通科は、若者を仕事の世界に向けて備えさせる機能を、まったくと言っていいほど欠いている」。「高校普通科卒の就労者の中では非正社員比率が高いだけでなく、正社員となった者は長時間労働に巻き込まれる比率が高く、逆に非正社員となった者は労働密度や就労意識が希薄である」。

『文庫版 大学1年生の歩き方』トミヤマユキコ・清田隆之（集英社文庫）

『バカ学生に誰がした？—進路指導教員のぶっちゃけ話』新井立夫＋石嶺嶺司（中公新書ラクレ）

『教員採用試験のカラクリ—「高人気」職のドタバタ受験事情』新井立夫＋石嶺嶺司（中公新書ラクレ）

『公務員試験のカラクリ』大原暁（光文社新書）

大原暁（1974年～）は公務員試験評論家。いくつかの公務員試験に合格。資格試験スクールや大学で公務員の受験指導を行った経験をもつ。

10-13 特別支援教育

「障害者」は12-3にまとめた。

『障害児教育を考える』茂木俊彦（岩波新書）

茂木俊彦（1942～2015年）は東京都立大学名誉教授・元総長。専攻は教育心理学・障害児心理学。

「今日、特別支援教育への教師や関係者の関心の向け方は、障害が相対的に軽い障害児の教育にやや傾斜しているように思われる。言い換えれば重度・重症の子どもとその教育が、視野の周辺部分に追いやられているのではないか。」という問題意識から、本のタイトルに「特別支援教育」ではなくて、あえて「障害児教育」ということばを使っている。

『障害児と教育』茂木俊彦（岩波新書）

「障害についていくら深く知ったとしても、それだけでは、その障害児の子どもとしての全体像がわかったということにはならない。いいかえれば、障害児とは障害をもつ「子ども」なのだ」。

「子どもの教育は、つねに現在を充実させることに重点をおき、そこに明日への挑戦を含みこむという構図でとりくまれるべきであり、そういう教育こそが子どもの発達の法則にも合っているのである」。

『特別支援教育—多様なニーズへの挑戦』柘植雅義（中公新書）

『新版 就学時健診を考える—特別支援教育のいま』小笠毅編（岩波ブックレット）

『ある盲学校教師の三十年』鈴木栄助（岩波新書）

鈴木栄助（1917年～）は県立山形盲学校に30余年勤務。全日本盲学校教育研究会長だった。1978年発行。

「盲児（者）たちは点字を触読できるようになると、奇妙に童顔を取り戻し、荒んだ心^{こころ}が落ち着くことを体

験して来た。それは『知性人』(homo sapiens)としての人間が文化を摂り入れる媒体としての文字＝点字を修得して自己を確立したことを意味した」。

電話機を発明したベルは、ボストン聾学校教師であった。視話法(発声による空気振動を視覚化して聾児の読話に役立たせる教育法)の研究実践が、電話機発明につながったのである。彼が1898年(明治31年)東京盲啞学校で行った講演で呼びかけたのは、「第一に盲啞学校教員養成機関の設置」であり、「第二項は、盲と聾啞とを分離して各府県が、必ず一つの盲学校と聾啞学校とを設ける」ことだった。

『発達障害の子どもたち』杉山登志郎(講談社現代新書)

『発達障害のいま』杉山登志郎(講談社現代新書)

『子育てで一番大切なこと—愛着形成と発達障害』杉山登志郎(講談社現代新書)

杉山登志郎(1951年～)は医師。専門は児童青年期精神医学。「特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議」で、特別支援教育コーディネーターを校務分掌とすることを主張した人である。

発達障害の入門書として、まずは『発達障害の子どもたち』を読む。そして『発達障害のいま』『子育てで一番大切なこと—愛着形成と発達障害』と読み進める。

『発達障害かもしれない—見た目は普通の、ちょっと変わった子』磯部潮(光文社新書)

『高機能自閉症児を育てる—息子・Tの自立を育てた20年の記録』高橋和子(小学館101新書)

高橋和子は大阪電気通信大学特任准教授。高機能自閉症の息子の初語は、3歳8か月の時である。そして京都大学の工学系の大学院博士課程前期在学中(2010年現在)。

「私は、障害名というのは、子どもを理解するために役立てるもの、と思っています。障害名が何であろうとも実際の子どもは存在していて、その特徴は変わらないわけです。つまり子どもの特徴をよく理解することが大切だと思います」。

『障害と子どもたちの生きるかたち』浜田寿美男(岩波現代文庫)

浜田寿美男(1947年～)は奈良女子大学名誉教授。専攻は発達心理学・法心理学。

自閉症のたかし君、右手の指がないみつ子さんとかかわりを描きながら、障害を一つの〈文化〉、一つの〈生きるかたち〉と考えることを提案している。

『自閉症スペクトラム障害—療育と対応を考える』平岩幹男(岩波新書)

平岩幹男(1951年～)は医師。自閉症の療育、高機能自閉症での社会生活訓練(SST)に詳しい。

『うちの火星人—5人全員発達障がい家族を守るための“取扱説明書”』平岡禎之(光文社)

平岡禎之(1960年～)はコピーライター・CMディレクター(広告代理店勤務)。

沖縄タイムスの連載をもとにしている。

『自閉症の僕が跳びはねる理由』東田直樹(角川文庫)

『自閉症の僕が跳びはねる理由2』東田直樹(角川文庫)

30か国以上で翻訳されている。会話のできない当事者の思いを知ることができる。

『アスペルガー症候群の難題』井出草平(光文社新書)

『五体不満足』乙武洋匡(講談社文庫)

乙武洋匡(1976年～)は作家・タレント。小学校教諭(2007～10年)、中央教育審議会・初等中等教育分科会・特別支援教育の在り方に関する特別委員会の委員(2010～12年)、東京都教育委員(2013～15年)。

600万部、日本第3位のベストセラー。「なぜ彼はスポーツライターとして活躍していたにもかかわらず、わざわざ教員免許を取得してまで教師になったのか」が分かる。彼が登校している間、母親が廊下などで付き添うことなどが条件で、彼は初めて普通学校に通えた。

『ぼく高校へ行くんだ—「0点」でも高校へ』佐野さよ子(現代書館)

第11章 自然科学

11-1 全般

『科学と科学者のはなし—寺田寅彦エッセイ集』池内了編（岩波少年文庫）

『科学の現在を考える』村上陽一郎（講談社現代新書）

『高校生のための科学キーワード100』久我羅内（ちくま新書）

『科学者が人間であること』中村桂子（岩波新書）

『市民科学者として生きる』高木仁三郎（岩波新書）

『原発はなぜこわいか 増補版』天笠啓祐（高文研）

『科学者は戦争で何をしたか』益川敏英（集英社新書）

益川敏英（1940～2021年）は京都大学名誉教授。京都産業大学名誉教授。専門は素粒子理論。2008年ノーベル物理学賞受賞。

『銀河の片隅で科学夜話—物理学者が語る、すばらしく不思議で美しいこの世界の小さな驚異』

全卓樹（朝日出版社）

全卓樹（1958年～）は高知工科大学教授。専攻は量子力学，数理物理学，社会物理学。

22編の科学エッセイ。おもしろい。

11-2 数学

『零の発見—数学の生いたち』吉田洋一（岩波新書）

吉田洋一（1898～1989年）は立教大学名誉教授。専攻は数学。

1939年発行。「タレスはみずからも幾何学の研究に手を染め，例えば，二等辺三角形の底角が相等しい，という定理は彼の発見にかかわるものといわれている」。

「ピュタゴラスの天文学は，また，その音楽理論と切り離すことのできないものであった」。

『数学的思考法』芳沢光雄（講談社現代新書）

『数に強くなる』畑村洋太郎（岩波新書）

『数学受験術指南—一生を通じて役に立つ勉強法』森毅（中公文庫）

森毅（1928～2010年）は京都大学名誉教授。専攻は数学。

昔の京大受験生の多くが読んだ。

11-3 宇宙・地学

『宇宙と生命の起源—ビッグバンから人類誕生まで』嶺重慎・小久保英一郎編（岩波ジュニア新書）

『宇宙と生命の起源2—素粒子から細胞まで』嶺重慎・小久保英一郎編（岩波ジュニア新書）

『宇宙は何でできているのか—素粒子物理学で解く宇宙の謎』村山斉（幻冬舎新書）

村山斉（1964年～）はカリフォルニア大学教授。専攻は素粒子物理学。

新書大賞2011受賞。

「のちに「アトム」の語源となった「atomon」とは，「それ以上は分割できない」という意味です。タレスやアリストテレスが自分の知っているものを「物質の根源」と考えたのとは違い，デモクリトスは目に見えな

いものを想定しました。素粒子物理学者はしばしば未知の粒子の存在を予言しますが、この分野で最初の「予言者」はデモクリトスだったと言えるでしょう」。

『宇宙はなぜ美しいのか』村山斉（幻冬舎新書）

「ニュートンが微積分や重力の法則を思いついたのは、1665年、ペストの流行でケンブリッジ大学から疎開していたときのことでした。私が南部理論をやっと理解できたのも、ロックダウン中のことです。人と議論しながら研究を進めるのはとても大切ですが、こもって一人で考える時間も大事だ、ということなのでしょう。」

『宇宙になぜ我々が存在するのか—最新素粒子論入門』村山斉（ブルーバックス）

『地学ノススメ「日本列島のいま」を知るために』鎌田浩毅（講談社ブルーバックス）

『土 地球最後のナゾ—100億人を養う土壌を求めて』藤井一至（光文社新書）

藤井一至（1981年～）は国立研究開発法人森林総合研究所主任研究員。土壌学者。

著者の研究は京大近くの吉田神社の裏山の土掘りから始まっている。

「私たちが世界中で消費している工事用の砂の量は、少なく見積もっても400億トンだ。……高さ100メートル、幅10メートルのコンクリート壁で赤道をぐると一周できる量だ。……これは世界中の河川が海へと運び出す砂の量の2倍に相当する。つまり、砂が生まれる速度の2倍の速度で砂が消費されている。……この状態は持続的どころか破壊的だ。」

11-4 生物

『生物と無生物のあいだ』福岡伸一（講談社現代新書）

福岡伸一（1959年～）は青山学院大学教授。専攻は分子生物学。

2007年度サントリー学芸賞（社会・風俗部門）受賞。新書大賞2008受賞。

評判どおり面白い。「極上の科学ミステリー」と広告されているが、物語を読むように、分子生物学の最前線を学ぶことができる。宗教や哲学や法律よりも、ましてや国が強制する道徳教育ではなく、生物学を学ぶことで、自らの存在そのものが「奇跡」であることを知り、他の存在も同じように「奇跡」であることを知ることが、倫理を学ぶ一番の近道であると思う。

『できそこないの男たち』福岡伸一（光文社新書）

新書大賞2009第2位。福岡伸一の2冊目はこれがいい。男が生物学的にダメな性であることがわかる。

『世界は分けてもわからない』福岡伸一（講談社現代新書）

新書大賞2010第6位。

『新版 動的平衡—生命はなぜそこに宿るのか』福岡伸一（小学館新書）

『新版 動的平衡2—生命は自由になれるのか』福岡伸一（小学館新書）

『新版 動的平衡3—チャンスは準備された心にのみ降り立つ』福岡伸一（小学館新書）

『生命とは何か』シュレーディンガー／岡小天・鎮目恭夫＝訳（岩波文庫）

『ゾウの時間 ネズミの時間—サイズの生物学』本川達雄（中公新書）

『ウニはすごい バッタもすごい—デザインの生物学』本川達雄（中公新書）

本川達雄（1948年～）は東京工業大学名誉教授。琉球大学助教授だった。専攻は動物生理学。高校の生物の教科書も執筆している。

『生物はなぜ死ぬのか』小林武彦（講談社現代新書）

小林武彦（1963年～）は東京大学教授。専門は基礎生物学。

新書大賞2022第2位。

「生き物は利己的に偶然生まれ、公共的に死んでいくのです。」

「旧石器～縄文時代（2500年前以前）には、日本人の平均寿命は13～15歳だったと考えられています。」

「(弥生時代) 平均寿命は20歳、人口は急激に増加して60万人とも推定されています。」

「平安時代には平均寿命は31歳、人口は700万人になりました。ただ、続く鎌倉、室町時代には気候変動による不作や政治の不安定化、それに連動して「いくさ」などが頻繁に発生し、平均寿命はまた20代に逆戻りしました。室町時代の平均寿命はなんと16歳です。その後、江戸時代に入ると社会情勢は安定して、さまざまな文化が花開きました。平均寿命も38歳まで延び、有名な人物では徳川家康は73歳まで生きています。」

明治、大正時代の平均寿命は、それぞれ女性44歳、男性43歳と延びました。戦争中は31歳となりました…最近100年間で寿命がほぼ2倍に延長したわけです。」

文学は戦争がなく社会が安定した時代に盛んとなる。

『生命をつなぐ進化のふしぎ—生物人類学への招待』内田亮子（ちくま新書）

『発酵』小泉武夫（中公新書）

『働かないアリに意義がある』長谷川英祐（ヤマケイ文庫）

長谷川英祐（1961年～）は北海道大学大学院准教授。進化生物学者。

「私たちが最初に「働きアリの2割ほどはずっと働かない」という結果を学会で発表したところ、ある新聞がそれを記事にしました。すると翌日「——働きアリの2割働かず——この研究やった人ヒマだよね」という読者の投稿ジョークが紙面に載り、思わず笑ってしまいました（本当におかしかった）。実際は1日に7～8時間の観察を2ヵ月以上続けるというハードな研究で、観察を担当した1名は疲労から途中で点滴を打ちながら観察を続け、血尿まで出した、という大変な実験だったからです。まさに血の滲む思いで遂行された研究なので、いまこうして本になると感慨深いものがあります。」

『縮む世界でどう生き延びるか？』長谷川英祐（メディアファクトリー新書）

『昆虫はすごい』丸山宗利（光文社新書）

新書大賞2015第7位。

『虫捕る子だけが生き残る』養老孟司・池田清彦・奥本大三郎（小学館101新書）

『植物はすごい—生き残りをかけたしくみと工夫』田中修（中公新書）

新書大賞2013第10位。

『栽培植物と農耕の起源』『花と木の文化史』中尾佐助（岩波新書）

中尾佐助（1916～93年）は大阪府立大学名誉教授。専攻は遺伝育種学・栽培植物学。

11-5 赤ちゃん

『胎児の世界—人類の生命記憶』三木成夫（中公新書）

三木成夫（1925～87年）は解剖学者。こういう人のことを博覧強記と言うのだろう。

「個体発生は系統発生 of 短い反復」であるという考えに基づき、墮胎された胎児の死体を解剖して、スケッチしている。「受胎32日目の胎児の顔＝古代魚類の顔」「受胎34日目の胎児の顔＝両生類の顔」「受胎36日目の胎児の顔＝原始爬虫類の顔」「受胎38日目の胎児の顔＝原始哺乳類の顔」「受胎40日目の胎児の顔＝ヒトの顔」。「地球の生物のからだには、7日目ごとに、何か目に見えぬ不可思議な波がそっと忍び寄ってくるのか」として、1週間・初七日・49日・女性の月の周期28日を例示している。

『内臓とこころ』三木成夫（河出文庫）

『私は赤ちゃん』松田道雄（岩波新書）

『私は二歳』松田道雄（岩波新書）

松田道雄（1908～98年）は小児科医。

『私は赤ちゃん』は1960年、『私は二歳』は1961年発行。60年以上読まれ続けている本である。

「危険の起こらない条件を用意しておいて捨て育ちにするというのが赤ちゃんをうまく育てるコツです。」

『赤ちゃんの不思議』 開一夫（岩波新書）

開一夫（1963年～）は東京大学教授。専攻は赤ちゃん学・発達認知神経科学・機械学習。

「発達心理学の世界では神様的な存在である、ジャン・ピアジェは、自分自身の3人の子どもが赤ちゃんのころから「実験」を行い、それに基づいて膨大な数の著作物を出版し、発達心理学の理論的基礎を築きました。また、進化論で有名なチャールズ＝ダーウィンも、1877年に自分の長男（ウィリアム＝ダーウィン）の育児日記に基づいた論文を『マインド（*Mind*）』という科学ジャーナルで発表しています」。

『ことばの発達の謎を解く』 今井むつみ（ちくまプリマー新書）

今井むつみ（1958年～）は慶應義塾大学教授。専攻は認知心理学・発達心理学・言語心理学。

「多くの人は、子どもが「大人にことばの意味を直接教わり、間違いを直してもらいながら覚える」と誤解していますが、実際には、子どもは大人の話しかけを自分で分析し、自分でことばの意味を覚えていくのです。」

第12章 共生社会・看護・医療

12-1 性差別

『私は女性にしか期待しない』松田道雄（岩波新書）

松田道雄（1908～98年）は小児科医。

『性と国家』北原みのり・佐藤優（河出書房新社）

『愛と性と存在のはなし』（NHK出版新書）

赤坂真理（1964年～）は作家。

『別冊NHK100分de名著 フェミニズム』加藤陽子・鴻巣友季子・上間陽子・上野千鶴子（NHK出版）

加藤陽子（1960年～）は東京大学教授。専攻は日本近現代史。2020年日本学術会議任命拒否6人のうちの1人。

鴻巣友季子（1963年～）は翻訳家、文芸評論家。

上間陽子（1972年～）は琉球大学大学院教授。専攻は教育学。

上野千鶴子（1948年～）は東京大学名誉教授。女性学・ジェンダー研究の第一人者。

『しゃべり尽くそう！ 私たちの新フェミニズム』

望月衣塑子・伊藤詩織・三浦まり・平井美津子・猿田佐世（梨の木舎）

『「男女格差後進国」の衝撃—無意識のジェンダー・バイアスを克服する』治部れんげ（小学館新書）

『当事者は嘘をつく』小松原織香（筑摩書房）

小松原織香（1982年～）は東北大学准教授。研究テーマは修復的司法。主な関心は、戦争・犯罪・災害などのサバイバー（生き延びた人々）の〈その後〉。

『ルポ 貧困女子』飯島裕子（岩波新書）

『性風俗のいびつな現場』坂爪真吾（ちくま新書）

『「身体を売る彼女たち」の事情—自立と依存の性風俗』坂爪真吾（ちくま新書）

『東京貧困女子。彼女たちはなぜ躓いたのか』中村淳彦（東洋経済新報社）

『日本の貧困女子』中村淳彦（SB新書）

中村淳彦（1972年～）はノンフィクション作家。

「沖縄県は琉球大学出身の公務員を頂点とする厳然とした学歴社会である。学歴がない者たちの月収は全国最下位で平均賃金に及ばず、月手取り10万～11万円ほど。」

「那覇市周辺の物価や家賃は内地とさほど変わらない。公務員、大企業のサラリーマン、公共事業に絡んだビジネスで成功した一部の者以外、普通に働いても普通の生活ができないという状態なのだ。」

「長年、県全体に雇用がない中で、格差と貧困が蔓延、貧困家庭の生活環境は荒れている。観光以外の大きな産業がないので、負の連鎖が起こる。」

『往復書簡 限界から始まる』上野千鶴子＋鈴木涼美（幻冬舎文庫）

上野千鶴子（1948年～）は東京大学名誉教授。女性学・ジェンダー研究の第一人者。

鈴木涼美（1983年～）は作家。東京大学大学院修士。AV女優、日本経済新聞記者だった。

2022年中国語訳が、映画・書籍を評価する最大級のサイト「豆瓣」のブックオブザイヤー1位に。

上野「恋愛はしないよりはしたほうがずっとよい、と今でも私が思っているのは、恋愛というゲームの場では、ひとは自己と他者についてとことん学ぶからです。……恋愛とは相手の自我を奪い、自分の自我を放棄する争闘の場です。」

上野「わたしは社会変革とは、ホンネの変化ではなく、タテマエの変化だと考えています。そして、そこまでが限界だと考えています。」

『子どもと話すマッチョってなに?』クレマンティヌ・オータン／山本規雄＝訳（現代企画室）

レマンティヌ・オータン（1973年～）はフェミニスト・強姦被害者。

訳者の山本規雄（1967年～）は大学の同級生。

「下町に住んでいて、社会から除け者にされていると感じているような若者は、マッチョな言動に身を任せてしまいがちというのもまた確か。社会から締め出されていても、女性に対する優越感を表現することによって自分の価値を高めることができ、自己愛を取り戻せるからね。」

『女の子が生きていくときに、覚えていてほしいこと』西原理恵子（角川書店）

西原理恵子（1964年～）は漫画家。

『おっさんの掟—「大阪のおばちゃん」が見た日本ラグビー協会「失敗の本質」』谷口真由美（小学館新書）

谷口真由美（1975年～）は法学者。大阪芸術大学客員准教授。専門は国際人権法・ジェンダー法など。全日本おばちゃん党を結成した（その後解散）。

「私が定義する「令和のおっさん」は次のような人たちです。

- ・上司や目上の人間の前では平身低頭。組織から弾き出されたくないのと、とくに「ムラの長」には絶対服従。しかし部下や下請けなど立場の弱い人間にはとにかく高圧的。
- ・口癖は「みんながそう言っている」「昔からそうだよ」「それが常識だ」という3つの思考停止ワード——理屈ではなく、慣例や同調圧力で部下を黙らせる。
- ・とにかく保守的。……部下や若手からの提案に対しては「リスクが大きい」「誰が責任を取るのか」と否定から入る。自分が退職する日まで“勝ち逃げ”できればいいので、組織が退化してもいいと考えている。「若い人のために一肌脱ぐ」なんてことは地球最後の日が来てもやらない。
- ・そのくせ「アレオレ詐欺」の常習犯。人の功績、部下の功績は自分の手柄。会社になんの貢献もしないかわりに、目の前の帳尻を合わせて上司の機嫌を伺う要領の良さばかりである。」

『カミングアウト』砂川秀樹（朝日新書）

砂川秀樹（1966年～）は文化人類学者。ゲイの活動家。

『トランスジェンダー入門』周司あきら・高井ゆと里（集英社新書）

周司あきは主夫、作家。

高井ゆと里（1990年～）は群馬大学准教授。倫理学者。

新書大賞2024第5位。

こんなにも生きにくい人がいることを、知らずに生きてきたことをシス男性として反省した。

12-2 高齢者

『沖縄が長寿でなくなる日』沖縄タイムス「長寿」取材班編（岩波書店）

『介護保険—地域格差を考える』中井清美（岩波新書）

『介護—現場からの検証』結城康博（岩波新書）

『下流老人—一億総老後崩壊の衝撃』藤田孝典（朝日新書）

藤田孝典（1982年～）はNPO法人ほっとプラス代表理事，社会福祉士。

新書大賞2016第5位。

『在宅ひとり死のススメ』上野千鶴子（文春新書）

『体力の正体は筋肉』樋口満（集英社新書）

12-3 子ども・児童虐待

『子どもが育つ条件—家族心理学から考える』 柏木恵子（岩波新書）

柏木恵子（1932年～）は東京女子大学名誉教授。専攻は発達心理学・家族心理学。

子育て支援は、子育てする「大人」への支援である。子ども自身の育ちへの支援になっていない場合も多い。

「つくらない」という選択もある中で「つくる」と決めて「つくった」子は親の「もちもの」的存在となりがちです」。

「子どもが育つ条件をつくるためには、おとな自身も発達し、成長しつづけることが前提です」。

観察学習の「バンデュラは「子どもは（親から）いわれたことはしない、親にみたことをする」と記しています」。教師が何をどのように教えるかだけではなく、教師がどのような人間であるのかが大切である。

『それでも子どもは減っていく』 本田和子（ちくま新書）

本田和子（1931～2023年）はお茶の水女子大学名誉教授。お茶の水女子大学初の女性学長。専攻は児童学・児童文化論・児童社会史。

子ども学の権威が78歳で書いた本（2009年出版）。

「20世紀の初めに、スウェーデンの女流思想家エレン・ケイは、近代の訪れを「婦人と子どもの時代」と歓迎し、彼・彼女らの生きやすい社会の構築が輝かしい未来に繋がると主張した。彼女は、当時新興科学であった「優生学」を踏まえて、良質の遺伝子を持った子どもこそが未来を進化させると説き、子どもにバラ色の夢を託した」「彼女にとって、「母性」こそが何物にも勝る女性の価値と見なされていたのである」。

「3歳までは母親が養育すべきとする「3歳児神話」は、関係者たちの継続的な努力によって真実度が試され、現在母親の養育の絶対視は否定されている。3歳児神話の根拠とされたのは、英国の精神分析家ジョン・ボウルビイの「アタッチメント理論（情緒的愛着行動の意）」であった。つまり、乳幼児の発達の阻害は、「母性的養育の喪失」であるとして、母子の密着を奨励したのである。彼のこの理論は、WHOの要請に応じて1951年に提出された。しかし、1980年以降、ボウルビイ説に疑義を呈する研究が相次ぎ、彼も、後には「主要な養育者に代わって、二次的養育者もその責を果たすことが出来る」として、自身の「母親絶対説」を修正している」。

『子どもが心配—人として大事な三つの力』 養老孟司（PHP新書）

養老孟司（1937年～）は医学者・解剖学者。東京大学名誉教授。医学博士。

以下の4名との対談集。

宮口幸治は児童精神科医・臨床心理士・医学博士。立命館大学教授。

高橋孝雄（1957年～）は慶應義塾大学名誉教授。小児科医・医学博士。

小泉英明（1946年～）は日立製作所名誉フェロー。物理学者・脳科学者。

高橋和也（1961年～）は自由学園学園長。

『児童虐待—現場からの提言』 川崎二三彦（岩波新書）

『虐待死—なぜ起きるのか、どう防ぐか』 川崎二三彦（岩波新書）

川崎二三彦（1951年～）は、32年間児童相談所に勤務した児童福祉士。2015年から子どもの虹情報研修センター所長。

『ルポ 児童相談所』 大久保真紀（朝日新書）

大久保真紀（1963年～）は朝日新聞編集委員。本当によい記事を書く。

『ルポ 虐待—大阪二児置き去り死事件』 杉山春（ちくま新書）

杉山春（1958年～）はルポライター。生活保護家庭で育った青年たちの支援にも携わる。

新書大賞2014第7位。

『児童虐待から考える—社会は家族に何を強いてきたか』 杉山春（朝日新書）

『誕生日を知らない女の子 虐待—その後の子どもたち』 黒川祥子（集英社文庫）

黒川祥子（1959年～）はノンフィクション作家。シングルマザー。

第11回開高健ノンフィクション賞受賞。

『虐待された少年はなぜ、事件を起こしたのか』 石井光太（平凡社新書）

『子どもの脳を傷つける親たち』 友田明美（NHK出版新書）

12-4 障害者

「特別支援教育」は10-12にまとめた。

『障害者差別を問いなおす』 荒井裕樹（ちくま新書）

荒井裕樹（1976年～）は二松學舎大学准教授。専攻は障害者文化論・日本近現代文学。2022年〔池田晶子記念〕わたくし、つまりNobody賞受賞者。

脳性マヒの障害者団体「青い芝の会」の思想と運動を通して、障害者差別を問いなおす。

『声生まれる—聞く力・話す力』 竹内敏晴（中公新書）

竹内敏晴（1925～2009年）は演出家。16歳まで聴覚障害で、ほとんど聞こえなかったが、一高から東大に進学・卒業した。ある程度自在に話すことができるようになったのは、聞こえてから20数年後の40歳代半ばになってからである。彼はそれを「ことばが劈（ひら）かれた」と表現した。宮城教育大学教授などで教育に携わりながら、「からだとことばのレッスン」を行った。

「子どもが自分がイヤなことはイヤだと言え、相手に合わせるのではない自分がほんとうに感じていることを、十分にことばにできるようになるためには、なによりも、母の、父の、友だちの、そして教師の、じかに子どもにふれてくる呼びかけが必要です。それに応えることによって、子どもの声は成長し、自分のことばになる。人という生きものは、ことばによって、人間になるのですから」。

『話す』とは、声によって人に働きかけ、相手の行動＝存在の仕方を変えることだ」。

『重い障害を生きるということ』 高谷清（岩波新書）

高谷清（1937年～）は小児科医。重症心身障害児施設である第一びわこ学園園長（1984～97年）。2011年ベストロッチー教育賞受賞者。

「さまざまな生きもの、それに人類も長い歴史のなかで多くの変化を遂げ、また死に絶えた生物種も多い。種全体の変貌とともに、個々の個体の多様性があり、「障害」といわれる生きるのに不利な状態も存在することになる。その原因は遺伝性を含む出生前のこともあるし、出生時や出生後の無酸素症などが原因のこともある。どのような生物種も病気や障害を抱えながら変貌を遂げている。というよりは変貌が障害を生み出したとも言えるし、その生物種に障害の個体を生み出しつつ、変貌を遂げてきたとも言える。そういう意味では、人類の障害を引き受けている個体は「人類戦士」であると言ってよいのではないだろうか」。

重度の障害者の問題を通して、人間とは何かを根本的に考える哲学書として推薦する。

『〈弱さ〉を〈強み〉に—突然複数の障がいをもった僕ができること』 天島大輔（岩波新書）

天島大輔（1981年～）は「世界でもっとも障がいの重い研究者のひとり」。四肢マヒ、発話障がい、視覚障がい、嚥下障がいが残る。専門は社会福祉学・当事者研究。参議院議員（2022年～）。

『つながりの作法—同じでもなく 違うでもなく』 綾屋紗月・熊谷晋一郎（NHK出版）

綾屋紗月（1974年～）はアスペルガー症候群の当事者。東京大学特任准教授。

熊谷晋一郎（1977年～）は脳性まひの電動車いすユーザー。小児科医。東京大学准教授。

『〈責任〉の生成—中動態と当事者研究』 國分功一郎・熊谷晋一郎（新曜社）

國分功一郎（1974年～）は哲学者。東京大学教授。

國分「キー・コンピテンシーを反対に読めば、自閉症の条件になる。」「数字としてこの30年で自閉症はどのくらい増えているのでしょうか？」

熊谷「データによりますけれども、ASDの診断数は、30倍に増えています。」

國分「……昔なら、ちょっと変わっているかもね、くらいですんだものを、すぐに診察してしまう。だから診断数が増えているというわけですね。」

熊谷「国の支出をなるべく抑え、「やはり自己決定、大事だよ」と個人の主体性を称揚しながら、「でも自己責任でね」と社会的なことのしわ寄せを個人にやらせている。」

國分「アレントによれば、孤独とは思考のための条件です。私と私自身との対話、それこそが思考である。だから孤独は人間にとってとても大切なことだと言えます。」「現代はこの孤独が危機に瀕している。……孤独のなかでの思考が行なわれなくなると、それを埋めるための過剰なコミュニケーションが求められる。そこでもたらされるのは言葉の衰退です。思考の葛藤、その葛藤を言葉にするうえでの葛藤、そうしたものがなくなったとき、言葉はあらかじめ存在している情報を伝えるだけの単なる記号になる。」

現行の学習指導要領で、「言葉」を「情報」として落とし込める記述が多いのは、思考せずに国家と財界の言いなりの「人材」を育成するためである。

『輝—いのちの言葉』 臼田輝（自費出版）

臼田輝（1993～2009年）は、1歳の誕生日直前にマンション5階から転落し、頭部損傷による、四肢体幹機能に重い障害を負い、16歳で亡くなった。私立の特別支援学校・愛育学園に通い、都立特別支援学校の中等部1年生からパソコン指導を介して文章表現を開始した。

ことばを発することがなく、ことばを持たないと考えられていた重度の障害者が、ことばを理解し、ことばで思考していることを教えてくれる。自費出版のため、注文は愛育学園にメールかファックスで。

『さわっておどろく！—点字・点図がひらく世界』 広瀬浩二郎・嶺重慎（岩波ジュニア新書）

広瀬浩二郎（1967年～）は国立民族学博物館教授。専攻は日本宗教史・民俗学・障害者文化論。13歳で失明。筑波大学附属盲学校から京都大学文学部に進学。彼の入学の際に大学のスロープづくりなどのバリアフリー化が少し行われた。

嶺重慎（1957年～）は京都大学名誉教授。専攻は宇宙物理学。

『目の見えない人は世界をどう見ているのか』 伊藤亜紗（光文社新書）

伊藤亜紗（1979年～）は東京工業大学教授。専攻は美学・現代アート。2020年〔池田晶子記念〕わたくし、つまりNobody賞受賞者。

「個人の「できなさ」「能力の欠如」としての障害のイメージは、産業社会の発展とともに生まれたとされています。現代まで通じる大量生産、大量消費の時代が始まる時期、均一な製品をいかに速くいかに大量に製造できるかが求められるようになりました。その結果、労働の内容も画一化されていきます。車を作るのに、Aさんが作ったのとBさんが作ったので出来上がりが違うのでは困る。「誰が作っても同じ」であることが必要であり、それは「交換可能な労働力」を意味します。

こうして労働が画一化したことで、障害者は「それができない人」ということになってしまった。それ以前の社会では、障害者には障害者のできる仕事が割り当てられていました。ところが「見えないからできること」ではなく「見えないからできないこと」に注目が集まるようになってしまったのです。」

『ママは身長100cm』 伊是名夏子（ディスカヴァー・トゥエンティワン）

伊是名夏子（1982年～）は沖縄出身のコラムニスト。電動車いすユーザー。沖縄教員塾第4期生の小学校教諭・第6期生の特別支援学校教諭が首里高の同級生。

『しょうぶ学園40周年記念誌 創ってきたこと、創っていくこと ここには屈託のない笑いがある。』

社会福祉法人太陽会・SHOBU STYLE

『累犯障害者』山本譲司（新潮文庫）

山本譲司（1962年～）は福祉活動家。衆議院議員（1996～2000年）。政策秘書給与の流用事件で実刑判決を受け433日間の獄中生活を経験。

「被害者になる障害者のほうが、加害者になる障害者よりも、何十倍も多い」事実を踏まえて、触法障害者の問題を取り上げている。彼らの多くが刑務所を「一番暮らしやすかった」と言うからだ。2004年の「新受刑者総数32090名のうち7172名（全体の約22%）が知能指数69以下の受刑者」,「測定不能者も1687名おり,これを加えると,実に3割弱の受刑者が知的障害者として認定される」。

「善悪の判断が定かでないため,たまたま反社会的な行動を起こし検挙された場合も,警察の取調べや法廷において,自分を守る言葉を口述できない。反省の言葉も出てこない。」「司法の場での心証は至って悪く,・・・反省なき人間と看做され,実刑判決を受ける可能性が高くなるのだ。」「知的障害のある受刑者の7割以上が刑務所への再入所者」。そのうち「10回以上服役している者が約2割を占める」。

「我が国の障害者福祉に使われる予算」は,「対国内総生産比に占める障害者予算」で「スウェーデンの約1/9,ドイツの約1/5,イギリスやフランスの約1/4,そして社会保障制度の不備が指摘されるアメリカと比べても,その1/2以下となっている。」

12-5 看護・医療

『いのちの始まりと終わりに』柳澤桂子（草思社）

『医療の原点』中川米造（岩波書店）

『医療の倫理』星野一正（岩波新書）

『いのち—生命科学に言葉はあるか』最相葉月（文春新書）

『「生きている」を見つめる医療』中村桂子+山岸敦（講談社現代新書）

『はじめて学ぶ生命倫理—「いのち」は誰が決めるのか』小林亜津子（ちくまプリマー新書）

『「尊厳死」に尊厳はあるか—ある呼吸器外し事件から』中島みち（岩波新書）

中島みち（1931～2015年）はノンフィクション作家。

2006年の富山県射水市民病院での人工呼吸器外し事件に半分以上の分量が割かれている。当該医師の「アバウトな理解・対応」「独善的な行動」「過剰手術＝切りすぎ」の実態は,目に余るものがある。この事件が発覚したのは,病院改革の一環としての看護師の意識改革によるものである。看護担当副院長として迎えられた看護師の意識改革の取り組みによって,当該医師の呼吸器はずしに何の疑問も出なかった現場から,疑問の声が出たのである。患者と家族の側に立って医師に意見できる看護師の存在は,どうしても必要である。

『移植医療』棚島次郎・出河雅彦（岩波新書）

『看護師という生き方』宮子あずさ（ちくまプリマー新書）

宮子あずさ（1963年～）は職歴35年の現役看護師。

『看護の力』川嶋みどり（岩波新書）

川嶋みどり（1931年～）は日本赤十字看護大学名誉教授。看護師歴60年。

『看護—ベッドサイドの光景』増田れい子（岩波新書）

『リハビリテーション』砂原茂一（岩波新書）

『新しいリハビリテーション—人間「復権」への挑戦』大川弥生（講談社現代新書）

『地域リハビリテーション—あせらずあきらめず』長谷川幹（岩波アクティブ新書）

『タバコはなぜやめられないか』 宮里勝政（岩波新書）

『他者と生きる—リスク・病い・死をめぐる人類学』 磯野真穂（集英社新書）

磯野真穂（1976年～）は東京工業大学教授。専門は文化人類学，医療人類学。

『感染症と文明—共生への道』 山本太郎（岩波新書）

山本太郎（1964年～）は長崎大学教授。医師。専攻は国際保健学・熱帯感染症学。アフリカ，ハイチなどで感染症対策に従事。

感染症による免疫を持っているか，持っていないかが異文化接触で果たした役割を歴史的に紹介する。歴史が違って見えてくる。

第13章 哲学・宗教・思想

13-1 哲学全般

『子ども』のための哲学』永井均（講談社現代新書）

永井均（1951年～）は日本大学教授だった。専攻は哲学・倫理学。

哲学の入門書として一番のお薦め。

『哲学入門』三木清（岩波新書）

『入門！ 論理学』野矢茂樹（中公新書）

野矢茂樹（1954年～）は東京大学名誉教授。専攻は哲学。

「論理」とは、ことばとことばの関係の一種なのです。否定・「かつ」・「または」・「ならば」・命題論理・「すべて」・「存在する」・述語論理について、説明する本である。

『世界哲学史1—古代Ⅰ 知恵から愛知へ』伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留編著（ちくま新書）

『世界哲学史2—古代Ⅱ 世界哲学の成立と展開』伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留編著（ちくま新書）

『世界哲学史3—中世Ⅰ 超越と普遍に向けて』伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留編著（ちくま新書）

『世界哲学史4—中世Ⅱ 個人の覚醒』伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留編著（ちくま新書）

『世界哲学史5—中世Ⅲ パロックの哲学』伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留編著（ちくま新書）

『世界哲学史6—近代Ⅰ 啓蒙と人間感情論』伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留編著（ちくま新書）

『世界哲学史7—近代Ⅱ 自由と歴史的発展』伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留編著（ちくま新書）

『世界哲学史8—現代 グローバル時代の知』伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留編著（ちくま新書）

『世界哲学史別巻—未来をひらく』伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留編著（ちくま新書）

伊藤邦武（1949年～）は京都大学名誉教授。専攻は哲学，思想史。

山内志朗（1957年～）は慶應義塾大学名誉教授。専門は中世哲学，倫理学。

中島隆博（1964年～）は東京大学教授。専門は中国哲学，比較哲学，表象文化論。

納富信留（1965年～）は東京大学教授。専攻は西洋古代哲学，西洋古典学。

理性ではなく感情を近代の始まりに据えた6巻は圧巻である。見つけた誤植は大学の同級生が勤める出版社に知らせた。

『中国哲学史—諸子百家から朱子学，現代の新儒家まで』中島隆博（中公新書）

『物語 哲学の歴史—自分と世界を考えるために』伊藤邦武（中公新書）

「魂の哲学—古代・中世」，「意識の哲学—近代」，「言語の哲学—20世紀」，「生命の哲学—21世紀へ向けて」という4章立てである。

『西洋哲学史—古代から中世へ』熊野純彦（岩波新書）

『西洋哲学史—近代から現代へ』熊野純彦（岩波新書）

熊野純彦（1958年～）は東京大学教授だった。専攻は倫理学・哲学史。論理の切れ味は抜群。文体が小気味よい。上高の哲学の先生です。

以下のような話が紹介されている。ベーコンの秘書を務めていたのが社会契約説のホッブズであり、ベーコンの侍医を務めていたのが血液循環論のハーヴェーである。ホッブズは、デカルトの『省察』初稿を読み、疑問点を提出して、デカルトが応えた。ロックの『人間知性論』が出版されると、ライプニッツは『人間知性新論』を執筆したものの、ロックの死の報に接して公刊をひかえる。ロックの友人が万有引力の法則のニュートンである。ニュートンとライプニッツの微積分法の発見にまつわるプライオリティの争いは有名である。ヒュ

ームの友人が古典派経済学の祖アダム＝スミスである。

『近代哲学の名著—デカルトからマルクスまでの24冊』熊野純彦編（中公新書）

以下は24冊の一部。デカルト『方法序説』。バークリ『人知原理論』。カント『純粹理性批判』。フィヒテ『全知識学の基礎』。ロック『人間知性論』。ライプニッツ『人間知性新論』。ヘーゲル『精神現象学』。ライプニッツ『形而上学叙説』。ヒューム『人性論』。カント『判断力批判』。ヘーゲル『論理学』。デカルト『省察』。スピノザ『エチカ』。シェリング『人間的自由の本質』。ルソー『言語起源論』。スミス『道徳感情論』。カント『実践理性批判』。マルクス『経済学批判要綱』。

『現代哲学の名著—20世紀の20冊』熊野純彦編（中公新書）

以下は20冊の一部。ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』。ハイデガー『存在と時間』。西田幾多郎『西田幾多郎哲学論集』。ベルクソン『時間と自由』。和辻哲郎『倫理学』。ベンヤミン『ドイツ悲劇の根源』。アドルノ『否定弁証法』。

『日本哲学小史—近代100年の20篇』熊野純彦編著（中公新書）

西田幾多郎，和辻哲郎，三木清などが取り上げられる。

『日本思想史』末木文美士（岩波新書）

『日本倫理思想史』佐藤正英（東京大学出版会）

佐藤正英（1936年～）は東京大学名誉教授。専攻は倫理学・日本倫理思想史。

『西洋哲学の10冊』左近司祥子編著（岩波ジュニア新書）

左近司祥子（1938年～）は学習院大学名誉教授。専攻はギリシア哲学。

プラトン『饗宴』，アリストテレス『ニコマコス倫理学』，アウグスティヌス『告白』，デカルト『方法序説』，カント『純粹理性批判』，ルソー『告白』，ニーチェ『ツァラトストラはこう言った』，ベルグソン『時間と自由』，ハイデガー『存在と時間』，ラッセル『幸福論』の10冊。

『哲学マップ』貫成人（ちくま新書）

『日本語の哲学』長谷川三千子（ちくま新書）

『言語と「期待」』重松健人（関西学院大学出版会）

重松健人（1966年～）は関西学院大学非常勤講師。大学の同級生。

大学生向けの哲学の入門書。20年以上も会っていないのに，同じような本を読んでいるのには驚いた。

『正義論の名著』中山元（ちくま新書）

中山元（1949年～）は思想家・翻訳家。

以下は一部。ホメロス『オデュッセイア』。プラトン『国家』。アリストテレス『ニコマコス倫理学』。キケロ『義務について』。アウグスティヌス『神の国』。トマス・アクィナス『神学大全』。マキアヴェッリ『君主論』。ホブズ『リヴァイアサン』。スピノザ『エチカ』。ロック『市民政府論』。ルソー『社会契約論』。カント『人倫の形而上学』。ヒューム『人性論』。アダム＝スミス『道徳感情論』。ベンサム『道徳および立法の諸原理序説』。ヘーゲル『法の哲学』。マルクス『ドイツ・イデオロギー』。ニーチェ『道徳の系譜学』。ベンヤミン『暴力批判論』。ロールズ『正義論』。ハーバーマス『討議倫理』。レヴィナス『全体性と無限』。

『自己啓発の名著30』三輪裕範（ちくま新書）

三輪裕範（1957年～）は経済評論家。

以下は30冊の一部。福沢諭吉『福翁自伝』。勝海舟『氷川清話』。ラ＝ロシュフコー『ラ＝ロシュフコー箴言集』。フランシス＝ベーコン『ベーコン随想集』。洪自誠『菜根譚』。新渡戸稲造『自警録』。幸田露伴『努力論』。ショウペンハウエル『読書について』。三木清『読書と人生』。

『現代思想の名著30』仲正昌樹（ちくま新書）

仲正昌樹（1963年～）は金沢大学教授。専攻は法哲学・政治思想史。

以下は30冊の一部。ハイデガー『存在と時間』。サルトル『存在と無』。レヴィナス『全体性と無限』。レヴィ＝ストロース『野生の思考』。フーコー『言葉と物』。ベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』。アドルノ・ホルクハイマー『啓蒙の弁証法』。吉本隆明『共同幻想論』。

『愛について』 今道友信（中公文庫）

『愛』 苫野一徳（講談社現代新書）

『人類哲学序説』 梅原猛（岩波新書）

梅原猛（1925～2019年）は京都市立芸術大学名誉教授（学長だった）・国際日本文化研究センター名誉教授（初代所長）。哲学者。その日本研究は「梅原日本学」とよばれる。

『ソフィーの世界—哲学者からの不思議な手紙』 ヨースタイン・ゴルデル／池田香代子＝訳（NHK出版）

『暇と退屈の倫理学』 國分功一郎（新潮文庫）

國分功一郎（1974年～）は東京大学教授。哲学者。哲学書なのに読みやすく、おもしろい。

「スピノザ [1632－1677]」という哲学者がいる。彼は真理やその理解についてとてもおもしろいことを考えた。私たちは何かを理解することがある。「分かった！」と思えるときがある。そのとき、もちろんその対象のことを理解したわけである。たとえば、数学の公式の説明を受けてそのような感覚を得たのなら、その公式を理解できたわけである。

しかしそれだけではない。人は何か分かったとき、自分にとって分かるとはどういうことかを理解する。「これが分かるということなのか……」という実感を得る。

人はそれぞれ物事を理解する順序や速度が違う。同じことを同じように説明しても、だれしものが同じことを同じように理解できるわけではない。だから人は、さまざまなものを理解していくために、自分なりの理解の仕方を見つけていかなければならない。

どうやってそれを見つけていけばよいか？ 特別な作業は必要ではない。実際に何かを理解する経験を繰り返すことで、人は次第に自分の知性の性質や本性を発見していくのである。なぜなら、「分かった」という実感は、自分にとって分かるとはどういうことなのかをその人に教えるからである。スピノザは理解という行為のこのような側面を指して「反省的認識」と呼んだ。認識が対象だけでなく、自分自身にも向かっている（反省的）からである。

だから大切なのは理解する過程である。そうした過程が人に、理解する術を、ひいては生きる術を獲得させるのだ。

逆に、こうした過程の重要性を無視したとき、人は与えられた情報の単なる奴隷になってしまう。こうしなければならないからこうするということになってしまう。たとえば、数学の公式の内容や背景を理解せず、これに数値をあてはめればいいとだけ思っていたら、その人はその公式の奴隷である。そうすると、「分かった！」という感覚をいつまでたっても獲得できない。したがって、理解する術も、生きる術も得られない。ただ言われたことを言われたようにすることしかできなくなってしまう。」

13-2 ギリシア哲学

『ソクラテスの弁明』 プラトン

『クリトーン』 プラトン

『パイドン』 プラトン

『哲学者の誕生—ソクラテスとは何者か』 納富信留（ちくま学芸文庫）

納富信留（1965年～）は東京大学大学院教授。専攻は西洋古代哲学、西洋古典学。

古代ギリシアの時代状況・社会状況の中で、いかに哲学が生まれたかを知ることができる。同性愛・少年愛

が当たり前の時代だから、ソクラテスの同性の恋人の話もでてくる。

『知者たちの言葉—ソクラテス以前』 斎藤忍随（岩波新書）

斎藤忍随（1917～86年）は東京大学名誉教授。専攻は哲学。

ヘラクレイトスとエンペドクレスを中心に扱い、補足的にデモクリトスを取り上げている。

次のようにある。「原子論の哲学者として知られるデモクリトスは、知識の広い点ではアリストテレスにも匹敵するのではないかと思われるほどの天才であった」。彼が「ペルシア、バビロニア、エジプトまで旅行したことは確かであるし、インド、エチオピアまでも足を伸したという説さえある」。彼の著作目録は「原子論の基本理論、宇宙論、天文学、地理学、生理学、医学、感覚論、知識論、数学、磁気学、植物学、音楽理論、言語学、倫理学、農業、絵画、その他の領域をおおっているのである」。

『ソクラテス』 田中美知太郎（岩波新書）

田中美知太郎（1902～85年）は京都大学名誉教授。専攻は西洋古代哲学。

「いろいろな知識を外から注ぎこむよりも、むしろ自分で考え、自分で発見させることが、教育者の仕事であり、外来の知識は、出産を助けるための投薬や呪文として、適当に用いなければならないことが言われているのである。もしソクラテスが、新しい教育運動の主動者であったとするならば、それはこのような教育原理の主張者としてであっただろう」。

『プラトン』 斎藤忍随（岩波新書）

「アリストテレスが言うように、「プラトンの対話篇が詩と散文の中間にある」とすれば、対話篇は一種の文学作品であると言ってよいが、そうすると、主人公ソクラテスにもプラトンの虚構の手が入っていることになるだろう」。

『プラトンの哲学』 藤沢令夫（岩波新書）

藤沢令夫（1925～2004年）は京都大学名誉教授。専攻は西洋哲学史、ギリシア哲学。

「プラトンのアカデメイアでは、「問答・対話の術」（ディアレクティケー）を学ぶための予備学問として、数学的諸学科——算数・幾何学・天文学・音楽理論など——が重要視されたことが特色となっている」。

『プラトンとの哲学—対話篇を読む』 納富信留（岩波新書）

7つの対話篇『ゴルギアス』『ソクラテスの弁明』『パイドン』『饗宴』『ポリテイア（国家）』『ティマイオス』『ソフィスト』について、あらすじを紹介し、解説する。

『アリストテレス—自然学・政治学—』（岩波新書）

山本光雄（1905～81年）は東京都立大学名誉教授。専攻は西洋古代哲学。

「弁論術はギリシア人の自由な弁論を愛好する素質に発し、民主主義の発展に応じて発達し、アリストテレスによって学問的に術として組織された」。

『アリストテレス入門』 山口義久（ちくま新書）

13-3 宗教全般

『ものがたり宗教史』 浅野典夫（ちくまプリマー新書）

浅野典夫（1960年～）は大阪府立高校社会科教諭。

ユダヤ教・キリスト教・イスラーム教・仏教・ヒンドゥー教について基本的な内容を解説している。

「24日はクリスマスイブ。イブを前日の意味だと思っている人がいますが、イブはイブニング、夜の意味です。では、25日クリスマスのイブニングがなぜ24日なのでしょう。これは、ユダヤ人の風習に由来します。われわれは日の出を一日の始まりと考えますが、ユダヤ人は日没を一日の始まりとしていました。ですから、25日の夜は、その前日の夜なのです」。

「世界中に仏塔はどのくらいあるかわかりませんが、その地下には必ずガウタマの遺骨が納めてある建前です。だからガウタマの遺骨はどんどん細かく分割されて米粒ほどに小さくなっており、これを仏舎利^{ぶつしゃり}といいます。寿司屋さんで米のことをシャリというのはここから来ています。世界中の仏舎利を集めると数十人の人骨になるそうです」。

『教科書の中の宗教—この奇妙な実態』藤原聖子（岩波新書）

藤原聖子（1963年～）は東京大学大学院教授。専攻は比較宗教学。

公民志望者は必読。「日本の倫理教科書はみな、例外なく、古代ユダヤ教を「律法主義」「形式主義」「選民思想」の言葉（いずれか、またはすべて）で形容している。それに対して、少なくともイギリス、アメリカ、ドイツ、フランスの教科書は、ユダヤ教を説明するときに「律法主義」「選民思想」という単語は使わないのが常識のようである。……「主義」という接尾語をつけると、非難めいたニュアンスが強まる。「律法主義」や「形式主義」という言葉は、ユダヤ教に対するマイナスのステレオタイプであり、一種の差別語なのである。「選民思想」もしかりである」。

『宗教学の名著30』島蘭進（ちくま新書）

島蘭進（1948年～）は東京大学名誉教授。主な研究領域は比較宗教運動論、近代日本宗教史。

以下は30冊の一部。空海『三教指帰^{さんこうしきき}』。ウェーバー『プロテスタンティズムと資本主義の精神』。エリクソン『幼児期と社会』。ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』。ヤスパース『哲学入門』。

13-4 ユダヤ教・キリスト教・イスラーム

『聖書』「創世記」「出エジプト記」「レビ記」「マタイ伝」

『コーラン（上中下）』井筒俊彦＝訳（岩波文庫）

『ユダヤ教 キリスト教 イスラーム—神教の連環を解く』菊池章太（ちくま新書）

菊池章太（1959年～）は東洋大学教授。カトリック神学、比較宗教史専攻。

「ユダヤ教における福祉の精神はイスラームに受け継がれたるイスラームこそは地上における福祉事業をもっとも成功したかたちで実現し得た宗教である。近世のキリスト教における福祉事業の多くは、イスラームにおいて発展したそれを継承したものである。」

『聖書入門』小塩力（岩波新書）

『マルティン・ルター—ことばに生きた改革者』徳善義和（岩波新書）

徳善義和（1932～2023年）はルーテル学院大学名誉教授。ルーテル神学校名誉教授。専攻は歴史神学（宗教改革）。

ルター作詞・作曲の「神はわがやぐら」は、ナチスが軍靴音を響かせた行進曲として利用した。そのため、過去の過ちを忘れない人たちの多くは、この讃美歌を歌うことにためらいを感じるそうである。

『ふしぎなキリスト教』橋爪大三郎×大澤真幸（講談社現代新書）

橋爪大三郎（1948年～）は東京工業大学名誉教授。社会学者。

大澤真幸（1958年～）は京都大学教授だった。社会学者。

新書大賞2012受賞。

対談なので読みやすい。「近代の根拠となっている西洋とは何か。もちろん、西洋の文明的なアイデンティティを基礎づけるような特徴や歴史的条件はいろいろある。だが、その中核にあるのがキリスト教であることは、誰も否定できない」。

『ウオッチマン・ニーの証し』（日本福音書房）

『カラー版』メッカ』野町和嘉（岩波新書）

野町和嘉（1946年～）は写真家でムスリム。

メッカとメディナは、ムスリム以外は入ることができない。筆者はムスリムだから、メッカに入り、写真を撮ることができた。

ラマダーン（断食）について以下のように解説している。「ひと月のあいだ、地球上で12億もの人間が等しく体験している、飢えと渇きの果ての食の輝き、いのちの更新の感動を、生きることに忙しすぎる私たちは感知できないでいる」。

『マホメット』井筒俊彦（講談社学術文庫）

『イスラーム哲学の原像』井筒俊彦（岩波新書）

井筒俊彦（1914～93年）は慶應義塾大学名誉教授。専攻は哲学、意味論。岩波文庫『コーラン（上中下）』の翻訳者である。

英文の著作が多く、30以上の言語を操り、語学の天才と言われている。没後30年の現在も日本語への翻訳出版がつづいている。本書の後半も、外国語で行った講演を自ら日本語に移したものである。

『コーランの読み方―イスラーム思想の謎に迫る』ブルース＝ローレンス／池内恵＝訳（ポプラ新書）

ブルース＝ローレンス（1941年～）はデューク大学教授。専門はイスラーム学。アメリカ人。

13-5 インドの思想・宗教

『インド哲学10講』赤松明彦（岩波新書）

赤松明彦（1953年～）は京都大学名誉教授。専攻はインド哲学。

「ウパニシャッド思想の中心にあるのは、ブラフマン（梵）とアートマン（我）の同一化、すなわち「梵我一如」であると言われるが、これが意味しているのは、宇宙の原理と個体の原理の一本化ということに他ならない。」

「人間存在を支える最も重要なものとしての思考力と息と言葉もまた、その要素に還元すれば、食物と水と熱の三要素の組み合わせから成っているというのである。「思考力は食物から成り、息は水から成り、言葉は熱から成る」

『法句経（ダンマパダ）』

『ブッダの真理のこぼ・感興のこぼ』中村元＝訳（岩波文庫）で読んだ。

『スッタニパータ』

『ブッダのこぼ―スッタニパータ』中村元＝訳（岩波文庫）で読んだ。

『〈カラー版〉ブッダの旅』丸山勇（岩波新書）

美しい風景の中で、ブッダの足跡をたどれる。思想・宗教を、それが生まれた時代背景や土地と結びつけて理解することは大切である。

『新釈尊伝』渡辺照宏（ちくま学芸文庫）

『仏教 第二版』渡辺照宏（岩波新書）

『日本の仏教』渡辺照宏（岩波新書）

渡辺照宏（1907～77年）は仏教学者。専攻はインド哲学・仏教。サンスクリット語、パーリ語、アルダマーガディー語、プラークリット語、チベット語などに精通した。

『ブッダは、なぜ子を捨てたか』山折哲雄（集英社新書）

『ゆかいな仏教』橋爪大三郎×大澤真幸（サンガ新書）

橋爪大三郎（1948年～）は東京工業大学名誉教授。社会学者。

大澤真幸（1958年～）は京都大学教授だった。社会学者。

対談なので読みやすい。

『仏教用語の基礎知識』山折哲雄編著（角川選書）

13-6 中国の思想・宗教

『論語』

『論語』金谷治＝訳注（岩波文庫）で読んだ。

『老子』

『老子』鉢屋邦夫＝訳注（岩波文庫）で読んだ。

『孔子』貝塚茂樹（岩波新書）

貝塚茂樹（1904～87年）は京都大学名誉教授。専攻は中国古代史。ノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹（1907～81年）の実兄である。

1951年初版。「孔子の伝記として、もっとも古いのは、漢の武帝時代に出た、中国の歴史の父ともいえるべき大歴史家であった司馬遷の著わした、『史記』と名づける通史の一篇をなしている「孔子世家」である。中国第一等歴史家であった上に、孔子の学問と人格に深く傾倒して、自分こそ孔子の道を漢の世にひろめる使徒であると自任していた司馬遷が、とくに精魂をこめて筆をふるったので、高遠な理想を抱きながら、その志を得ず、諸国に流浪してたびたび危難に遇った孔子の不運の生涯が、まざまざと描き出されて、読者の胸をうつものがある。」

『孔子伝』白川静（中公文庫）

白川静（1910～2006年）は立命館大学名誉教授。専攻は中国文学。

台湾の本屋で中国語訳を見かけたので、読んだ。

「事実は必ずしも真実ではない。事実の意味するところのものが真実なのである。」

「体制が、人間の可能性を抑圧する力としてはたらくとき、人はその体制を超えようとする。そこに変革を求める。思想は、何らかの意味で変革を意図するところに生まれるものであるから、変革者は必ず思想家でなくてはならない。またその行為者でなくてはならない。しかし、そのような思想や行動が、体制の中にある人に、受け容れられるはずはない。それで思想家は、しばしば反体制者となる。少なくとも、反体制者として扱われる。孔子は、そのような意味で反体制者であった。孔子が、その生涯の最も重要な時期を、亡命と漂泊のうちに過ごしたのは、そのためである。孔子は、その意味で圏外の人であった。」

「逆説は、人を原点に近づける修辞法である。」

「現実の上では、孔子はつねに敗北者であった。しかし現実の敗北者となることによって、孔子はそのアイデアに近づくことができたのではないかと思う。社会的な成功は、一般にその可能性を限定し、ときには拒否するものである。思想が本来、敗北者のものであるというのは、その意味である。」

『論語入門—真意を読む』湯浅邦弘（中公新書）

湯浅邦弘（1957年～）は大阪大学名誉教授。専攻は中国哲学。

「古代中国の諸子百家の中で、自らを「〇〇家」とか「〇〇者」と自称して集团的活動を展開したのは、儒家と墨家のみである」。

『論語入門』井波律子（岩波新書）

井波律子（1944～2020年）は国際日本文化研究センター名誉教授。中国文学研究者。

『論語』には数えきれないほどの注釈書や解説書があるが、そのもとになるのは、いわゆる「古注」と「新注」である。古注とは、魏の何晏（190ごろ～249）がそれまでの注釈を整理し編纂した『論語集解』を指し、新注とは、南宋の朱子（1130～1200）の著した注釈を指す。また、日本におけるすぐれた注釈書としては、江

戸時代、伊藤仁斎（1627～1705）の著した『論語古義』、荻生徂徠（1666～1728）の著した『論語徴』があげられる。」

『本当は危ない『論語』』加藤徹（NHK出版新書）

加藤徹（1963年～）は明治大学教授。専攻は中国文学。その漢文論・中国論は、広く深くおもしろい。上高の漢文の先生です。

「もともと二級の副読本にすぎなかった『論語』が一級の聖典にまで格上げされるまでの歴史のダイナミズムを描く。「孔子の死から現行の『論語』ができあがるまで、約700年もの歳月がたっていた」。

『儒教とは何か』加地伸行（中公新書）

『孔子』加地伸行（角川ソフィア文庫）

加地伸行（1936年～）は大阪大学名誉教授。専攻は中国哲学史。

孔子は「怨む」ことも「憎む」ことも認めていた。孔子は魯の司寇（法務大臣兼警察庁長官・警視総監）になった際、ライバルを政治的に粛清している。その遺体を3日さらしたという伝説もある。

『諸子百家—中国古代の思想家たち』貝塚茂樹（岩波新書）

『諸子百家—儒家・墨家・道家・法家・兵家』湯浅邦弘（中公新書）

『古代中国の文明観—儒家・墨家・道家の論争』浅野裕一（岩波新書）

浅野裕一（1946年～）は東北大学名誉教授。専攻は中国哲学。

古代中国の文明発生時、巨大な都市文明の建設に伴って大規模な自然破壊が行われた。環境問題を孔子・墨子・老子がどのように考えていたかを解説する。

『孟子』金谷治（岩波新書）

金谷治（1920～2006年）は東北大学名誉教授。追手門学院大名誉教授。専攻は中国哲学。

1966年初版。後年、大乘仏教の「悉有仏性の説がひろく受け容れられるようになったのも、この性善思想の普及と深い関係があったと思われる」。

『朱子学と陽明学』島田虔次（岩波新書）

島田虔次（1917～2000年）は京都大学名誉教授。専攻は中国近世・近代思想史。

1967年初版。昭和39年度の京大の東洋史の学生のための講義がもとになっている。朱子学は仏教の汎神論的思想の影響、道家の汎神論的な感情の影響を受けている。陽明学は、道教・仏教を肯定し、三教一致にすむ。

『入門 朱子学と陽明学』小倉紀蔵（ちくま新書）

小倉紀蔵（1959年～）は京都大学教授。専攻は東アジア哲学。

著者自身が上記の『朱子学と陽明学』（島田虔次・岩波新書）の入門書と記している。「朱子学は朱子（朱熹：1130～1200）の死の直前に「偽学」というレッテルを貼られて弾圧されたが、元の時代には官学となってその後20世紀まで東アジアをほぼ支配したとあってよい。特に朝鮮は14世紀終わってから20世紀初めという長期にわたって、ほとんど朱子学一辺倒となった。陽明学は王陽明（王守仁：14720～1528）が朱子学を継承しつつそれを批判・超克したラディカルな「心の哲学」である。」

『入門 老荘思想』湯浅邦弘（ちくま新書）

『莊子—古代中国の実存主義』福永光司（中公新書）

福永光司（1918～2001年）は京都大学名誉教授。老荘思想研究の第一人者。

1964年の出版。「莊子はいつわりのないもの、飾りのないもの、純粋なものを熱愛する。彼は生命を害うもの、真実を歪めるもの、自由を束縛するものを何よりも激しく憎む。彼にとって芸術とは人生と宇宙を貫くいつわりなき生命の主体的な表現であり、詩とは常識的な価値の世界を超えた万象の根源的な真実を赤裸々な言葉として語ることであった。」

『道教思想10講』 神塚淑子（岩波新書）

神塚淑子（1953年～）は名古屋大学名誉教授。専門は中国思想史。

沖縄文化の中で、土帝君（トーティークン）・紙銭（ウチカビ）・火の神（ヒヌカン）を道教の影響とみる人は多い。さらに、シーサー、屏風（ヒンプン）、石敢當（イシガントウ）、亀甲墓、清明祭（シーミー）まで道教の影響とする人もいる。

『韓非子—不信と打算の現実主義』 富谷至（中公新書）

富谷至（1952年～）は京都大学名誉教授。専門は中国法制史・古文書学。

『軍国日本と『孫子』』 湯浅邦弘（ちくま新書）

13-7 欧米の思想

『ミケルアンジェロ』 羽仁五郎（岩波新書）

『ルネサンスの思想家たち』 野田又夫（岩波新書）

『ガリレオ・ガリレイ』 青木靖三（岩波新書）

青木靖三（1926～77年）は神戸大学教授だった。

『ニュートン』 島尾永康（岩波新書）

島尾永康（1920～2015年）は同志社大学教授だった。専門は科学史。

『方法序説』 デカルト

『方法序説ほか』 野田又夫＝訳（中公クラシックス）で読んだ。

『デカルト』 野田又夫（岩波新書）

野田又夫（1910～2004年）は京都大学名誉教授。哲学者。

もとはNHK古典講座の放送講演の原稿なので読みやすい。デカルトの秘書的な役割を担ったメルセンヌがいたパリの修道院は、メルセンヌアカデミーと称されるほど学者の集まるサロンだった。モラリスト・数学者・物理学者のパスカル、フェルマーの最終定理の数学者フェルマー、フランス亡命中の社会契約説のホッブズ、『太陽の都』のカンパネラが出入りした。デカルトは「世間という書物」に学ぶために旅に出た。

『モンテーニュ—人生を旅するための7章』 宮下志朗（岩波新書）

宮下志朗（1947年～）は東京大学名誉教授。放送大学名誉教授。専門はフランス文学。

『パスカル』 野田又夫（岩波新書）

『社会契約論—ホッブズ、ヒューム、ルソー、ロールズ』 重田園江（ちくま新書）

重田園江（1968年～）は明治大学教授。専攻は現代思想・政治思想史・フーコー。

『ホッブズ—リヴァイアサンの哲学者』 田中浩（岩波新書）

田中浩（1926年～）は一橋大学名誉教授。専攻は政治思想。

ホッブズ研究に一生をかけた学者が90歳で出版した入門書。

「おわりに」から引用。「日本も戦後70年続いた「専守防衛」の方針を転換するため「自己保存」「自然権」ということばを用いて、「解釈改憲」という手法によって——かつてカール・シュミットは、この方法を用いて、「ヴァイマル憲法」を崩壊させ「ナチス独裁」への道を切り開いた——、自衛隊の海外派兵を可能にする「安全保障関連法」を制定した（2015年9月19日）。」

『ジョン・ロック—神と人間の間』 加藤節（岩波新書）

加藤節（1944年～）は成蹊大学名誉教授。専攻は政治学史・政治思想。

ロック研究に一生をかけた学者が74歳で出版した入門書。

『人間不平等起源論』 ルソー

『ルソー』 桑原武夫編（岩波新書）

京大人文研の伝統となった共同研究の最初の成果を入門書としたもの（1962年出版）。著者は桑原武夫（1904～88年）・河野健二（1916～96年）・樋口謹一（1924～2004年）・多田道太郎（1924～2007年）の5人。

『ルソー』 福田歓一（岩波現代文庫）

福田歓一（1923～2007年）は東京大学名誉教授。専攻は政治哲学。

ルソーの人と生涯、思想の全体像を知る上で入門書としてお薦め。

『エミール』の副題はたしかに「教育論」である。そして日本では学校教師やその卵がまずこの書物に取りつき、多くのものを引き出して来た。しかしここでの教育は、ルソーが明示的に「ひとが学院とよぶかの笑うべき施設」と言っているように、学校教育とは何の関係もない。このことは教育という言葉が西洋風の学校制度の導入と同時に翻訳語として成り立った、したがって百年たった今でも圧倒的に学校教育の意味をもちつづけている日本の場合、特に注意すべきところである。」

『今こそルソーを読み直す』 仲正昌樹（NHK出版新書）

仲正昌樹（1963年～）は金沢大学教授。専攻は社会思想史・比較文学。

ルソーは、外国人に基本的な立法を任せることを示唆し、自身も『ポーランド統治論』と『コルシカ憲法草案』で外国人立法者の役割を果たそうとした。GHQ中心に作られた日本国憲法を考えるうえで興味深い。

『永久平和のために』 カント

『永遠平和のために／啓蒙とは何か 他3編』 中山元＝訳（光文社古典新訳文庫）で読んだ。

『ヘーゲルとその時代』 権左武志（岩波新書）

権左武志（1959年～）は北海道大学大学院特任教授。専門は西洋政治思想史。

『アダム＝スミス—『道徳感情論』と『国富論』の世界』 堂目卓生（中公新書）

堂目卓生（1959年～）は大阪大学教授。専門は経済思想史。

2008年度サントリー学芸賞（政治・経済部門）受賞。2009年新書大賞第6位。

スミスが、単に市場主義経済を擁護した思想家ではないことを、教えられる。スミスは、自己利益の追求は、第三者である公平な観察者の共感が得られる範囲に限られると考えていた。しかも最低水準の富さえあれば、それ以上に富が増大しても、幸福には影響しないと考えたのである。

『国富論』の原語タイトルは、Wealth of a Nationではなく、Wealth of Nationsと、最後が複数形になっている。『国富論』は、一国民または特定国民の豊かさではなく、諸国民の豊かさを探究する書物なのである。」

「スミスは、（アメリカ植民地の）分離の提案を『国富論』を締めくくる言葉とした」。

『共産党宣言』 マルクス・エンゲルス

『共産党宣言』は、「ヨーロッパに妖怪があらわれた、共産主義という妖怪が」という有名な冒頭から、「万国の労働者よ、団結せよ」という有名な末尾まで、一挙に読める。

『資本論（第1巻）』 マルクス・エンゲルス

『ドイツ＝イデオロギー』 マルクス・エンゲルス

『経済学・哲学草稿』 マルクス

『フランスにおける階級闘争』 マルクス

『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』 マルクス

『フランスの内乱』 マルクス

『賃労働と資本』 マルクス

『賃金、価格および利潤』 マルクス

『空想から科学へ』 エンゲルス

『家族、私有財産および国家の起源』 エンゲルス

『マルクス 資本論の哲学』熊野純彦（岩波新書）

熊野純彦（1958年～）は東京大学教授だった。専攻は倫理学・哲学史。文体を意識して書く哲学者。

『資本論』は現在のところやはり、この世界の枠組みを規定している資本制をめぐり、すくなくともその基本的ななりたちにかんしてもっとも行きとどいた分析を提供し、私たちが現在もなお、どのような世界のなかで生を紡いでいるのかを、その深部から歴史的に理解させてくれる、古典的な遺産のひとつである」。

『今こそマルクスを読み返す』廣松渉（講談社現代新書）

『帝国主義論』レーニン

『国家と革命』レーニン

『帝国主義と民族・植民地問題』レーニン

『なにをなすべきか？』レーニン

『未完のレーニン—〈力〉の思想を読む』白井聡（講談社学術文庫）

『実践論』毛沢東

『矛盾論』毛沢東

『これがニーチェだ』永井均（講談社現代新書）

『ベルクソン—〈あいだ〉の哲学の視点から』篠原資明（岩波新書）

篠原資明（1950年～）は京都大学名誉教授。専攻は哲学・美学。

『ハイデガーの思想』木田元（岩波新書）

木田元（1928～2014年）は中央大学名誉教授。専攻は西洋哲学史、現象学の研究。

『サルトル—「人間」の思想の可能性』海老坂武（岩波新書）

海老坂武（1934年～）はフランス文学者。

サルトルは片目が見えず、「奇妙な声」をし、身長150cmほどだったが、デートの相手には事欠かなかった。アルジェリア解放闘争を支持したために、自宅にプラスチック爆弾をしかけられたこともある。

『現代思想の断層—「神なき時代」の模索』徳永恂（岩波新書）

徳永恂（1929年～）は大阪大学名誉教授。大阪国際大学名誉教授。専攻は現代ドイツ哲学・社会思想史。長崎で被爆。1962～64年にドイツ留学し、アドルノに師事した。

「この本で取り上げた思想家の主著は——ウェーバーの『世界宗教の経済倫理』、フロイトの『モーゼと一神教』、ベンヤミンの『パサーージュ論』、アドルノの『啓蒙の弁証法』、ハイデガーの『存在と時間』を含めて——ことごとく未完に終わった。その中断した断面の前に、われわれは立っている」。

『寝ながら学べる構造主義』内田樹（文春新書）

内田樹（1950年～）は神戸女学院大学名誉教授。専攻はフランス現代思想・映画論・武道論。

2016年度実施教員選考試験の小学校・国語で出題された。

次のように構造主義を整理している。構造主義前史としてマルクス、フロイト、ニーチェ、構造主義の始祖としてソシュール、構造主義の四銃士としてフーコー、バルト、レヴィ＝ストロース、ラカンである。

『闘うレヴィ＝ストロース』渡辺公三（平凡社新書）

渡辺公三（1949～2017年）は文化人類学者。立命館大学教授だった。

レヴィ＝ストロースの文化人類学の研究の全体像はもちろん、社会主義者だった青年時代、ブラジルでの先住民調査、アメリカへの亡命、ユネスコ社会科学国際委員会事務局長を務めた中年時代も描かれている。

『レヴィナス入門』熊野純彦（ちくま新書）

『私家版・ユダヤ文化論』内田樹（文春新書）

2007年小林秀雄賞受賞。

「帰納法的推論の致命的な欠点は「未知のファクターの関与」や「既知のファクターの未知のふるまい」を

想定しない点にある。そして現実には、私たちの社会で起こる事象のほとんどは、わずかな入力差が大きな出力差をもたらす「複雑系」なので、帰納法的推理はあまり役に立たない」。

『学問の春—〈知と遊び〉の10講義』山口昌男（平凡社新書）

山口昌男（1931～2013年）は東京外国語大学名誉教授。文化人類学者。

ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』を読みながらの講義録。

『ジョン・デューイー—民主主義と教育の哲学』上野正道（岩波新書）

上野正道（1974年～）は上智大学教授。デューイ研究の第一人者。

「1899年に刊行されたデューイの『学校と社会』は、ラボラトリーとしてのシカゴ大学実験学校の実践をもとに書かれたものである。」

『民主主義と教育』では、一般に、民主主義と聞いてイメージする内容、たとえば、議会政治にかんする問題や、投票、選挙制度、多数決といった問題についてはほとんど触れられていない。デューイが論じたのは、コモン、コミュニティ、コミュニケーションのなかで、異なる他者とともに、よりよく生き、よりよく学び、経験し、成長することについてだった。」

『ハンナ・アーレント—「戦争の世紀」を生きた政治哲学者』矢野久美子（中公新書）

矢野久美子（1964年～）はフェリス女学院大学教授。思想史専攻。

新書大賞2015第3位。

ユダヤ人であるアーレントは、1933年にパリ、そして1941年にアメリカに亡命する。

『社会学史』大澤真幸（講談社現代新書）

大澤真幸（1958年～）は京都大学教授だった。社会学者。

マルクス・フロイトにしっかりページを割いていることに共感する。

13-8 日本の思想・宗教

『日本思想史の名著30』荻部直（ちくま新書）

荻部直（1965年～）は東京大学教授。専攻は日本政治思想史。

以下は30冊の一部。『古事記』。聖徳太子「憲法十七条」。『日本霊異記』。慈圓『愚管抄』。親鸞・唯圓『歎異抄』。日蓮『立正安国論』。新井白石『西洋紀聞』。伊藤仁斎『童子問』。荻生徂徠『政談』。山本常朝・田代陣基『葉隠』。本居宣長『くず花』。平田篤胤『霊の真柱』。福沢諭吉『文明論之概略』。中江兆民『三酔人経綸問答』。「教育勅語」。吉野作造「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」。平塚らいてう『元始、女性は太陽であった』。柳田國男『明治大正史 世相篇』。和辻哲郎『倫理学』。「日本国憲法」。丸山眞男『忠誠と反逆』。

『日本を創った思想家たち』鷲田小彌太（PHP新書）

『日本宗教史』末木文美士（岩波新書）

末木文美士（1949年～）は国際日本文化研究センター名誉教授。総合研究大学院大学名誉教授。東京大学名誉教授。専攻は仏教学・日本思想史。

「仏教は単に一つの宗教に留まらず、壮麗な寺院は最先端の建築・工芸の粋を尽し、医学・治水などの科学技術から音楽などの娯楽にまでわたるすべてをカバーするオールラウンドの文化であった」。

『仏教vs倫理』末木文美士（ちくま新書）

『仏典を読む』末木文美士（新潮社）

『遊行経』、『無量寿経』、『法華経』、『般若心経』、最澄『山家学生式』、空海『即身成仏義』、親鸞『教行信証』、道元『正法眼蔵』、日蓮『立正安国論』などを取り上げている。

『日本仏教史』末木文美士（新潮文庫）

最澄と空海の入唐について。「第二船に乗った最澄はこのとき38歳」。「第一船に乗った空海はこのとき31歳」。「無事に明州に到着したのは第二船のみ、第一船は唐とはいえ、はるか南に流されて福州に漂着、第三船はふたたび九州にもどり、第四船にいたっては行方不明のままという惨状であった」。

鎌倉仏教を三期に分ける。「第一期は大きな社会的変動の時代を背景に鎌倉仏教が形成される時期で、重源・栄西・法然・貞慶・俊芿・慈円らが活躍する。第二期は比較的平和で安定した社会を背景に思想が深められる時期で、明恵・良遍・親鸞・道元らが活躍する。第三期はふたたび社会的不安が高まると同時に、元寇による国家意識の高まりなど新しい要因が加わる思想の展開期で、叡尊・忍性・日蓮・一遍・凝然などが活躍する」。

『日本人の神』大野晋（河出文庫）

大野晋（1919～2008年）は国語学者。学習院大学名誉教授。上高の日本語の先生です。

『神仏習合』義江彰夫（岩波新書）

『神道用語の基礎知識』鎌田東二編著（角川選書）

『空海と日本思想』篠原資明（岩波新書）

『江戸幕府と儒学者—林羅山・鷲峰・鳳岡』揖斐高（中公新書）

『江戸の学びと思想家たち』辻本雅史（岩波新書）

辻本雅史（1949年～）は京都大学名誉教授。中部大学名誉教授。専攻は日本思想史，教育史。

「幕末きっての洋学通といわれた佐久間象山や横井小楠の思想の枠組は、儒者のものであった。次の世代の中村正直も、もとは幕府の学問所の生粋の朱子学者。かれは、ロンドン留学中に素読を欠かさなかった。「東洋のルソー」といわれる中江兆民は、ルソーの思想にふれたとき、改めて経書を読み返した。その翻訳『民約訳解』は漢文で書かれた。儒学的思考型式を土台にしてこそ、欧米の知を自らのものとすることができたのである。」

『忘れられた思想家—安藤昌益のこと（上下）』E.ハーバート・ノーマン／大窪愿二＝訳（岩波新書）

E.ハーバート・ノーマン（1909～57年）は駐日カナダ代表部主席だった。

昌益の批判は苛烈を極める。

「かれは日本史上の三大人物をとくに憎むべきものとして指摘する。この3人は聖徳太子，秀吉，家康である」。

「『自然眞營道』第二十四巻は「法世物語巻」と題する。「法世」とは昌益の特殊的新造語であって、その當時の武士が特権者として上に立ちその下の無知な農民大衆を収奪する嚴重な身分制社會を指している。昌益はこの社會の偽善と野蠻を嫌悪し、獸，鳥，魚，蟲の對話にかりてこれを諷刺した」。「犬が法世の「仲間」だといっている聖賢」は孟子，老子，朱子，聖徳太子，林羅山，荻生徂徠である。

『本居宣長とは誰か』子安宣邦（平凡社新書）

子安宣邦（1933年～）は大阪大学名誉教授。専攻は近世日本思想史。

「小学校教育を戦前の昭和初期に受けられた方々は、5年生の国語読本に載っていた「松坂の一夜」という宣長と師賀茂真淵との出会いの物語を記憶されているでしょう」。昭和14年修正印刷された『小学国語読本』巻11では「第10「日本海海戦」，第11「皇国の姿」，第12「古事記の話」があり，それに続けて第13「松坂の一夜」となります。この目次を見ただけでも国学的な色彩の濃い，皇国主義的な国語読本であることが分かります」。

『本居宣長—文学と思想の巨人』田中康二（中公新書）

『横井小楠—維新の青写真を描いた男』徳永洋（新潮新書）

『吉田松陰』奈良本辰也（岩波新書）

『近代国家を構想した思想家たち』鹿野政直（岩波ジュニア新書）

『近代社会と格闘した思想家たち』鹿野政直（岩波ジュニア新書）

『三酔人経綸問答』中江兆民

『貧乏物語』河上肇

『近代日本の思想家たち—中江兆民・幸徳秋水・吉野作造』林茂（岩波新書）

『菅野すが—平民社の婦人革命家像』絲屋寿雄（岩波新書）

『田中正造』由井正臣（岩波新書）

由井正臣（1933～2008年）は早稲田大学名誉教授。専攻は日本近現代史。

1901年に東京で鉅毒調査有志会が結成される。参加者には、三宅雪嶺、陸羯南、徳富蘇峰、内村鑑三がいた。この年、天皇直訴事件を起こす。直訴状は幸徳秋水の筆による。中学生だった石川啄木は新聞配達で得た義捐金を被害民に送った。

『代表的日本人』内村鑑三／鈴木範久＝訳（岩波文庫）

1908年に英文で書かれた。ドイツ語訳したのは、ヘルマン・ヘッセの父である。内村は、日清戦争を日本にとって「義戦」であるとして支持する論陣をはった。そのために日本が正義に立脚していることを訴えるための著作であり、そのため西郷隆盛・上杉鷹山・二宮尊徳・中江藤樹・日蓮の5人の人選となった。内村はその後、日清戦争が「義戦」でないことを知り、激しく恥じた。そして日露戦争に対する「非戦論」となる。そのために本の題名も内容も改めた。それでも愛国主義的な印象が強い。

『内村鑑三』鈴木範久（岩波新書）

鈴木範久（1935年～）は立教大学名誉教授。専攻は宗教史学。

不敬事件のあと、内村鑑三は重い流感にかかり意識不明の状態が続いた。そのあいだに出された辞職願は明らかに筆跡が異なる。外からの抗議者への対応に迫られた妻は、3か月後に同じ流感で亡くなった。

『西田幾多郎—無私の思想と日本人』佐伯啓思（新潮新書）

新書大賞2015第10位。

『和辻哲郎—文人哲学者の軌跡』熊野純彦（岩波新書）

熊野純彦（1958年～）は東京大学教授だった。専攻は倫理学・哲学史。

北鎌倉の東慶寺には、「西田幾多郎、鈴木大拙、安倍能成、岩波茂雄、小林秀雄などの墓碑とならんで、本書の主人公、和辻哲郎の墓所もある」。

歴史に名を残す人物がどれほどの研究・思索をしたかという事実には圧倒される。夏目漱石、谷崎潤一郎、西田幾多郎、新渡戸稲造などとの関係によって、その時代を知ることもできる。

『遠野物語へようこそ』三浦佑之・赤坂憲雄（ちくまプリマー新書）

三浦佑之（1946年～）は千葉大学名誉教授。専攻は古代文学・伝承文学。

赤坂憲雄（1953年～）は学習院大学教授。専攻は民俗学・日本文化論。

2010年が『遠野物語』が刊行されて100周年ということで発行された。『遠野物語』の入門書として軽く読める。『遠野物語』は最初わずか350部が印刷されたただけだった。柳田は官僚時代「大学で農政学を講義する学者」でもあった。また「その一方で、少年の頃から短歌を作り、学生時代には叙情的な詩を作る文学青年でもあった柳田は、国木田独步や田山花袋らと『叙情詩』という詩集も刊行しています。そうした、「経世済民」（世の中を治め人びとの苦しみを救うこと）の意志と文学青年としての叙情的な性向とが、官僚から民俗学者へとたどる柳田の生涯を方向づけていったと考えられます」。

『禅と日本文化』鈴木大拙／北川桃雄＝訳（岩波新書）

鈴木大拙（1870～1966年）は仏教学者。1940年発行。

英文で書かれた“Zen Buddhism and its Influence on Japanese Culture.”（1938）の一部を和訳したものである。序文は、鈴木大拙の中学時代からの友人・西田幾多郎が書いている。禅と美術、武士、剣道、儒教、

茶道、俳句との関係を論じている。「禅は無政府主義やファシズムにも、共産主義や民主主義にも、無神論や唯心論にも、またいかなる政治的、経済的な教説（ドグマ）にも結びついている。ある意味では、禅はいつも、革命的精神の鼓舞者ともいえる」。

『現代日本の思想—その五つの渦』 久野収・鶴見俊輔（岩波新書）

久野収（1910～99年）は哲学者。

鶴見俊輔（1922～2015年）は哲学者。

1956年発行。「日本の観念論—白樺派」「日本の唯物論—日本共産党の思想」「日本のプラグマティズム—生活綴り方運動」「日本の超国家主義—昭和維新の思想」「日本の実存主義—戦後の世相」の5つが解説される。

『加藤周一—二十世紀を問う』 海老坂武（岩波新書）

『谷川雁—永久工作者の言霊』 松本輝夫（平凡社新書）

『国家神道と日本人』 島蘭進（岩波新書）

『必生 闘う仏教』 佐々井秀嶺（集英社新書）

佐々井秀嶺（1935年～）はインド仏教指導者。真言宗智山派で得度。タイ留学を経て1967年に渡印。2003年にはインド政府少数者委員会仏教徒代表に任命された。インド国籍。当時のラジヴ・ガンディー首相からインド名、アーリア・ナーガールジュナを授与される。2009年6月に44年ぶりに日本に帰国した。その著者が自らの人生を語った内容。

『創価学会』 島田裕巳（新潮新書）

島田裕巳（1953年～）は宗教学者。日本女子大学教授だった。

創価学会は政権与党の公明党の最大の支持母体である。日本人の「およそ7人に1人は創価学会員である可能性がある」。その歴史と実態を知ることができる。

第14章 文学

14-1 日本文学

『竹取物語』

『新版 竹取物語—現代語訳付き』室伏信助＝訳注（角川ソフィア文庫）で読んだ。

『伊勢物語』

『新版 伊勢物語—付現代語訳』石田穰二＝訳注（角川ソフィア文庫）で読んだ。

『古今和歌集』

『新版 古今和歌集—現代語訳付き』高田祐彦＝訳（角川ソフィア文庫）で読んだ。

紀貫之『土佐日記』

『土佐日記—付現代語訳』三谷栄一＝訳注（角川ソフィア文庫）で読んだ。

紫式部『源氏物語』

『潤一郎訳 源氏物語（巻1～5）』谷崎潤一郎＝訳（中公文庫）で読んだ。

清少納言『枕草子』

『枕草子（上）（下）』石田穰二＝訳注（角川ソフィア文庫）で読んだ。

『新古今和歌集』

『新古今和歌集（上下）』久保田淳＝訳注（角川ソフィア文庫）で読んだ。

鴨長明『方丈記』

『方丈記』築瀬一雄＝訳注（角川ソフィア文庫）で読んだ。

森鷗外（1862～1922年）

『舞姫』『キタ・セクスアリス』『青年』『雁』『阿部一族』『大塩平八郎』『山椒大夫』『高瀬舟』

伊藤左千夫（1864～1913年）『野菊の墓』

夏目漱石（1867～1916年）『倫敦塔』『幻影の盾』『琴のそら音』『一夜』『薔露行』『趣味の遺伝』

『吾輩は猫である』『坊つちやん』『草枕』『虞美人草』『坑夫』『文鳥』『夢十夜』『三四郎』『永日小品』

『それから』『門』『思ひ出す事など』『ケーベル先生』『変な音』『手紙』『彼岸過迄』『行人』『ころも』

『道草』『明暗』

夏目漱石は、不登校だった15～16歳頃に荻生徂徠（江戸時代の儒学者）を書写し、その後も漢詩を詠むほどに中国の古典を学んでいる。また俳句を詠み、鴨長明の『方丈記』を英訳するほどに日本の古典を学んでいる。イギリス留学から帰国後に一高（現在の東京大学教養部）の日本人初の英語教師になるほどにイギリス文学を学んでいる。つまり日本の近代化を体現した人である。

幸田露伴（1867～1947年）『五重塔』

田山花袋（1871～1930年）『蒲団』

国木田独步（1871～1908年）『武蔵野』

島崎藤村（1872～1943年）『破戒』『夜明け前』

樋口一葉（1872～96年）

『大つごもり』『たけくらべ』『ゆく雲』『うつせみ』『にぎりえ』『十三夜』『わかれ道』『われから』

『たけくらべ』は原文と松浦理英子の現代語訳（河出文庫）で読んだ。

泉鏡花（1873～1939年）『高野聖』『女客』『国貞えがく』『売色鴨南蛮』『歌行燈』

有島武郎（1878～1923年）『小さき者へ』『生まれ出づる悩み』

永井荷風（1879～1959年）『遷東綺譚』

種田山頭火（1882～1940年）『山頭火句集』（ちくま文庫）

自選句集『草木塔』収録。

志賀直哉（1883～1971年）『城の崎にて』『和解』『暗夜行路』

高村光太郎（1883～1956年）『智恵子抄』

武者小路実篤（1885～1976年）『友情』

中勘助（1885～1965年）『銀の匙』

谷崎潤一郎（1886～1965年）『痴人の愛』『卍』『蘆刈』『春琴抄』『細雪』

石川啄木（1886～1912年）『一握の砂』『悲しき玩具』『啄木歌集』（岩波文庫）

『ROMAZI NIKKI』『時代閉塞の現状・食うべき詩他十篇』『啄木詩集』（岩波文庫）

萩原朔太郎（1886～1942年）『月に吠える』『青猫』

山本有三（1887～1974年）『路傍の石』

倉田百三（1891～1943年）『出家とその弟子』

芥川龍之介（1892～1927年）『羅生門』『鼻』『手巾』『戯作三昧』『蜘蛛の糸』『地獄変』『枯野抄』『蜜柑』

『舞踏会』『秋』『杜子春』『藪の中』『トロッコ』『侏儒の言葉』『河童』『歯車』『或阿呆の一生』『一塊の土』

宮沢賢治（1896～1933年）『注文の多い料理店』『双子の星』『よだかの星』『カイロ団長』『黄いろのトマト』

『ひのきとひなげし』『シグナルとシグナレス』『マリヴロンと少女』『オツベルと象』『猫の事務所』

『北守将軍と三人兄弟の医者』『銀河鉄道の夜』『セロ弾きのゴーシュ』『饑餓陣営』『ビジテリアン大祭』

三木清（1897～1945年）『人生論ノート』

井伏鱒二（1898～1993年）『山椒魚』『黒い雨』

壺井栄（1899～1967年）『二十四の瞳』

川端康成（1899～1972年）『伊豆の踊子』『雪国』『掌の小説』

梶井基次郎（1901～32年）『檸檬』『冬の蠅』『冬の日』

小林多喜二（1903～33年）『蟹工船』『党生活者』

竹山道雄（1903～84年）『ビルマの竪琴』

林芙美子（1903～51年）『放浪記』

堀辰雄（1904～53年）『風立ちぬ』『美しい村』

坂口安吾（1906～55年）『墮落論』

中原中也（1907～37年）『山羊の歌』『在りし日の歌』

中島敦（1909～42年）『名人伝』『山月記』『李陵』

太宰治（1909～48年）『晩年』（「葉」「思い出」「魚服記」「列車」「地球図」「猿ヶ島」「雀こ」「道化の華」

「猿面冠者」「逆行」「彼は昔の彼ならず」「ロネマスク」「玩具」「陰火」「めくら草紙」収録）

『ダス・ゲマイネ』『雌に就いて』『虚構の春』『狂言の神』『創世記』『喝采』『二十世紀旗手』『HUMAN LOST』

『燈籠』『満願』『姥捨』『I can speak』『富嶽百景』『黄金風景』『女生徒』『懶惰の歌留多』『秋風記』

『新樹の言葉』『花燭』『愛と美について』『火の鳥』『葉桜と魔笛』『八十八夜』『座興に非ず』『美少女』

『畜犬談』『ア、秋』『デカダン抗議』『おしゃれ童子』『皮膚と心』『春の盗賊』『俗天使』『兄たち』『鷗』

『女人訓戒』『女の決闘』『駈込み訴え』『老ハイデルベルヒ』『誰も知らぬ』『善蔵を思う』『走れメロス』

『古典風』『盲人独笑』『乞食学生』『失敗園』『一燈』『リイズ』『きりぎりす』『ろまん燈籠』『東京八景』

『みみずく通信』『佐渡』『清貧譚』『服装に就いて』『令嬢アユ』『千代女』『新ハムレット』『風の便り』『誰』

『恥』『新郎』『十二月八日』『水仙』『正義と微笑』『待つ』『小さいアルバム』『日の出前』『禁酒の心』

『故郷』『黄色先生言行録』『帰去来』『花吹雪』『不審庵』『鉄面皮』『右大臣実朝』『作家の手帖』『佳日』

『新釈諸国噺』『散華』『雪の夜の話』『東京だより』『竹青』『津軽』『惜別』『お伽草子』『パンドラの匣』『十五年間』『冬の花火』『苦悩の年鑑』『チャンス』『春の枯葉』『たずねびと』『薄明』『男女同権』『親友交歓』『トカトントン』『メリイクリスマス』『ヴィヨンの妻』『母』『父』『女神』『フォスフォレスセンス』『朝』『斜陽』『おさん』『犯人』『酒の追憶』『美男子と煙草』『眉山』『女類』『渡り鳥』『桜桃』『人間失格』『グッド・バイ』『家庭の幸福』

中学2年生の国語の授業で太宰治の『走れメロス』を読まされた。大人になって、こんな話をわざわざ書く太宰という作家はつまらないと思った。高校生になり、いろいろな人がいろいろな本を勧める中で、よくあげられていたのが『人間失格』であった。だまされたつもりで読んでみた。それまでクラスの中のお調子者を引き受けていた自分は、クラスの中では誰とも口をきかなくなった。それもいれてたぶん5回くらいは読んでいると思う。

大岡昇平（1909～88年）『野火』

松本清張（1909～92年）『点と線』

柴田トヨ（1911～2013年）『くじけないで』（飛鳥新社）

白寿（99歳）の処女詩集。168万部。一語・一語しっかり考え、選び抜かれている。

島尾敏雄（1917～86年）『死の棘』

福永武彦（1918～79年）

『風土』『草の花』『愛の試み』『廃市』『告別』『忘却の河』『海市』『風のかたみ』『死の島』

恋愛論の中では『愛の試み』が一番よい。

三浦綾子（1922～99年）『塩狩峠』（新潮文庫）

遠藤周作（1923～96年）『海と毒薬』『沈黙』『恋愛とは何か—初めて人を愛する日のために』

安部公房（1924～93年）『壁』『砂の女』

三島由紀夫（1925～70年）『仮面の告白』『潮騒』『金閣寺』『春の雪 豊饒の海（一）』『奔馬 豊饒の海（二）』『暁の寺 豊饒の海（三）』『天人五衰 豊饒の海（四）』

星新一（1926～97年）『ノックの音が』『未来いそっぷ』『にぎやかな部屋』『おせっかいな神々』『午後の恐竜』『マイ国家』『おのぞみの結末』『悪魔のいる天国』『ようこそ地球さん』『ボッコちゃん』『たくさんのお宝』（新潮文庫）

石牟礼道子（1927～2018年）『苦海浄土—わが水俣病』（集英社文庫）

北杜夫（1927～2011年）『夜と霧の隅で』（新潮文庫）

向田邦子（1929～81年）『思い出トランプ』『男どき女どき』（新潮文庫）『あ・うん』『隣りの女』（文春文庫）

阿佐田哲也（1929～89年）『麻雀放浪記（一～四）』『ドサ健ばくち地獄（上下）』（角川文庫）

開高健（1930～89年）『パニック』『巨人と玩具』『裸の王様』『流亡記』

三浦哲郎（1931～2010年）『忍ぶ川』（新潮文庫）

高橋和巳（1931～71年）『悲の器』『散華』『我が心は石にあらず』『邪宗門』『憂鬱なる党派』『捨子物語』『日本の悪霊』（新潮文庫）『わが解体』（河出文庫）

石原慎太郎（1932～2022年）『太陽の季節』

森村誠一（1933～2023年）『高層の死角』

山田太一（1934～2023年）『ふぞろいの林檎たち』『ふぞろいの林檎たちⅡ』（新潮文庫）

『ふぞろいの林檎たちⅢ』『ふぞろいの林檎たちⅣ』（マガジンハウス）

『ふぞろいの林檎たちⅤ』（国書刊行会）

『飛ぶ夢をしばらく見ない』（小学館文庫）『異人たちとの夏』（新潮文庫）

灰谷健次郎（1934～2006年）『兎の眼』『太陽の子』

- 大江健三郎（1935～2023年）『死者の奢り』『飼育』
- 池澤夏樹（1945年～）『カデナ』（新潮文庫）
- 中上健次（1946～92年）『十九歳の地図』（河出文庫）『岬』（文春文庫）『枯木灘』（河出文庫）
- 宮本輝（1947年～）『蚩川・泥の河』『道頓堀川』（新潮文庫）
- 村上春樹（1949年～）『ノルウェイの森』（講談社文庫）
- 永山則夫（1949～97年）『木橋』（河出文庫）
- 葉室麟（1951～2017年）『蝸ノ記』（祥伝社文庫）
- 水村美苗（1951年～）『続明暗』（ちくま文庫）
- 桐野夏生（1951年～）『メタボラ』（文春文庫）
- 百田尚樹（1956年～）『永遠の0』^{ゼロ}（講談社文庫）
- 大沢在昌（1956年～）『新宿鮫』『毒猿 新宿鮫Ⅱ』『屍蘭 新宿鮫Ⅲ』『無間人形 新宿鮫Ⅳ』『炎蛹 新宿鮫Ⅴ』『氷舞 新宿鮫Ⅵ』『灰夜 新宿鮫Ⅶ』『風化水脈 新宿鮫Ⅷ』『狼花 新宿鮫Ⅸ』『絆回廊 新宿鮫Ⅹ』『暗約領域 新宿鮫Ⅺ』『鮫島の貌 新宿鮫短編集』（光文社文庫）『黒石^{ヘイシ} 新宿鮫Ⅻ』（光文社）
- 川上弘美（1958年～）『蛇を踏む』『真鶴』（文春文庫）『風花』（集英社文庫）
- 松浦理英子（1958年～）『葬儀の日』『セバスチャン』『ナチュラル・ウーマン』『親指Pの修業時代』（河出文庫）
- 『裏ヴァージョン』『最愛の子ども』（文春文庫）『犬身』（朝日文庫）『奇貨』（新潮文庫）
- 『ヒカリ文集』（講談社）『ポケット・フェティッシュ』（白水uブックス）
- 生きている作家の中では、松浦理英子が最も好きな作家である。
- 中沢けい（1959年～）『楽隊のうさぎ』（新潮文庫）
- 新沖縄文学賞の審査員を長く務めていた。那覇の居酒屋で名刺交換した。
- 山田詠美（1959年～）『ベッドタイムアイズ』（河出文庫）『ぼくは勉強ができない』（新潮文庫）
- 多和田葉子（1960年～）『犬婿入り』（講談社文庫）
- 宮部みゆき（1960年～）『あかんべえ』『模倣犯』『理由』『堪忍箱』『初ものがたり』『幻色江戸ごよみ』『火車』『淋しい狩人』『かまいたち』『本所深川ふしぎ草紙』『返事はいらない』『レベル7（セブン）』『龍は眠る』『魔術はささやく』『孤宿の人』『ソロモンの偽証』（新潮文庫）『蒲生邸事件』（文春文庫）
- 『R. P. G.』（集英社文庫）
- 小川洋子（1962年～）『博士の愛した数式』（新潮文庫）
- 本屋大賞2004受賞。
- 原田マハ（1962年～）『太陽の棘^{とげ}』（文春文庫）
- 俵万智（1962年～）『サラダ記念日』（新潮文庫）
- 江國香織（1964年～）『きらきらひかる』『つめたいよるに』（新潮文庫）
- 赤坂真理（1964年～）『東京プリズン』（河出文庫）
- 2012年度司馬遼太郎賞受賞。
- 村山由佳（1964年～）『すべての雲は銀の…（上下）』（講談社文庫）
- よしもとばなな（1964年～）『なんくるない』（新潮文庫）
- 西村賢太（1967～2022年）『苦役列車』（新潮文庫）
- 東山彰良（1968年～）『流』（講談社文庫）
- 森絵都（1968年～）『みかづき』（集英社文庫）
- 柳美里（1968年～）『JR上野駅公園口』（河出文庫）
- 有川ひろ（有川浩：1972年～）『図書館戦争—図書館戦争シリーズ①』『図書館内乱—図書館戦争シリーズ②』『図書館危機—図書館戦争シリーズ③』『図書館革命—図書館戦争シリーズ④』

『別冊図書館戦争Ⅰ—図書館戦争シリーズ⑤』『別冊図書館戦争Ⅱ—図書館戦争シリーズ⑥』

『レインツリーの国』（角川文庫）『阪急電車』（幻冬舎文庫）『アンマーとぼくら』（講談社文庫）

高山羽根子（1975年～）『首里の馬』（新潮文庫）

川上未映子（1976年～）『先端で、さすわ さされるわ そらええわ』『水瓶』（ちくま文庫）

『乳と卵』『夏物語』（文春文庫）『ウィステリアと三人の女たち』（新潮文庫）

『わたくし率 イン 歯一，または世界』『ヘヴン』『すべて真夜中の恋人たち』『愛の夢とか』（講談社文庫）

川上未映子を読むと思ったのは、『六つの星—川上未映子対話集』（文春文庫）の6人の対談相手が、斎藤環・福岡伸一・松浦理英子・穂村弘・多和田葉子・永井均だったからである。いずれもこの「推薦図書」で本を紹介している。

2008年〔池田晶子記念〕わたくし，つまりNobody賞受賞者。第二詩集『水瓶』（ちくま文庫）はとてもよい。
三浦しをん（1976年～）『舟を編む』（光文社文庫）

本屋大賞2012受賞。

万城目学（1976年～）『鴨川ホルモー』（角川文庫）

真藤順丈（1977年～）『宝島』（講談社文庫）

山崎ナオコーラ（1978年～）『人のセックスを笑うな』（河出文庫）

森見登美彦（1979年～）『夜は短し歩けよ乙女』（角川文庫）

本谷有希子（1979年～）『異類婚姻譚』（講談社文庫）

村田沙耶香（1979年～）『コンビニ人間』（文春文庫）

辻村深月（1980年～）『かがみの孤城（上下）』（ポプラ文庫）

本屋大賞2018受賞。不登校の中学生を描く。

又吉直樹（1980年～）『火花』（文春文庫）

金原ひとみ（1983年～）『蛇にピアス』（集英社文庫）

綿谷りさ（1984年～）『蹴りたい背中』（河出文庫）

最果タヒ（1986年～）『グッドモーニング』（新潮文庫）

14-2 沖縄文学アンソロジー

『新装版 沖縄文学選—日本文学のエッジからの問い』（勉誠出版）

芥川賞受賞4作品すべてを含む以下の作品が読める。

第一部 沖縄文学の近代

小説「九年母」山城正忠，「奥間巡査」池宮城積宝，「滅びゆく琉球女の手記」久志富佐子

琉歌三首 真境名安興

短歌三首 摩文仁朝信

詩「夕の賦」末吉安持，「首里城」世禮國男，「妹へおくる手紙」「会話」「沖縄よどこへ行く」山之口貌

第二部 アメリカ占領下の沖縄文学

小説「カクテル・パーティー」大城立裕，「オキナワの少年」東峰夫

詩「村 その一」「村 その二」牧港篤三，「ある挽歌」大湾雅常，「コッテキ吹く男」あしみねえいいち

「慟哭」新川明，「島（Ⅱ）」川満信一，「家郷への逆説」清田政信

第三部 復帰後の沖縄文学

小説「嘉間良心中」吉田スエ子，「海鳴り」長堂英吉

戯曲「人類館」知念正真

詩「ソールランドを素足の女が」仲地裕子、「骨のカチャーシー」芝憲子

「優しいたましひは埋葬できない」知念榮喜、「喜屋武岬」高良勉、「沈黙の渚」中里友豪

「死骸の海」与那覇幹夫、「おきなわのうた」上原紀善

第四部 沖縄文学の挑戦（90年代以降の沖縄文学）

小説「豚の報い」又吉榮喜、「水滴」目取真俊、「風水譚」崎山多美

『現代沖縄文学作品選』（講談社文芸文庫）

次の作品が読める。

「鱧に曳きずられて沖へ」安達征一郎、「K 共同墓地死亡者名簿」大城貞俊、「棒兵隊」大城立裕

「ダバオ巡礼」崎山麻夫、「見えないマチからションカネーが」崎山多美、「伊佐浜心中」長堂英吉

「カーニバル闘牛大会」又吉榮喜、「^{カウチー}軍鶏」目取真俊、「鬼火」山入端信子、「野宿」山之口獏

『オキナワ 終わらぬ戦争—セクション戦争と文学8』（集英社文庫）

次の作品が読める。

「海鳴り」長堂英吉、「人類館」知念正真、「虜囚の哭」霜多正次、「カクテル・パーティー」大城立裕

「ギンネム屋敷」又吉榮喜、「嘉間良心中」吉田スエ子、「平和通りと名付けられた街を歩いて」目取真俊

「夜」田宮虎彦、「ふたたび「沖縄の道」」岡部伊都子、「手」灰谷健次郎、「聖なる夜 聖なる穴」桐山襲

詩「沖縄よどこへ行く」山之口獏、「アカシア島」高良勉、川柳

最後に大城立裕のインタビューが付録として掲載されている。

『沖縄詩人アンソロジー 潮境 第1号』

『沖縄詩人アンソロジー 潮境 第2号』

『沖縄詩歌集—琉球・奄美の風』（コールサック社）

『現代詩手帖2022年11月号』（思潮社）

特集が「琉球弧の詩人たち」。以下の詩人の詩とエッセイが掲載されている。

川満信一、八重洋一郎、伊良波盛男、新城兵一、松原敏夫、高良勉、仲本瑩、市原千佳子、おおしろ建、宮城隆尋、トーマ・ヒロコ、西原裕美。

14-3 沖縄文学

山之口獏（1903～63年）『山之口獏詩文集』（講談社学術文庫）『山之口獏詩集』高良勉編（岩波文庫）

大城立裕（1925～2020年）『小説 琉球処分』（講談社文庫）

『小説 琉球処分』は沖縄生まれの人たちには絶対に読んでほしい傑作である。1959年33～34歳での琉球新報の連載である。

大城立裕『カクテル・パーティー』（岩波現代文庫）

『カクテル・パーティー』で1967年度上半期に沖縄出身者で初めて芥川賞を受賞した。

2016年度実施教員選考試験・専門国語で出題された「亀甲墓」も収録されている。

他に「棒兵隊」「ニライカナイの街」「戯曲 カクテル・パーティー」収録。

大城立裕『焼け跡の高校教師』（集英社文庫）『レールの向こう』（集英社文庫）

『焼け跡の高校教師』は大城立裕の遺作となった。自伝的作品に、作者の長い人生の中で、野嵩高校（現在の普天間高校）の「文学」教師の「2年間が私の人生のなかで、最も輝いていたのではないかと、いまでも思っています」と記している。「文学」は「国語」だが、米軍政がこの名称をきらって、「文学」とよんだ。

大城立裕『日の果てから』（講談社文芸文庫）『かがやける荒野』（新潮社）『恋を売る家』（新潮社）

大城立裕自身が『日の果てから』『かがやける荒野』『恋を売る家』を「戦争と文化」三部作と名づけている。

『日の果てから』は囚人と遊女に焦点を当てて沖縄戦を描く。

『かがやける荒野』は、敗戦後の軍政下の沖縄を、コザを中心に描く。

『恋を売る家』は、神女（ノロ）・軍用地主・ユタ・闘牛・賭博・暴力団などの沖縄文化を描く。

川満信一（1932年～）『川満信一詩集』（オリジナル企画）『世紀末のラブレター—川満信一詩集』（エポック）

川満信一は詩人。宮古島出身。反復帰論・琉球共和社会憲法C私（試）案で有名。2016年4月24日沖縄教員塾で講演会をしていただいた。

長堂英吉（1932～2020年）『ランタナの花の咲く頃に』（新潮社）

長堂英吉は作家・アナウンサー。同人誌『南瀟文学』創設者。

他に「いちじゃま」「チャンピオン」収録。

長堂英吉『エンパイア・ステートビル紙ヒコーキ』（新潮社）

他に「伊佐浜心中」「ヨーガリー」「水の上のウヤフジたち」「役者たち」収録。

長堂英吉『海鳴り』（講談社）

他に「銃殺」「帰郷」「ペリー艦隊殺人事件」収録。

佐々木薫（1936年～）『ディープ・サマー』『詩集 那覇・浮き島』『島—パイパテローマ』（あすら舎）

沖縄教員塾を開いた際、詩集と同人誌をもって、塾を訪ねてくださった。季刊詩誌「あすら」を送っていた。

清田政信（1937年～）『遠い朝・眼の歩み』『光と風の対話』『眠りの刑苦』（永井出版企画）

清田政信は詩人。久米島出身。2021年度実施教員選考試験・専門国語で清田政信の作品として『遠い朝・眼の歩み』『光と風の対話』を選ばせる設問が出題された。

新城兵一（1943年～）

『流亡と飢渴』『詩集 無名記』（根元書房）『詩集 いんまぬえる』『詩集 弟または二人三脚』（あすら舎）

新城兵一は詩人。宮古島出身。何度かお会いして、お話を伺っている。「全面詩歌句」を送っていただいている。2021年度実施教員選考試験・専門国語で間違いの選択肢として『未決の囚人』『流亡と飢渴』が出題された。

平敷武蕉（1945年～）『句集 島中の修羅』（コールサック社）

平敷武蕉は俳人・評論家。何度かお会いしている。沖縄県立高校国語教諭だった。

芝憲子（1946年～）

『芝憲子詩集 さかさま階段—沖縄から南半球へ』（OFFICE KON）『沖縄という^{みなもと}源で』（あすら舎）

沖縄教員塾を開いた際、詩集と同人誌をもって、塾を訪ねてくださった。

又吉栄喜（1947年～）『ギンネム屋敷』（集英社）

『豚の報い』で1995年度下半期の芥川賞を受賞した。

他に「ジョージが射殺した猪」「窓に黒い虫が」収録。

又吉栄喜『ジョージが射殺した猪』（燦葉出版社）

他に「海は蒼く」「カーニバル闘牛大会」「猫太郎と犬次郎」「努の歌声」「テント集落奇譚」「尚郭威」収録。

松原敏夫（1948年～）

『那覇午前零時』（アザリア書房）『アンナ幻想』（海風社）『ゆがいなブザのパリヤー』（あすら舎）

松原敏夫は詩人。宮古島出身。何度かお会いして、お話を伺っている。個人詩誌「アブ」を送っていただいている。2021年度実施教員選考試験・専門国語で間違いの選択肢として『那覇午前零時』『アンナ幻想』が出題された。

仲本瑩（1949年～）『おでかけ上手に』（紫陽社）仲本彩泉『句集 風を買う街』（沖積舎）

仲本瑩は詩人・俳人・作家（俳号が仲本彩泉）。沖縄タイムスの「詩時評」担当者。何度かお会いして、お

話を伺っている。

大城貞俊（1949年～）『椎の川』（朝日新聞社）

大城貞俊は作家・詩人。沖縄県立高校国語教諭・琉球大学教育学部教授だった。

2014年度実施教員選考試験・専門国語で出題された。

大城貞俊『一九四五年 チムグリサ沖縄』（秋田魁新報社）

河合民子（1950～2023年）

河合民子は居酒屋「レキオス」店主。作家・詩人。

「針突（はじち）をする女」（第21回琉球新報短編小説賞受賞「沖縄短編小説集第2集」所収）

「清明の頃」（第28回新沖縄文学賞佳作「沖縄文芸年鑑2002」所収）

大城立裕（1925～2020年）と河合民子の父・中山良彦（1925～2016年）が同級生で親友だった（大城立裕の芥川賞受賞の電話を自宅で取る写真の後ろで、中山良彦が万歳をしている）。大城立裕にとって、親友の娘の作品だから、その選評があまりにも厳しい。

「八月のコスモス」（第33回九州芸術文学賞佳作「文学界2003年4月号」所収）

「蒼き狼、琉球へ行く」（未完、絶筆。雑誌「琉球」連載）

石川為丸（1950～2014年）『島惑ひ 私の—石川為丸遺稿詩集』（榕樹書林）

石川為丸は詩人。昔の同僚の遺稿詩集。彼の死体を発見した自分が編集委員会の会計を務めた。新聞書評は川満信一（沖縄タイムス）、崎山多美（琉球新報）。

西銘郁和（1952～2023年）『時の岸辺に』（非世界出版会）

西銘郁和は詩人。本人から直接いただいた。

崎山多美（1954年～）『月や、あらん』（インパクト出版会）『うんじゅが、ナサキ』『クジャ幻視行』（花書院）

崎山多美は作家。2018年4月1日沖縄教員塾で講演会をしていただいた。

目取真俊（1960年～）『水滴』（文春文庫）

『水滴』で1997年度上半期の芥川賞を受賞した。沖縄県立高校国語教諭だった。

他に『風音』『オキナワン・ブック・レビュー』収録。

目取真俊『虹の鳥』『眼の奥の森』（影書房）

池上永一（1970年～）『バガージマヌパナス—わが島のはなし』『テンペスト（一～四）』『続ばる島』

『黙示録（上下）』『ヒストリア（上下）』（角川文庫）

池上永一は作家。那覇市生まれで、3歳から中学生までを石垣島で過ごし、開邦高校卒業後に、早稲田大学に進学した。

知念実希人（1978年～）『ひとつむぎの手』（新潮文庫）

オーガニックゆうき（1992年～）『入れ子の水は月に轆かれ』（ハヤカワ文庫JA）

第8回アガサ・クリスティー賞受賞。

豊永浩平（2003年～）『^{ちち}月^はぬ^は走^{うんま}いや、^は馬^はぬ^は走^{うんま}い』（講談社）

第67回群像新人文文学賞受賞。

14-4 海外文学

ラ・ロシュフコー（1613～80年）『箴言集』

ヴォルテール（1694～1778年）『カンディード』

ゲーテ（1749～1832年）『若きウェルテルの悩み』

ツルゲーネフ（1818～83年）『初恋』

ドストエフスキー（1821～81年）『罪と罰』『カラマーゾフの兄弟』『賭博者』

イプセン（1828～1906年）『人形の家』

マーク・トウェーン（1835～1910年）『王子と乞食』

スティーブンソン（1850～94年）『宝島』『ジキル博士とハイド氏』

ランボオ（1854～91年）『地獄の季節』『飾画』

『地獄の季節』 小林秀雄＝訳（岩波文庫）で読んだ。

アンドレ・ジード（1869～1951年）『狭き門』

ヘルマン・ヘッセ（1877～1962年）『車輪の下』『デミアン』『シッダールタ』

魯迅（1881～1936年）『狂人日記』『阿Q正伝』

カフカ（1883～1924年）『変身』

ヘミングウェイ（1899～1961年）『老人と海』

サン・テグジュペリ（1900～44年）『星の王子様』

カミュ（1913～60年）『異邦人』『ペスト』

許南麒（1918～88年）『火縄銃のうた—長篇叙事詩』

サリンジャー（1919～2010年）『ライ麦畑でつかまえて』

ミヒャエル・エンデ（1929～95年）『モモ』

サガン（1935～2004年）『悲しみよこんにちは』

ジョン・アーヴィング（1942年～）『ガープの世界』『ホテル・ニューハンプシャー』（新潮文庫）

パウロ・コエーリョ（1947年～）『アルケミスト—夢を旅した少年』（角川文庫）

チョ・ナムジュ（1978年～）『82年生まれ、キム・ジョン』（ちくま文庫）

韓国136万部，日本29万部，32の国・地域で翻訳。映画化もされている。

第15章 芸術・趣味・スポーツ・マンガ

15-1 芸術

『カラー版 名画を見る眼Ⅰ—油彩画誕生からマネまで』高階秀爾（岩波新書）

『カラー版 名画を見る眼Ⅱ—印象派からピカソまで』高階秀爾（岩波新書）

高階秀爾（1932年～）は東京大学名誉教授。専攻は西洋美術史。

ナショナルギャラリー（ロンドン）、ルーブル美術館・オルセー美術館（パリ）、バチカン美術館（ローマ）に行く前に読んでおけばよかった、と強く後悔した。

計29作品が紹介されている。以下の作品は見た。ファン・アイク「アルノルフィニ夫妻の肖像」、レオナルド「聖アンナと聖母子」、ワトー「愛の島の巡礼」、ドラクロワ「アルジェの女たち」、クールベ「アトリエ」、マネ「オランピア」。モネ「パラソルをさす女」、ルノワール「ピアノの前の少女たち」。

『フィレンチェ—初期ルネサンス美術の運命』高階秀爾（中公新書）

「フィレンチェは、12世紀以来、厳然たる共和国であった。……その「都市国家」においては、少なくとも制度上は、ほとんど完璧に近い民主制が行なわれていた。」「ルネサンスは新しい世界の発見であった。それは、文字どおり地理上の「新世界」が歴史の表面に登場してきた時代でもあり、科学上の新知識が外界に対するそれまでとはまったく違った眼をもたらしした時代でもあった。」

『増補 日本美術を見る眼—東と西の出会い』高階秀爾（岩波現代文庫）

『君はレオナルド・ダ・ヴィンチを知っているか』布施英利（ちくまプリマー新書）

『構図がわかれば絵画がわかる』布施英利（光文社新書）

『色彩がわかれば絵画がわかる』布施英利（光文社新書）

『遠近法がわかれば絵画がわかる』布施英利（光文社新書）

布施英利（1960年～）は東京藝術大学教授。専攻は美術解剖学。ダ・ヴィンチやミケランジェロが人体の解剖を行ったように、自らも解剖を行っている。

『ルネサンス三巨匠の物語—^{レオナルド} 万能・^{ミケランジェロ} 巨人・^{ラファエロ} 天才の軌跡』池上英洋（光文社新書）

『キリストの顔—イメージ人類学序説』水野千依（筑摩選書）

水野千依（1967年～）は青山学院大学教授。専攻はイタリア・ルネサンス美術史、芸術理論。著者も編集者も大学の同級生。

『最後の秘境 東京藝大—天才たちのカオスな日常』二宮敦人（新潮文庫）

『学校で教えてくれない音楽』大友良英（岩波新書）

大友良英（1959年～）はギタリスト・ターンテーブル奏者・作曲家・映画音楽家・プロデューサー。

『ものがたり西洋音楽史』近藤譲（岩波ジュニア新書）

近藤譲（1947年～）は作曲家・音楽評論家。

『ものがたり日本音楽史』徳丸吉彦（岩波ジュニア新書）

徳丸吉彦（1936年～）はお茶の水女子大学名誉教授。音楽学、特に民族音楽学専攻。

「教員資格をもった音楽教師で、和楽器を教えることができるのはまだ少数に過ぎません。」「そうした中で、救いとなる動きもあります。沖縄県が音楽教員採用試験に三線の演奏を課していること」。

日本音楽史に残る画期的な出来事だったのだ。

『美輪明宏と「ヨイトマケの唄」—天才たちはいかにして出会ったのか』佐藤剛（文藝春秋）

15-2 趣味

『Aクラス麻雀』阿佐田哲也（双葉文庫）

阿佐田哲也（1929～89年）は作家の色川武大が、麻雀小説を書く際の筆名である。

『科学する麻雀』とつげき東北（講談社現代新書）

『藤井聡太論—将棋の未来』谷川浩司（講談社+α新書）

『藤井聡太はどこまで強くなるのか—名人への道』谷川浩司（講談社+α新書）

『カーマ・スートラ』ヴァーツヤーヤナ（角川ソフィア文庫）

『暴力団』溝口敦（新潮新書）

『続・暴力団』溝口敦（新潮新書）

『しらふで生きる』町田康（幻冬舎文庫）

町田康（1962年～）は作家・ミュージシャン。

2021年10月に禁酒したあとに、読んだ。

15-3 中日ドラゴンズ

『嫌われた監督—落合博満は中日をどう変えたのか』鈴木忠平（文藝春秋）

2022年大宅壮一ノンフィクション賞受賞。2022年講談社ノンフィクション賞受賞。

『なぜ日本人は落合博満が嫌いなのか？』テリー伊藤（角川oneテーマ21新書）

『落合博満論』ねじめ正一（集英社新書）

『采配』落合博満（ダイヤモンド社）

『戦士の食卓』落合博満（岩波書店）

『参謀—落合監督を支えた右腕の「見守る力」』森繁和（講談社）

『中日ドラゴンズ論』今中慎二（ベスト新書）

15-4 マンガ

『どんぐりの家』山本おさむ（小学館）

聾学校での重複障害の子どもたちを描いた漫画である。作者自身が重複障害の子どものための学校づくりの運動を担った。部屋の中にいる、聴覚障害を抱えた子どもとその母親。雪が降っていることに気づいた母親が、聴覚障害を抱えた子どもに「雪がシンシンと音を立てているのに、どうして気づかなかったの？」と問いかけられ、ショックを受ける場面が強く記憶に残っている。「雨がザーザーと降る」と「雪がシンシンと降る」の違いは、「聞こえない人」には自明ではない。

『今日もいい天気—原発事故編』山本おさむ（双葉社）

『遙かなる甲子園』で知られる漫画家自身の被災・避難生活を描く。

『いちえふ 福島第一原子力発電所労働記(1)～(3)』竜田一人（講談社）

『神様の背中—貧困の中の子どもたち』さいきまこ（秋田書店）

『健康で文化的な最低限度の生活(1)～(10)』柏木ハルコ（小学館）

『リエゾン—こどものこころ診療所(1)～(5)』原作・竹村優作／漫画・ヨンチャン（講談社）

『Sunny(1)～(6)』松本大洋（小学館）

『毎日やらかしています。—アスペルガーで、漫画家で』沖田×華（ぶんか社）

『ますます毎日やらかしています。—アスペルガーで、漫画家で』 沖田×華（ぶんか社）

『漫画 山頭火』 原作・竹内一郎／漫画・川端新（春陽堂書店）

『学習まんが 日本の歴史(1)～(20)』（集英社）

沖縄教員塾の2期生から塾に寄贈された。

第16章 絵本・図鑑・児童文学

子どもと保護者が同じ絵本（方向）を向いているのが、よい。教育も、教師と児童生徒が向かい合う場面を減らし、同じ方向を向くのがよい。同じ権利の主体として、共によりよい共生社会に向かっていくのがよい。

絵本は、乳幼児にとって、破るもの、なめるもの、食べるものです。

絵本は「50刷」「100刷」という定番のものから始めるとよい。絵本の選定は、年齢の指定は参考にするだけで、基本的に無視してよいです。何が気に入るかは、たくさん読み聞かせて、初めてわかることです。絵本は高いので、絵本の有名な出版社で月刊で購入するとお買い得。赤ちゃんは、お母さんの声を聞きわけける能力をもって生まれてきます。妊娠後期から、読み聞かせは有効なのです。

16-1 絵本

『家族のこころの病気を子どもに伝える絵本①ボクのせいかも……お母さんがうつ病になったの』

『家族のこころの病気を子どもに伝える絵本②お母さんどうしちゃったの……統合失調症になったの・前編』

『家族のこころの病気を子どもに伝える絵本③お母さんは静養中——統合失調症になったの・後編』

『家族のこころの病気を子どもに伝える絵本④ボクのことわすれちゃったの？…

—お父さんはアルコール依存症』 プルスアルハ（ゆまに書房）

すべての学校の職員室・保健室に置いて欲しい本です。沖縄でこそ読まれるべき本です。

『新・戦争のつくりかた』 りぼん・ぷろじえくと（マガジンハウス）

英訳付き。関連資料もすばらしい。

「学校では、いい国民はなにをしなければならぬか、をおそわります。どんな国やどんな人が悪者か、もおそわります。」

『琉球という国があった』 上里隆史文／富山義則写真／一ノ関圭絵（福音館書店）

『みえるとかみえないとか』 さく ヨシタケシンスケ／そうだん 伊藤亜紗（アリス館）

『おめん』 作わだことみ／絵ささきようこ（ポプラ社）

『じゃあ じゃあ びりびり』 まついのりこ（偕成社）

『なにいろ？』 作・絵 本信公久（くもん出版）

『1・2・3』 作・絵 本信公久（くもん出版）

『あいうえお』 本文イラスト いのうえ栄（永岡書店）

『ねないこ だれだ』 せなけいこ さく・え（福音館書店）

『あ〜ん あん』 せなけいこ さく・え（福音館書店）

『いやだ いやだ』 せなけいこ さく・え（福音館書店）

『ぴよちゃんのありがとう』 さく・え いりやまさとし（学習研究社）

『ぴよちゃんのおともだち』 さく・え いりやまさとし（学習研究社）

『がたんごとん がたんごとん』 安西水丸さく（福音館書店）

『ねこさんスパゲッティ』 作・絵 夏目尚吾（チャイルド本社）

『ノンタン はっくしょん』 キヨノサチコ作・絵（偕成社）

『のりものえほん トラック』 バイロン・バートンさく・え（金の星社）

『のりものえほん ひこうき』 バイロン・バートンさく・え（金の星社）

『しゃしんえほん ひこうき・ふね』 写真小賀野実（ポプラ社）

- 『パオちゃんのいちねん』 なかがわみちこ さく・え (PHP研究所)
- 『どんな かお?』 しらいしょうこ文／ふかのただし絵 (女子パウロ会)
- 『おててがでたよ』 林明子さく (福音館書店)
- 『おつきさま こんばんは』 林明子さく (福音館書店)
- 『くつついた』 三浦太郎 (こぐま社)
- 『バスがきました』 三浦太郎 (こぐま社)
- 『こねこがにゃあ』 ひろのたかこ (福音館書店)
- 『だっこ だっこ だーいすき』 かみじょうゆみこ ぶん (福音館書店)
- 『こりゃ まてまて』 中脇初枝ぶん／酒井駒子え (福音館書店)
- 『ぼくのおべんとう』 さくスギヤマカナヨ (アリス館)
- 『ひとりでうんちできるかな』 きむらゆういち さく (偕成社)
- 『いただきますあそび』 きむらゆういち さく (偕成社)
- 『いないいないばああそび』 きむらゆういち さく (偕成社)
- 『いいおへんじできるかな』 きむらゆういち さく (偕成社)
- 『いいもの どっち?』 さく わだことみ／え あらかわしずえ (学習研究社)
- 『どんどこももんちゃん』 とよたかずひこ (童心社)
- 『どうぶつのおかあさん』 小森厚ぶん／薮内正幸え (福音館書店)
- 『くだもの』 平山和子さく (福音館書店)
- 『やさい』 平山和子さく (福音館書店)
- 『ころころころ』 元永定正さく (福音館書店)
- 『くだものだもの』 石津ちひろ文／山村浩二絵 (福音館書店)
- 『こんにちは』 わたなべしげお ぶん／おおともやすお え (福音館書店)
- 『しろくまちゃんのほっとけーき』 わかやまけん (こぐま社)
- 『おふろでちゃぶちゃぶ』 いわさきちひろ え／松谷みよ子 ぶん (童心社)
- 『でんき つけて!』 さいとうしのぶ (ひさかたチャイルド)
- 『てじな』 土屋富士夫 作 (福音館書店)
- 『もけらもけら』 山下洋輔ぶん／元永定正え／中辻悦子構成 (福音館書店)
- 『ねずみさんのながいパン』 多田ヒロシ (こぐま社)
- 『めのまどあけろ』 谷川俊太郎ぶん／長新太え (福音館書店)
- 『ピーのおはなし』 きもとももこ さく (福音館書店)
- 『イエペはぼうしがだいすき』 石亀泰郎写真 (文化出版局)
- 『おばけのてんぷら』 作・絵せなけいこ (ポプラ社)
- 『バスでおでかけ』 作・絵 間瀬なおかた (ひさかたチャイルド)
- 『うしろにいるのだあれ』 ふくだとしお さく (新風社)
- 『おやすみなさいコッコさん』 片山健さく・え (えほんのいりぐち福音館月刊えほん)
- 『きんぎょがにげた』 五味太郎作 (えほんのいりぐち福音館月刊えほん)
- 『へんなおにぎり』 長新太さく (えほんのいりぐち福音館月刊えほん)
- 『とべ かぶとむし』 得田之久さく (えほんのいりぐち福音館月刊えほん)
- 『かじだ しゅつどう』 山本忠敬さく (えほんのいりぐち福音館月刊えほん)
- 『ぶたのさんぽ』 白川三雄さく (えほんのいりぐち福音館月刊えほん)
- 『これ なーに?』 きたむらえり さく (えほんのいりぐち福音館月刊えほん)

- 『ほんやのおじさん』 ねじめ正一ぶん／南伸坊え（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『たこらすとまいかちゃん』 安江リエ文／いまきみち え（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『ハンバーグーチョコキパー』 長新太さく・え／和田誠しあげ（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『こんにちは みんな！』 にしむらあつこ さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『うさぎ うさぎ なにたべてるの』 松野正子さく／大沢昌介え（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『みんな みーつけた』 きしだえりこ さく／やまわきゆりこ え（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『あみものじょうずのいのししばあさん』
- こさかまさみ文／山内彩子え（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『まてまてタクシー』 西村敏雄さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『どうぶつのこどもたち』 小森厚ぶん／薮内正幸え（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『はぐ』 佐々木マキ（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『ちんころりん 高知の昔話』 中脇初枝再話／ささめやゆき絵（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『ずかん・じどうしゃ』 山本忠敬さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『おさらのこども』 西平あかね さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『あつい あつい』 垂石眞子さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『ぼくのおじいちゃんのかお』 天野祐吉文／沼田早苗写真（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『ピーン』 古賀充 作（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『いしころ ところ ところ』 古賀充 作（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『おやおや、おやさい』 石津ちひろ文／山村浩二絵（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『おかあさんとあかちゃん』 中谷千代子ぶん・え（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『また あした』 ぱくきょんみ文／伊部年彦絵（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『にんじん だいこん ごぼう』 植垣歩子再話・絵（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『おべんとう』 小西英子さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『ラスチョのせつじょうしゃ』 アンヴィル奈宝子さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『はっぱのおうち』 征矢清さく／林明子え（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『おひさま ぽかぽか』 笠野裕一（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『ひまわり』 和歌山静子（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『ももいろのちいさいえ』 おかいみほ さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『ちいさな くろいいし』 マレーク・ベロニカ作／石津ちひろ訳（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『おにぎり』 平山英三ぶん／平山和子え（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『いろいろお世話になりました』 やぎゅうげんいちろう さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『まる まる』 中辻悦子さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『どうすればいいのかな？』

わたなべしげお ぶん／おおともやすお え（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）

『きょうのおべんとうなんだろうな』

きしだえりこ さく／やまわきゆりこ え（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）

『ちいさいもの みつけた』 富田百秋さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）

『かさかしてあげる』 こいでやすこ さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）

『がちゃがちゃ どんどん』 元永定正（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）

『こんにちは』 わたなべしげお ぶん／おおともやすお え（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）

『コンニチハエホン』 イノウエヨースケ（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）

- 『にゃん にゃん』 せなけいこ さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『ブルくんのおうち』 ふくざわゆみこ さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『しゅっぱつ しんこう！』 山本忠敬さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『ブルブルさんのあかいじどうしゃ』 平山暉彦（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『ねてるの だあれ』 神沢利子さく／山内ふじ江え（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『どんどこ どん』 和歌山静子作（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『くろねこかあさん』 東君平さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『とん ころころころ』 荒川薫 文／村田朋泰造形・写真（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『おかあさんといっしょ』 薮内正幸さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『くまとりすのおやつ』
- きしだえりこ ぶん／ほりうちせいいち・ほりうちもみこ え（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『おばけがぞろぞろ』 ささきまき（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『たまごのあかちゃん』
- かんざわとしこ ぶん／やぎゅうげんいちろう え（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『くものもいち』 こしだミカさく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
- 『ぶたぶたくんのおかいもの』 土方久功さく・え（福音館月刊絵本ものがたり新36）
- 『カニ ツンツン』 金関寿夫ぶん・元永定正え（福音館月刊絵本ものがたり新36）
- 『くろうまブランキー』 伊東三郎再話／堀内誠一画（福音館月刊絵本ものがたり新36）
- 『ごろはちだいみょうじん』 中川正文さく／梶山俊夫え（福音館月刊絵本ものがたり新36）
- 『ぼく びょうきじゃないよ』 角野栄子さく／垂土眞子え（福音館月刊絵本ものがたり新36）
- 『まじょのかんづめ』 佐々木マキ さく（福音館月刊絵本ものがたり新36）
- 『もりのひなまつり』 こいでやすこ さく（福音館月刊絵本ものがたり新36）
- 『まほうのえのぐ』 林明子さく（福音館月刊絵本ものがたり新36）
- 『あひるのたまご』 さとうわきこ さく・え（福音館月刊絵本ものがたり新36）
- 『だいちゃんとうみ』 太田大八さく・え（福音館月刊絵本ものがたり新36）
- 『かばくんのふね』 岸田衿子さく／中谷千代子え（福音館月刊絵本ものがたり新36）
- 『たからさがし』 なかがわりえこ・おおむらゆりこ（福音館月刊絵本ものがたり新36）
- 『ぐりとぐらのおきやくさま』 なかがわりえこ・やまわきゆりこ（福音館月刊絵本こどものともセレクション）
- 『ゆうびんやさんのホネホネさん』 にしむらあつこ さく・え（福音館月刊絵本こどものともセレクション）
- 『ぞうくんのさんぽ』
- なかのひろたか さく・え／なかのまさたかレタリング（福音館月刊絵本こどものともセレクション）
- 『ぞうくんのあめふりさんぽ』 なかのひろたか さく・え（福音館月刊絵本こどものともセレクション）
- 『まゆとおに』 富安陽子文／降矢な絵（福音館月刊絵本こどものともセレクション）
- 『いちごばたけのちいさなおばあさん』
- わたりむつこ さく／中谷千代子え（福音館月刊絵本こどものともセレクション）
- 『さんまいのおふだ～新潟の昔話～』
- 水沢謙一再話／梶山俊夫画（福音館月刊絵本こどものともセレクション）
- 『ちょっとだけ』 瀧村有子さく／鈴木永子え（福音館月刊絵本こどものともセレクション）
- 『あな』 谷川俊太郎作／和田誠画（福音館月刊絵本こどものともセレクション）
- 『ねこどけい』 きしだえりこ さく／やまわきゆりこ え（福音館月刊絵本こどものともセレクション）
- 『トマトさん』 田中清代さく（福音館月刊絵本こどものともセレクション）

- 『あめふり』 さとうわきこ さく・え (福音館月刊絵本こどものともセレクション)
- 『ままです すきです すてきです』 谷川俊太郎ぶん／タイガー立石え (福音館書店)
- 『ねずみのでんしゃ』 作山下明生・いわむらかずお (ひさかたチャイルド)
- 『14ひきのあさごはん』 いわむらかずお (童心社)
- 『ぼくにもそのあいをください』 作・絵宮西達也 (ポプラ社)
- 『あなたをずっとずっとあいしてる』 作・絵宮西達也 (ポプラ社)
- 『せんろはつづく』 竹下文子文／鈴木まもる絵 (金の星社)
- 『モチモチの木』 斉藤隆介作／滝平二郎絵 (岩崎書店)
- 『はじめてのうちゅうえほん』 さく・え てづかあけみ (パイ インターナショナル)
- 『はしれ! マンモス・ゴン〜巨大ライオンと戦う巻〜』 作・黒川光広 (童心社)
- 『けがをした恐竜〜化石が語るティラノサウルスの話〜』 黒川みつひろ (こぐま社)
- 『恐竜 トリケラトプスとひみつの湖』 黒川みつひろ作・絵 (小峰書店)
- 『恐竜 トリケラトプスとギガノトサウルス』 黒川みつひろ作・絵 (小峰書店)
- 『せみとりめいじん』 かみやしん作／奥本大三郎監修 (福音館書店)
- 『ごんぎつね』 原作: 新美南吉 (シーズ)
- 『ふくはうち おにもうち』 内田麟太郎作／山本孝 絵 (岩崎書店)
- 『おかあさんはおこりんぼうせいじん』 スギヤマカナヨ (PHP研究所)
- 『おおきくなるっていうことは』 中川ひろたか文／村上康成絵 (童心社)
- 『だいじょうぶ だいじょうぶ』 いとうひろし作／絵 (講談社)
- 『ちからたろう 日本の昔話』 文・片岡輝／絵・村上豊 (チャイルド本社)
- 『きいろいばけつ』 もりやまみやこ作／つちだよしはる絵 (あかね書房)
- 『ガタガタ村と大ナマズ』 山王三・四丁目自治会 文／寺田順三絵 (Z会)
- 『新・おきなわ昔ばなし⑥ (竹の笛／獅子のことづけ)』
- 文・石川きよ子／絵・安室二三男, 文・宮城康博／絵・大城美千代 (沖縄出版)
- 『100かいだてのいえ』 いわいとしお (偕成社)
- 『ちか100かいだてのいえ』 いわいとしお (偕成社)
- 『ピリカ, おかあさんへの旅』 越智典子文／沢田としき絵 (福音館書店)
- 『そらまめくんのベッド』 なかやみわ・さく (小学館)
- 『そらまめくんとめだかのこ』 なかやみわ・さく (小学館)
- 『そらまめくんのぼくのいちにち』 なかやみわ・さく (小学館)
- 『ぐりとぐら』 なかがわりえこ・おおむらゆりこ (福音館書店)
- 『そらいろのたね』 なかがわりえこ・おおむらゆりこ (福音館書店)
- 『マフィンおばさんのぱんや』 竹林亜紀さく／河本祥子え (福音館書店)
- 『しょうぼうじどうしゃ じふた』 渡辺茂男さく／山本忠敬え (福音館書店)
- 『おおきなかく』 内田莉莎子再話／佐藤忠良画 (福音館書店)
- 『恐竜絵本 恐竜学入門』 (今人舎)
- 『進化の迷路〜原始の海から人類誕生まで〜』 作・絵香川源太郎 (PHP研究所)
- 『メアリー・スミス』 アンドレア・ユーレン作／千葉茂樹訳 (光村教育図書)
- 『まよなかのだいどころ』 モーリス・センダックさく／じんぐうてるお やく (富山房)
- 『マイク・マリガンとスチーム・ショベル』

ぶんとえバー吉ニア・リー・バートン／やく いしいももこ (童話館出版)

- 『ちいさい おうち』 バージニア・リー・バートン文・絵／石井桃子訳（岩波書店）
- 『いろいろへんないろのはじまり』 アーノルド・ローベルト作／まきたまつこ やく（富山房）
- 『どろんここぶた』 アーノルド・ローベル作／岸田衿子訳（文化出版局）
- 『きょうりゅうたち』 ベギー・パリッシュ文／アーノルド・ローベル絵／杉浦宏訳編（文化出版局）
- 『みにくいあひるのこ』
- ハンス・クリスチャン・アンデルセンさく／スペン・オットー・Sえ／きむらゆりこ やく（ポルプ出版）
- 『ビロードのうさぎ』 マージョリィ・W・ビアンコ原作／酒井駒子絵・抄訳（ブロンズ新社）
- 『うさぎ小学校』 アルベルト・ジクストゥス文／フリッツ・コッホニゴータ絵／はたさわゆうこ訳（徳間書店）
- 『王さまと九人のきょうだい』 君島久子訳／赤羽末吉絵（岩波書店）
- 『ちきゅうはみんなのいえ』 リンダ・グレイザー文／エリサ・クレヴェン絵／加島葵訳（くもん出版）
- 『ぞうのババール〜こどものころのおはなし〜』 ジャン・ド・ブリュフさく／やまがわすみこ やく（評論社）
- 『Le Petit Prince絵本版 星の王子さま』 原作サンテグジュペリ／訳池澤夏樹（集英社）
- 『ねぼすけ はとどけい』 ルイス・スロボドキン作／くりやがわけいこ訳（偕成社）
- 『しろいうさぎとくろいうさぎ』 ガース・ウィリアムズぶん・え／まつおかきょうこ やく（福音館書店）
- 『ほんをよめばなんでもできる』 ジュディ・シエラ文／マーク・ブラウン絵／辺律子訳（セーラー出版）
- 『ねえ、どれがいい？』 ジョン・バーニンガムさく／まつかわまゆみ やく（評論社）
- 『うんがにおちたうし』
- フィリス・クラシロフスキー作／ピーター・スパイアー絵／みなみもとちか訳（ポプラ社）
- 『ひとまねこざるときいろいぼうし』 H.A.レイ文・絵／光吉夏弥訳（岩波書店）
- 『百まいのきもの』 文エリノア・エスティーズ／絵ルイス・スロボドキン／訳石井桃子（岩波書店）
- 『せいめいのれきし』 バージニア・リー・バートン文・え／いしいももこ やく（岩波書店）
- 『たいせつなきみ』 マックスルケード作／セルジオ・マルティネス絵／松波史子訳（フォレストブックス）
- 『バナナのおはなし』 伊沢尚子文／及川賢治絵（福音館書店月刊かがくのとも）
- 『すずめくんどこでごはんたべるの？』 たしろちさと ぶん・え（福音館書店月刊かがくのとも）
- 『しぜん いちご』 指導・佐藤紀男／絵・斉藤雅緒（フレーベル館）
- 『しぜん セキセイインコ』 指導・宗近功／絵・外園勉（フレーベル館）
- 『しぜん とうもろこし』 指導・竹内栄次郎／絵・鶴田修（フレーベル館）

16-2 図鑑

- 『1 こんにちは』 三芳悌吉え／矢島稔しどう（はじめてであうずかん福音館書店）
- 『2 けもの』 相笠昌義え／小森厚しどう（はじめてであうずかん福音館書店）
- 『3 とり』 安徳瑛え／高野伸二しどう（はじめてであうずかん福音館書店）
- 『4 さかな』 笠木實え／久田迪夫しどう（はじめてであうずかん福音館書店）
- 『5 しょくぶつ』 高森登志夫え／古矢一穂しどう（はじめてであうずかん福音館書店）
- 『学研の図鑑 宇宙』（学研教育出版）
- 『小学館の図鑑NEO 地球』（小学館）
- 『小学館の図鑑NEO 大むかしの生物』（小学館）
- 『小学館の図鑑NEO 恐竜』（小学館）

16-3 児童文学

『本へのとびら—岩波少年文庫を語る』宮崎駿（岩波新書）

宮崎駿（1941年～）はアニメーション映画監督。『トム・ソーヤーの冒険』など児童文学の紹介書。

著者の3・11の受け止め方をぜひ読んでほしい。

「本には効き目なんかないんです。振り返ってみたら効き目があったということにすぎない。あのときのあの本が、自分にとってああいう意味があったとか、こういう意味があったとか、何十年も経ってから気がつくんですよ。だから、効き目があるから渡す、という発想はやめたほうがいいと思っています。読ませようと思っても、子どもは読みません」。

「要するに児童文学というのは、「どうにもならない、これが人間という存在だ」という、人間の存在に対する厳格で批判的な文学とはちがって、「生まれてきてよかったんだ」というものなんです。生きていてよかったんだ、生きていいんだ、というようなことを、子どもたちにエールとして送ろうというのが、児童文学が生まれた基本的なきっかけだと思います」。「子どもにむかって絶望を説くな」ということなんです」。

『今こそ読みたい児童文学100』赤木かん子（ちくまプリマー新書）